

連句年鑑

'99 RENKU NENKAN

連句協會

連句年鑑

平成十一年版

連句年鑑（平成十一年版）目次

〈表紙題字・今泉宇涯〉

「第十七回連句協会全国大会の記」……………8

「第十三回国民文化祭 おおいた'98連句大会 文芸祭連句大会を顧みて」……………9

評論  
エッセイ

西鶴と芭蕉―同時代人の芸術感覚―……………荒川有史……………10

連句と四三……………大野鶴士……………37

再び俳諧について「松山市民俳句大会記念講演」より……………松永静雨……………43

俳諧・赤穂義士伝……………密田青々……………60

回顧

平成十年の連句界……………土屋実郎……………67

# 作品

ああノ会	天の川連句会東京支部	「藍頭巾」	海市の会
「クローン駱駝」……………70	「草紅葉」……………87	「山霞む」……………102	「悪太郎」……………120
青葉城連句会	鮎可部連句会	伊豆芭蕉堂連句会	「端座」……………121
「春の土」……………71	「小豆畑」……………88	「元朝や」……………103	解 纜
青葉連句会	鮎倉橋連句会	伊勢原連句会	「塵埃渺漠」……………122
「名水を訪ね」……………72	「やまべ」……………89	「太山の花」……………104	「出 <small>まんじ</small> 」……………123
茜連句会	鮎須川連句会	市川俳諧教室	香川県連句協会
「初みくじ」……………73	「石 <small>い</small> 専 <small>が</small> 粥 <small>が</small> 」……………90	「斑雪嶺」……………105	「初虹や」……………124
あした連句会	鮎連句会	「風薫る」……………106	香川連句会
「星涼し」……………74	「芋の葉」……………91	いなみ連句会	「水軍の郷」……………125
「大瀑布」……………75	鮎連句同好会	「草笛の」……………107	勝山連句会
「山吹や」……………76	「梅かほり」……………92	「望遠鏡」……………108	「雪解野や」……………126
「鳩の群」……………77	あるふあ会	茨の会	風の巷
「初鷄や」……………78	「緑さす」……………93	「高野山」……………109	「流し雛」……………127
「香水や」……………79	伊賀連句会・西の丸座	「クレイン伸びるや」……………110	河童連句会
「秋の海」……………80	「街道フェスタ・奈良街道」……………94	「春浅し」……………111	「花の宰相」……………128
「白 夜」……………81	伊賀連句会・高旗の座	「福まねき」……………112	かびれ連句会
「寒明けや」……………82	「街道フェスタ・和銅の道」……………95	「程のよき夢」……………113	「山 泊」……………129
あしたの会えびね支部	伊賀連句会・月鉾の座	宇宙連句会	「秋 風」……………130
「つばめ来る」……………83	「五月晴」……………96	「刻々と」……………114	「今年竹」……………131
あしへ俳諧塾	伊賀連句会・白鳳の座	NHK文化センター青山教室	「鶴捕場」……………132
「凌 宵 花」……………84	「夢の浮橋」……………97	「望の夜」……………115	「冬木原」……………133
亜の会	池袋連句会	「人文字」……………116	「十三夜」……………134
「垂直の前線」……………85	「雪しろ」……………98	小野連句会	兜の会
天の川連句会	「郭公や」……………99	「野仕事」……………117	「一直線」……………135
「友好の」……………86	「冬暖か」……………100	おぼろ連句会	歌林連句会
		「卒業」……………118	「ままごと」……………136
		「颯 風」……………119	川内連句会

「嘲り」……………	137
「磯の香」……………	138
神田川連句会	
「クラシックホテル」……………	139
神田義仲寺連句会	
「奈良の秋」……………	140
きさらぎ連句会	
「炎 暑」……………	141
「松花堂」……………	142
木の会	
「草間先生御快癒・万緑」……………	143
岐阜県連句協会・朱の会	
「初晴や」……………	144
岐阜県連句協会・瑞巖寺法楽連句会	
「苔の元」……………	145
岐阜県連句協会・郡上みよし野連句会	
「座り地藏」……………	146
錦心会	
「背凭れ」……………	147
くさくき	
「秋 風」……………	148
「野分星」……………	149
「秋思の譜」……………	150
「講義室」……………	151
「零雨先生追悼・大隣寺」……………	152
「花火待つや」……………	153

「軽莞の子」……………	154
「洗い 鯉」……………	155
くさくき北九州支部	
「残る鴨(一)」……………	156
「残る鴨(二)」……………	157
くさくき松山支部	
「道祖 神」……………	158
「落葉焚く」……………	159
雲の会	
「私といふ交流電燈」……………	160
興聖寺連句会	
「しまなみ架橋」……………	161
郡山連句会	
「棕 鳥」……………	162
ころも連句会	
「唐辛子」……………	163
「夏 薊」……………	164
「天地凍つ」……………	165
「初雪や」……………	166
さくら草連句会	
「七彩の夢」……………	167
「ざわめきの」……………	168
佐久良連句会	
「卒業」……………	169
「初富士」……………	170
里の会	
「落し文」……………	171
ザ・ファイブ	

「月の夜」……………	172
三尺童	
「著菝の花」……………	173
「それぞれの」……………	174
鹿の会	
「初 買」……………	175
「とら猫」……………	176
「銀色の」……………	177
「木遣り歌」……………	178
「夏近し」……………	179
慈眼舎連句会	
「鶴 亀 の」……………	180
「カンパニユラ」……………	181
「萩の葉や」……………	182
四国は一つ連句会	
「自由奔放」……………	183
獅子門	
「寒さかな」……………	184
「大根引」……………	185
「落葉川」……………	186
「春のうぶ声」……………	187
「百代の過客」……………	188
「葉牡丹の渦」……………	189
紫薇の会	
「春の蠅」……………	190
紫明庵連句会	
「亀 鳴 く」……………	191
「早春賦」……………	192

「晩 菊」……………	193
「雲の峰」……………	194
「北の大地」……………	195
樹氷連句会	
「父の 日」……………	199
上毛連句会	
「黄葉や」……………	200
「冬めきぬ」……………	201
湘南吟社	
「寒明の雨」……………	202
「第五回鶴岡八幡宮奉納松涛軒五世襲号記念俳諧之連歌」……………	203
しらぎく	
「いろはにほへと」……………	204
しらさぎ	
「忙中閑」……………	205
尋牛会	
「梅雨晴れや」……………	206
新庄北陽社	
「今朝の春」……………	207
「片 蔭」……………	208
「秋高し」……………	209
「青 葉」……………	210
深大寺連句会	
「研究所」……………	211
「葉 鶏 頭」……………	212
青宵紫庵俳諧	
「寝転んで」……………	213

「葛蒲湯」……………	214	「中央連句会	「秋 澆」……………	232	「帆 柱」……………	248	「俳諧寒菊堂三つ物連句碑建立	記念・今あらば」……………	264			
「身の縮む」……………	215	「余 寒」……………	「月 蝕」……………	249	「月 <small>ナナ・エクリプス</small>	蝕」……………	249	「俳諧田園	「恋づくし・恋の陥穽」……………	265		
瀬戸内海を囲む連句会		ちばらき連句会	都心連句会		「柚平先生九十一歳祝賀」……………	250	「何のつもり」……………	266	芭蕉記念館連句会			
「すらり」……………	216	「草 団 子」……………	「伊東桃庵翁追善 寒雀」……………	252	「第十回青時雨忌追善俳諧連歌」	……………	251	「宗 旦 忌」……………	267			
浅春連句会		土筆・有楽帖三吟会	「僧 庵 に」……………	253	「伊東桃庵翁追善	寒雀」……………	252	「朝 寒 や」……………	268			
「大 運 河」……………	217	「鯉 の 群」……………	「初 し ぐ れ」……………	237	「筑波連句協会		253	「白 梅 や」……………	269			
「月 今 宵」……………	218	筑波連句会	「二羽智子連句集『虎落笛』上梓		「夏に入る」……………	254	「神話の里」……………	270	「神話の里」……………	270		
創 の 会		「ヤスバース」……………	祝賀・筑波路」……………	238	富山県連句協会		253	「巴世里連句会				
「ヤスバース」……………	219	「初 し ぐ れ」……………	「密田靖夫編『芭蕉・北陸道を行		「夏に入る」……………	254	「風の師走」……………	271	「風 of 師走」……………	271		
草 門 会		「二羽智子連句集『虎落笛』上梓	く』上梓祝賀・北陸道」……………	239	長尾連句会		255	「初 懷 紙」……………	272	「初 懷 紙」……………	272	
「コラージュの花野」……………	220	津幡連句クラブ	「寒 明 け」……………	240	習志野連句会		255	「はねだ連句会				
「霞裏漉し」……………	221	「寒 明 け」……………	「ほつほつと」……………	241	「透ける波」……………	256	「青鬼灯（しりとり）」……………	273	「青鬼灯（しりとり）」……………	273		
啐 啄 会		「ほつほつと」……………	「雪霏々と」……………	242	南草連句会		256	「更 衣」……………	274	「更 衣」……………	274	
「草 矢」……………	222	「雪霏々と」……………	「入 園 の」……………	243	「葉 桜 や」……………	257	「芭流朱連句会		274	「芭流朱連句会	274	
「雪 搔 く」……………	223	「入 園 の」……………	つらつら吟社		「道観の門」……………	258	「夏 野」……………	275	「夏 野」……………	275		
「迫々の梅」……………	224	つらつら吟社	「初 明 り」……………	244	俳諧工房		259	「東松山連句会				
大智院連句会		「初 明 り」……………	東京義仲寺連句会馬山人記念会		「桃の籬に」……………	259	「日ノ出連句会		276	「日ノ出連句会	276	
「青 葉 潮」……………	225	東京義仲寺連句会馬山人記念会	「久木田朱美子さん一周忌追		俳諧寺芭蕉舎		259	「花 一 望」……………	277	「花 一 望」……………	277	
第六天連句会		「久木田朱美子さん一周忌追	悼・骨董ひとつ」……………	245	「二歩出て（K98-67）祝小出		260	「菱の実会				
「初 鎮 守」……………	226	悼・骨董ひとつ」……………	「脳髓洗ふ」……………	246	「一歩出て（K98-67）祝小出		260	「電 撃」……………	278	「電 撃」……………	278	
「路のたう」……………	227	「脳髓洗ふ」……………	「桃天樹唸聚		「二歩出て（K98-67）祝小出		260	「P C I V A N 電 腦 連 句				
「蒲団叩く音」……………	228	「桃天樹唸聚	「萩 叢」……………	247	「廊踏めば」……………	262	「カラコロと」……………	263	「六月の男」……………	279	「六月の男」……………	279
多度津連句会		「萩 叢」……………	徳島連句懇話会		「カラコロと」……………	263	「カラコロと」……………	263	「そぞろ神」……………	280	「そぞろ神」……………	280
「きさらぎの」……………	229	徳島連句懇話会		247								
多摩連句会												
「行く春の」……………	230											
丹 想												
「非 懷 紙」……………	231											

〔大江戸尽〕……………281

B 面

〔鵬日和〕……………282

ひよとり連句会

〔土筆摘む〕……………283

〔酒蔵〕……………284

〔竜頭船〕……………285

〔鳴神に〕……………286

広野連句会

〔冬木立〕……………287

風蘭社

〔翁堂〕……………288

〔桑の実や〕……………289

藤が谷連句会

〔秋彼岸〕……………290

富士裾野連句会

〔寺山〕……………291

北杜連句塾

〔赤かぶ〕……………292

〔喪の仕度〕……………293

勾玉の会

〔マント脱ぐ〕……………294

〔原風景〕……………295

松山連句協会

〔句碑いくつ〕……………296

〔鏝絵〕……………297

〔姿見〕……………298

松山連句教室

〔落葉ふむ〕……………299

窓

〔茶の花〕……………300

摩耶連句会

〔蝸の〕……………301

丸亀連句会

〔若葉風〕……………302

三重県連句協会

〔村田治男理事長 三重県平成文化賞受賞を祝して・北十字星〕……………303

三河連句会

〔花女〕……………304

未来図連句会

〔旅硯〕……………305

〔白牡丹〕……………306

目黒連句会

〔ヤマゴボウ〕……………307

本宮連句会

〔啓蟄や〕……………308

杜の会

〔地軸揺らぐ〕……………309

〔遮断機あげて〕……………310

八千草連句会

〔炎帝や〕……………311

〔はせを碑や〕……………312

山国連句の会

〔探梅や〕……………313

瑤沙連句会

〔晩節〕……………314

〔式部の実〕……………315

葉門連句会

〔防風林〕……………316

〔街騒に〕……………317

〔邪馬台国〕……………318

よみうり文化センター川口

〔風の唄〕……………319

よみうり文化センター京葉

〔大初日〕……………320

連句会「Za」

〔新緑〕……………321

連句会ひらめき

〔焼芋の笛〕……………322

〔寒紅〕……………323

連句会遊子座

〔春の雪〕……………324

〔冬薔薇〕……………325

連句パワー

〔フオンタナ〕……………326

連楽会

〔小春日の〕……………327

和光大学

〔花の光〕……………328

全国連句グループ概況

連句協会会員名簿

3

25

# 第十七回連句協会全国大会の記



六月二十日、前日の風雨がうそのように晴れあがった東京。代々木の日本青年館・国際ホールに於いて標記の会が開催され約百三十名が参集。開会は近松寿子副会長・連句日和という言葉でまず天気の話から始め、次いで体調を崩され欠席の今泉宇涯会長に代わり宇咲冬男副会長のあいさつ。△今泉会長は六月二十八日に逝去された▽

土屋理事長は「事業報告」、協会賞休止のことなどにも触れ今後の協会のありかたについて述べた。このあと秋の国民文化祭が行われる大分山国町を初め、新庄、岐阜、佐渡等の連句会の案内が各実行委員の方より述べられた。

連句実作会は二十四席。くじびきによる一期一会の連衆を昼食の弁当を広げつつ各席なごやかにスタート。時に笑い声などが交じる充実した二時間。

講演はテレビ等でおなじみの塩田丸男氏、「連句と私」と題し軽妙な話で連衆を魅了した。連句の普及が誤れる近代個人主義を排し「和の世界」をつくる一助になるのではと、自身の連句体験を例にのべて興味深い内容。

第二部は懇親会、連句ならではの交歓があちこちで見られ名残を惜しみつつ散会となった。

△太郎▽



## 第十三回 国民文化祭おおいた'98

### 文芸祭連句大会を顧みて

平成十年十月二十四日、全国連句大会が、山国町で開催され、翌二十五日は、合同大会が日田市で開催、いずれも大会史上、空前の盛会に終り、関係者の喜びは大きかった。連衆との交流、ふれあいを通じて実力のほどを痛感し励みにもなった。山国町は、三年前、0からのスタート。無から有にするための地道な努力が小振りの花を咲かせるまでになった。それにしても、当日の実作会場では、横網の胸を借りる幕下の感があつて三時間は、緊張の連続であつた。さて役所にいると、三十年前とは比較にならないような新規事業が舞い込んで来る。そして、全国規模のイベントが山国町でも開かれるようになった。しかも、規模、内容ともに、全国（世界）大会に相応しい連句大会が、僅か四千人に満たない山国町で開催され、成功を収めたことは、殆ど奇跡としか言いようがなく、関係者の喜びは大きい。

平成九年十一月十六日開催のプレ大会の惨憺たる状態から一年間、血の滲むような努力の甲斐があつて、本大会は有終の美を飾ることができた。特に、三十二座（実質三十四座）二二〇名の人たちによって、延々三時間にわたり巻かれた半歌仙は、すばらしく、全国からの連句愛好者を充

分に満足させたのではないだろうか？と自画自賛しています。大会終了後、四ヶ月、残務整理に追われながら、「良かった」「連句に出会えて良かった」と思う毎日です。県のご指導をいただきながら進めましたが、本当に長い三〜四年にわたる事業であつただけに心労も一入のものがありました。今はただ只管に、楽しい思い出だけを胸に、日々、連句を巻くことによつて、心の浄化、癒しに努め、日本に於ける短文学の真髄に迫りたいと思います。多くの方々のご厚志、ご指導、協力に対して、心からお礼を申し上げます。

（仲 武彦 山国町実行委員会委員・企画委員）



## 西鶴と芭蕉

### —— 同時代人の芸術感覚

荒川 有史

#### 一 好き嫌いの行方

たしか太宰治の一文に、芸術の評価など所詮好き嫌いですよ、という意味の発言があつたかと思う。

表現の特性にしろ、文体に定着を示している発想にしろ、すぐれているとか、すぐれていないなどの評価は、行き着くところ、好き嫌いにもとづく、といつていいのであろう。と同時に、その好き嫌いに変化の生まれることも、年輩の人間には痛いほど経験ずみのことである。

若いときは芭蕉（一六四四・寛永21年生〜一六九四・元禄7年没）が嫌いだったのに、この世の持ち時間がすくなくなるにつれ、次第にその魅力を発見したりするようになる。あるいは、逆の場合も存在する。

廣末保のように、若いときは井原西鶴（一六四二・寛永19年生〜一六九三・元禄6年没）の浮世草子を商業資本のどす黒さの反映と見なしていたのに、晩年になってからその魅力に気づき、うまずたゆまず発言

したりするようになる。

では、こうした好き嫌いの変化は、どうして生まれてくるのであろうか。

今まで見えなかったものが見えてくる。今までよしと見てきたものの中に、矛盾なり限界を発見して、あきたりなさを感じたりする。下世話に言えば、惚れているうちはあばたもえくぼにしか見えなかったのに、情熱がさめかけてくると、あばたはあばたに見えてくる。それと、どこか通い合うものがあるだろう。あるいは、あばたがあばたとして見えてきたものの、えくぼの魅力に深まりを感じることもあるだろう。

西鶴風に言えば、へ人はばけものである。よくもあしくも変化する。その変化した時点でさまざまな芸術作品と対面したとき、そのよしあしの評価の基調に好き嫌いのあることを忘れ、傍観者風の批評を展開したりするのである。

が、やはり太宰治が指摘するように、そのよしあしは、好き嫌いから出発する。この作品はよかったね、胸をワシづかみにされたよ、という原初の鑑賞体験なり感動体験が、自分ひとりの中にしまいこむ行為をばむのである。この感動を、ひとりでも多くの仲間伝えたい、伝えあいたい、という願望が芽生える。その願望は、さらに大きく成長する。好き嫌いを起点に、なぜ好きなのか、という感情体験と、嫌いなもの・嫌いな側面との対比・対決が進行する。そこに、印象の追跡としての批評の第一歩がはじまるのである。

私の場合、西鶴との対面、芭蕉との対面の種々相も、この好き嫌いから始まったことにあらためて気づく。

## 二 浮世草子の魅力

西鶴の浮世草子との出会いは、私の場合、十代の後半に始まる。大学予科（旧制）に入学したと思うよろこびもつかの間、三年間の病氣療養を余儀なくされる。

そのとき恩師の熊谷孝先生（国立音楽大学名誉教授、一九一一年一月二八日生く一九九二年五月一〇日没）より、『西鶴諸国ばなし』の口語訳をすすめられた。『諸国ばなし』は、内題に『近年諸国咄』とあり、副題に『大下馬』とある。三つの題名をもつ作品である。一六八五（貞享2）年正月刊、西鶴44歳のときである。近藤忠義編著『西鶴・日本文学読本9』（日本評論社一九三九年五月二〇日刊）所収の頭注と、新村出編『辞苑』だけを便りに、毎日一作品ずつ翻訳を試みた。

悪い紙質のわら半紙に書きつけていくものの、心ゆさぶられる作品とは仲々お目にかかれない。せいぜい巻一の三「大晦日つごもりはあはぬ算用―江戸の品川かほらけにありし事」か、巻四の二「忍び扇の長歌―江戸土器町かほらけにありし事」などが記憶に残った程度である。

大晦日の生活風景。品川の場合末に住む浪人群像。米屋などの借金さえ満足にはらえない原田内助という浪人が、妻の兄、半井清庵の温情で正月の仕度金を手に入れる。清庵は、神田明神下に住まいする富裕な医師である。たびたびの無心に困惑しながらも、妹の今の身の上を思い、可能な限り融通しているようである。今風に換算すれば、百万円以上の臨時賞与というところであろうか。上書うわがきに、「貧病の妙薬金用丸万によし」と記すところ、清庵と内助との人間関係も垣間見えて楽しい表現である。自分だけ薬効にあずか

れなれないと思つた内助は、やはり近所に住む浪人たちをまねいて忘年会を開く。席上、上書とともにかの十両を回覧、千秋楽の謡とともに回収すると、九両しかない。そこから発生した悲喜劇を、軽妙な筆づかいで西鶴は描く。たまたま一両持ちあわせたという理由で切腹しようとする浪人がいる。そのとき即座に、小判一両投げ出してその危機を回避しようとしたひともいる。一件落着いたあとに、「物には念を入たるがよし」と分別顔するひともいる。結びの「かれこれ彼は武士の交際つきあいかくべつ各別ぞかし」という言葉も、すてきである。いったい誉めているのか諷刺しているのか、あるいは諷刺を基調としながら誉めているのか、あるいはまた礼讃を基調としながらもある部分にわびさびを利きかしているのか、読者のさまざまな反応を喚起するよきな表現刺激である。

真山青果は、この作品を題材として、「小判拾壹両」という脚本（『演劇新潮』一九二六年五月号）を創作した。太宰治も、「貧の意地」という題名でこの主題を追跡（『文芸世紀』一九四四年九月号、『新釈諸国噺』生活社一九四五年一月二七日刊所収）している。

「忍び扇の長歌」では、上野の桜見物の帰途、身分の低いひとりの武士が、大名家の姫君にひとめ惚れする。片や「女の好かぬ男」というから、あまり風采のあがらぬ男であろう。片や八和国美人揃揃にも見えないような、気品に満ちた美しさの姫君である。世間の常識からすると、土台、釣り合わない縁である。が、この男にとって、そうした常識は無縁であつたようだ。さつそく就職運動を開始して、姫の住む屋形の雑用係となる。もちろん、姫と直接口をきけるような関係にはない。まるで、姫と酸素を共有すれば、それでいい、と語っているかのようである。やがて姫にも、男の視線、男のつとめぶりが見えてくる。姫から脱走して生活を共にしよう、というよびかけの恋文がもたらされる。「我を思はば今宵のうちに連れて

立ちのくべし」というのである。緊張した文体を通して、姫の切々たる願いが読みとれよう。今風に言えば、私を好いてくれるなら、いつしよに逃亡してほしい、という意味であろうか。このあと二人の生活が描かれる。五十日の新婚。大名家の必死の探索の結果、二人は探し出され、男は即日打ち首となる。姫のその後の行動選択も含めて、心打つものがあつた。

こうした二、三の作品をのぞけば、さして『諸国ばなし』に魅力を感じなかつた、と言つてよい。

ところが、芥川、井伏、太宰の作品に親しんだあとにまた再読してみると、手習い草紙のような文調を通して、微妙な楽しみを感じずうようになった。たとえば、盲人の耳の話がそうである。

中国春秋の時代、唐土の公冶長こうやちやうという人は、諸鳥の声を聴きわけたという。さしづめロフティングの作品に登場するドリトル先生のように、鳥語をも解したのであろう。また、本朝の安部の師泰という人は、他者の話す音調を聴いて人がらや身分なども洞察できたという。この才能を継承する人が、近世の日本にも登場する。『諸国ばなし』巻一の四、「不思議の足音」の主人公である。伏見の里、豊後橋のほとりに住む盲人である。昔は、身分の高い人であつたのだろうか。世を捨てた現在でも、その気品は人をうつものがある。

この盲人が、九月二十三日の月待ちのとき、伏見の間屋町、北国屋の主人から芸の所望を受ける。この盲人の芸というのは、一節切ひとえぎりを吹きながら、人びとの足音を聞き、男女別・年齢別・職業などを正確に言ひあてるのである。いわば吹奏は、心を集中し、その音色と人びとの足音との対比を追跡する微妙ないなみでもあるのだらう。この噂を伝え聞いた客人衆からの所望でもあつた。

産婆の手を引く男、子どもをおんぶした子守娘、鳥足の行者などが通りすぎる。子守娘の場合、足音は

ひとつなの、ふたりの人間と言ひあてる。二階から大道を見おろす客人の目と、大道を行く人びとの足音に聞き入る盲人の耳とは、まったく一致をみる。

初夜の鐘の鳴るころ、さいごの所望となる。大坂行の下り舟に乗り遅れまい、といそぐふたり連れの旅人である。盲人によれば、ひとり女、ひとり男である。ここではじめて、多数の目と盲人の耳とが対立する。目で見るかぎり、そこにはひとりの武士と供のものが歩いていく。大小をたばさみ黒い羽織を着用し、菅笠を被<sup>かぶ</sup>っている。供の者といえば、挟み箱に酒樽を付け後に続いている。見物衆が、やはり間違ひがあるものですね、と心中快哉を叫ぶ。すると盲人が、いや、おのおのがたの目違ひではないか、と切り返す。

ここで店の者にあとをつけさせて様子をさぐると、伏見より大坂へ向かう商人のふたり連れであつた。そのうちのひとり、実は女である。女主人は、夜道を心配して侍姿になっている。しかも、供の者が挟み箱の先につるした酒樽の中味は、酒でない。小判が、いや大坂だから銀貨がいつぱいつまっている、という寸法であるらしい。目あきの敗北である。

目あきの多くは、ともすれば視覚だけをたよりにして全五官を総動員しようとしなない。私自身そうであるように、見かけの姿にだまされて肉体の線まで透視していかない。現象と共にある心の内部まで透視していかない。現象相互の關係に、するどい目を向けようとしなない。現象とは何か、本質とは何か、運動過程にある事物の根源は何か、などの問いかけが、その瞬間その瞬間における行動選択と結びついていかなない。この目で見た事実を、真実と見誤まりがちである。片寄った判断形成の端緒と言えよう。

ともあれ、こうした作品を読むにつけ、へ人はばけもの、という『諸国ばなし』序にみる西鶴の発想が改

めて想起される。人間みな同じものではない。五官の不自由を克服して、新しい才能を切り開いていく人びとへの、あたたかく、ひろやかなまなざしがここにはある。また、不自由さを自由さに切りかえていくいとなみの中に、〈対象の声なき声〉を聴くという人びとへの讃歌もあろう。それは人間の可能性への信頼と結びつき、人間讃歌として顕在化する。

さしずめ、『諸国ばなし』は西鶴浮世草子の原点であり、人間信頼を基調に〈対象の声なき声〉の多様性、広がり、深まりを文体として定着しているのである。

が、不幸なことに、敗戦数十年というものこうした作品群は、感動体験の分析の対象というより、生体解剖の対象として扱われがちであった。まず、文章を分割する。次いで、自己の主観による文意把握を大前提に、この部分は書き手の創意、この部分は先行文芸からの借用と腑分けする。いわば、生体解剖ふうの、あるいは足し算・引き算ふうの論考の横行である。それらは、さも実証性・客観性に裏づけられた研究の文章化であるような体裁を取り続けた。

やはり、太宰治の指摘にもどり、自己の感受性を捉え直すところから、古典との真の対話を始めるべきではなかろうか。

### 三 去来の証言

こうした浮世草子の魅力が深まるにつれ、ときどきとまどうような発言に出会うときがある。西鶴に対する、納得しにくい批判といってよいだろう。たとえば、向井去来（一六五一・慶安4年生）一七〇四・



宝永1年九月一〇日没)の紹介する芭蕉発言についてである。有名な『去来抄』の一節を再読してみよう。

先師曰く、「世上の俳諧の文章を見るに、或は漢文を倭名(假)に和らげ、或は和歌の文章に漢章(字)を入れ、詞あしく賤しくいひなし、或は人情をいふとても今日のさかしきくまぐ(限)迄探り求め、西鶴が浅ましく下(くだ)れる姿あり。我徒の文章は慥(たしか)に作意をたて、文字は譬(たと)ひ漢章(字)を(借)かるともなだらかに言ひつゞけ、事は鄙俗(ひやく)の上に及ぶとも懐しくいひとるべしとや。

(井本農一校注『俳論集』日本古典文学大系66・岩波書店一九六一年二月六日刊所収)

去来の篤実な人柄からみて、ここに紹介された芭蕉発言に間違いはないであろう。ただし、『先師評』にみるように、芭蕉の全体像をまるごと描く場合と、『故実』篇にみるように他者の言動を説明したり批判したりする場合とは、若干落差が見受けられる。

同門の場合でもそうである。『猿蓑』(一六九一・元禄4年刊)編集以後、蕉門を去っていった凡兆(一七一四・正徳4年没)の記述などに、その反映を見ることができよう。「此木戸(ちやう)や錠(ぢやう)のさゝれて冬の月」という其角(一六六一寛文1年生一七〇七・宝永4年二月二九日没)の発句を、芭蕉は最初誤読した。「此木戸」を「柴(しば)の戸」と読んでしまったのである。そのまま、『猿蓑』に入集した。が、後日、芭蕉は誤読に気づき愕然とする。其角が下五文字を「冬の月」にするか、「霜の月」にするか迷い、書簡を通して先師に批正をゆだねた。その悩みの意味について、芭蕉も気づいたからである。当時、芭蕉は天津に滞在していた。至急の便を去来のもとに送り、たとえ印刷工程にはいつていようとも、費用など度外視して

訂正せよ、というのである。去来は即座に、先師の判断（＝鑑賞体験・感動体験の総括）を諒承できたらしい。ところが、相棒の凡兆は、慥然とした表情で、どっちでもいいじゃないか、という。一説によれば、凡兆は、芭蕉の其角びいきが気に入らなかつたという。去来同様、先師の判断を諒解してのふてくされとも見える。そうした凡兆の心情の屈折が、去来には見えにくかつたのであろうか。去来は、見立てについての正論を説く。この月を「柴の戸に寄せて見れば、尋常の気色」であり、これを「城門にうつして見侍れば、其風情あはれに物すごく、いふばかりなし」というのである。凡兆は、内心苦笑していたかもしれない。

去来の場合、蕉門を去っていった凡兆以上に、西鶴に対しては理解困難なものをもっていたであろう。かりに芭蕉が西鶴の「浅ましく下れる姿」を云々したとしても、批判対象が談林俳諧なのか、浮世草子なのか、あるいはその両方にまたがるのか、はつきりしない。また、浮世草子を批判対象にすえているとしても、『好色一代男』（一六八二・天和2年一〇月刊）より『西鶴置土産』（一六九三・元禄6年刊）に到る全作品をさすのか、はつきりしない。其角の迷いを洞察したような鑑賞体験のありようが描かれていたら、と惜しまれてならない。

が、ともあれ、西鶴の文章との対比において語られていることを見ていくと、蕉風俳諧は、すくなくとも虚構意識において言葉の選択と配列がなされていることに気づく。事実のうわつつらだけを描くのではなく、何が真実で何が虚像なのか、明らかにする価値意識において、見立てが行われていくのである。「作意」とは、真実を一瞬のうちに開示する切り口のことである。すぐれた見立てのことである。たとい、俗語や漢語などの俳言を使用しても、木に竹をつぐようなぎこちなさがあつてはいけぬ。スキマのない表現こ

そ、そこに求められている。

描写が「鄙俗」な世界に及んでも、その世界を泥くさくはいまわるだけでは意味がない。きびしい現実の中に生きている人間のよろこびなり悲しみが、人びとの願いのありようも含めて、まるごと描かれることを志向するのである。

去来の紹介した芭蕉発言は、ところで形をかえ西鶴の浮世草子でも志向され実現されていたのではなからうか。

たとえば、『世間胸算用』（一六九二・元禄5年、西鶴51歳）を見てみよう。卷三の三に、「小判は寝姿の夢」という作品が収録されている。乳呑み児をかゝえた若夫婦が、大晦日をすごしかね、七転八倒する物語である。万やむをえず、妻を裕福な家庭の乳母に差しだしたものの、奉公先の主人に対する近所のおかみさんたちの噂に心をかきみだされ、即座に妻を取り戻してしまふ。「なみた涙で年を取とりける」と結ばれている。

遺稿集となった『西鶴置土産』を見てみよう。卷二の二に、「人には棒振むし同然におもはれ」という作品が収録されている。一夜に何両（数十万）も、時には何十両（数百万）も遊興についやした月夜の利左。そこで彼は、生涯の伴侶ともなる太夫の吉州と出会う。さまざまな苦労の末、身請し、人びとの面前から姿を消す。身請することで、一文なしの生涯となったのであろう。今や、金魚の餌となる棒振虫を取り集めて一日二五文（二千五百円前後）の収入。その利左の面前に、偶然三人の旧友が出現する。上野の返り咲きの桜見物の帰途である。三人の善意の攻勢を前に、利左夫妻は自分たちの誇りと生きがいを守りぬくため、また新たな逃亡を試みる。幼い息子を連れて、である。

こうした作品群には、すくなくとも「浅ましく下れる姿」などない。清冽といってよいような人間模様

が展開する。こうした表現に接し、「浅ましく下れる姿」云々というなら、その発言者の文章感覚が逆に疑われることになりそうだ。

去来による芭蕉発言紹介の、言葉足らずを思う。

こうした判断は、ところで、私ひとりのものではないだろう。すでに八十年ほど前、芥川龍之介が明快に説明しているところである。

#### 四 芥川龍之介の新鮮な切り口

芥川は、数年に渡って、「芭蕉雜記」を書き続けている。一九二三（大正12）年十一月、一九二四（大正13）年五月、同年七月の三回にわたって『新潮』に発表。その「断り」に、執筆事情の一端が紹介されている。——「これは芭蕉及びその作品に関する僕の感想を集めたものである。尤も全部を集めた訣ではない。残りはいづれ手を入れ次第、やはりいつか『新潮』に公にしたいと思ってる。／僕の「Text」に使ったのは一一の例外を除きさへすれば、沼波<sup>ぬなみけいおん</sup>瓊音氏の芭蕉全集である。又僕の引用した逸話に出典を明記しなかったのは僕の孫引きをした沼波氏の全集にその用意の足らぬ崇りである。さもなければ僕は恬然と一かどの俳書通を装ったかも知れぬ。大正一二年十月十日記」云々。

さらに、一九二七（昭和2）年八月『文藝春秋』に、「芭蕉雜記」の追加が掲載されている。自裁の直前まで、芭蕉についての思索を深めている。と同時に、芭蕉をとおしての自己凝視・自己反省・自己確認を深めている。

芥川は、この「雑記」の中で、西鶴と芭蕉について、次のように語っている。

芭蕉の伝記は細部に亘れば、未だに判然とはわからないらしい。が、僕は大体だけは下に盡きてゐると信じてゐる。——彼は不義をして伊賀を出奔し、江戸へ来て遊里などへ出入しながら、いつか近代的（当代の）大詩人になつた。なほ又念の為につけ加へれば、文覚さへ恐れさせた西行ほどの肉体的エネルギーのなかつたことは確かであり、やはりわが子を縁から蹴落した西行ほどの神経的エネルギーもなかつたことは確かであらう。芭蕉の伝記もあらゆる伝記のやうに彼の作品を除外すれば格別神秘的でも何でもない。いや、西鶴の「置土産」にある蕩児の一生と大差ないのである。唯彼は彼の俳諧を——彼の「一生の道の草」を残した。……

神聖侵すべからざるひと芭蕉、という底の俳聖意識などは、ここにない。青春の情熱を最大限に燃焼して行動する、そうした芭蕉像がここにある。また、中世歌人西行と対比して、肉体上のたくましさもなければ、精神上のふてぶてしさもないという。芭蕉は、庶民と等身大の肉体を持つ。たゞ、近世詩人として繊細な精神のありようがちがうのである。

が、ここで何よりも注目しておきたいことがひとつある。『西鶴置土産』に登場する「人には棒振虫同然に思はれ」の主人公、月夜の利左と同様な行動の軌跡を、芥川は芭蕉に発見していることである。この発見は、西鶴浮世草子の方法意識がたんなる蕩児礼讃に終始するものでないことへの洞察につながる。蕩児の行動の軌跡が、人間回復へのいとなみと相即不離において描かれているのである。

つまり、青春の時期における芭蕉の奔放な姿と、後年の俳諧にみる人間讃歌とをつなげ、さらに菱川師宣（——一六九四・元禄7年六月四日没）の浮世絵を媒介に、西鶴の人間讃歌に通底するものを引き出しているのである。

この間の事情を、芥川の「雑記」に即しながら追跡してみよう。さしあたり、「芭蕉雑記」の中から、芥川の時期区分意識の反映と見なしうる記述を抜き出してみる。(一)『虚栗』(其角撰、一六八三・天和3年刊)以前、(二)『虚栗』の時代、(三)蕉風成立以降の三期に区分する。

まず、第一に、『虚栗』以前。——「芭蕉もあらゆる天才のように時代の好尚を反映している……。正保元年に生れた芭蕉は寛文、延宝、天和、貞享を経、元禄七年に長逝した。すると芭蕉の一生は怪談小説の流行の中に終始したものと云わなければならぬ。このために芭蕉の俳諧も……殊にまだ怪談小説に対する一代の興味の新鮮だった『虚栗』以前の俳諧は時時鬼趣を弄んだ、巧妙な作品を残している」(表記は、『芥川龍之介全集7』ちくま文庫一九八九年七月二五日刊に拠る。以下、同じ)云々。

芥川は、こうした指摘のあとに、いくつかの付合を紹介している。その中から二つ。

骨刀こつがたなかはらけつば土器どき鐔つばのもろきなり

其角

瘦やせたる馬の影に鞭うつ

桃青

釜かぶる人は忍びて別るなり

其角

槌つちを子に抱くまぼろしの君

桃青

芥川によれば、「瘦せたる馬の影」とか「槌を子に抱く」などの印象は、「当時の怪談小説よりもむしろもの凄（こ）い」ということになる。「馬の影」を「影の馬」の倒置だ、と理解する人も存在する。芥川は、骨の刀、土器ふうの鐙を帯した幽霊が、やせ馬の影を鞭うっている、とそのまま理解していたのであろうか。また、「変化」と交わって生まれた槌の子、その槌を抱く女もやはり「変化」だと、芥川は理解しているのであらうか。

「馬の影」という付句は、『世に有て』（桃青編『次韻』一六八一・延宝9年刊所収）という百韻の十六番めに位置づく。「槌を子に抱く」という付句は、同じく『世に有て』という百韻の四十番め。蕉風成立以前、桃青たちは歌仙（三十六句完結）よりも百韻を楽しんだように思われる。ちなみに、『芭蕉年譜大成』（角川書店一九九四年六月一〇日刊）の著者、今栄蔵氏によれば、芭蕉がみずからその号を名乗るようになったのは、一六八二（天和2）年春頃からであり、芭蕉庵桃青とも併用していた、ということである。芭蕉、39歳。奇しくも西鶴が、浮世草子の第一作と目される『好色一代男』を世に問うたのも、この年にほかならない。西鶴、41歳のときである。

さらに芥川は、「芭蕉は蕉風を樹立した後、ほとんど鬼趣には縁を断ってしまった。しかし無常の意を寓した作品はたとい鬼趣ではないにもせよ、常に云うべからざる鬼気を帯びている」云々と、芭蕉文学の連続と非連続の関係を、「鬼趣」と「鬼気」という切り口から総括し、「鬼気を帯びている」事例として、『続猿蓑』（芭蕉原撰、支考補撰、一六九八・元禄11年刊、没後三年余）から、次の句をあげる。

稲妻やかほのところが薄の穂

骸骨どもが演能している画に触発された発句のようである。どくろ、薄という言葉が喚起するものは、絶世の美女と言われた小野小町の説話の世界にほかならない。死後、彼女のどくろの目から薄が生えた、というのである。永遠とは何か、美とは何か、生きるとは何か、人生を楽しむとはどういうことなのか、一瞬の稲妻の光を通路に、改めて考えさせられる。芥川が、へ鬼気という切り口から芭蕉の風狂精神に迫っているのももつともである。

さて、第二に、『虚栗』の時代にはいる。——「延宝年間のとうせい桃青は談林風の俳人である。が、貞享年間の芭蕉はもう談林風の俳人ではない。すなわち延宝から貞享に至る天和年間の芭蕉庵桃青は拳を放れた鷹たかのように、談林風のけんがい圏外へ逸し去ったのである。」「四十歳に近い天和年間の芭蕉に蕉風の寂光土を示したものは……何だったであろうか？……最も直接に芭蕉の天才の開眼に力のあつたのは何であろうか？」「天和年間の芭蕉の作品は頗る支那文学の臭味しゅうみを帯びている。」「すると最も芭蕉の天才を開眼するのに効のあつたものも支那文学と云うことは出来るかも知れない」云々。

芥川は、つぎのような翻訳臭のつよい発句に、支那文学との対決と対話を読みとる。

憶ロウトヲオモウ老杜、髭ヒゲカゼ風ヲ吹フイテ暮秋ボシユウタン歎タズルハ誰タガ子コゾ  
夜着よぎは重し呉天ごてんに雪を見るあらん

いわば、「海彼岸の文学を翻案」したとしか思えない表現である。と同時に、「海彼岸の文学」に反映された中国民族の原体験を通路に、元禄びとの思いを捉え直し、その接線上进行きつ戻りつしながら言葉の定着を模索しようとするとき、談林調とはまったく異なる独自の表現をかちえた、とする判断も示してい



る。そうした対比・対決・対話の創造過程は、芥川によれば、〈芭蕉洞桃青〉という署名にも反映されている。〈芭蕉庵桃青〉が日本独自の雅号である、という判断のもとでの対比であらう。

第三に、蕉風成立以後の俳諧における、その魅力の解明である。翻案のおもかげがいつさい消え去っていったように見えるとき、それが同時に蕉風成立の指標でもあった。元禄びとの人情をあますところなく表現するのに、もつともふさわしい言語形象（＝文学形象）の成立である。芭蕉風に言えば、俗語を正す、というかたちでの成立である。『芭蕉の作品と伝記の研究』の著者、村松友次氏の助言に学んでいうと、芭蕉の自意識では、「みなし栗なども、さたのかぎりなる句共多見え申候」（半残あて一六八五・貞享2年一月二八日付書簡―萩原恭男校注『芭蕉書簡集』岩波文庫所収）という、自省に立っての開眼にほかならない。また、去来によると、芭蕉の俳諧は、「先師の『次韻』起て信徳が『七百いん』おとろふ。先師の変風におけるも、『みなし栗』は生じて『次韻』かれ、『冬の日』出て『みなし栗』落、『冬の日』は『さるみの』におほはれ、『さるみの』は『炭俵』に破られたり。」（『答許子問難弁』―大内初夫校注『俳諧問答』／『蕉門俳論俳文集』集英社刊所収）という展開を示す。こうした展開を射程におきながら、蕉風成立以降の連句の中から、次の六つを、芥川は楽しそうに抜き出す。

① 15 狩衣を砧の主にうちくれて

16 わが稚名を君はおほゆや

② 24 宮に召されしうき名はづかし

25 手枕に細きかひなをさし入て

路通

芭蕉

曾良

芭蕉

③ 25 殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ

千里

26 兀げたる眉を隠すきぬぎぬ

芭蕉

④ 12 足駄はかせぬ雨のあけぼの

越人

13 きぬぎぬやあまりか細くあでやかに

芭蕉

⑤ 13 上置の干菜きざむもうはの空

野坡

14 馬に出ぬ日は内で恋する

芭蕉

⑥ 10 やさしき色に咲るなでしこ

嵐蘭

11 よつ折の蒲団に君が丸くねて

芭蕉

①②は、芥川が選択した順序である。15、16などは、連句の中の位置を示す番号である。表記は、芥

川が愛読した沼波瓊音編『芭蕉全集』（岩波書店一九二二年二月五日刊）に拠る。戦後刊行された芭蕉の全集本によると、たとえば「あまりか細くあでやかに」という表現は「あてやかに」と修正されている。

なまめかしい美しさという印象から、高貴な美しさという印象への変化でもある。しかし、ここでは、芥川の芭蕉像形成にかかわる表記に、変更の手を加えたりしなかった。かりに、④の付合が、表記の変更に よって記述意図に反する印象を喚起したとしても、芥川は芭蕉俳諧の中から、いくらでも希望の付合を発

見できたにちがいない、と思うからである。

ともあれ、①から⑥までの制作時をたしかめると、次のようになる。

①「衣装ヌキして」の巻（歌仙）——一六八九（元禄2）年春

②「風流の」の巻（歌仙）——一六八九（元禄2）年四月

③「日の春を」の巻（百韻）——一六八六（貞享3）年一月

④「かりがねも」の巻（歌仙）——一六八八（貞享5）年九月

⑤「振売かりうりの」の巻（歌仙）——一六九三（元禄6）年一〇月

⑥「初茸はつたけや」の巻（歌仙）——一六九三（元禄6）年七月

かならずしも制作順でないことに気づかされよう。一つないし複数の物語を構想していることと関係がありそうだ。

①は、貴族社会における若い男女の新しい出会いと幼いころの回想。②は、恋の成立。③は、恋の歓喜を経験した翌朝。④は、別れを惜しみ、別れを延期するための恋の算段。

一方、目を転ずると、底辺にはたらく民衆の、やはり真摯な恋が見えてくる。⑤では、雨の日の馬方の恋という見立て（＝虚構）が、台所ではたらく下女の初々しい動作を際立たせている。⑥は、まろく寝ている恋人（下女）の姿を想像する若者（馬方）の思いとつなげて理解することもできるし、やっと二人切りになれた若者が一足先につい眠ってしまった娘をぬくもりのある視線で見つめていると鑑賞することもできよう。

二つの異なった現実を生きる若者たち。と同時に両者に通底するさわやかな情熱のほとばしり。

こうした付合の選択を通して、芥川は「近代の芭蕉崇拜者の芭蕉とはいささか異なつた芭蕉」を発見しているように思われる。「きぬぎぬやあまりか細くあでやかに」という表現は、「枯淡なる世捨人の作品」でないのである。「菱川の浮世絵に髻髻たる女や若衆の美しさにも鋭い感受性を震わせていた、多情なる元禄びとの作品」にほかならない。浮世絵を通路に、西鶴や近松の生きた現実とも重なり合う〈時代〉が、そこではまるごと取り出されてきているのである。魅力あふれる現代史としての俳諧史（Ⅱ文学史）がそこに繰り広げられている。

このように見てくると、芭蕉の西鶴批判が、いつ、どこにおいて、どのような言語形象を対象においてなされたものか、という新しい課題に直面することになる。

芭蕉の念頭にあつたのは、浮世草子の表現であつたのか。あるいは、矢数俳諧に終始したかに見える談林俳諧の表現であつたのか。あるいはまた、両者をも含みこむ言語形象であつたのか。

こうした課題意識に対し、『西鶴新論』『芭蕉の俳諧』の著者、暉峻康隆氏（くのいち連句会主宰）の見解は、一条の光をなげかける。暉峻氏によれば、芭蕉が批判の対象とした西鶴の言語形象は、おそらく卑俗な風俗性にあふれる談林俳諧の世界であろう、というのである。『西鶴』を語る座談会（『近代文学』一九五六年十一月号）での発言ではある。が、傾聴に値いする見解と言えよう。

改めて、去来の舌足らずな記述に、残念な思いをいだく。

近世詩（Ⅱ蕉風俳諧）と近世小説（Ⅱ西鶴浮世草子）に共軛する文学精神のありようは、管見に入るかぎり、芥川龍之介によつてはじめて解明された、と言つてよい。

※本章の記述は、次の三冊を前提としている。

小著『西鶴—人間喜劇の文学』こうち書房 一九九四年五月五日刊

小著『西鶴世代との対話』こうち書房 一九九六年七月七日刊

編著『日本の芸術論』三省堂 一九九五年五月五日刊

## 五 太宰治から見た西鶴と芭蕉

戦後、太宰治は、文学においてもっとも大切なものはへ心づくしであると言った。『如是我聞(二)』(『新潮』一九四八年五月号、後に新潮社一九四八年一月一〇日刊所収)において、である。続けて、「『心づくし』といっても君たちにはわからないかも知れぬ。しかし、『親切』といってしまうえば、身もふたも無い。心趣<sup>こころばえ</sup>。心意気。心遣い。そう言っても、まだびったりしない。つまり、『心づくし』なのである。作者のその『心づくし』が読者に通じたとき、文学の永遠性とか、或いは文学のありがたさとか、うれしさとか、そういったようなものが始めて成立するのである」(新潮文庫一九八〇年九月二五日刊)、と言いつついる。

この太宰が、へ心づくしという切り口から、戦中・戦後における志賀直哉の言動を批判した。——「私はいまもって滑稽でたまらぬのは、あの『シンガポール陥落』の筆者が、(遠慮はよそうね。おまえは、一億一心は期せずして実現した。今の日本には親英米などという思想はあり得ない。吾々の気持は明るく、非常に落ちついて来た。などと言っていたね。)戦後には、まことに突如として、内村鑑三先生などという名前が飛び出し、ある雑誌のインタービューに、自分が今日まで軍国主義にもならず、節操を保ち得たの

は、ひとえに、恩師内村鑑三の教訓によるなどと言っているようで……」云々。

次いで、〈君〉は、「芥川の苦悩がまるで解っていない」とまで言い切る。〈君〉とは、志賀直哉個人にとどまらず、自分以外の流儀を認めようとせず、他者の苦しさを解ろうとしない〈私たち〉のことででもあるだろう。芥川の文学伝統を継承し、二十世紀旗手としての文学課題を実現しようとする太宰。その意気込みが感じられよう。

さらに、太宰治が敬愛した近代作家に、森鷗外、井伏鱒二の二人がいる。

鷗外の文体について、太宰治は次のように語る。——「ここに鷗外の全集があります。私が、よそから借りて来たものであります。これを、これから一緒に読んでみます。きっと諸君は、『面白い、面白い』とおっしゃるにちがいない。鷗外は、ちつとも、むずかしいことは無い。いつでも、やさしく書いて在る。

……翻訳篇、第十六巻を、ひらいてみましょう。いい短編小説が、たくさん在ります。……みんな、書き出しが、うまい。書き出しの巧いというのは、その作者の『親切』であります。また、そんな親切な作者の作品ばかり選んで翻訳したのは、訳者、鷗外の親切であります。鷗外自身の小説だって、みんな書き出しが巧いのですものね。すらすら読みいように書いて在ります。ずいぶん読者に親切で、愛情持っている人だと思います」云々（『女の決闘』／『月刊文章』一九四〇年一月号、表記は『新ハムレット』新潮文庫一九九五年一月三〇日刊所収に拠る）。

また、鷗外への傾倒ぶりの一端は、死後、森林太郎の墓の近くに葬ってほしい、という遺言にも反映されている。その意志は、遺族の配意によって実現した。三鷹市禅林寺の太宰治の墓は、森林太郎の墓のまむかいにある。

井伏への傾倒も有名である。同人誌『世紀』創刊号（一九二三年七月）に掲載された、井伏の処女作「幽閉」を一読し、そこに日本のチェーホフを発見した。青森中学一年生るときである。それ以来、井伏の天才性に対するおもいは、生涯かわっていない。

森鷗外、芥川龍之介、井伏鱒二の文学伝統の方向線上に、井原西鶴の浮世草子が存在する。

太平洋戦争の敗色明らかかな一九四四年、太宰は『新釈諸国噺』を書き続けた。そのはしがきに、西鶴は世界でいちばん偉い作家だ、と書きつけている。さらに、「メリメ、モオパッサンの諸秀才も遠く及ばぬ。」とまで言い切る。最後に、「この仕事も、書きはじめてからもう、ほとんど一箇年になる。その期間、日本に於いては、実にいろいろな事があつた。私の一身上に於いても、いついかなる事が起るか予測出来ない。この際、読者に日本の作家精神の伝統とでもいうべきものを、はっきり知っていただく事は、かなり重要な事のように思われて、私はこれを警戒警報の日にも書きつづけた。出来栄はもとより大いに不満であるが、この仕事を、昭和聖代の日本の作家に与えられた義務と信じ、むきになって書いた、とは言える。」（圏点、引用者）と結んでいる。

井原西鶴に対する、なみなみならぬ傾倒ぶりを読みとることができよう。

一方、芭蕉についてはどうか。長いこと私は、太宰の芭蕉像について、誤解したまま生きてきた。

その誤解の一因は、『津軽』（小山書店一九四四年一月一五日日刊）に登場する作中人物、兼狂言回しの「太宰治」なる人物の発言に幻惑されていたからである。「行脚あんぎやのおきて掟」を引用しつつ、作中の太宰は次のように語る。

芭蕉翁の行脚掟として世に伝えられているものの中に、一、好みて酒を飲むべからず、饗応により固辞しがたくとも微醺にして止むべし、乱に及ばずの禁あり、という一箇条があつたようであるが、あの論語の酒無量不及乱という言葉は、酒はいくら飲んでもいいが失礼な振舞いをするな、という意味に私は解しているので、敢えて翁の教えに従おうとしないのである。泥酔などして礼を失しない程度ならば、いいのである。当り前の話ではないか。私はアルコールには強いのである。芭蕉翁の数倍強いのではあるまいかと思われる。よその家でごちそうになつて、そうして乱に及ぶなどという、それほどの馬鹿ではないつもりだ。此時一盞無くんば、何を以てか平生を叙せん、である。私は大いに飲んだ。なおまた翁の、あの行脚掟の中には、一、俳諧の外、雑話すべからず、雑話出づれば居眠りして労を養ふべし、という条項もあつたようであるが、私はこの掟にも従わなかつた。芭蕉翁の行脚は、私たち俗人から見れば、ほとんど蕉風宣伝のための地方御出張ではあるまいかと疑いたくなるほど、旅の行く先々に於いて句会をひらき蕉風地方支部をこしらえて歩いてゐる。

「蕉風宣伝のための地方御出張」などの発言を、芭蕉に対する太宰の全面否定と誤解したのである。長いこと、この誤解が続く。

その後、太宰治作『右大臣実朝』（錦城出版社一九四三年九月二五日日刊）を愛読し、熟読するようになる。その結果、実朝の和歌を通して、日本の文学伝統について思索する、ひとつの習慣が生まれた。

たまたま、『芭蕉全集第七卷』（角川書店一九六六年七月二〇日日刊）所収の、大内初夫校注「続の原句合（冬の部）」（一六八八・貞享5年）を読んでいたとき、次の一文に接した。



左勝 霜

親と子の霜夜をかこふ野馬哉のうま溪石けいせき

右

霜ふかし扇をかざす夜の舟よる勇招ゆうせう

「ものいはぬよものけだものすらさへもあはれなるかなや親の子をおもふ」と、よみたまひし、このうたにたより便して、野馬のうまの子をいとふさま、せつなり。右の句、さもあるべきながら、左の句秀逸しゅういつなれば、まけ侍らむかし。

源実朝（一一九二・建久3年八月九日生く一二一九・建保7年一月二八日没）を媒介に、太宰治と芭蕉の文学精神の切点を発見したのである。周知のように、藤原定家所伝本『金槐和歌集』（一二二二・建暦3年）によれば、芭蕉の判定に引用した歌は、「ものいはぬ四方よものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ」とある。

太宰33歳のとき、「鉄面皮」（『文学界』一九四三年四月号）という作品の中で、「くるしい時には、かならず実朝を思い出す様子があった。いのちあらば、あの実朝を書いてみたい」と書く。27歳のとき、「すらだにも」（『作品』一九三六年一月号）という随想において、「二十代の心情としては、どうしても『すらだにも』といわなければならぬところである。ここまで努めて、すらだにも、と口に出したくなくて来るではないか。」と書く。

名著『太宰治——「右大臣実朝」試論』（増補版・みずち書房一九八七年四月五日刊）の著者、熊谷孝は、

この歌が『右大臣実朝』という作品の中で、マチ針のように機能していると指摘、次のように語る。――  
「ホウソウを病んですつかり面おも変わりしてしまつた十七歳の実朝と、母北条（の）政子との対応の場面、……  
『すらだにも』の歌の移調……、無神経だから自分の冷酷なもの言いに気づかない……政子との対決……。  
それに対する実朝の返答が、例の『スグ馴レルモノデス』」云々。太宰と芭蕉との切点は、今や明らかであろう。

が、私の読みは、まだ浅かつた。『津軽』の表現の内側から、両者に通底する文学精神を発見していなかつたからである。『井伏鱒二―山椒魚と蛙の世界』（武蔵野書房一九九四年三月二四日刊）の著者、佐藤嗣男氏の助言に学んでいうと、『津軽』第四章に、芭蕉に対する太宰の、すぐれた理解が反映しているのである。「古池や蛙飛び込む水の音」の句について、作中人物がいただいた鑑賞の質を追跡してみよう。

池のほとりに立っていたら、チャボリと小さい音がした。見ると、蛙かえるが飛び込んだのである。つまりない、あさはかな音である。とたんに私は、あの、芭蕉翁の古池の句を理解できた。私には、あの句がわからなかつた。どこがいいのか、さっぱり見当もつかなかつた。……あの古池の句に就いて、私たちは学校で、どんな説明を与えられていたか。森閑たる昼なお暗きところに蒼然そうぜんたる古池があつて、そこに、どぶうんと（大川へ身投げじゃあるまいし）蛙が飛び込み、ああ、余韻じようじよ嫋々、一鳥啼なきて山さらに静かなりとはこの事だ、と教えられていたのである。なんという、思わせぶりたつぷりの、月並な駄句であろう。いやみつたらしくて、ぞくぞくするわい。鼻持ちならん、と永い間、私はこの句を敬遠していたのだが、いま、いや、そうじゃないと思ひ直した。どぶうん、なんて説明をするから、

わからなくなってしまうのだ。余韻も何も無い。ただの、チャボリだ。謂わば世の中のほんの片隅かたすみの、実にまずしい音なのだ。芭蕉はそれを聞き、わが身につまされるものがあつたのだ。古池や蛙飛び込む水の音。そう思つてこの句を見直すと、わるくない。いい句だ。当時の壇林派だんりんのにやけたマンネリズムを見事に蹴飛ばけとしている。謂わば破格の着想である。月も雪も花も無い。風流もない。ただ、まずしいものの、まずしい命だけだ。当時の風流宗匠たちが、この句に愕然としたわけも、それでよくわかる。在来の風流の概念の破壊である。革新である。いい芸術家は、こう来なくつちや嘘うそだ、とひとりで興奮して、その夜、旅の手帖てちようにこう書いた。

「山吹や蛙飛び込む水の音。其角きかく、ものかは。なんにも知らない。……古池や、無類なり」

「其角、ものかは」と手帖に書きつけた批判の言葉は、支考（一六六五・寛文5年生〜一七三一・享保11年二月七日没）が『葛の松原』（京都井筒屋庄兵衛一六九二・元禄5年刊、『校本芭蕉全集第七卷』所収）に紹介した芭蕉の発想とつながるものである。支考によれば、「山吹という五文字は風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして実也じつ。実は古今の貫道なればならし。」ということになるのである。ともあれ、太宰治の場合にも、芥川龍之介同様、西鶴と芭蕉の文学精神の共軌性が、実に見事に追跡されているのである。両者の媒介をとおして、西鶴と芭蕉の世界に通底するものも見えてこよう。へ対象の声なき声に聴く、という創作方法が、近世詩と近世小説のふたつの分野に、期せずして実現しているからである。

※ 本章の記述は、次の論稿を前提としている。

拙稿「なぜ、いま、太宰文学か——〈現代史としての文学史〉の視点から」（『新編・太宰治研究叢書 1』近代文芸社一九九二年四月三〇日刊所収）

拙稿「〈心の王者〉との対話——熊谷孝著『増補改版 太宰治』に寄せて」（『新編・太宰治研究叢書

2』近代文芸社一九九三年四月三〇日刊所収）

拙稿「子ども・共同体・説話」（『文学と教育』一七八号、こうち書房一九九七年八月三日刊）

拙稿「芭蕉俳論を読むへその一」——愛読と濫読との間」（『文学と教育』一七七号、こうち書房一九

九七年六月五日刊）

拙稿「芭蕉俳論を読むへその二」——太宰治と芭蕉の間」（『文学と教育』一七九号、こうち書房一九

九七年一月二八日刊）

連句と四三

大野 鶴 士

一九九八年十一月五日、スペースシャトル「デイスカバリ―」から向井千秋さんが発した「宙がえり 何度もできる 無重力」の上の句に付ける下の句の募集に対する反響は、いかにも大きかった。

歴史的に遡るならば、かの二条良基が『筑波問答』において連歌成立の過程として説く尼と大伴家持による定型の唱和が、近未来を先取りした宇宙空間からの発信として、しかもマスメディアを利用して現出した点で、きわめて挑発的であった。

画像を見つつ、日本人に根深く伝えられてきた五音と七音による表現を好む「遺伝子」を刺激するであろうゆえ、少なくとも数万点、まず五、六万点は応募があるかと考えていたが、十四万四七八一点とは予想以上であった。

応募作品は、現代に生きる老若男女一般的日本人の思想や感性などが、七七という実に小さな鏡の破片のようなスクリーンに映し出されているようで興味深く読んだが、とりわけ関心を持ったのは言語リズムの面であった。

作品のかなり多くが、七七の下の七音において意味上四音と三音に切れているのである。たとえば、「ほしのピアノでおはなのおうた」の、「おはなの／おうた」というように。ちなみに国内の入賞作品百点について確かめてみると、四三になっているものは五十五点であった。半数以上である。小中学生の部に多いのかと思っただけけれども、一般の部と比べてほとんど差はなかった。

応募者がいかなる人々かは知るすべもないが、日頃は短歌をあまり作ったりしない人が、指を折りつつ話すように七七を案じて付けたのではないだろうか。もし連句をしていいる人が付けたとしたら、それほどまでに四三は多くなかつたであろう。無視と無知は別にして、程度の差こそあれ意識するからである。

さほど意識することのない人々が付けた結果が四三になつたという現象に、現代の言語における音律感覚の問題

として興味を覚えたのであった。

\*

発生において連句と類縁関係にある和歌の場合、結句を四三で止める例はあるのだろうか。『古今集』四・九パーセント、『新古今集』〇・六パーセントというように、勅撰和歌集における出現率は時代を追って減少することが指摘されている。(『七五調の謎をとく』坂野信彦)。私家集や物語、紀行、日記文学などに含まれている和歌もほぼ同様だろう。

『金葉集』の撰者源俊頼の『俊頼髓脳』には、「末なだらかならぬ歌」の一例として在原業平の歌が示されている。

さくら花ちりかひくもれ老いらくのこむといふなる道

まがふがに

古今・三四九

この歌は四三ではないが、盛んに桜が散り乱れて空が曇ることにより、老いの訪れてくるという道がわかりにくくなることを期待する結句「道まがふがに」が、朗唱してみると声調がよくないと知られる。結句を四三で止めるなど、当時の歌人の言語感覚からして論外だっただろう。

中古平安、中世鎌倉室町において忌避された結句における四三調も、近世江戸の和歌になると、数は多くないもの

のいくらか散見される。

霞わけて雁帰る見ゆ行くさきのはるけきもへばあはれ

むわれは

田安宗武

高円の野辺見にくれば新草に古草まじりうぐひす鳴く

も

上田秋成

いそのかみふるの古道さながらにみ草ふみわけ行く人

なしに

良寛

きのふまで吾が衣手にとりすがり父よくといひてし

ものを

橘曙覧

こうした歌の作者を見ると、いずれも『万葉集』に関心を示したり、万葉調の歌をよくした歌人であることに注意したい。事実、万葉に四三調の歌を見つけるのは困難でない。右の歌なども、措辞の上で万葉の影を見い出せる。

近代を迎えると、万葉からの影響だろうか、正岡子規や子規につながる歌人、たとえば伊藤左千夫、斎藤茂吉などの短歌に往々にして四三調が用いられているし、茂吉は「短歌に於ける四三調の結句」(「アララギ」明治四二、一)において万葉歌の成功例を論じている。

かくて現代の短歌には夥しい。

プラカード持ちしほてりを残す手に汝に伝えん受話器  
をつかむ

岸上大作

地球儀の陽のあたらざる裏がはにわれ在り一人青ざめ  
ながら

寺山修司

俵万智の『サラダ記念日』は、任意に開いたほとんどの  
ページに、結句四三調の歌が溢れている。手元の女子大学  
生の歌集を見ても、もちろん多い。

三十一音の形式以外に近代以前の和歌と紐帯を持ち得な  
い現代短歌では、四三調など問題にすらならないだろう。

右の岸上や寺山の作品にしても、四三でないように改作  
するのはいとも易しいが、それでは切迫感や孤独感が鮮や  
かなまでに失われてしまう。

明治以降の増加については、作者の精神のリズムととも  
に、言文一致の傾向、口語調の流入、時代を映す新しい語  
彙の出現などの観点からも考察が必要とされようが、現代  
短歌においては問題にならないどころか、むしろ四三調は、

その歌にとってはもろもろの意味でもっともふさわしい表  
現の様式であり、現代短歌が確実に手に入れてしまったも  
のの一つであると思われる。

\*

現代の連句作品においては、短句七七における四三はそ  
れほど見られない。見られるとすれば、考えあつての無視  
か、それとも無知か、無意識であろう。その点、「此道の眼  
にて候。連歌のふしをおとし、たけ高くうつくしく、うる  
はしくなす秘曲也」(『宗祇袖下』)とか、「三四をよきに定  
め、四三をあしきに定めたり」(『俳諧埋木』)といった教え  
が、連歌から俳諧にかけて守られ、今日の連句においても  
「二五四三」と称して生命を保っている。

ところが、現代の連句でもないのに、短句の四三が多い  
例がある。それは西鶴の作品である。

千畳じきのたゝみのおもて

せがれより公儀を広う見覚えて

碁でも鞠でも歌でも詩でも

丸山の月は涼しきこゝろもち

帯とけひろげの傾城ぐるひ

西鶴三十六歳の延宝五年三月、大坂の生玉本覚寺で興行  
され矢数俳諧の創始とされる、一昼夜千六百句独吟『俳諧  
大句数』第十の三の折の裏八句目から十二句目である。四

三の句が連続しており、最後の句は字余りにもなっている。

『大句数』は上巻しか現存せず、千句分しか句を見ること  
ができないが、短句五百句において四三になっているのは  
四十三句である。率としては八・六パーセントに過ぎない  
けれども、実際に読んでいくと印象は数字以上に強い。

次いで三十九歳の延宝八年五月、生玉寺内で四千句独吟  
が興行され、『西鶴大矢数』が上梓された。

音羽の山の世界が専一

爪に火をかけたる木にて灯されたり

迎むかへの事に繩いときり所望

いかに盛久遊覧の時四斗樽も

貧乏鍛冶まで鞆たもと祭に

第六の一の折の裏の四句目から八句目にかけての付合で  
ある。四三になっている句の前後それぞれ二句ずつすべて  
が字余りとなっている。

四三に限ってみるならば、『大矢数』は『大句数』に比べ  
て七パーセント程度と若干減少している。しかし反面、長  
句の字余りや短句が八七や七八となる字余り、さらには若  
干の字足らずなど、定型からの逸脱傾向は増加している。

そしてついに四十三歳の貞享元年六月、住吉神社におい  
て一昼夜二万三千五百句独吟を達成した。この時の作品は、  
幸か不幸か第一の発句しか残っていない。あまりにも速す  
ぎて執筆の記録が追いつかず、棒を引いて数えたと伝えら  
れている。

計算してみるならば、千六百句の場合は平均して約五十  
秒で一句、四千句の際は約二十秒で一句ということになる。  
それが二万三千五百句だと、一句あたり約三、四秒である。  
三秒といえは句を普通に読むだけでもかかるくらいの速さ  
であつて、いかに速かつたかが分かる。

速記なら記録できるだろう。また、今日ならマスコミを  
総動員しての一大イベントとなり、ビデオなどでしっかりと  
記録されるであろうが、むしろ記録が追いつかなかつたと  
いうところにこそ、西鶴の速吟の面目躍如の感がある。

実際に二万三千五百句の独吟は、どのような作品であつ  
たのだろうか。残っていない以上、なんとも言い難いので  
あるけれども、『大句数』や『大矢数』の作品から、ある程  
度まで推し量ることはできる。それはきつと、長句短句と  
もに字余りの句が頻繁であり、短句においては二五や四三



もかなりあったに違いない。長句は十七字というより十七音量、短句は十四字というより十四音量といった傾向が見られたと思う。

歌人小塩卓哉は、評論「緩みゆく短歌形式」(『新定型論』)において、近年の短歌は緩やかな定型観が主流となり、三十二文字化していると指摘している。小塩の表現を借りるならば、西鶴の矢数俳諧の作品は、まさに「緩みきつた連句形式」とでも呼ぶべきであろうか。

西鶴は守武流の俳諧を標榜した。その守武の『守武千句』は、追加五十句の分も含めても、四三は十三句、字余りは長句短句合わせても十句に満たない。

西鶴個人についても、初期の『大坂独吟集』所収の百韻や、没する前年に紀伊の熊野へ出かけて詠んだ独吟百韻においては、四三も字余りもさほど目立たない。

してみると、そうした現象は矢数俳諧において顕著に見られる傾向なのであろう。限られた時間内に数多くの句を詠まなければならぬという特殊な状況に起因するのである。

芭蕉の連句には四三はない。短句四三に着目するならば、

西鶴の矢数俳諧は連歌の流れを引く連句から、ともすると隔絶しようとしているかに見える。

三十三間堂の通し矢は、矢が通った頃には次の矢は弦から離れており、三番目の矢は番えられているくらいの速射であつたという。二万三千五百句の興行も、雨霰と降りかかる銃弾ではないが、西鶴の口から文字通り矢継早に、すでに発せられた句を追って次の句が、言葉の矢として次々に際限なく発せられた。

間断なく発射される言語、もうこれは連句というより語りであり咄である。幸いなことに、観客という聴衆も存在している。

仮に記憶力が並外れてすばらしい観客がいたとして、西鶴が時に旧作を用いて付けたり、少し前に付けた句に似た句を付けたことに気づいたとしても、別に咎めだてするに値しないであろう。落語や講談を聞きに行つて、前に聞いたことがあると怒り出す人がいるだろうか。あるいは、能や歌舞伎を鑑賞していて、台本通りだと批難するであろうか。

矢数俳諧が文学作品たり得ているのかどうか、根本的に

文学の定義にもかかわってくる問題であり、にわかには断じがたい。ただ、舞台が設営された上で出演者が現われ、時の進行とともに韻律を備えた音声言語を紡いでいく、空間的・時間的総合芸術としての視点からの見方があってもよいと思うのである。なにも密室の中で、紙に記すものだけが文学作品ではないだろう。

\*

矢数俳諧と現代の正式俳諧。両者は別のものに見えて、しかし興行の形態や意味を考える時、まったく無縁の存在とも思われない。通底するものが見えてきそうである。

正式俳諧で執筆を務めた翌日など、手足の筋肉が痛いことがある。激しい動作をするわけではないが、やはり身体によるパフォーマンスであり、日常とは異なった筋肉を使った動きをするからであろう。無意識のうちにも一種の劇場的な空間の中で、己の身体を記号化しようとしているようだ。

宗匠、執筆以下連衆の座する位置は空間的な規矩に従って定められており、それぞれの動きもほぼ決まっている。

心得ておきたいのは、流動的な状態における相互の距離、

すなわち間合いである。

正式俳諧の座は、ほとんど五感に訴えかけてくるが、とりわけ聴覚の世界、音声为主导して進行していく。その際、付句を治定するまでの時間なども、宗牧の『当風連歌秘事』が「程拍子」について述べるに似て、配慮する。これは時間的な間合いである。

執筆や吟声の役ともなると、句を読み上げねばならぬ場面もある。仮に、正式俳諧興行の座で短句の四三を朗唱することになったとしたら、急に穴に落ちたような音律的感覚に襲われるだろう。一卷に内在する流れが、そこで分断されてしまう。そして、埋め合せとして次の言葉をすぐに発したい誘惑にかられる。それは、いかにも間が悪い。

歌は元来うたわれるものであった。遠い昔に歌と別れ、連歌を経て現在に至った連句も、時に音声の生きる場へ返すことによって、新たな発見があるのではなからうか。

## 再び俳諧について

「松山市民俳句大会記念講演」より

松 永 静 雨

昭和五十六年の二月十一日第十八回の松山市民俳句大会の時に、市役所の八階講堂におきまして「俳諧について」と言ふ題でお話しを申しあげました。あれから十年たちましました。十年の間に連句は素晴らしい発展をみました。

本日は「再び俳諧」について」といふ題でお話を進めたと思います。

それではまず昭和の連句が愛媛の地でいつの頃から始つたかを申しておきましょう。

私が俳句を始めたのは小学校三年生の頃からですが、連句をはじめたのは丁度昭和十五年、草茎松山支部の創立も昭和十五年の三月でございました。当時は戦時中の事であり、思ふように勉強の出来にくい時代でした。今は無き神

尾静光先生の発案で始めましたが、昭和十五年と言へば日本全国どこを見ても、連句をやっている結社なんていうのは実に寥々たるものでした。まして愛媛県では連句をやっている人は一人もいませんでした。句会の際には大勢集つてくるのですが、連句会は敬遠されまして、結局は静光先生と私の二人きりになりました。芭蕉の『七部集』などを手本にこつこつと勉強して居りました。それも昭和十八年の三月、私が海軍に召される迄続きましたが、それ以後はやむなく中断致しまして、再び本格的な勉強が始まつたのは昭和二十一年からでございました。と申しますのは恩師宇田博士が度々ご来松下さいまして、時には年に二度三度の多き及ぶ事もありました。私達も出来得る限り上京致しまして、俳句の勉強と共に連句の勉強も命がけで続けました。そのため東京で発行された連句集には、この松山の人達の連句がたくさん載っております。その目録をちよつと読んでみますと、「草茎十二歌仙」が昭和二十四年に発行されました。「連句集花筐はなかたか」これは五十巻収められています。非常に評判がよく、日本だけではなく、ハーバード大学からの五十部・ミュンヘン大学からの三十部というよ

うに外国からの注文が続々と来たのです。それは勢いを得て、そう言ふ事なればと出来上つたのが、「連句集続花筐」、そうして四冊目の連句集として、「松山連句集」が東京から発行されました。これは過去の三冊の中に洩れた分をまとめて出来たものです。そうして松山から発行されたものには「連句集俵口」、「連句集 花見船」があります。その当時の人々の句もみなこれに載っておりますが、とにかく五十年以上も前から、松山に連句の種が育つていたのであります。愛媛新聞社なども大變力を入れて下さいまして、私達が連句を巻いている所へ一晩付き合つて、夜中近く迄取材して下さい、歌仙一卷まき上る有様をくわしく報道してくれました。「静かなるブーム連句」等と大きく取り上げてくれたのも昭和四十四、五年の頃でした。『独吟三十一人集』『第二独吟歌仙集』『第三独吟歌仙集』などと草茎社から連句集は沢山発行されました。そうして昭和五十年代になると全国的に続々と連句集が発刊される時代となりました。

松山にも星加帚木先生を中心に「松山連句会」と言ふのが出来ました。富田狸通さん、永田黙泉さん達大勢の方々が集つて来て賑やかな会が出来たのが昭和四十四年頃だつたと思ひます。それから十年目に『連句集いでゆのかをり』という松山連句会の本が出版されました。その時に私もご招待を受けたので御座居ます。そして星加先生も狸通先生も亡くなられて困つて居るから是非にといふお誘ひを受けまして、松山連句会へ入る事になりました。私は此の会を捌手の養成所にしたと思ひました。其の当時は連衆を二つに分けて一組は永田先生が一組は私が捌いて居りました。二三年たつと、今日は伸居さん捌いてみて下さい、蝸谷さん今日は貴方がと言ふ風にして居るうちに捌ける人が増えてまいりました。今日の市民俳句大会には連句の出来る方々も大勢来て居られます。一つだけ連句の会が變つて居る所は総員が投稿する事です。連句協会の会長も顧問も審査員も全部連句を出している事です。名前を伏せて誰が捌いたとも誰の作品とも分らない様にして審査を受けます。此の大会は七百三十九巻という膨大な応募数になりました。これは長短合はせて、『二三、三〇二章』という膨大な数であり、俳諧史上こんな数は今迄に例がなく、当日の人数にしても、三五〇人という大勢であり、これを四二席に分けての実作会でございました。こんな連句大会は日本初

つての事だろうと思ひます。これは県、市当局の全面的なご支援と、日本全国の連句作家のご協力のたまものであります。松山を中心とする愛媛県下の連句人の決死的な努力の賜物でございました。それが実を結びまして、昨年の国民文化祭の連句大会には皇太子殿下をこの会場へお迎えする事が出来たのであります。

殿下はこの会場の真ん中の通路をお通りになられつつあちらこちらで御下問になり、長時間ご視察下さいました。

此の事も連句史上、初めての事と思ひます。ですからこの子規博が出来てから十年、その十年間のうちで一番特筆すべき事柄は、昨年の国民文化祭でありましょう。昨年は第五回目の文化祭でしたが、今迄はこの県でも中々組み込めなかつた連句が初めて愛媛の地で文化祭に入つて、其上皇太子殿下が親しく御視察くださいました。これは私が思つていた以上の立派な成果が生れたものだと思ひますし、これを一番喜んでゐるのは、芭蕉であり子規であろうかと思ひます。けれども連句と言ふのは、まだまだ今ようやく始つたばかりと言ふ感じです。だからどうしても私達は

も立派な俳人ばかりでございますから其の素質は十分にございます。たとえば今日お集りの皆さん五〇〇名を一〇名づつ五〇組に分けて、各組に一名づつ五〇名の捌手がいらっしゃいますが、前句を生かして自分の句も生きる。それと同時に次の人の句が作り易いようにと心がけるのが連句であります。

連句は百韻というのが基本の形式でしたが、外にも歌仙、二十韻、胡蝶、十八公、短歌行、十二調、出花等々色々な形式の物があります。しかし私はやはり歌仙三六句をおすすめしたいと思ひます。歌仙と言ふのは五七五の発句ではじまつて、七七の掲句まで三六句で終るのです。連句をやつたことのない人でも、「その揚句に」なんて日常会話にも結構連句の言葉を使つております。

さて私達はどうすれば一番早く連句が身に付くかということ。今日はまづ、時間の許す限り芭蕉の連句を味わつて見たいと思ひます。

まず『尾張五歌仙』の「冬の日」の中の一巻からお話を致しましょう。この歌仙には長い前書が付いております。

「笠は長途の雨にほころび、昏衣はとまりくくのあらしにもめたり。侘びつくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂歌の才士、此国にたどりし事を、不図おもひ出て申侍る。」という前書のもとに、「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」という字余りの発句ですが、芭蕉の意気込みがよく分ると思ひます。前書は夙に吹きさらされた自分は、自分が見てさえ哀れに思える。昔竹斎物語の主人公竹斎が京から江戸へ下る途中名古屋に滞在していたことがあつた。それを思ひ出して、発句を作ります。

「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」

そうすると名古屋の野水が、「たそやとばしるかさの山茶花」。発句が夙で冬の句ですから山茶花と冬の句で受けたのですね。そこへ訪れられた風流人はどなた様でございませうかという風な挨拶の句ですが、これをお話しする前に歌仙の基本を説明しておきましょう。

歌仙は「表」が六句、「裏」が十二句で計十八句、これで半歌仙「一の折」とも申します。そうして「名残の表」が十二句、「名残の裏」が六句、これを「二の折」と申しまして計十八句、「一の折」と「二の折」合はせて「三十六句」

これを歌仙と申します。一番はじめの句を「発句」最後の句を揚句、そして「月花」の定座というのがございます。

月花の句というのは、「二花三月」といつて歌仙のなかには、花が二ヶ所月が三ヶ所に出てまいります。花は裏の十一句目、名残の裏の五句目。さうして三月の月は、表の五句目、裏の七句目、名残の表の十一句目あたりになることになつております。そうして其の一卷の中には、春・夏・秋・冬を揃えその間は無季の句「雑」の句でつながります。だからてんでばらばらの三十六句ではなくて、「発句」から「脇」へ脇から第三へと続きますが、小説的なつながりではなくて、A—B—C—AとBはつながりがあるけれどもAとCはつながりがあつてはならない、これを三句の渡りと申しますが、こうして三十六句でもつて現代の生活なり、生活感情なりをふんだんにうたい込んで行く。「一座建立」と申しますが一座した皆の愛と和によつてすばらしい作品が生まれると思ひます。

それでは「冬の日」にかえつて、「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」「たそやとばしるかさの山茶花」「有明の主水に酒屋つくらせて」「かしらの露をふるふあかむま」これ

は平凡な赤い馬ですね。その馬が頭の露をふるつてい  
るのです。「朝鮮のほそりすすきのほひなき」ほそりすすきは  
秋の句ですね。「日のちりぢりに野に米を刈る」夕方田んぼ  
で稲刈りをしている。ここまでが表六句です。嚴重に言ひ  
ますと表六句においては地名・人名・神祇・釈教・恋・無  
情・病態・旅態・狂態などは詠んではいけないとされてお  
ります。ただし発句は何を詠んでもいいとされて居ります。  
それは漢詩でいうと、起、承、転、結、の起に当る所だか  
らです。最初からいろんな句を作つたのでは、中に入つて  
からの盛り上りがないからでしょう。裏へ入りますと、今  
まで禁じられていたものが全部でてこなくてはいけませ  
ん。その中には政治に対する不満だの、自分達の願望だの  
あるひは病氣もするだろうし、人も死ぬだろうし、恋もす  
るだろうし、特に恋の句は前半に一ヶ所後半に一ヶ所位は  
必ず出てきます。

それでは「冬の日」の裏へ参ります。皆さんも自分なら  
ばどう付けるかなと思ひ乍ら聞いて下さい。「わがいほは驚  
にやどかすあたりにて」田舎の情景ですね。「髪はやすまを  
しのぶ身のほど」「髪はやす間」ですが、これは僧籍にあつ

た人が還俗するのに髪が生える間の事です。「いつはりのつ  
らしと乳をしぼりすて」女の情態ですね。「消えぬ卒塔婆に  
すごすごとなく」まだ墨の香も新しい卒塔婆の事で釈教的  
なものです。影法のあかつき寒く火を焚きて」影法は影  
法師です。寒くと言ふのですから冬の句です。「あるじは貧  
にたえし虚家」からい「田中なるこまんが柳落るころ」これも謂が  
あるのですが省略します。田の中にある由緒ありげな柳と  
思つて下さい。「霧にふね引く人はちんばか」柳散るも、霧  
もともに秋の句ですね。「たそがれを横にながむる月ほそ  
し」これも秋の句が三句続きました。これは春、秋、の句  
は季候の良い時だから、三句から五句ぐらゐまでは続いて  
もいいだろうといわれています。夏と冬の句は一句で捨て  
てもいいし、三句ぐらゐまでは続いてもいいと言はれて居  
りますが、歌仙は三十六句ですから春秋の句といえども三  
句ぐらゐまでで良いと思ひます。

「となりさかしき町に下り居る」と申しますのは、宮仕え  
をしていた女の人が、仕事をやめて帰つて居るのです。「さ  
かしき」というのはかしまのことです。「二の尼に近衛の花の  
さかりきく」二の尼といふのはえらい人で宮中の第二夫人

が、天皇崩御の後尼になられた方です。近衛の花のさかり  
きくは宮中の花はいかがでございましょうかと聞いて居る  
のです。「蝶はむぐらにとばかり鼻かむ」いま宮中は花どこ  
ろではなく、疲弊のどん底で、むぐらの上に蝶がとんでい  
ますよと言ふ応答です。「鼻かむ」というのは、鼻をかむの  
ではなくて嘆き悲しむ事です。蝶だからこれも春の句。「の  
り物に簾透く顔おぼろなる」おぼろだから春の句です。

「いまぞ恨の矢をはなつ声」これは凄い句です。乗物に向  
つて「父の仇」とか「主人の仇」とか言つて矢を射かける  
のです。

「ぬす人の記念かたみの松の吹おれて」これは大盗熊坂長範の物  
見の松でございましょうか。

「しばし宗祇の名を付し水」これは白雲水という名を付け  
た連歌の宗祇です。

「笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨」普通の人ならば用意の  
笠をさつと被るところを、宗祇の跡をたずねるやうな風狂  
の人だから、「笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨」となります。  
冬の句ですね。

「冬がれわけてひとり唐萱とうちき」その冬枯の中に不断草だけが

青青と眼にうつるのです。

「しらくくと砕けしは人の骨か何」そこらあたりにしらじ  
らと砕け散つて居るのは人の骨であろうか、何であろうか。

「鳥賊はえびすの国のうらかた」

鳥賊の骨を連想したのでしよう。これは外国のうらないの  
形式であります。

「あはれさの謎にもとけじ郭公ほととぎす」郭公は夏の句です。

「秋水一斗もりつくす夜ぞ」これは夏から秋へ季移りをし  
てをります。普通の水ではなくて水時計の水です。

「日東じつとうの李白が坊に月を見て」これは日本の李白といわれ  
た石川丈山という詩人の洛北の詩仙堂でお月見をしている  
というなかなかしつかりした句だと思ひます。

「巾きんに木槿をはさむ琵琶打」巾と申しますのは支那風の帽  
子です。それに木槿の花がはさんであるという句です。秋  
が三句続きました。

「うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに」うしの霊を弔つて居る  
のでしよう。

「箕みに鯨このしろの魚をいたゞき」

「わがいのりあけがたの星孕むべく」あけの明星に向つて



身籠らせ給えと念じている姿です。

「けふはいもとのまゆかきにゆき」

眉かきに行くというのはお化粧をしに行くことです。

「綾ひとへ居湯をりゆに志賀の花漉して」

この綾ひとえの句は凄い句なのです。「居湯と申しますのは、湧した湯を湯槽の中にくみ込むのです。むかし都であった志賀の花を漉している情景です。

「廊下は藤のかげつたふ也」

ご殿の長廊は藤の影が長閑につづいている様子が目に見えるやうです。これが掲句です。これが尾張五歌仙の最初の歌仙です。

芭蕉以前の俳諧といふのは一つの言葉に二つ三つの意味をこめたり、一句毎に滑稽な事を詠み込んだりして、ただの文字の遊びであつた。それを芭蕉は文学の域まで高めるために生涯をかけたのでした。

次は『猿蓑』へ移ります。芭蕉の『猿蓑』はとくに有名ですが、その中には四巻の歌仙が載っております。一番最初の歌仙は「鳶の羽かひつくり」の巻です。

「鳶の羽も刷ぬはつしぐれ」

と冬の句から始つています。二番目の歌仙は

「市中いちなかは物のにほひや夏の月」

夏の句から始まつています。三番目の歌仙は

「灰汁桶あくおけの雫やみけりきりぎりす」

秋の句から始まつております。

そうして四番目が「錢乙州東武行」の前書がある

「梅若菜まりこの宿のとろろ汁」

皆さんもよくご存じの句、春の句ではじまる歌仙です。梅が咲いて若菜が萌え出て、まりこの宿へ着いた頃には、あそこはとろろ汁が名物なんですよ。「元気で旅を続けて来て下さい。」という意味をこめた餞別の句です。

それに答へて乙州は、

「かさあたらしき春あけぼのの曙」

旅支度も充分調ひました。元気で行つて参りますという事だと思ひます。

「雲雀なく小田に土持もつころ比なれや」

空には雲雀が囀つて田んぼに入れ土をするようないい時候、春の句が三句続きました。

「しとぎ祝ふて下されにけり」

しどきは米の粉で作った餅ですが、蒸した餅だろうと思ひます。

「片隅に虫歯かかえて暮れの月」

今は表六句では病態などはいけなさとされていますが、一寸感心しない句ですね。

「二階の客はたたれたるあき」

此の句もどうかと思ひますがこの歌仙は裏へ入つてからが素晴らしい句が出てまいります。

「放ちやるうづらの跡は見えもせず」

逃してやつたうづらがぱつと一直線に飛んでいつたのでしよう。

「稲の葉延はのびの力なき風」これは七七の短句ですがなかなかうまい句だと思ひます。ありなしの風にゆらいでいる稲がみごとです。

「ほつしんの初にこゆる鈴鹿山」

「内蔵頭くらのかみかと呼声はたれ」

「卯の刻の箕手に並ぶ小西方こにしがた」

ここは皆さんよく考へてみて下さい。

卯の刻と言へば今でいう午前六時頃でしょうか。時刻迄う

たつてあります。「箕の手」は箕の陣形に並んだ小西方、と申しますのは、小西行長は豊臣秀吉恩顧の大名です。「卯の刻の箕手に並ぶ小西方」とこれだけ言つていただけで、天下分け目の関ヶ原の合戦の模様が想像できます。西軍の石田三成はどのあたり、東軍の徳川家康はどのあたり等と色々な事がありありと浮んで来ます。

「すみきる松のしづかなりけり」

戦いくさの前の静けさをうたつた凄い句だと思ひます。私も五十年ばかり連句をやっていますが、とてもとても、このような句は出来なくて苦労して居ります。言はないで表現する、言はないで想像させる、これは連句だけではなくて俳句を作る時にも大切な事で、やはり芭蕉は凄い俳人だと思ひます。そうしてこれだけ鋭く付け込んできますと後は力を抜いていく巧みさ、これが芭蕉の力です。

「萩の札すすきの札によみなして」

「雀かたよる百舌鳥もずの一声」

鴟とが高鳴けば雀が怯えて片寄つている。これは普通の写生的な句です。

「懐に手をあたたむる爍さかの月」

やや寒くなつての月でしよう。

「汐さだまらぬ外の海づら」「汐さだまらぬ」はうねりのことで外海の情景です。

「鍵の柄に立すがりたる花のくれ」

これは昔の旅の状態でしょう。花どきの物憂い情景がよく伺へます。

「灰まきちらすからしなの跡」

「春の日に仕舞てかへる経机」

商売をしていた人が早仕舞をして帰つてくるのでしよつか。

「店屋物くふ供の手がはり」

今でも昼は店屋物ですました等とよく使つていますが、一度に皆が行つてしまつては困るのでお供の連中が交代でご飯を食べに行く。

「汗拭い端のしるしの紺の糸」

これは何でもない事のようにですが、位付とでも申しましようか、面白い句です。

前句が「供の手がはり」とお供の句だから、

「汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸」

本当は太郎兵衛とでも馬子作とでも名を縫ひ込む筈なんだけれど、其の嫁さんは文字を知らないのでしょうか。

あんたは何処へ行つても忘れて来たり、替へてきたりして困る。ここに紺糸でしるしが付けてありますよ。という位付です。

「わかれせはしき鶏の下」

昔は止り木だけが高い所にあつて、夕方がくると其の止り木へ鶏が帰つて寝ていたのです。

「大胆におもひくづれぬ恋をして」これは恋の句です。

「身はぬれ紙の取所なき」

こんな恋を試してみたいものですね。

「小刀の蛤刃なる細工ばこ」

細工箱の中には鋭利な刃物もあり蛤のような鈍い刃物もある。

「棚に火ともす大年の夜」

普通の棚ではなくて、年徳神を祀つてある棚に道具箱を供へて「いろいろお世話になりました。来年もよろしく」と手をたたいて拝んでいるのです。

「こゝもとはおもふ便も須磨の浦」

ここには芭蕉以前の掛詞かけことばがちらつと覗いています。便りをすまいと思ふのと須磨明石の須磨です。

「むね打合せ着たるかたぎぬ」これは零落したお公家さんなどが偲しのばれます。

「此夏もかなめをくゝる破扇やれおうち」

この夏もというのですから去年も一昨年もかなり傷んでいたのかも知れません。扇を買い替えようと思ふのになかなか買えないのです。

「醤油ねさせてしばし月見る」

こゝにおいでの方皆さんならたいにお分りになると思ひますが、醤油瓶を寝させるのではなくて醤油の麴こうじをねさせる事です。これは大豆を煮たり、麦を炒つたりして、それを交ぜ合はせて筵の上にひろげて、其の上へ棕櫚の葉つばなどを置き筵をかけてねさせるのです。だいたい昔は、田舎などでは一年じゆう使ふ味噌、醤油、などは自分の家で作っていました。醤油麴をねさせて、あゝきようも忙しかつた事よと月を見てほつとしている状態です。

「咳声しはぶきの隣はちかき縁づたひ」咳声が自家用の醤油をねさせる様などころによく付いています。

「添へばそふほどこくめんな顔」

こくめんな顔というのは律儀実直な顔で、あまり融通の利く方ではないでしょう。

「形なき絵を習ひたる会津盆」

これは会津地方で作る剥盆はくぼんに絵をかくのです。

「うす雪かかる竹の割下駄」

これは竹を二つに割つて鼻尾がすげてある下駄の事です。

さて皆さん次が「花の定座」です。此の句は意地が悪いと思ひませんか。皆さんならばここの花の句はどう作りますか。割下駄の上に薄雪がかかっているのではなかなか花は咲きませんね。「どうだ花の句を作つて見ろ、できるか」という句でしようか。ところが上手に作つて居りますね。

「花に又ことしのつれも定まらず」

毎年誘ひ合つてお花見に行つていっているのだが、今年はまだ誰と誰が行くか、連が決つていないというのです。

「籬の袂そでを染るはるかぜ」これが揚句です。そしてこれが

猿蓑の中の一番最後の歌仙です。

「梅若染まりこの宿のとろゝ汁」

有名なこの句も実はこの句だけ独立しているのではなく

て、この様にあとに三十五句続いている歌仙の発句なので  
す。

それでは時間も少なくなりましたので次へ進みます。

次は『炭俵』の中の歌仙で、「むめが香の巻」です。

「むめが、のつと日の出る山路かな」

「処く、に雉子の啼たつ」

「家普請やぶしんを春のてすきにとり付て」

これは芭蕉と野坡の両吟歌仙です。

「上のたよりにあがる米の直ね」

上方からの便りでは又米が値上りするそうだ。

「宵の内はらはらとせし月の雲」

「藪越しはなす秋のさびしき」

これが表六句です。裏へ回つて、

「御頭へ菊もらはるゝめいわくさ」

春の発句から始まつて春の句が三句雑が入つて「月の宴」

から「菊もらはるゝ」まで秋の句が三句続いています。

菊もらはるるめいわくさ、それはそうでしょう。御頭が「菊

が所望じゃ。」いやという訳にはいきません。

「娘を堅う人にあはせぬ」

まあまあ菊でよかつた、「娘を行儀見習ひに」等と言はれた  
ら大変な事です。

「奈良がよひおなじつらなる細基手」

「ことしは雨のふらぬ六月」

うまいこと転じております。

「預けたるみそとりによる向河岸」

「ひたといひ出すお袋の事」

「終宵よしすがら尼の持病を押へける」

次の句がすばらしいです。

「こんにやくばかりのこる名月」

芭蕉は実にうまいと思ひます。たつたこれだけを言つて、

宵の内には酒も沢山あつたらうし、料理もいろいろあつた

はずなのでしょうが、酒は飲みつくし料理は食べ尽して、

こんにやくばかりが残つていふと言ふのです。

「初雁のりかけしたぢしいに乗懸下地敷ぢしいて見る」

「露を相手に居合ひとぬき」

「町衆ちやうしゆうのづらりと酔て花の陰」

町役人がお花見をしているのです。

「門で押るゝ壬生の念仏」

そして名残の表へまいります。「東風吹かば」の菅原道真公の和歌とはずいぶんおもむきの違つた句が出てまいります。

「東風に糞のいきれを吹まわし」

若い方々はご存知ないかも知りませんが、これは昔なつかしい田園風景でございます。下肥の匂ひあるいは堆肥の匂ひが東風に乗つて漂つてくる状景です。

「ただ居るまゝに肱わづらふ」

病態が出てまいります。

「江戸の左右むかひの亭主登られて」

江戸のとかくの状況をいろいろ話してくれるのです。

「こちにもいれどから臼をかす」

うすをかしてくれませんか、こちらにも要るのだけれど「さあさあ使つて下さい」。そんな状景ですね。

「方くに十夜の内のかねの音」

「桐の木高く月さゆる也」ほんとうは月の句は名残の表の十一句目に出るのですが、「方くに十夜の内のかねの音」と月が出やすい雰囲気となつたのでここに出した。

「桐の木高く月さゆる也」大へんいい句ですね。さゆると

言ふので冬の句ですね。

「門しめてだまつてねたる面白さ」

「ひらふた金で表がへする」

こう言う句が川柳に独立していきました。

連句のなかには真面目な句、詩的な句ばかりではなくて、此の様な滑稽な句も必要なのです。

「又この春も済まぬ牢人」

「法印の湯治を送る花ざかり」

ここは月の句が出る場所ですがもう月の句が出てしまつていたので花の句がここへ引き上げられました。花の句は本当は名残の裏の五句目に出るのです。

このように連句は、窮屈なものではないのです。一応の規則はありますがもともと自由自在なものです。

「なは手を下りて青麦の出来」

そして名残の裏へ入ります。

「どの家も東の方に窓をあけ」

これはちよつと変わつています。どの家もどの家も東の方に窓があるというのです。

「魚に喰あくはまの雑炊」

本当にうまい事作っています。説明的なところがなくて、魚はもう飽いたというのです。

「千鳥なく一夜くくに寒うなり」

「未進の高のはてぬ算用」

これは年貢の納め残りがまだある。払つても払つても年貢が払ひ切れないというのです。

「隣へも知らせず嫁をつれて来て」

ここは花の定座ですが恋の句になつています。それは年貢さえ払えないのだから、普通ならば親戚縁者、朋輩衆も集まつてもらつて嫁取りのおひろめをやる場所ですが、出来ないので。

「屏風の陰にみゆるくはし盆」

どんな嫁さんが来たのかと節穴や戸の透間から覗いてみると、菓子盆だけが見えているという。しかし部屋の中には新郎も新婦もいるというのです。

芭蕉といえ、本当に真面目な悟りすました詩的な句ばかり作つていたと思ふ方もいるかも知れませんが、そんな事はありません。こういう風な句も作れたのです。そうして何も言わないで想像させる巧みな句ですがこれが揚句に

なつていきます。この歌仙はちよつと変つた面白い歌仙です。

時間が迫つてきましたが、『炭俵』の中からもう一卷「ゑびす講の巻」についてお話して見たいと思ひます。

「神無月廿日ふか川にて即興」という前書がついて居ります。

「振売の雁あはれ也ゑびす講」

「降てはやすみ時雨する軒」

冬の句で始まつて冬の脇です。

「番匠が椽しほみの小節を引かねて」

節が多いとなかなか鋸が進まないのです。

「片はげ山に月をみるかな」

月の句だから秋ですね、

「好物の餅を絶さぬあきの風」

「割木の安き国の露霜」

以上が表六句です。裏へ回つて、

「網の者近づき舟に声かけて」

「星さへ見へず二十八日」

これは昔は陰暦だったから、二十八日とか晦日に月は出なかつた筈です。

「ひだるきは殊に軍の大事也」

芭蕉の句ですが、腹がへつては戦にならぬといふことでしょうか。

「淡気あはけの雪こに雑談ざつだんもせぬ」冬の句です。

「明あしらむ籠かご提灯じようちんを吹き消して」

「籠提灯」は今では映画かテレビでしか見ることはないでしょうが、少々風が吹いても揺れても消えない昔駕籠屋さんが使っていた提灯です。

「肩癖かたがせにはる湯屋の膏薬」

湯屋で売っていた膏薬のことです。

「上かみをきの干菜かんさい刻きむもうはの空」

これは宿湯の下働きの女の人です。

「馬うまに出ぬ日は内うちで恋する」

宿場の下女と馬方の恋です。位付でしょうか。芭蕉はいろいろな恋を扱っていてなかなかの粋人です。

「紬かぜかい買かいの七ななつさがりを音ねづれて」

「塀へいに門かどある五十石取」

昔は五十石取つていれば、塀に門のある家に住まえたようです。一石が四斗俵で二俵半ですから、五十石は百二十五

俵になります。二十五俵を自家用米に置いて百俵を売れば贅沢なくらしが出来ていたのでしょうか。

「此島の餓鬼も手を摺る月と花」

「砂すなに暖ぬくみのうつる青草」

「新島しんじまの糞くそもおちつく雪の上」

「吹ふきとられたる笠かさとりに行」

「川かは越この帯おびの水みづをあぶながり」

昔の川止めとか、もう水が減ったから渡つてもいいとかいう状態でしょう。

「平地へいぢの寺てらのうすき藪垣やぶかき」

これは大水が出たらどうなるのかと思ふ様な藪垣でしょう。

「干物かものを日向ひなたの方かたへいざらせて」

「塩出しほだす鴨かひの苞つとほどくなり」

「算用さんように浮世うきよを立たる京きやうずまい」

「又また沙汰さたなしにむすめ産うぶ」

お産をしたと云ふ事で、又娘に子供が出来たという事です。

「どたくたと大晦日おととしも四よつのかね」

このあたりなかなか調子よく打てば響くようにつながつて



います。

「無筆のこのむ状のあとさき」

この忙しいのに代筆を頼んできて、それもすらすらと言つてくれればいいのに後になつたり先になつたり書きづら  
い。しかし仕方がないので代筆をしているのです。

「中よくて傍輩合の借いらぬ」

醤油借りたり味噌を貸したりの仲でしょう。

「壁をたゝきて寝せぬ夕月」

「風やんで秋の鷗の尻さがり」

「鯉の鳴子の網をひかゆる」

「ちらはらと米の揚場の行戻」

今でいう株の様に昔は米相場があつたのです。

「目黒まいりのつれのねちみやく」

と云ふのはねちねちとしつこく、なかなか埒の明かないこ  
とです。

「どこもかも花の三月中時分」

昔の三月は旧暦だからどこへ行つても花が咲いていたので  
す。

「輪炭のちりをはらふ春風」

これが揚句になつて居ります。

最後に、芭蕉の歌仙で軽みが出て来てだいぶん句境の移  
り変りを見るといはれている『続猿蓑』の中から二巻書き  
ぬいて来ました。が時間の関係でその中の一巻「霜の松露の  
巻」だけ大急ぎで見えていきましょう。

「猿蓑にもれたる霜の松露かな」

沾圃といふ人の発句から出発しています。

「日は寒けれど静かなる岡」

芭蕉の句です。

「水かるゝ池の中より道ありて」

「篠竹まじる柴をいただく」

「鶏があがるとやがて暮の月」

「通りのなさに見世たつる秋」

ここから裏に入ります。

「盆じまひ一荷で直ぎる鮭の魚」

「昼寝の癖をなをしかねけり」

「聾が来てにつともせず物語」

それはそうでしょう、「まだうちの嫁は昼寝の癖が治らな  
い」につこりともしないで言い上げに来たのでしよう。

「中国よりの状の吉左右」

「朔日の日はどこへやら振舞れ」

「一重羽織が失てたづぬる」

これは川柳的な句で面白いと思ひます。

「きさんじな青葉の比の楸楓」  
もみかえで

「山に門ある有明の月」

これは普通の山ではなくて寺山です。其の門を入れれば七堂、伽藍、などの立ち並ぶ大本山でしょう。有明の月もありません。

「初あらし畠の人のかけまはり」

これは支孝の付句で支孝といふ人はなかなか付句もうまいです。

「水際光る浜の小鰯」

前句と共にこのあたりうまいと思ひます。

「見て通る紀三井は花の咲きかゝり」

「荷持ひとりにいとゞ永き日」

名残の表に入りまして

「こち風の又西に成り北になり」

「わが手に脈を大事がらるゝ」

と言ふのは自己診断をして身体に気をつける事です。

「後呼の内儀は今度屋敷から」  
のちよび

お内儀さんと言ふのは町家でしようか、屋敷と言ふのは武家屋敷で今度の後入さんは武家屋敷からきたと言ふのです。

「喧嘩のさたもむざとせられぬ」

それはそうでしょう。

「大せつな日が二日有暮の鐘」  
ある

「雪かき分し中のどろ道」

「来るほどの乗掛は皆出家衆」  
のりかけ

これはまた異様な光景で次から次と馬に乗つてくるのは全部お坊さんだと言ふのです。

「奥の世並は近年の作」

これは奥州みちのくは近年にない豊作であるという事です。

「酒よりも肴のやすき月見して」

「赤鷄頭を庭の正面」

「定まらぬ娘の心取りしづめ」

「寝汗のとまる今朝がたの夢」

これは凄い句ですね、「ああ夢でよかつた」と言ふ所でしよう。

「鳥籠をづらりとおこす松の風」

「大工づかいの奥に聞ゆる」

大きな家でしよう。奥の方で大工さんの仕事をする音が聞えているのです。

「米搗もけふはよしとて帰る也」

そういう大きな家だから毎日米搗く人をやとつているのでしよう。

「から身で市の中を押あふ」

「此のあたり弥生は花のけもなくて」

弥生三月だというのに花の咲く気配もない。

「鴨の油のまだぬけぬ春」

この掲句も凄いと思ひます。鴨はふつう暖くなれば油が抜けるはずなのに、まだ花も咲かない寒さに鴨も油をぬいてないと言ふのです。これが続猿蓑にのつている一巻です。

いろいろとお話し申しましたが、「発句」が独立して俳句となつたのです。発句と言ふのは歌仙でいうなれば其の一

巻を統率するだけの力量がなくてはなりません。しつかり

した句でなければあとの三十五句に劣る様な句では「発句」の役は勤まりません。季語があつて、切字があつて、余韻、余情、の深い句でなければなりません、皆さんも発句を作るつもりでしつかりした句を作つていただきたいと思ひます。私はいつも思ふのですが次の世代に誤りのない俳句を、誤りのない連句を譲り渡していかなければならない大きな責任があると思ひます。これからも皆さんといつしよに勉強して行きたいと思ひます。

「平成三年二月十一日。松山市立子規記念博物館に於ける

第二十八回松山市民俳句大会記念講演録に本人加筆稿」



## 俳諧・赤穂義士伝

密田青々

大高源五

元禄十五年十二月十四日の事である。赤穂浅野藩の浪士

たちは、茶道の宗匠四方庵宗遍より本日夕刻本所吉良邸で年末茶会があると聞き込み、それなれば上野介は必ずや在宅、今宵こそ討ち入りの好機と、面々かねて定めて置いた参集の場所へ急いだ。江戸急進派の先鋒大高源五も、同志数人と打ち連れ、本所をさして小走りにやって来たが、参集の定刻は丑の上刻、宵から雪がちらついて寒さは寒し、手足が冷えてどうにもたまらぬ。ふと見ると道端にうどん屋が一軒、「久兵衛」と書いた行燈にまだ灯を入れてい

る。「やあ、これは妙でおざる。一杯傾けて暖まってまいろう

ではござらぬか」と言えば、「至極もつとも、もつとも」と

皆々同意して、どやどやと店へ入り込み、「亭主、急いで熱いところを」という次第になった。

やがて源五たちがふうふうやり出したところ、店の主人が先刻からしきりに首をひねりながら、「なんのその、ええ：なんのその」と呟いているのに気が付いた。源五は子葉と号して江戸座の俳諧に遊ぶ者であったから、これは冠付けの上五だなと察して声を懸けた。

「亭主、その方先刻からしきりに首をひねっておるが、俳諧でもやるのか」

「へい、これは恐れ入りました。実はこのほどお聞きの通りの冠付けが出ましたので、どうにか一番点になるような発句ができぬものかと、工夫をいたしております。それでつい口癖に出まして：」と額を撫ぜた。

上方での笠付けは江戸では冠付けと呼ばれ、上五文字を題として中七・下五を付ける形式であったが、人の意表に出る付句が珍重された。

源五は「ム、時にとつて面白い。拙者が付けて進ぜよう」と、少し首を傾げてから即吟した。

『なんのその巖をも通す桑の弓』

「これは御名吟」と亭主。「如何にも名吟」と同志銘々も喜ぶ。

「さらば参ろう」と鳥目を投げ出すと、「なんのその、なんのその」と一同駆け出して行った。泰平に慣れた元禄武士達が、これから死地へ飛び込んで行かねばならぬ。とかく臆し勝ちになる気持ちを、「なんのその、なんのその」と奮い立てながら走ったのであろう。

大高源五の俳諧の師匠は、蕉門榎本其角の弟子水間沾徳（せんとく）であつた。十五日の早朝に、誰とも知れずこの沾徳の門まで来て、封書一通を置いて行った者があつた。

山を抜く力をもれて松の雪子葉中には右の一句が記されており、届けたのは、討ち入りの本懐を遂げた子葉自らであつたろうと思われた。

翌元禄十六年二月四日、松平隠岐守邸大書院前の切腹の座に着いた大高源五は、庭前に白く散る梅を見、微笑を浮かべながら左右をかえりみて申し出た。

「ここに臨みながら一句浮かんでおざれば、お筆を拝借つかまつりたい」

それっというので、近くの者が矢立てをさし出すと、源

五はやおら懐紙を取り出して十七文字をしたためた。

梅で呑む茶屋もあるべし死出の山

富森助右衛門・神崎与五郎

討ち入りの翌朝、沾徳に届いた子葉の右の封書の中には「春帆（しゅんぱん）・竹平（ちくへい）も同じ道にて候。涓泉（けんせん）は御存じの如くにて御座候」とあつた。

春帆は富森助右衛門、竹平は神崎与五郎で、涓泉は義挙に先立って自害した萱野三平のことであり、これらの義士たちも沾徳の俳諧の弟子だったのである。

ところで沾徳の仲間、同じく其角の弟子に桑岡貞佐なる俳諧宗匠があつた。この者は平生酒を好んで家も定まらなかつたが、俳諧では江戸座の驍将であつた。

この貞佐もまた赤穂浅野藩の武士たちと親しく交わっていたが、元禄十四年三月に浅野家に珍事が起り、親しかつた武士達も四散して音信が絶えてしまった。その後貞佐は友人にさそわれて京都へ上り、あちらこちらと見物して歩くうちに、ふと神崎与五郎に出逢うたので絶えて久しい物語りをし「だれだれは無事なりや、昔に変わらず往来し給う

や」などと旧浅野家中の俳諧仲間の消息をたずねた。与五郎は連中と絶えず往来していることが知られ、復讐の盟約が洩れては困るので、「だれだれは不実のことありて、今は絶交なり」と答えた。貞佐はこれを実と思ひ、「それはにがにがしきことなり。われなかだちをして仲直しまいらせん」と約束し、さらにつもる話に時を過ごして名残り惜しくも別れたのである。

さて江戸に帰つてから、その年の暮れに両国橋の上で、今度は富森助右衛門に出逢つたので、貞佐はさきごろ京都へ遊んだことなどを物語りし合ううちに、助右衛門はこのあいだ霰の俳諧をものしたと言つて、こんな発句を示した。

飛び込んで手にもたまらぬ霰かな 春帆

如才のない貞佐は、ただ「おもしろし、おもしろし」と

答えて別れた。それから二日を過ぎ、貞佐が早朝風呂へ行つたところ、入り来る人々が口々に、「昨夜浅野家の旧臣数千人集まり、本所吉良邸へ『亡君の讐なり』と討ち入つて主従多勢を殺害し、この暁方高輪泉岳寺さしてひきとりたり」と言ひののしる。貞佐は愕然とした。「さては先日春帆が示した発句の意がよめた。あれは吉良邸へ討ち入ろう心意氣

だつたに相違ない。よもやかの者たち、人数の中に洩れてはおるまじ」と、湯にも入らずそのままのなりで高輪目指して駆け出した。途中、とある酒屋へ飛び込み、にわかのこととで錢持たぬからと、着ている羽織を脱いで質に置き、一樽抱えると泉岳寺門前へ至つて高声を揚げた。

「この中に富森どのやござす。神崎どのやある。粗酒参らせたし。逢わせてたべ」

しかしはや官から警備の役人があまた詰め掛け、ひしと門を閉めていたから詮すべもなく、貞佐は途方に暮れて泣きじゃくつた。その貞佐の志の深さに感じ入つたのである。「そのままに捨て置かれよ。届かぬこととはあるべからず」と言つてくれる者があつたので、貞佐は其の意を覚つて立ち去ることとした。

さて帰る道になつて考えてみると、かの羽織は某侯から拝領の家紋付きの品。そんな品を酒手の質に置くなど、とんでもない事をしてしまったと気が付いた。貞佐は今度はそのまま某侯の屋敷へうかがつて「殿やおはす」と申し上げた。早速御前に召され「何用なりや」とのお尋ねに、「今朝しかじかのことにて、お家の御紋付の羽織を質に入

れしゆえ、念のためお届け申し置くなり」と、寒中ながら冷汗をたらたら流して申し上げた。侯はその様子を可笑しく思召しながら、貞佐の篤実を称美されたといふのである。

神崎与五郎は、後に水野監物邸に御預けとなつて切腹の日を待つ身となつたが、元禄十六年の正月には同志の面々とこんな俳諧に遊んでいた。

宿直の方よりえならぬ句ひを春風おくれば

春もやゝ萌出る句ひ蘭の風竹平

いつくどこにかへる蝶々秃峰

羽子板も終にはしりへ捨てられて如柳

秃峰は茅野和助、如柳は間十次郎の号で、みな赤穂に在つた連衆である。中でも神崎と茅野とは、譜代ではなく他国から移つて来た家臣であつた。二人はともに美作の森伯耆守に仕える武士であつたが、元禄九年森家の嗣子が絶えてお家は断絶、浪人して赤穂へ来たところを、ともども五両三人扶持をもつて浅野内匠頭に拾われたもので、いわば一宿一飯の恩義に報いて、この度は死地へ赴いたのであつた。

ところで富森春帆は、最後に次のような句を残していた。

寒鳥の身はむしらるゝ行衛哉春帆

春帆の右の句といい秃峰の脇や如柳の第三といい、義士たちの心の奥には深い悲しみもあつたように思われる。

### 萱野三平

萱野三平の家はもともと摂州萱野郷を領し、世々此処に住んだから萱野を姓としたのである。三平の父七郎左衛門重利は、旗本大島出羽守に八十石をもつて仕えていた。三平は幼少から聡明と噂され、出羽守が赤穂の浅野家へ推薦してくれたので、十三歳の折に十二両二分三人扶持を以て浅野へ召し抱えられ、中小姓を勤めて内匠頭の近侍となつていた。三月十四日の殿中松の廊下に於ける凶変の際にも萱野三平は主君の供廻りに立っていたが、東海・山陽両道を馳せてこの凶事をいち早く赤穂の城へ報じたのは、早水藤左衛門とこの萱野三平だったのである。

三平は涓泉と号し、沾徳などに学んで俳諧に遊ぶ風流士でもあつて、沾徳が元禄四・五年頃京都に滞在して撰した俳諧集「文蓬萊（ふみよもぎ）」には、子葉・竹平などとともこの涓泉の句も多く収められている。また子葉自身が

編した撰集「二ツ乃竹」や、三平の従兄の蘭風が撰した「萱

野艸」に載る涓泉の句も面白い。

勝尾寺の庇間寒し茨の花（文蓬萊）

秋風や隠元豆の杖のあと（二ツ乃竹）

何がさして裏からござれ杜若（萱野艸）

「隠元豆の杖」とは豆の蔓の支柱。晩秋の畑、豆の蔓は始末したが、風の中に支柱の穴だけが残っているのであろう。

ところで元禄十四年に、赤穂の浅野家が断絶すると、三平は浪々の身となって萱野郷へ帰った。萱野家では父七郎左衛門重利は既に隠居し、長兄の重通が家督を嗣いで大島家へ仕え、長崎奉行の出羽守に扈從して当時長崎に在った。

主家が滅んで浪々の身となった三平を憐れみ、父は三平を養子に出し、他家の名跡を嗣がせて仕官の道を求めさせようとした。しかし赤穂へ使いた時から、すでに血盟に加わり、大高・神崎などとも深く交わっていた三平であったからこの話には困却し、一日父に斯く申し出た。

「わたくし、このまま田舎に朽ち果てまするも心外でおざれば、今一度江戸へ出て仕官の道を求めとうございます。どうか旅立ちをお許しなされて下されよ」  
父は答えた。

「それはならぬ。その方、よもや仕官のための出府ではあるまい。必ずや内匠頭殿の讐を報ずる所存であろう。その方が江戸御膝元を騒がせ、その罪科によつてわが萱野家にとのようなお咎めがあるうとも、それは父の憂うるところではない。しかし、その方を浅野家へ推挙して下されたは、わが主君大島出羽守殿である。大島家にとり紀州徳川家は主筋、紀州家はまた吉良家と縁が深く、いわば吉良家も大島家の主筋に当る。その方が吉良殿へ狼藉を働けば、推挙なされた出羽守殿に迷惑が及ぶは必定。主家を大切に思うは、この七郎左衛門も同じことで、その方の出奔を許すわけにはいかぬ。ここところはよく弁えてもらいたい」  
かく述べてから、七郎左衛門は暗然と涙を呑んだ。武士としてどう処すべきか、この父と子にはよく判っていたのであろう。

大島一族には、紀州徳川家の槍奉行を勤める者もあつて、代々紀州家は大島の主筋であつた。ところで吉良上野介の長男は米沢十五万石の上杉家へ養子に入り、綱紀と名乗つて家督を嗣いでいたが、その内室は紀州徳川綱教の姉の為姫だったのである。しかも綱紀と為姫の間にできた次男の



義周（よしちか）が吉良家へ戻って上野介の嗣子となったから、紀州家とは重ね重ねの縁で吉良は大島の主筋に当り、これに狼藉を働くなど、あるまじきことであつた。

元禄十五年正月十三日、三平は近くの新稲村へ嫁いでいる十二歳年上の懐かしい姉のもとを訪ねた。やがて帰るさに門をくぐりながら三平は振り向き、送つて出た姉の顔を見上げて言った。

「あねさま、とんとおさらばでございます」

翌十四日、内匠頭の命日の朝に三平は腹を掻き切つていた。齡は廿八歳であつた。切腹のことが洩れては、血盟の大事も察知されるので、三平は病による急死ということにして、ひそかに裏山へ葬られた。辞世の句はこうであつた。

晴れゆくや日ごろ心の花曇り 涓泉

死を決意して心の迷いが吹っ切れたというのであろう。

いかに義によるとはいえ、子を死なせた七郎左衛門は悲しみに絶えなかつたものか、その年の八月に三平の後を追うように世を去つてしまった。

かねて三平は時刻を測つて使いを出していたらしく、切腹の日の早朝に山科なる大石の閑居へ文箱が届き、中の遺

書を開いた内蔵助は三平の志に痛哭した。義挙の後に内蔵助は、細川越中守邸へ御預けになつたが、その折細川家中の堀内伝衛門が萱野三平のことを問うたところ、内蔵助は悵然として「彼もし存命にて居り申したならば、今度の一列に加わり申すべき志の者でおぎつた」と、答えたという。三平の兄利衛門重通も紅山と号して俳諧の成る人であつたが、一日弟の魂祭りをしてこんな悼句を吟じた。

亡弟涓泉が魂を祭りて

是非もなや名はあげぬれど草の露 紅山

今も豊中市の新福寺には萱野家の墓地があつて、この兄の墓に並んで三平の墓が立っているが、人々が憐れんで撫でるのであろう、弟の三平の墓の方は磨り減つてしまつて、法名も俗名もそれと読み分けがたい。

また先に述べた三平の従兄の蘭風は斯く吟じた。

靈棚（たまだな）や四十七人狭くとも 蘭風

当初義士の人数は寺坂を除いて四十六士とされたが、後に三平を入れて四十七士と数えたらしい。寛政年間に刊行された「摂津名所図会」にも、「萱野三平墓、所謂四十七士の其一人なり」とある。

元禄十六年二月四日、義士達は幕命によって切腹し、泉岳寺へ葬られたが、罪人であるから墓所参詣は許されず、追善供養なども営めなかった。しかし其角の遺稿には、次の三吟で始まる初七日の追善俳諧が残っていた。

故赤穂城主浅野少府監長矩之旧臣大石内蔵助等四十六人同志異躰報亡君之讐、今茲二月四日官下令一時伏刃斎屍。

万世のさえづり、黄舌をひるがえし肺肝をつらぬく。

うぐひすに此芥子酢はなみだ哉 其角

ちる 約束 や 名 残 ある 梅 応三

船頭のけんくわは霞むまでにして 沾徳

脇を付けた応三とは、事件後に大高原五など義士十人を預かった伊予松山藩主松平隠岐守の家臣奥平治郎大夫の俳号で、この治郎大夫は当時藩の番頭で、義士御預りの一件すべてに関わり、切腹にも立会った人であった。第三の沾徳の句は、行き交う春の川の船頭の口喧嘩も、霞に船が消えればそれまでという意味である。人の世の修羅闘争も生きていく間だけのこと、過ぎてしまえばあるまいものをと

いう思いであろうか。

その年の六月十三日、其角は「もうすぐ義士達の新盆が来る」と思いながら、いさらご坂を下って泉岳寺の門を覗き「亡くなってしまった人に経など読んでも仕方がないが」と思いつつも、一句手向けたのである。

：子葉・春帆・竹平等が倂、まのあたり来りむかへるやうに覚えて、そゞろに心頭にかゝれば、花水とりてとおもへど、墓所参詣をゆるさず。草の丈ヶおひかくして、かずくならびたるも、それとだに見えねば、心にこめたる事を手向草になして、亡魂・聖霊ゆゑしき修羅道のくるしみを忘れよとたはぶれ侍り。

かへらずにかのなき玉の夕べかな

元禄風雅の士たちにとって、討ち入りは勇ましくも華々しくもなかった。ただそれは、鶯の目に芥子酢が入ったように、涙の流れて止まらぬ悲しい事件だったのである。

数年後のこと、水間沾徳は斯くも発句した。

昔 いつ 武士 六七 騎 門 の 雪 沾徳

その頃には、義士たちのことはすでに遠い思い出になっ

ていたであろう。

## 平成十年の連句界

土屋実郎

年々連句行事が殖えて来たことは誠に同慶の至りである。例えば岐阜県では平成十一年の国民文化祭の開催をひかえて、三月にプレのプレとして県民文化祭を行い、八月にプレ文化祭を行うという念の入れ方である。大阪では、七月の天神祭に連句船を仕立てて、船上連句を楽しんだ。また、五月から九月にかけて、平成連句競詠ということでも、形式自由の連句作品の公募が行われた。残念ながら今回は大賞入選作はなかった様であるが、毎年続けて公募があるので、連句の幅をひろげる好企画といえよう。

ともかく、諸行事に関しては一覧表が判りやすいので、左にこれを掲げよう。

出稿を得て益々充実して来たことは喜ばしいかぎりである。

出版物では、密田靖夫『芭蕉・北陸道に行く』が七月に刊行された。金沢生れで土地勘のある著者が、奥の細道の北陸での旅程をたどったもので、わかりやすく面白い。本書は金沢市民文学賞を受けられたそうので、ご同慶にたえな

い。また十月には、大畑健治『俳諧の連歌—研究と創作の間』が刊行された。六五四頁に及ぶ大著で、俳諧の歴史をたどりながら、蕉風俳諧の基本を論じた労作である。また副題にもある通り、理論と実作との関連を追求していて興味深い。その点、猫蓑会の『連句作品集Ⅷ』に収録された座談会記録「連句批評と観賞の方法」は見逃せない。

この他、矢崎藍『おしゃべり連句講座』、二羽智子『虎落笛』が刊行され、雑誌の方も『れぎおん』『俳諧接心』『くさくき』『あした』『獅子吼』『筑波』等々が着実に刊行され、連句の輪をひろげている。

慶弔では、小林静司氏が第五世松涛軒を継ぎ、十月鶴岡八幡宮で正式俳諧を興行した。また六月には連句界に偉大な功績をのこされた今泉宇涯会長が急逝された。深く哀悼の意を表し、ご冥福を祈るものである。

# 平成十年 連句行事一覧表

月	日	協会行事	諸行事
1	17	理事会 (日本青年館)	
2	1	協会報 (100号)	
3	7	常任理事会 (青年館)	3/1 第4回岐阜県民文化祭 (プレのプレ) 3/15 第5回全国連句津幡大会*
4	1	協会報 (101号)	4/4 五十嵐浜藻追善連句会 (町田市) 4/26 第2回心敬忌 (伊勢原市)
5	9	理事会 (青年館)	5/2 第10回青時雨忌
	17	関西連句を楽しむ会 (智恩院)	5/31 第18回大山正式俳諧
6	1	協会報 102号	6/6 “かびれ” 800号記念大会 (如水会館)
		第17回全国大会 (青年館)	
7	4	常任理事会 (青年館)	7/25 天神祭に連句船供奉 (大阪)
8	1	協会報 103号	8/9 プレ国民文化祭 (岐阜)* 8/22、23、24 第6回天の川を見る会 (佐渡) 8/29 第9回千葉県支部総会
9	12	理事会 (青年館)	9/2 イオン・コドレスク氏 (ルーマニア) を囲む 連句会
	30	'98連句年鑑刊行	9/3、4 第10回全国連句新庄大会*
10	1	協会報 104号	10/11 第5回鶴岡八幡宮正式・五世松涛軒襲号 10/12 第52回芭蕉祭 (伊賀上野)*
	31	常任理事会 (青年館)	10/24、25 第13回国民文化祭'98おおいだ (山国町)*
11	21	理事会 (青年館)	11/8 第10回さきたま連句大会 (常光院)* 11/8 さぬき文化祭* 11/15 しぐれ忌 (調布市)
			11/22 平成連句競詠文芸賞発表会*
12	1	協会報 105号	

\*は作品公募の付随している会

作

品

—連句グループ五十音順

歌仙 『クローン駱駝』

村野夏生捌

神輿みな出払ひにける庫の闇

川野蓼 艸

キラキラキラと石清水汲む

坂手手 留

紅の豚空中を飛翔して

市川千 年

匂ふ夕刊積みてキヨスク

上島玄 司

月光の波濤を綴るイ短調

篠見那 智

明日来るひと秋の野を行く

松平 之

ッさはやかさみだらさ少女澄みとほり

村野夏 生

携帯電話の笑ひなまめく

川口 遊

「いいわよ」と握り返して群衆裡

蓼 千 那

神と人とを結ぶヴァチカン

那 千 那

くつがへす天水はあり摩訶曼陀羅

那 千 那

クローン駱駝の三つ目の瘤

粉川 宏

玉子酒黄金の月かきませ

蓼 千 那

遠野炭斗廻るくるくる

夏 千 那

座敷童子百会ひやくえのツボを押しに来る

那 千 那

水圧で截る頭蓋骨なり

宏 千 那

花満ちて未来永劫記憶する

手 千 那

生命あかりもかぎろひの中

ナオふつつと蟻蚕ありごの生あれて世紀末

いつかモスラになって見せうぞ

冷えきったピザもどうにか温めて

士官学校から永田町まで

吹き降りを浴びてキーパー横っ飛び

シースルーの「翼ください」

身に深くささやく声と泳ぎつつ

油照りする彼此の岸边よ

充分に吸はせて発止蚊を叩く

アフリカ大陸遠景の樹々

月の象汝の故国は遙けくて

揚幕上がり鬼女と紅葉と

ナッガラス絵の割れてこぼれて秋千草

佃島にてランボオと会ふ

夜道船路七曲りしてベニスまで

地球儀抛ちつつひに卒業

花散るや落書死市を埋め尽し

泣いて笑って春も暮れゆく

平成十年七月二十六日首尾

(於・東京中野・如庵)

宏

千

宏

蓼

千

那

手

蓼

夏

宏

蓼

之

蓼

那

宏

夏

遊

歌仙 『春の土』

小野寺妙子捌

春の土ボールの弾みはじめけり  
小野寺妙子

慣れし農具にすすむ畑打  
鈴木文男

漁船発ち手を振る浜のうららかに  
小野寺信一郎

市立つ宵の町の賑わい  
佐藤ちよ子

弦月の墨絵の如き天守閣  
妙郎男

濠の水澄みあらわなる鯉  
郎男

柿たわわ加速のつきしバイク来る  
郎男

真夜中に聞く地震情報  
ち男

ままごとのおもちや八畳占領し  
妙郎男

忘れ形見の娘わがまま  
ち男

ほつれ毛をかき上げる指かほそくて  
ち男

門限しかときめられており  
郎男

月冴えて臆病犬が遠く吠え  
妙郎男

雪積む上に小便のあと  
ち男

ゆずり合う露地のことばがあたたかい  
妙郎男

子供の足音絶えて久しく  
郎男

釈迦三尊しずかに混みし花の寺  
妙郎男

わらびぜんまい道の辺に売る

ナオ目借り時もの忘ること多くなり

猫爪を研ぐしたたかな性

恋敵うまいカラオケ三次会

全裸のアポロ見てはいけない

煙草吸う手つき生意気高校生

演技派目ざし芸の特訓

名刀展開く館に虎が雨

日暮れてややに涼風の立つ

客足の減る一方の国分町

蕭々として古戦場の碑

航跡の末広がりには昼の月

観光の島秋まつりなり

ナウ実紫牧場の柵に沿うて咲き

父母亡き里の買手なき家

保育所の建替え寄付が追って来て

マラソンランナー新記録出す

青き空残して花の散り初めぬ

欠伸しているメイドの後尾

平成十年四月二十六日首

平成十年十月三十日尾

(文音)

ち男

郎男

妙郎

ち男

郎男

妙郎

ち男

郎男

妙郎

ち男

郎男

妙郎

ち男

郎男

妙郎

ち男

郎男

妙郎

ち男

郎男

半歌仙 『名水を訪ね』

八島美枝子捌

名水を訪ね若葉の城下町

八島美枝子

真昼のしじま歩む白靴

長谷部みつ子

裏木戸を開く音して母ならん

金沢宏子

ピアノの上に猫の眠れり

み

誕生の知らせ待ちみる小望月

丸尾智恵

熟柿を啜り思ひ更け行く

浦田稔

椰子の島巡りて了る秋通路

大村あさ

野山の景を収む八ミリ

美

寄り添ふて弾む話の薔薇色に

若尾敦

覚めて不思議やあれはこの世か

稔

結ばるる佳き人乗せて渡し舟

柏崎郷

牧より聞こゆ駒の嘶き

稔

月冴ゆる写経一卷書き終へて

石元政

備前の壺に小障子明り

宏

時刻表繰りてひろがる旅の夢

智

浜で拾ひしうつつせ貝掌に

美

街騒に揺らぐぼんぼり花の雨

み

春を惜しみつつ校歌斉唱

宏

平成十一年六月十三日首  
平成十一年五月十二日尾

(於・八島美枝子宅)



『初みくじ』

合川月林子捌

初みくじ「吉」が出るまでひきつづけ

三橋早苗

願い託して買ひ来し破魔矢

島内美佳

厨まで菜に着きし土匂ふらん

松井洋子

子等の廻りを蝶々たわむれ

大空純子

美観地区塗り塀越しに春の月

合川月林子

グレコといふ名のコーヒーショップ

洋苗

太りすぎ顔小さくみゆ猫が居り

洋苗

生まれし街に君を連れ行く

佳月

長生きはしたし女もくどきたし

月苗

下手な鉄砲数打ち当たる

洋苗

花守に生きん教職辞してより

洋苗

不況列島恵比壽と行脚

純洋

ナオ人の世に誤算多しとあきらめて

念仏さんまい妻と唱へる

君の名の一字一字も好きなれば

男は二人愛せると言ひ

菊祭り催しものは浪花節

そぞろ寒なる手を擦り合せ

月今宵固唾をのみて待ち居たり

水からくりの止まることなし

ナウ坂道の洋館の庭濃紫陽花

かつての少女いまも変わらず

盃に花を浮かべて一息に

瀬戸の嶋々春の大潮

平成十年一月十日首  
平成十年五月二十一日尾  
(文音)

苗月洋純純月洋佳月純佳洋洋月純純月佳洋

歌仙 『星涼し』

宇咲冬男捌

星涼し哲学と詩の吾が故郷

宇咲冬男

再び訪いし薔薇美しき町

上田泰真

舟唄の朗々大河蛇行して

軍司路子

あちらこちらにとんがれる家

須加金男

メルヘンの月の兎が語りかけ

嶋田麻紀

原野の色のむらさきを濃く

篠原弘脩

佇めば自ずと秋思満ち来たる

大豆生伴子

季節はずれの病気もらいし

白根順子

新しき粹なスーツで空の旅

高尾秀四郎

電子メールで愛の交信

永島直子

この頃はペアーで通うラマーズ法

山司英子

生者必滅超ゆる佛典

小磯國雄

月光の氷柱透けいる清らかさ

小林晋子

飛んでは止まり舞える冬蝶

小磯ハル子

しつとりと酔う手作の狂言に

川岸富貴

まなこつむりし俣のひと時

吉田光子

笑まいつつ「仮幻」を遺し花と逝く

加舎逸子

古城を包み燃ゆる陽炎

青木つね子

本場仕込みのソーセイジ買う

松澤晴美

幼な児はむすんでひらき手を打って

小林厚子

水晶きらと震えかくせず

山田西子

熱帯夜チラチラ妖しキャミソール

江森京子

ふたりで汗を拭きかねている

澤田乃美子

伝説のギルドを守る職人さん

渡部孝子

修復されし安芸の宮島

矢倉澄子

弾く琵琶のつわもの共の夢かなし

依田みどり

明くれば首相ただの代議士

平野三枝子

身をおける無月の底の山の音

小嶋信太郎

みがきをかける猿うちの銃

衛藤圭子

格式のでんと土蔵に菊の酒

山田隆己

歴史ひもとく楽しみのあり

野口絹子

きようよりは石碑が証かす句の力

金子裕哉

表白文に墨を滲ます

上田美枝子

独日の祝意華やか花衣

小久保彰田

希いの叶う春は闌

三枝霧子

平成十年七月十七日首  
平成十年七月二十日尾

スキャンジナビア航空機にてフランクフルト行き機中にて  
ヘルゲンのエドワードグリーンホテルにて

注「仮幻」は石原八東先生の最後の句集名で訃報が届いたばかり

なので無情の句となった(冬男)



歌仙 『山吹や』

角田双柿捌

<sup>起</sup>山吹や溪音凡となる小径

角田双柿

ふとたたたづめば舞える蝶々

中野稔子

節分にリサイクル市開かれて

谷田男児

新車の列の長く続けり

大石視朗

宙天に三五の月のわびしめる

篠原弘脩

団扇置きたる濡縁の席

三澤律乃

<sup>承</sup>紅葉忌修し文学こころざす

高橋たかえ

下駄からころと下町の角

男

人情のつまみ細工にこめられて

律

一期一会が永遠の契りに

双

目に滲む観光船の寄る港

男

ドイツビールの味の深さよ

弘

薔薇の句碑シュタインフルトに夏の月

稔

旅の余韻に蚊取線香

た

友垣に土産を選ぶ秋隣り

た

騎手はよろこび馬はギャロップ

弘

花曇りあすはお寺の鐘きかん

視

消えては浮かぶ春愁の雲

律

<sup>ナオ</sup>竜天に登る兆しか海の坂

男

<sup>転</sup>孔・孟の道見直されたる

律

神童も二十歳すぎればただの人

稔

西も東も戦さ止まざり

弘

凍玻璃になま身あずけて立ちすくみ

稔

やはり子供は産むと決む冬

宇咲冬

男

吾等棲む地球は掌ほどにして

双

向井千秋が作る上の句

視

めまぐるし回転寿司をえらびかね

弘

糖尿病の悪化する頃

稔

弦月の研ぎすまされし空の青

男

秋の祭りの幟はためく

た

<sup>ナウ</sup>木瓜の実の音符のようにはじけたり

男

<sup>結</sup>俳祖の墓に絶えぬひと影

稔

新しく生まるる世紀ほまれあれ

弘

古いも若きも拍手喝采

稔

晴れやかにぱつとひらかる花の門

冬

高く高くと競う大風

男

平成十一年二月七日首尾

(於・江東区芭蕉記念館)

歌仙 『鳩の群』

福田太ろを捌

冬終る鳩の広場に鳩の群

福田太ろを

香りほのかに匂う蠟梅

安藤正一

夢にみる二十一世紀迫り来て

新井秋芳

家族で登る螺旋階段

桜井つばな

月明り高速艇の水尾遙か

宇咲冬男

つぎからつぎと鯨の入れ喰い

花巻珠枝

秋ウ遍路職失いし人同志

正秋

あなたのハート赤く染めたし

正秋

白粉の香りうすれてゆくばかり

正秋

先もきめずに乗り込みしバス

正秋

古びたる酢蔵酒蔵並びいて

正秋

栃木の町にロケハンのくる

正秋

月涼し「路傍の石」の碑に

正秋

餓鬼大将は夏を天下と

正秋

とりどりのアイスクリーム食べつづけ

正秋

ロックバンドの開演のベル

正秋

屋上の花は早くも散り尽くし

正秋

ゆるりと巡る春の七曜

正秋

継ナがれたる水口祭賑やかに  
色鍋島の小皿購う

太

うどんそば作るを趣味とする男

太

茶髪を決めて女将目配せ

太

帰り際に逢う日を約束し

太

渴きし砂に寒の雨降る

太

パチンコも電動となり懐手

太

餌がほしいと犬が泣きつく

太

うっかりとすべり転んで骨折し

太

土葬の土の崩るるがまま

太

山間の村寂として月の光ゲ

関根雪子

太

いと爽やかに柚人の唄

太

二科展ナウに初入選の祝賀会

太

仕事一流芸も一流

太

掛時計柱で鳴れる朝ぼらけ

太

塀に並びてしゃぼん玉吹く

太

花は八重シエタインフルトまた訪わん

太

シャッターを押す心地よき東風

執筆

平成十年二月七日首尾

(於・江東区芭蕉記念館別館)

歌仙 『初 鷄 や』

白根順子捌

初鷄やまぶたに青き山と河

白根順子

家族揃いて祝う太箸

須加金男

蒲公英の小径にぼつと咲き出でて

宮脇美智子

嬉しきことの多きこの頃

樋田初子

名月の孤高の光放ちおり

金順美

簾納むる西のベランダ

順美

トーストの朝の匂いの爽やかに

美順

指の火傷に貼る絆創膏

田川知

あの人へプッシュボタンのもどかしく

金初

逢えばたちまち影絵のひとつ

初美

鉄瓶のお湯の突然噴きだして

美初

翁の面に籠る念力

順美

忘れぬ野営思わる月の霜

宇咲冬男

アロハシャツ着てウクレレを弾く

金順

菩提樹の下に諸仏のささめける

美知

色即是空空即是色

順美

城跡に花のトンネル夢のごと

知美

ホールインワン蝶の舞い立つ

美知

卒業子万感声にならざるも

Vサインして午後の約束

短足の地表を遠く一輪車

おつと危ない毬がころころ

冬帽子まずは愛犬手なずけて

雪降る夜の熱き褥よ

精密なかりくり人形恐しき

クローンという科学の進歩

黒牛の肉うまそうに尻を振り

牧場の風がつつむお稲荷

望月をドイツへ「薔薇の句碑」の発つ

新酒を酌みて祝う連衆

ナウたつぷりとがまずみの枝大壺に

皿にひろがる溶きし顔彩

清貧を生涯通す父祖ありし

昔のままの水位もつ池

外灯に泛ぶ初花気の満てり

天翔けてくる春の妖精

平成十一年一月十五日首尾

(於・江東区芭蕉記念館)

『香水や』

成田淑美捌

香水やエスカレーターすれちがう

成田淑美

彩のあふれる夏の空港

矢倉澄子

夢を抱き北の原野をめざすらん

新井世紫

旧仮名まじる母からの文

須佐薫子

軒先の桶に浮かびし十三夜

川上綾子

草の実をつけ戻りくる馬

川上綾子

廣重忌女ふたりの珍道中

大豆生田伴子

だるま弁当はじらいっ食べ

世

往年の大根役者大ヒット

薫薫

ふどし姿の尻つんとして

薫薫

しのび逢う小屋に汐騒遠く聞き

綾綾

黝く鎮もる神々の島

伴

月光の霧氷の華をきらめかせ

澄澄

涙をふきふき掛乞に行く

世

リストラの影濃きビルの通用門

澄

監視カメラの休むことなし

綾綾

酔うほどになお酌むほどに花あわれ

綾綾

翅をふるわせ雨に死す蜂

世

惜春の情を捨て去るパリの朝

綾

裏階段の暮し活き活き

澄

味噌醬油たりないからとちよいと借り

淑

エプロン似合う男達ふえ

世

家柄は明治維新の志士の裔

澄

炎暑の中を走る仲人

淑

添うてみて夫婦の味はわかるもの

世

別姓のまま一姫二太郎

澄

ころんでもただでは起きぬ度根性

綾

要らぬ痩せ田がテーマパークに

世

恐竜の骨青白く晒す月

綾

勤行の鐘冷まじきほど

澄

予後の身は火鉢が恋し炬達欲し

淑

心もとなき吊橋の揺れ

澄

石筍のメルヘンめける鐘乳洞

世

雪代山女噂ばかりで

淑

花前線御室の花にたどり着く

世

風玻璃越しにうららかな午後

綾

平成十年七月二十九日首  
平成十年八月二十六日尾

(於・江東区芭蕉記念館)

歌仙 『秋の海』

中 和枝捌

<sup>起</sup>秋の海砕けし貝を置いていく

中和枝

いざよう月に遠き船影

福永千晴

早生蜜柑商う小店賑わいて

渡部春水

ペット抱きし挨拶の人

山司英子

新聞の学芸欄のさりげなし

武井ユキエ

カーテン揺らす庭の薫風

千 春

<sup>承</sup>浴衣掛け天気図を見る山男

英 春

胸の鼓動の早やも昂ぶる

紅 英

灯を消して藤十郎の恋をまね

千 紅

お口汚しとなりしお土産

千 春

過半数何が何でも欲しき保守

春 千

仏道知らぬ凡人の道

栗原英甫

侘助の有明月にほころびて

和 甫

ラブラドールの白く息吐く

千 和

盲いては神戸地震の傷深し

宇咲冬男

槌音高き共生の時

春 男

若木いま大きく育て花の山

英 春

母の匂いの丸き草餅

和 英

<sup>ナオ</sup>蜃気楼見たくて旅の途中下車

千 春

<sup>転</sup>由緒正しき一の宮なり

英 春

御たたりねじ伏せ給う甲斐ありて

和 英

俄かの雨に濡るる石垣

千 和

紅薔薇のようなフェロモン全身に

千 春

ブレーキきかぬ短夜の闇

春 千

滝見の湯さしつさされつ極楽じゃ

英 春

墓標に刻む夢のひと文字

ユ 春

しづかなる終の棲家にチェロ流れ

千 春

栗名月のやはり晴れたる

春 千

兄妹落穂拾いの背を伸ばす

春 千

画展画展ではや冬隣

蓮見 林

<sup>ナウ</sup>雪催い銀行どこも借し渋り

千 一

<sup>結</sup>コンピューターの二〇〇〇年危惧

甫 千

自然なる営みがよし長寿村

林 千

初虹の立ち幸先のよし

英 千

花の昼ドイツの句碑を思うらん

林 千

鯛網上げて祝げる豊漁

和 千

平成十年十月十八日首尾

(於・江東区芭蕉記念館別室)



歌仙 『白』 夜

三枝霧子捌

喉オに熱き海賊の酒白夜かな

三枝霧子

瀑布の飛沫、轟の音

高尾秀四郎

万華鏡の如き出合いのありぬらん

阿部朝子

幼の瞳まばたきもせず

松澤晴美

遊園地人去りてより望の月

秀霧

かすかに聞こゆ鈴虫の声

霧朝

はなやかに時代祭の毛槍ゆく承

晴秀

北の訛の喧嘩中裁

秀朝

すれ違う中に見目よき女いて

朝秀

文で口説くか触れて口説くか

宇咲冬男

ひと知れず挙式の旅のヨーロッパ

秀霧

合併進む自動車業界

朝霧

月凍てて人間不信つのもり来し

晴霧

狐の尻尾首に巻きたる

霧朝

鼓抱く静御前のはかなさよ

晴霧

遠山に雲うすく棚引く

蓮見林

橋くぐる花見舟より笑い湧き

晴朝

浅利蛤 栄螺 鳥貝

朝霧

佐保姫のうたた寝の夢果てしなく  
玉突きしたる車すつ飛ぶ

霧朝

残されし子は大臣の候補なり

柴崎絢

意気揚々と登る階段

霧朝

読経に貴夫人集う薔薇の句碑

朝霧

サマードレスの胸ふくよかに

秀霧

したたかな妻抱丁を研ぎいたる

霧朝

引込みつかぬ千両役者

冬霧

見上ぐればキリンの首は枝の上

霧朝

いたるところにサロンパス貼り

秀霧

竹刀振る無月の庭の寂として

朝霧

障子を洗う昏き井戸端

絢朝

縄文の焦けしどんぐり土器の中ナウ

晴霧

小学唱歌声のはじけて結

林朝

草原に赤き長靴ぬぎ置かれ

晴霧

どこまで続く暮かぬる道

秀霧

茅葺きの茶室へ飛花のいづこより

霧朝

白魚浮ける黒塗りの椀

朝霧

平成十年十月二十八日首  
平成十年十二月十六日尾

(於・江東区芭蕉記念館)

歌仙 『寒明けや』

中尾硫苦捌

<sup>起</sup>寒明けや大河に触れる翁庵

中尾硫苦

薄紅梅のちらほらと咲く

室伏章郎

出代りの高下駄高き音たてて

矢倉澄子

お手てつないで行くは母と子

山崎浪江

このごろは忘れられがちな十三夜

宇咲冬男

雑草の中蛇穴に入る

硫章

<sup>承</sup>秋祭り若衆さらう撥捌き

硫章

小股の切れしひとがよぎれる

澄浪

泊まりこむガーデンングにかこつけて

冬浪

親の代より江戸指物師

浪硫

ビギナーはラフからラフへ谷渡り

硫章

煙草いっぶく深々と吸い

章澄

月涼し縁台将棋王手飛車

澄浪

目鼻くずして西瓜むしゃぶる

浪硫

静寂の村に戻りぬ土用波

硫章

ひとり佇むホスピスの窓

章澄

花万朶シユタインフェルトに句碑立ちて

澄浪

夢を求めて巣立ち鳥鳴く

浪硫

<sup>ナ</sup>オリストラは新入社員つゆ知らず

硫章

<sup>ナ</sup>ハリウッドタイタニックで再浮上

澄浪

燃やし尽くせぬ今生の酒

浪冬

山茶花の宿は古しと寒の薔薇

冬硫

埋火の灰また掘り起こし

硫章

勤行の鐘撞き出せる里の寺

章澄

地球の上に戦止まざり

澄浪

平成の毒婦真須美のカレー好き

浪硫

吊橋揺れて山の気動く

硫章

満月に妖精踊る湖の岸

章澄

眠れぬままに鹿の声聞く

澄浪

<sup>ナ</sup>街道の茶店そろそろ冬支度

浪硫

<sup>結</sup>イーゼルおろす百号の作

硫章

今更に老人力の見直され

章澄

天守閣への長い階段

澄浪

園児らの瞳輝き花くぐる

浪硫

黄沙を浴びる日本列島

硫章

平成十年二月七日首尾

(於・江東区芭蕉記念館別館)

脇起歌仙 『つばめ来る』

大平美代子捌

オ起つばめ来る空のページをひるがえし 宇咲冬 男

地図を押さええる芳草の上 平野三枝子

畑打ちはウォークマンを耳にして 小谷伸子

小さき流れに渡す板橋 依田みどり

高層の建物群に望の月 矢倉澄子

改札口を出ればうそ寒む 原田幸吉

ウ承軽トラに積み上げられし古酒新酒 大坪万里

腰のポケベルコールしきりに 山田幸子

デートの日君の都合に僕合わせ 三橋しげ子

子のみ欲しくて夫はいらずと 進藤制子

円安で視察旅行の沙汰もなく 笹森敏子

小渕内閣やっつと誕生 笠木以都子

夏の月今出でてはや薄白み 広田節子

蛇の衣見し山の辺の寺 松本紀子

伝来の漢方薬は手放せず 大平美代子

年金暮らし楽しからずや 枝

ぞくぞくと友集いきて花の宴 澄り

風船とんで泣きじゃくる児の 澄り

オ転開店の旗のはためく春疾風 吉

いま満ちてゆく決戦の時 里

つれあいの不倫幾たび耐え忍び げ

性転換をふつと望める 里

木枯しに割れしマキシのミニの脚 紀

だるまストーブ燃ゆる工房 幸

夕刊をことんと落とし通り過ぎ げ

国寶帰りほつと一息 制

痛い膝撫でてカレーを煮こみつつ 伸

ねそべっているシヤム猫の艶 敏

月さして弔問の客そそくさと 里

名残の簾揺るる濡れ縁 節

ウ結長き夜に調子あわせの琴の音 都

禰宜の袴の折目正しき 澄

開発の間近に迫る裏の谷戸 制

余寒のつづく昨日今日なる 吉

お宝の大壺据えて花を待ち 幸

夢の如くに蝶々の影 伸

平成十年四月七日首  
平成十年七月七日尾

(於・玉川学園文化センター)



歌仙 『垂直の前線』

歙塚聰子捌

月天心ありとあらゆる樽の中

歙塚聰子

酒屋つくらす爽籟の軒

前田圭衛子

虫細る顕微鏡などかたわらに

内田美子

電視台ともテレビ局とも

貞永まこと

このところ眠りの浅き父の背

晴野みなと

二進法なる朝凧の海

姫野恭子

樹々の香のあふるるばかり夏館

山下整子

白雪姫の本性を知る

沢都

初めての接吻雨はやんでいた

天野おとめ

らせん階段指輪ころころ

聰子

水平に割り水平に挿す少年

まこと

無沙汰詫びつつ最終のバス

おとめ

クリスマス・イヴ月を擦る風ばかり

恭子

冬將軍も脚が弱って

みなと

遠吠えは墨西哥の地の砂模様

都

世渡り上手つかず離れず

整子

糸道もチャンプルも出る花曇り

まこと

かつこ鳴らして絮毛追う頃

おとめ

ナオ若鮎の鰭あおおと岸近く

まこと

ちよいと傭兵斡旋所まで

恭子

仕方なく一五三五度鉄は溶け

聰子

最古にあらず和銅開珎

都

打ち水の先へ先へと裸っ子

整子

積乱雲刺す大ファールウル

まこと

グレゴリオ暦に見切りをつけました

恭子

いけずやなあと紐あそびして

みなと

母かたは良妻貞女の紋どころ

都

引出し深く木彫り観音

おとめ

ふうわりとシフォンに包む宵月夜

整子

とどのつまりはとろろ汁なり

聰子

ナッげんげ蒔く小鬼の唄を鬼が聴き

みなと

長めに穿いたG I パンツ

都

あの世ではきつと君とは兄弟あにおとと

おとめ

うららかに来てうらうらと去る

まこと

垂直に花の前線予報せり

浅沼 璞

蝶に問われて開く封メ

恭子

平成十年十一月二十四日首  
平成十年二月八日尾

(文音)

半歌仙 『友好の』

本間昭雄捌

友好の朱鷺雛生れと願ひけり

福田眞空

霞たなびく佐渡の島山

本間昭雄

ゆらゆらと青風船は陽を追ひて

伊藤節子

緋のもんぺ八重に繕ふ

加藤文子

後退りして杉上の月眺む

服部志保子

車座になり酌む新走り

石塚多恵子

大鏡秋気移ろふ潮の涯

〃

愛が欲しいとインターネット

本間泰義

にじりより離しませんとつねられる

生田政春

耳順の夢は宇宙飛行士

中川アイ

雪達磨造る子のなき過疎の村

羽根洋子

ゆらぐ知事選読めぬ票数

近藤遊川

月涼しいつか五感の澄みゆきぬ

春

茅の輪潜りの名主先達

文

人類の世界の平和理想郷

雄

北窓開けて心うきたつ

中川ハツエ

時は今倭国原花万朶

安藤清

都踊りに拍手喝采

中村静枝

平成十一年二月二十五日首  
平成十一年二月二十五日尾

(於・畑野町農環センター)

歌仙 『草紅葉』

福田真空捌

碑に動く淡き日影や草紅葉  
高木厚子

丹精込めし庭の昼月  
橋文子

秋刀魚焼く煙ぼうぼう眼にしみて  
吉松ます子

宅配便の認印捺す  
芳田龍子

風鈴の音も澄み渡る竿の先  
初沢甚四郎

梅干す人の指染まるらん  
内山良子

ッ少子化のジャングルジムに子と猫と  
大谷似智子

呼吸もびったり弾むステップ  
笹木睦子

独り居に何もて満す夫は逝き  
安宅由美子

絵具まみれに目差す入選  
福田真空

株式の上り下りに夢託し  
浜口泰子

陝西の朱鷺待てる冬風  
文子

大都会月の光芒雪の道  
郎

脅し文句は砒素をいっぷく  
ま

聞き書きの地域女性史回重ね  
良

襲名披露袴紋付  
似

幕間の綴綴帳花盛り  
龍

春火燧置く部屋の片隅  
良

ナオのどらかに盃盤狼藉咎め無く  
厚

異変生ずる珊瑚広がる  
睦

献体証靴に老いの旅支度  
文

ムーミングッズコレクション増え  
泰

山荘は茂りに茂る森の中  
龍

鼻をかすめて死んだかなぶん  
厚

一輪車ジントに乗って走り出る  
ま

また逢ひたくて隠れ湯の宿  
由

ばじりこはあなたのために刻むのよ  
厚

玄関ブザーチュチュと鳴き  
良

月明り俳諧の書に付箋付け  
郎

香を選びて庵爽やか  
似

ナウベンチ冷ゆ城趾公園北の町  
由

宣伝係兼ねる権弥宜  
文

思ひ侘びあまのじゃくをば封じこめ  
睦

手作り糺の口はちよほ口  
ま

花万朶久遠の空を染めにける  
空

凧合戦の気合充分  
似

平成十年十月十三日首  
平成十年十月十三日尾

(於・国士館大学鶴川校舎)

半歌仙 『小豆畑』

久保俊子捌

オはじけ飛ぶ音のかそけき小豆畑

久保俊子

とり入れすんではや十三夜

林 哥 子

紅葉狩仲間とはしやぐ息切れて

生田ミヨ子

笛などを聞き香木を焚く

桐本千恵子

路地裏の幾曲りにも冬日向

渡辺鈴 枝

籬に咲いて寒椿なる

哥 子

空青く童戯むる校庭に

ミ 哥

はなたれし犬とびついて来る

俊 子

髪なびく肩いからせてイヤリング

鈴 子

リズムに合はせ倶楽部のマダム

藤原マサエ

道後まで船中なごみふたりづれ

千 子

坊ちゃん団子買ひて戻りぬ

生尾さだみ

端居して月の出を待つ友のゐて

マ 子

暑中見舞の届く絵手紙

森崎ちとせ

毒入りのカレー事件へテント張り

さ 子

神みそなはす平成の世に

俊 子

たんねんに仕立おろしの花衣

ち 子

同行二人おへんろの旅

昭 子

平成十一年二月十日起  
平成十一年二月一日満尾

(於・可部公民館)





半歌仙 『石<sup>あ</sup>尊<sup>お</sup> 粥<sup>が</sup>』

藤本 翠捌

発石尊粥古きが親し島の宿 宇咲冬 男

おぼろおぼろな連子の格子 高橋昭 三

うらうらに南を指し機の発ちて 奥田恵以子

まづ目にはいる広大な土地 久保富美恵

誕生の子がよちよちと月まどか 黒野伊久子

フオークダンスで文化の祭 石田光 子

＜承＞ウ 思いきり声を大きく稲雀 乙部慶 子

楽器を肩にもどる青年 加戸亀佐子

デュエットで唱いあげたる愛の歌 池田尚 美

小さき貝殻波のもてくる 宮林八 重

遠くではてんやわんやの都知事戦 寺本宣 子

昔の母の靖國神社 作田加代子

碑の文字かなしき灼くる月 藤本 翠

赤い蘇鉄の咲きつづきいる 新宅那智子

還えりきし火野葦平のペンと手記 奥田恵以子

大河の流れゆたにたゆとう 長浜スミエ

花吹雪色重ねてはふきちぎれ 久保富美恵

思い出にじむ雛の菱餅 正戸恵美子

平成十一年三月十五日起首  
平成十一年三月十五日満尾

(於・鹿老渡集会所)

歌仙 『芋の葉』

高橋昭三捌

起芋の葉を傘と走りしむかしかな

高橋昭三

今宵の月を仰ぐ兄弟

久保俊子

赤とんぼ定刻に來ぬバスなりし

生尾さだみ

心はすでにに走り出したり

昭

新柄のシルクマフラー選ぶらん

俊

年の瀬近む坂多き街

さ

承ミュンヘンの旅情にしばし浸りいて

昭

湖畔をのぞむワインテーブル

俊

中世の絵画のごとき白き帆よ

さ

後れ毛あげて軽きくちづけ

昭

絶壁にザイルを結ぶペアルック

俊

せせらぎの音かすかに聞こえ

さ

杉の秀に大きくかかる夏の月

昭

改札口の歓迎リース

俊

三毛猫のリボンも替えてやりましょか

さ

暴落激し株のあとさき

昭

行き行きて角を曲れば花明り

さ

見かえり佛の指に春風

さ

転引返すまじく雲雀野果つるとも

どっかとかとあきし隕石これぞ

地球出てちよつと散歩をしてみたい

お天気つづくきょう此の頃は

冬ばらの胸に一輪舞踏会

柚子湯の乙女日毎艶めく

抱けとこそ背中むけしかログハウス

きぬぎぬという君の移り香

颯爽と通勤カバン小脇にし

タータンチェック不易流行

被災地を無情の月の照るばかり

冬瓜ひとつ切り分けて煮る

結秋祭宮総代として侍り

男袴の折目正しき

義太夫の子どもが泣かすおかかさま

テントたたみて長堤を行く

愛誦の詩集に栞る花一片

うららかに酌む古希の盃

執筆

平成十年八月二十九日起首  
平成十年九月 二日満尾

(於・可部公民館)

昭

俊

さ

昭

俊

さ

昭

俊

さ

昭

さ

俊

昭

さ

俊

俊

さ

半歌仙 『梅かほり』

助信淳子捌

神代の梅かほりけり帆待川

高橋昭三

もとおり来れば近き囀

久保俊子

春衣画廊喫茶に立ち寄りて

助信淳子

何かよいことありそうな午後

林哥子

上りくる月の明かりに磯馴松

昭

颯爽として秋の風切る

生尾サダミ

ウここかしこ紅葉色づく峠道

渡辺鈴枝

黄柳櫛を持って長き髪すく

サ

若旦那羽織たたみて四畳半

俊

湯船の窓にうつる影法師

藤原マサエ

新なる旅立ちをして気分かへ

哥

みにくい家鴨突然ジャンプ

淳

ケセラセラいくつもの夢夏の月

鈴

五百羅漢も汗しておはす

サ

先生の伴奏のみの国歌聞く

俊

一升徳利ぶらり隣りへ

マ

祝橋花の三次に嫁ぎ来て

哥

歴史の町にかかる初虹

執筆

平成十一年二月十一日 起首  
平成十一年二月十一日 満尾

(文音)

一ノ瀬幸雄先生長岡技術科学大学退官記念祝賀

二十韻 『緑 さ す』

高津明生子捌

ナオゲレンデに夢彈ませる雪便り 樹

寒月 覗く お 嘸 の 窓 幾

衛星を宇宙飛行士わし掴み 太田光 子

大仕事終え大地踏みしむ 中納暁 洋

辰年と寅年うまれ夫婦にて 光

神に詣でて授かりし孫 明

ナウこの先は名を改むるマイン川 水

歌声乗せて風の光れる 尚

「羽衣」をひとさし舞いし花の宴 保坂木 羊

化粧塩して膳に虹鱒 執 筆

平成九年七月十二日首  
平成十年九月三十日尾

(於・新潟県長岡市 長岡グランドホテル  
茨城県つくば市 機械技術研究所、他)

緑さす悠久山<sup>(1)</sup>に別れかな 高津明生子

さみだれ清し新しき旅 高津宗 樹

未来派と聞きしばかりに魅せられて 西 幾 多

鳩首<sup>LA LUNE(2)</sup>しばしの著書の題<sup>タイトル</sup>名 江須ひろ香

名 月 のひびきに似たり虫の声 石崎幸 三

逢瀬の後<sup>ワイン</sup>はそぞろ身に入み 正木尚 子

紅白の新酒華やぐゴールイン 水原和 行

船長笑みて羅針盤指す 幾

佐渡へ向き良寛像は目に涙 前仏虚 水

手鞠ころころそちらは鬼よ 明

註(1)「悠久山」は新潟県長岡市にあり、神域になっている。

(2)五句目「LA LUNE」はフランス語で「月」のこと(「LA」は冠詞)。

歌仙 『街道フェスタ 奈良街道』

山村としお捌

穂芒のなびく追分大和向け 山村勝子

百里の一步月本の露 山村としお

湯治場の玉兎は影を作りつつ 杉本従子

町にすぎたる子午の鐘守り と

餘念なくヨット繰る若い衆 従

研究室でかき氷食ぶ 勝

誤解受け猟犬悲し地藏堂 仙

口伝だけの久須姫の郷 宮田孝

業平の逢瀬は秘そと御簾の奥 勝

茶屋去りし人影乱しおふ 豊岡は

丈六は巖に在すときかされし と

国道格上げ車頻繁 従

凍ての月家並み近くに猿啼く は

毛帽手袋旅をおしやれに 勝

壬申の舞台は移りおおみ京 は

泥岩層に化石ごろごろ 従

さまざまの銘酒交はして花筵 と

連子の軒に巢立つつばくろ 勝

ナオ 景観の木造校舎 半仙戯 勝

ギャラリイ多彩文化発信 従

河川敷レクスポーツのふれあひに は

味の関所で柔き網焼き 味

炎天下楽市楽座で喝を入れ 炎

万緑の中 新市建設 従

二世代の議員大臣出でし處 勝

支へし女のかげにませしと 支

駆落ちは左奈良みち右は伊勢 従

綾書に生き忍ぶ糸繰る 孝

かけあいは城を背の月見能 勝

伊賀の新米寿司屋競り合ふ 従

慈愛受く自然の心芭蕉の忌 勝

ペイント列車描くくの一 勝

県境まほろばの郷、古都、水都 勝

絵馬鈴なりに東風によく鳴る 従

咲き満ちて花の盛り上ぐ大天守 勝

よきもの伝へあたたかな街 従

平成十年 九月二十六日首  
平成十年十一月 十八日尾

(於・上野市 山村宅)



半歌仙 『五月晴』

永島三造捌

オ卷藁に正す弓構五月晴

上杉知恵

振りきらぬもあり振り花

羽野きよ

ご機嫌のすゝろに足のむくまゝに

奥田雅生

公民館に立寄つてみる

水島三造

月明り親しき顔の揃ひきて

知き

表にちゝろ裏に馬追

き

ウ爽やかに装ひ新た京都駅

雅

お越しやすとて笑顔やさしき

三

祇園街なじみしは夢

知

不倫ご法度「なすな恋」とて

き

尼さんのむかし昔の物語

雅

読書亡羊齡重ねて

三

凍て月に屋台暖簾にひとり酌む

知

凧の中犬が従きくる

き

華やかに不沈うたわれたる日本

雅

反骨知事の沖繩の基地

三

さんざめく薄墨桜青空に

知

彗星探す春の曙

き

平成十年六月十日首尾

(於・上杉宅)



半歌仙 『夢の浮橋』

恒岡成弥捌

オ万愚節夢の浮橋渡りけり 村井充子

島島巡る菜の花の沖 恒岡成弥

ぼっちゃんとおぼろに霞む湯本にて 豊岡はつ子

田舎教師も楽じゃないよ 恒岡弘二

望の月くまなく照らすおおやしま 充

香りただよふ酢橘土産に 成

ッ一服の茶にくつろげば秋闌たけて は

ひそひそ話す娘の電話 弘

人恋ふに齡は言はぬよ墓場まで 充

同行二人手に手をとりにて 成

碑文は無念の流刑崇徳院 は

子供歌舞伎の床ふみならず 弘

凜として核の持込み許すまじ 充

竜馬の像は月に涼しく 成

黒潮に鯨が泳ぐおらが池 は

友訪ねきて盃を重ねる 弘

城山のさくらの遅速おもしろき 充

三橋ゆらゆら蝶のとび交ふ 成

歌仙 『雪しろ』

白杵游児捌

雪しろの岸辺噛みゆく大河かな

白杵游児

鋭き反転をみせるつばくろ

篠崎ゆき

農具市呼びこみの声賑やかに

松谷雅子

パソコン画面変り続ける

大石視朗

学会に集う俊秀月を待ち

沢田洋々

焼栗を買い帰る坂道

川岸富貴

このあたり冬の支度に心急き

鈴木豊次

見馴れぬ外車村の外れに

雅

目のつぶら髪ながながと佇つ少女

ゆ

代々木の森で指環交換

洋

長押には父祖伝来の弓矢あり

游

鳥鷺の勝負を競う名人

視

着ぶくれて凍月仰ぐ翁と媼

游

猟犬聡き耳を立てている

ゆ

何のこと意味のわからぬコマージュナル

雅

無名戦士の深眠る墓

葦

咲くよりも散り急ぎたる花に風

ゆ

蚕飼の里は霜くすべ焚く

洋

母と子の願いは別に知恵詣

ゆ

誰にも負けぬ手料理の味

雅

帆船の模型に積る薄埃

游

霍乱したか何か気だるき

視

ハスキーな声に身も世もあらぬ夏

ゆ

ダチュラの如くあやしげに咲く

豊

旅鞆ピサの斜塔に首傾げ

富

野球の結果Eメールにて

洋

リストラの流行る世間は鬼ばかり

游

遠くきこゆるピアノ弾く音

小

盃に月を映して月の客

雅

枸杞の垣根に赤き実の熟れ

視

パソコンバイン運転すれば竈馬跳び

富

裁縫室の残る分校

雅

新聞がどさり纏めて配られて

ゆ

異国の街の師の栄誉祝ぐ

富

花の路リルケの詩を口ずさみ

游

春虹立てりまなかいの山

視

平成十一年二月七日首尾

(於・池袋勤労福祉会館)

歌仙 『郭公や』

桜井つばな捌

桜井つばな

白杵游 児

中島さつき

渡辺孝 子

郭公や湖にうつりし雲の白  
ひっそりと咲く杜の姫著莪  
サンドレス飾るブティック並びいて  
人の流れの急に変わる  
天中に序々と名高き月となり

秋狂言の決まる出し物

不<sup>ウ</sup>忍<sup>承</sup>は見渡す限り破蓮

ロダンの像は何を思うや

バーのママ若き学徒を支えきて

酒の苦さをいつかおぼえる

何もかも数が頼りのわびしさに

ご利益たのむ千手観音

月凍る路地の落書きサイケ調

鮠を追って吠えたてる犬

テナントの入らぬビルの黒々と

誰が忘れしかノートパソコン

花万朶異国訛りの賑やかに

ポートルレースに心地よき風

密<sup>オ</sup>求<sup>転</sup>の旅から旅へ蜂の群

一期一会のお茶を一服

知らぬ者どうして囲む鳥鷺の陳

理系文系遺伝子のまま

透ける肌見とれていたる若き医師

ザイルで固く結ばれし仲

待つことに馴れし小部屋の熱帯魚

趣味の轆轤を廻すひととき

産土の赤き鳥居は色あせて

杖をたよりに歩く練習

朗々と月に吟ずる月の詩

木犀の香のただよえる苑

遠<sup>ウ</sup>来<sup>結</sup>の客にふるまう走り蕎麦

長寿番組いつも見ている

裏方の苦労は誰もわからずに

春の淡雪消えてはかなし

古城跡に花を咲き継ぐ花大樹

親子で励む田打畦塗

平成十年五月十三日首  
平成十年七月八日尾

(於・池袋勤労福祉会館)

游

孝

つ

游

さ

孝

つ

游

孝

游

つ

孝

さ

游

孝

つ

游

孝

つ

孝

さ

つ

短歌行 『冬 暖 か』

浜本青海捌

オ冬暖かつどふ面立ち遠き日々

土肥暢子

いろりを囲み重ねゆく杯

横田和比呂

異国より公使夫人のメール来て

浜本青海

烏帽子かたぶき向こう槌打つ

田中安芸

ッさんざめく祭りの群れに月明り

中澤念魚

美男葛の実る古庵

大久保風子

ペダル止め二人よりそふ秋の浜

大城里水

瞳の奥に泉たたえて

品田公子

何家村の銀器あふるる唐の夢

小野酔陶

太古のままの北斗またたく

高根沢洋子

ひもすがら花の便りを待ち侘びて

地引聡亭

あれ亀の声友の寄りくる

芸

ナオ春の海波の持ち去るブーメラン

小塚原には頭蓋累々

気に入らぬスリップドレス白き唇

外湯に浸るお忍びの宿

きぬぎぬに後れ髪梳く香の残り

娘らにまつわる放たれし犬

月冴えて碑高し飛鳥の地

世界を駆けるインフルエンザ

杉崎迪

ナウ杖ついで見送る母の背の丸く

届いた魚南蛮漬に

花大樹次千年も咲かんとす

苗代水に映る里山

平成十年十二月二日首  
平成十一年二月三日尾

(於・麴町秋葉庵)

暢水芸陶海暢亭子風魚古迪

半歌仙 『藍頭巾』

山口圭子捌

火吹竹握る陶師の藍頭巾

福田重子

鯉は動かず山茶花の庭

早川忠夫

集い来し歌仙の妙味究むとて

村野正夫

心寧らぐ薄茶いっぷく

中津秋野

名城の薨の映ゆる月今宵

山口圭子

熟柿ばかりを棕鳥は啄む

山口圭子

身障の子も背負われて秋祭

山口圭子

プレゼントするシルクスカーフ

重子

ふわふわのマシユマロみたいな気分です

榑原由美

サニタリーの床ピルの散らばる

秋美

黙し抱く若者達の国際線

秋美

つきくる犬を払おうとせず

正美

床擦れの母の汗ふく昼の月

正美

禅問答の声は涼しく

圭子

足ばやにくぐる馴染みの縄のれん

圭子

ガラスの鉢に蝌蚪の毬浮く

重秋

千本に千の色あり花の雲

重秋

ゆれる吊橋笑う山々

忠秋

平成十年二月七日首  
平成十年二月一日尾

(於・伊勢市立図書館)

半歌仙 『山霞む』

中津秋野捌

山霞む仁徳陵のしづかなり

中津秋野

芽吹く柳のさみどりの糸

山口圭子

子雀のはづめる声に餌をやりて

福田重子

やさしい顔に作る人形

早川忠夫

月祀り初物ばかり供へられ

村野正夫

今年落鮎豊漁といふ

圭夫

ツツ気打ち千人太鼓伊勢は秋

秋圭

ルーズソックスバイク疾走

正圭

ハンカチを洗って返す気配りに

圭重

言葉はいらないたゞ抱いて欲し

重圭

老いてなほ人恋ふことの煩悩を

正圭

アロエジュースが町で評判

秋重

月明り川鵜が並ぶシルエット

重圭

桜桃忌とて集ふ若者

圭重

国挙げてリストラ行革懸命に

正圭

山菜取って家計助けん

忠圭

宮詣り祝ひ着の母子花浴びて

圭重

うるむ瞳で春の鹿寄る

重圭

平成十年二月八日首  
平成十年三月八日尾

(於・伊勢市立図書館)

歌仙 『元朝や』

石渡蒼水捌

元朝や光り纏ひし鳶の舞ひ

石渡蒼水

若菜摘む野の東雲の頃

福井敬行

合格の報せを囲む春炬燵

宮沢次男

轉りやまぬ窓の明るし

中根明美

春の月測量船の止まる位置

敬美

グリコ一粒跳ぶ三千里

敬美

辞書みれば破瓜のあとには馬鹿とあり

敬水

恋愛小説読みすぎの弊

敬水

夢の中いとしき人が成田発つ

大高サチ子

霧吹きかけてふやす螢火

美サ

冷酒に乱るゝ友を介護する

美サ

携帯電話かさむ料金

次美

住み古りて引き扉重たき月の家

美サ

消えて再び虫すだくこゑ

美サ

稲荒らす雀に案山子阿呆面

水サ

嫌ひな奴に出がらしのお茶

敬水

刑務所の庭へ庭へと花嵐

敬水

親のあと追ふ牧の若駒

次敬

新ら鉄の切れ味試す春の敵

敬

泥んこの子ら無邪気に遊ぶ

次

宇宙から電波に乗って上の句が

敬

藍麩の藍ふつつふつと音

美

お巡りのバイク追ひ越す冬の道

サ

軒の氷柱がきらり育む

次

優勝の熱の醒めゆく中華街

サ

坊主浮かれて恋をさゝやく

美

照れかくしの小さき咳してうしろ向き

敬

餃子のやうな耳を持つシエフ

美

月を踏み千鳥足して夫婦る

サ

豊作貧乏さがす節税

次

卓の上に脳を磨けと胡桃の実

美

昼やゝ近く空腹の鳴る

敬

背に鹿の笛きゝながら袖がゆく

次

餅の返す村の夕暮

水

御手洗の杓にひとひら濠の花

サ

水皺風皺田螺ころころ

美

平成十年十一月十五日首尾

(於・伊東市中央会館)

半歌仙 『太山みやまの花』

近藤薫肝捌

海越ゆる風に太山の花もがな

異国の丘に鐘かすむ頃

若草を踏めば羊の集まりて

子守唄聞き眠る赤んぼ

不精髭鏡の月とにらめっこ

自治会資料つくる長き夜

とんぶりで故郷ふるさとの酒酌み交わす

写真のポーズ肩に甘える

倦怠期妻の旧姓忘れかけ

女め男お道祖神永とよの微笑み

バス中にぼうづき市の土産鳴る

ざぶんどぼんと接待強要

月冷てし露天風呂でも酔いさめず

狐の跡を追えば谷底

溪流に苔石渡る釣師あり

使いこなせぬフレツシユ休暇

チャリテイのステージドレスきくら桜色

献血募るうらかなかな声

近藤薫 肝

広田 遊ゆう

西部周のり 子こ

近藤クリス

大津博 山

山田広 重

遊 重

山 重

クリス 山

子 重

小泉昌しやう 一いち

須藤比紹志ひしやうし

前田明 水

増井 敬

子 敬

遊 子

山岸 雅ただし

遊 子

平成十年三月十五日首  
平成十年三月十五日尾

(於・伊勢原シティ・プラザ)



歌仙 『斑雪嶺』

藪彦捌

斑雪嶺の音霊を聞く達治の忌

伊藤貴子

農鳥の首真東に向く

伊藤藪彦

合格子こんどは下宿探しにて

鈴木いと

駅まで五分シヨツピング街

伊藤貴子

今日の月風ささやけば水のゆれ

萩谷悦子

秋刀魚くわえて野良猫のボス

藤沼和恵

ぬくめ酒ちびりちびりと稿すすめ

萩谷悦子

料理上手の妻の居る幸

萩谷悦子

五十年前の艶書を暴かるる

萩谷悦子

背中合せの墓を造ろう

萩谷悦子

明王の加護加持力を賜わりぬ

萩谷悦子

パリ―留学検定をパス

萩谷悦子

月涼し豪華客船いまいづこ

萩谷悦子

単衣の帯をゆるく着こなし

萩谷悦子

緊張の余り痺れしお茶の席

萩谷悦子

枯山水の飛びとびの石

萩谷悦子

花万朶測になだれて影映す

萩谷悦子

去りゆく友に淡き糸遊

萩谷悦子

ナオ亀鳴けりともしやな纜めきて御神鈴

貴

二番煎じの詩がぼろぼろ

悦

道化師の手足の捻子のしなやかに

悦

袴姿が似合う美少女

悦

毛糸玉まろびてチワワくさめせる

齊藤一燈

郭屋敷に羽子が舞い込み

貴

曳船の汽笛忙しく日の暮れて

燈

リストラパパの増やす吸殻

悦

難民の子供無惨に瘦せほうけ

悦

三億円のくじに並びし

燈

いざよいてビルの谷間を昇る月

悦

木犀の香の路地に洽く

悦

ナウたのしみは郷の憶いの衣被

貴

米寿の母は今もカルチャ―

悦

小分けする哀しき色の錠剤を

貴

万華鏡より覗く行く先

悦

順々に岸を離るる花筏

彦

蝶が輪を描く強東風のなか

悦

平成十一年五月十二日首  
平成十一年六月二日尾

(於・市川 今泉ビル)

半歌仙 『風 薫 る』

一燈捌

風薫る館は四方に山を置き

萩谷悦

子

清き流れに澄む河鹿の音

鈴木い

と

抽斗にこけし小刀ひそませて

伊藤貴

子

ジューパンの膝すり切れる頃

藤沼和

恵

月あげてバリヤフリーの街造り

伊藤藪

彦

紅葉散り敷く絵タイルの道

齊藤一

燈

温め酒楽しみにする休みの日

悦

い

うつつとりと聞く第一楽章

悦

燈

留学も二年目となるブダペスト

貴

燈

デート相手は公爵夫人

彦

貴

石像の獅子に見られしみそかごと

悦

い

くるま急がせ汽車にとび乗る

悦

燈

満月を歪めて映す大氷原

悦

燈

となかいの鈴抜ける寒林

悦

貴

こめかみの齒痛こらえて火を遣う

悦

貴

つかまり立ちの嬰兒が手を上げ

悦

貴

市川の史跡通りに花吹雪

悦

貴

鳥帰る空うつつすらと染む

悦

貴

平成十一年五月十二日首  
平成十一年六月二日尾

(於・市川 今泉ビル)

歌仙 『草笛の』

二村文人捌

草笛の唇柔き童女哉

山本秀夫

かきつに宿る露の玉玉

長谷豊子

研ぎあげしのみの切れ味確かめて

宇野恭子

楠の木屑で作るブローチ

竹部慧美子

里帰り父に誘われ月の道

三谷貴志夫

ままかり鮭の並ぶ食卓

恭子

運動会ナイキのズック放り出し

沖田恭子

すらり伸びたる足のまぶしき

恭子

ちゃんづけで妻に呼ばれる恥かしさ

二村文人

いつか枕の位置が変わって

泰人

山間に鐘鳴りわたる出湯の里

貴人

茶髪のバイト訛り可愛く

豊人

月更けて聖樹見上げる御堂筋

恭人

水の鏡に眠る鶴

泰人

横綱も巨人も弱く世紀末

人

気功の術に凝りしこの頃

恭人

大観の富士に出会いし花の昼

泰人

春苑望むサロンにぎやか

貴人

ナオ船頭は棹を巧みに川臈

大島朋子

都都逸ちよいとうたう御隠居

貴子

連日の熟女口論嫌になり

恭人

猿に注意と立てし看板

豊人

マネキンの腕を抜かれて更衣

豊人

アフター5ビール酌み合う

慧人

泣き上戸口説き上手とつゆ知らず

慧人

未婚の母にたまのお休み

泰人

クツキーをパンダ・コアラに型抜きし

恭人

鎮守の杜へ自転車をこぐ

泰人

こきりこの月に高まる踊りの輪

豊人

心臓移植記事にやや寒

朋人

ナウ鯊を釣る師弟の影が土手にのび

泰人

井飯に納豆をかけ

豊人

大鼓を激しく打ちて鬼女の舞い

貴人

次の時代へ残す襖絵

恭人

いま一度淡墨の花ともに見ん

人

夢から覚めて歩むうららか

朋人

平成十一年五月十六日首尾

(於・井波町社会福祉センター)

歌仙 『望遠鏡』

金子容士捌

望遠鏡焦点合ひし夏の山

金子容士

口笛の子を染める新緑

吉藤一郎

珈琲とフィンガーポップンかるやかに

いぬじま正一

建設現場女所長も

中嶋昌子

浴槽の湯面に映す明けの月

杉本聰

千枚の田の果ては花蕎麦

正容

ッ隔てなく秋刀魚つつきて語る過去

容正

焼け棒杭のくすみ始める

聰一

後朝に次の逢瀬を指切りで

一正

どこで失せたかかの部屋の鍵

正容

雨粒の波紋見る間に繁くなり

容正

日銀短観いまだ低迷

正昌

着ぶくれて仰ぐ軒先鎌の月

昌一

神は留守とて地酒酌み交ふ

一容

会心の句なりと友は膝を打ち

容聰

船賃倍に払ふうたびと

聰正

杜子春の夢さめてなほ花盛り

正聰

胡蝶今しも舞ひ上りたる

聰正

ナオ橋うらら盲導犬に導かれ

クツキー渡す茶髪青年

一昌

もういいかい鬼の声だけ流れ来て

正容

根継ぎねんごろ重文の堂

容正

掛香の袋を縫ふは若き母

一正

虎キチ気炎ビール飲みつつ

正聰

芝生席ふたりの外は誰もゐず

聰聰

瞳みつめて告白のとき

聰一

初めてのキスの感触もう忘れ

一昌

懇親の宴草津温泉

昌容

あたらしき畳匂ひて月の影

容一

後の彼岸の準備整ふ

一昌

ナッコシヒカリ今米米よと宅配に

昌正

お箸の行儀叱られし頃

正一

物売のスピーカー鳴る昼下り

一正

わらわら走る越境難民

正一

あれ着たりこれ着てみたり花衣

一聰

フリーガのごとき鳥の囀り

聰一

平成十一年五月十六日首尾

(於・井波町福祉センター)

半歌仙 『高野山』

近松寿子捌

高野山僧と見紛う雪達磨※

上田真而子

凛と咲きたる紅き寒梅

弦川八重

寿ことほぎの座敷に親族うから集うらん

高見茜

凝った一字が「和」と読める額

日高敏子

月光ゲの差し込むあたり猫睡る

茜

橋のたもとに揺れる刈萱

茜

ゆるく秋の旅の酒場に酌み交わし

茜

博多の帯をするり落として

茜

後朝の別れ出自は明かさずに

茜

残り香ほのと涕たの顯たつ

敏

古文書の披ひらかれし窓夏の月

敏

真偽の論の果てもなきさま

茜

裏返し裏返ししてクレープ焼く

茜

園児ら群れる午後のお砂場

敏

烈震の傷いたみは癒えず独り居に

茜

芽吹く気配の細き雨降る

而

花満ちてさくらさくらの琴連弾

敏

都踊りに拍手喝采

八

平成十年一月十八日首尾

(於・茨木市民会館)

※高野山の僧は、防寒・防雪のために「雪ゆかた」と称する白い木綿衣を着た。

短歌行 『クレーン伸びるや』

久保田夜虹捌

空高くクレーン伸びるや涅槃西風 久保田夜虹

見えつかくれつ行く雁の群 荻川八重

春惜しむ俳諧連歌弾みいて 奥村富久女

お運びうれしお薄いただく 日高敏子

ッ月光に金波銀波の静と動 大田行雄

黄頰魚を描いた絵葉書が来る 夜

前生のゆかりの人か身にぞ沁む 富

しつけ糸解く午後の逢瀬に 敏

山荘に囁き熱し夢のごと 八

有島武郎心中の部屋 夜

ひとひらもこぼさぬ花の咲きみちて 富

溜水には蝌蚪の点々 夜

ナオ女教師は遠足の子等数えかね 妙島秋男

新名所とか新京都駅 富

斜しゃに構えギネスビールを飲み乾せり 夜

閻魔詣りの釜の蓋開く 敏

背徳の刻ときの記憶が甦る 秋

慎ましやかに享ける腹帯 近松寿子

冴えわたる冬満月の寂々と 八

鈴を鳴らして悴みの猫 寿

ナウバタフライナイフ何故なにゆえかさせるや 敏

春の虹たつ街道をゆく 夜

いま見頃花の盛りと届く文 秋

能留め拍子果つるうららか 富

平成十年二月十五日首  
平成十年三月十五日尾

(於・茨木市市民会館)

短歌行 『春 浅 し』

富澤 弘捌

ナオ 風霞の中に尾を曳いて

錨を下ろす豪華客船

ゆるやかなワルツに肩の浮き沈み

トロピカルジュース分け合いて飲む

嘘まこと口説き文句の格好良く

地獄に堕ちろ接待官僚

寒竹の月を貫く羅漢寺

民宿の客雪踏んでくる

ソウよく減りし越中富山の置薬

猫の爪切る午後のまどろみ

花爛漫家族写真に「はいチーズ」

しゃぼん玉から光弾ける

平成十年二月十五日首  
平成十年三月十五日尾

(於・茨木市市民会館)

弘 桂 美 千 弘 桂 美 弘 桂 千 美 弘 桂 千 美

春浅し白馬に舞うや金メダル

芽吹きうながす児らの歓声

蛤の籠磯の辺に置かれて

小首かしげる陶の人形

良寛の墨跡著き月明り

途切れときれに虫の音を聞く

残菊に燃ゆる思いを抑えかね

妻と夫とを取り替えばやと

もつれたる電話のコード不整脈

パソコンで成る密議商談

悪役の衣裳のまままで花見酒

氏子総代草餅を搗く

桂 千 茜 美 千 弘 桂 惠 子 子 子 茜 千 桂





半歌仙 『程のよき夢』

奥村富久女捌

程のよき夢を買いけり福袋

内山尚 美

漫画の寅も並ぶ初市

出来千 恵

玻璃のビルたなびく雲を映しいて

品部一 朝

月の出を待ち交す乾杯

加藤 久

ひと差しとさやかにひらく舞扇

奥村富久女

花野をわたる風のかそけし

朝

とつおいつ思い直してエプロンす

久

可愛いあなた俎板に乗せ

尚

しめやかに牡丹燈籠圍の奥

久

若き声する夏の念仏

千

ビジネスといえど重ねし嘘あまた

朝

狼だよー 狼だよー

尚

草原の霸王の碑文月凍てて

千

峠越えれば遠き潮見ゆ

久

お伊勢まで雨中の旅もあと僅か

朝

しぐれ蛤お茶漬けによし

尚

前生の記憶浮き顕つ花明かり

富

臙に座せる和歌詠みの裔

千

平成十年一月二十八日首  
平成十年一月二十六日尾

(ウラ四より文音)  
(於・茨木市市民会館)

歌仙 『刻々と』

大月西女捌

刻々と咲ききり月下美人かな  
大月西女

吐息そろいて熱き手の汗  
松永静雨

就航の機体の凶柄あざやかに  
渡部晃女

フェンスくぐりて戻り来る猫  
極楽

待宵のお薄頂く奥座敷  
井上和久

あの虫の名は君も知らずや  
西

第一に新高梨を穫れと言う  
静

円安なれば旅に出でかね  
晃

ピアス揺り靴を繕う末息子  
楽

テレビの主演あれが嫁さん  
和

橋かかる瀬戸に水脈曳く船を見て  
西

ちんちん千鳥啼けば嬉しき  
静

雪晴れのブルーモスクの月澄める  
晃

酒も煙草も駄目という医師  
大野花留化

立志伝夢に始まり実るもの  
近藤 岳

歴史を誇る土堤の陽炎  
和

根上がりの松より淡く花満ちて  
静

春の踊りに白塗りの稚児  
晃

朱鷺の子を今か今かと待ち焦がれ  
西

口はうまいが油断大敵  
静

老いらくの恋は地獄か極楽か  
晃

思いもかけずセクハラの罪  
西

コソボ地区和平を願うクリントン  
静

西瓜の種を飛ばす競走  
晃

境内は杉の並木に著莪明り  
西

逆立つ髪に迫る物の怪  
静

血糖値中性脂肪気にしつつ  
晃

車窓に映る十六夜の月  
西

萩芒湖畔の歌を合唱し  
静

身体ちぢめて肌寒き風  
晃

ナッ炉火ゆらりゆらりゆらりと自在鍋  
西

熊といえども急所一発  
静

昔より君子は危険避けてゆき  
晃

山に向かいて深呼吸する  
西

空覆う白水の花散り初めて  
晃

亀を聞くとして集う同胞  
西

平成十年七月十五日首  
平成十年十月三日尾

(於・松山市西女庵)

短歌行 『望の夜』

白杵游児掬

ナオ風光る園長さんの鼻眼鏡

玉手箱から小旗とり出す

世界中同時不況というニュース

追いつ追はれつバイク四五十

お揃いの真赤な帽子はやされて

そつと開きしピーチパラソル

天草の乾ぶ匂ひの晝の月

ほろ酔い機嫌耀りの掛声

ナウはやばやと反魂丹を飲み下し

荒神様にあげる燈明

花守りは女系家族の三代目

秘宝秘めたる岡の永き日

平成十年十月五日首尾

(於・NHK文化センター青山教室)

美春 游 佐 春 美 佐 春 游 美 佐 春 游 春 美

聖堂の鷗尾峙てり望の夜

白杵游 児

木犀の香のほのかなる坂

藤井佐和子

郵便夫色鳥を背に現われて

宮脇美智子

縁に誘う手作りの菓子

片山春 陽

着ぶくれて昔噺しを語りをり

中野稔 子

とぎれとぎれに獅子舞の笛

佐

板前の修業はじめてはや六年

游

思ひひそかに通うO・L

佐

はるか来てひとよの宿とおぼし召せ

稔

諸行無常のみちのくの旅

美

枝折りてかざす初花峰ぐもり

春

牧も狭しと馳せる若駒

游

短歌行 『人文字』

八島美枝子捌

校庭につくる人文字天高し 八島美枝子  
 声きちきちと大枝の鴟 室伏章郎  
 夕月にシテの衣の映ゆるらん 佐崎静緒子  
 並ぶ姉妹の笑顔優しく 吉江康子  
 先ずどうぞ徳利すすめる祝ひ膳 静  
 青木たわわに実るくれなる 康  
 雪深き方丈までの下駄の跡 章  
 句会の披講朗朗として 美  
 のっそりと来てまどろめるペルシャ猫 静  
 触れ合ひし手の温みほのぼの 美  
 東の間の逢瀬に燃ゆる花の闇 康  
 小さき枕に通ふ春風 康

初虹の海に乗出す豪華船

原爆ドーム世界遺産に

ボランテイヤ生甲斐として老夫婦

毎週末は鍼に灸にと

三絃ののどかにひびく路地の裏

佃祭もとうに終りて

桶抱へ銭湯にゆく月涼し

混血の娘の気立穏やか

ナウ小魚の育ち早きが絵日記に

利子のつかない預金通帳

作家住む馬込界限花ざかり

折敷に山と盛りし草餅

平成十年十月五日首尾

(於・NHK文化センター青山教室)

静 康 美 静 章 静 章 康 美 章 美 静 章 静

歌仙 『野仕事』

渡部伸居捌

嘯や野仕事の手の休みがち

渡部伸居

山菜採りの若き等の群

宇都宮柏

春驟雨ヒュツテに憩ふ者ありて

長井實

活断層の調査始まる

大野順

月浴びつ家路を辿るわが孤影

村上雪

袴の裾に草風つけ

香子

紅葉せる蔵王の景の素晴らしく

居

旅に見初めて忘れ得ぬひと

平

過ぎし日を綴る日記の色褪せて

順

念仏唱ふ寺の静寂

香

湯たんぼの低温やけど癒え難く

居

石原さんの都知事就任

葉

故郷の卯のはな月夜語りあひ

平

瀬音まじりに河鹿鳴く声

順

箒もて境内掃ける白襪

香

とかく憂き世をかこつ友どち

居

花びらを盃はひに受けつつ酌み交はし

平

強東風を衝き駒は駈けゆく

葉

ナオどんたくにうかれ出でたる笛太鼓

渡部就子

景品はさてけふもパチンコ

葬列のよどみは泣きと慰めと

少年投手態度堂々

箸置いて画面に見入る牡丹鍋

雪女郎来てしばし扉を打つ

アクティブに学生原書読みつつも

ひそかに恋へる齡上のひと

やけ食ひで忘れてしまへ片想ひ

たつきのかざの漂へる露地

百万の難民に照る月哀し

老母好みの芒活けたる

ナウ句作する窓にきてゐるきりぎりす

自転車泥を夜毎警戒

新品のカメラでそつと隠し撮り

みなで喜ぶ孫の成長

花屑を流してよべの俄雨

隣へ頒つ浅蜷あさな若干

平成十一年四月十九日首

平成十一年五月十七日尾

(於・松山市小野公民館)

香居就平葉居香就平葉居香就平葉居香

歌仙 『卒業』

鈴木春山洞捌

オ切れし生徒(こ)はアルバムもなく卒業す

鈴木春山洞

スーツ着慣れぬ新入社員

長井南茶亭

古里はげんげ咲き初む頃ならん

梶野浩 楽

原発建屋蒸気のぼれり

山本青 芝

残務終へ月下の道を歩みけり

浅木一 耕

母子で摘みし野葡萄を煮る

高橋蘭 水

美しく紅葉もみぢの映ゆる稲荷山

藤本純 一

腰まろき娘このあとつけてゆく

洞

嬉しさのあまり恋文抱き廻り

亭

憧れの師は今背の君

楽

モノクロの仏像写真幽玄に

芝

不倫話にたかるマスコミ

耕

うさばらし麦酒大杯月仰ぎ

水

長橋行けば夜光虫見ゆ

純

瀬戸の海豪華客船浮かべたり

洞

金婚式の夫婦はれやか

亭

義家の鎧にかかる花吹雪

楽

旧友誘ひ藤原祭

芝

ナオ躑躅つづじ賞で庭に弁当つかひけり

農園経営骨が折れるよ

聖子また自己演出で再婚し

純

なんのこことやら泪ぐみる

洞

そわそわと着物選びに余念なく

今井比呂夢

群れるし鳩のぱつと飛び立ち

楽

東大寺戒壇院に起こる火事

芝

熱き焼芋かくす懐

耕

ゴミ袋片手に提げてボランティア

水

盲導犬とトレーニングする

純

名月を足取り軽く街に出て

洞

釣果を競ふ根釣りの自慢

夢

高原ナウに拡がる牧場馬肥ゆる

楽

サッカーくじも可決しおふせ

芝

給食のお蔭でミルク好きになり

耕

肩身の狭き煙草のみにて

水

蝦夷の地に花の並木が二里続く

芝

磯辺を離れ流れ行く雛

純

平成十年四月三十日首  
平成十年五月二十八日尾

(於・松山市若草町松山市総合福祉センター)

歌仙 『颯 風』

鈴木春山洞捌

水 白装束のふたり連れ  
端溪の硯もかわく暇なくて  
習ひそめたる高野切なり  
枯山水心遊ばす夏座敷  
ナイター球場揚がる歓声  
堂々と立て看板でバイアグラ  
不倫映画で独りにやにや  
熊本の土産の袋くばられて  
目を合わさずにさりげなく去り  
山の辺を離る名月円かなり  
三橋時代初潮を見る  
妻陪乗帝釈峽へ紅葉狩  
広島カープ猛奮起せよ  
海を越えサッカー選手往来す  
日々好日の趣味を楽しみ  
春爛漫池の面に降る花の蕊(しべ)  
児等たわむるる若草の原

水 芝 亭 洞 純 楽 芝 水 亭 楽 芝 洞 純 楽 芝 亭 洞 純 楽

オ悪戯(わるさ)せし颯風二つ失せにけり

鈴木春山洞

折れたる大樹照らす月光

梶野浩 楽

炊きたての松茸飯をいだされて

浅木一 耕

座り直してお世辞たらたら

高橋蘭 水

沖はるか一本釣りの鯖火燃ゆ

今井比呂夢

のうぜんかずら門ごとに咲き

山本青 芝

子ができて挨拶をする人が増え

長井南茶亭

電子メールに心弾ませ

藤本純 一

ホステスの泪話にほだされて

楽 洞

不適切なる行為に及び

水 亭

いかげんで止めてはどうか酒・煙草

芝 楽

気まま暮しが長寿の秘訣

耕 水

流れゆく雲の間に月冴ゆる

芝 水

雪道歩む 托鉢の僧

夢 純

草千里馬にまたがり一巡り

純 楽

首相またぞろアメリカ詣で

亭 洞

ガス灯の点く公園の花並木

洞 楽

東(ひんがし)に眺る霞む石鎚

楽 亭 洞 純 夢 芝 耕 水 洞 楽 一

平成十年九月二十四日首  
平成十年十月二十九日尾  
(於・松山市若草町松山市総合福祉センター)

歌仙 『悪太郎』

鈴木 漢捌

青梅を噛めば惚ばゆ悪太郎

鈴木 漢

懐紙に描く放つ亀の子

梅村光 明

うつつゆめ大吊橋を渡り来て

三木英 治

金波銀波も空に溶け込む

永田圭 介

弥増さる二光なれども星と月

光 介

稲穂象かたじる帽の校章

漢 光

朝霧に自転車の音遠ざかり

圭 漢

待ち侘びてなほ吉の籤恋ふ

英 圭

おさげ髪編み目優しく肩に触れ

漢 英

綾取り交かはす指も纏もつれて

光 漢

鱒酒の席に連なる窓の月

英 光

長ちやう付く役に風の吹く

圭 英

豆を打つ声深々と溪に落ち

光 圭

座敷わらしが婆を手招き

漢 光

天井のしみまで像と化すごとく

圭 漢

蛇の唸りを幽玄に聴く

英 圭

ちらほらと羞はぢらふ花の咲き初はじめ

漢 英

石シヤ鱒ボン玉なす清らかな息

光 漢

ナオ 隴なる聖堂カテドラルより島のミサ

異端ごころを秘むるこの身に

さればこそ系譜図の×ぼち曰くめき

風ほがらかに馬場の夏芝

日盛りの道行更に遥かなり

さてありやなし無何有郷ユウトピアなど

矢印に従ひて入るグルメ街

季節回帰のペアルック着て

再婚の定時電話を睦み合ひ

月も雲間に顔覆ふらん

爛れゆく静物画ステイル・ライフの桃幾つ

遺言状にまとふ残り蚊

ナウ ふるさとは離れるこそうるはしく

国逐はれしを想ふ靈みぞれに

埋み火を掻き起す夜のまなこ醒め

古きシャンソン口笛に乗す

隠し芸狼藉もあり花の陰

この世の春の須臾に過ぎつつ

平成十年五月三十一日首  
平成十年七月一日尾

(文音フアクシミリ)

英 圭 光 漢 圭 英 光 漢 圭 英 光 漢 圭 英 光 漢 圭 英 光 漢 圭



半歌仙 『端座』

鈴木 漠捌

鳥雲に忙中閑を端座かな  
三木英 治

農業を継ぐ子の種選び  
鈴木 漠  
伸びる木々歌ふが如く春闌けて  
永田圭 介

晴れの舞台に前後忘るる  
映像は月にしるせし第一歩  
英 漠

Vサインなど老いて爽やか  
水澄める日の釣果もて竿納め  
圭 英

恋愛詩集余暇に耽読  
パソコンに描く面影切なくて  
英 漠

凍りつきたるガラス戸の月  
霜柱踏み惑ひ来る朝帰り  
圭 英

小石を蹴って無為を繕ふ  
ショッピング荷持ち亭主の待つ辻に  
圭 英

あの歓声はギャル神輿らし  
あの歓声はギャル神輿らし  
圭 漠

教育を論じ空しく西瓜食ぶ  
人の世に欲し起承転結  
圭 英

花明り時々刻々を華やいで  
森羅万象みな霞むなり  
圭 英

平成十年三月二十八日首尾

(於・神戸ポートアイランド)

籠 『塵埃沙漠』

小原洋一 捌

骸骨は花野にありや紙の酒

小原洋一

鋼のをとこ満月を鍛つ

別所真紀

秋灯し積木の城に子の寄りて

浅賀淑代

手旗信号イロハニホヘト

北山建穂

沢庵もケーキも食べる猫の貌

仏淵健悟

威儀を正して開く歳時記

小林純

白南風に入江の村の喧嘩沙汰

紀穂

醒めて悲しき深海魚なる

紀穂

きぬぎぬののどぼとけなどまさぐりて

紀穂

比丘尼の忘れたる木綿わづらの紐

悟純

花が降る降る四千の日と夜に

悟純

浅蜷の桶に音がしたやう

悟穂

逃げ水の真っ只中にかりんたう

代穂

いまさら論じをり弁証法

代穂

ネバモアと叫ぶ鴉と仮想都市

悟代

エレファントマンの恋ぞ切なき

紀代

月光にマフの女が泣いてゐる

代純

乱れ伏したる関の枯芦

純代

かにかくに筑紫の郷の鴻臚館  
風鈴の音も風琴の音も  
血と汗を点綴したるアナグラム  
宇宙は紡錘形と信じて  
うつつしよは塵埃沙漠花あかり  
郵便受けに蝶の鱗粉  
執筆

平成十年九月十六日首尾

(於・文京区「松聲閣」)

歌仙 『<sup>まんじ</sup>卍<sup>えいえん</sup>』

別所真紀捌

柿紅葉喪服はつねに華やげり  
河村志乃

異国語の飛ぶ街騒の月  
小林純

きちきちの切取線に翹立てて  
小原洋一

山羊の眼を彫る腐蝕銅板  
仏淵健悟

燐寸擦るとき一画のひらめくよ  
浅賀淑代

つはぶきに陽のちりりこぼれる  
石田京

ッ雪吊と昂只今交信中  
上野遊馬

お茶の水博士うれしさうです  
別所真紀

棒で地の母を起こして笑まれけり  
乃

黒塗りしても神と知れたる  
悟

スタンディングカーテンコールドグロウ座  
紀

さらばバサラと疾るサムライ  
一

月光下西瓜の縞が太くなる  
馬

磔刑の丘朝焼けに頸ち  
代

天井の木目に泛く厳格な夢  
悟

祖父の蔵せし浄瑠璃本など  
京

花浴びて戦はせめる開闢論  
代

春アラスカの空はオーロラ  
純

ナオ追伸に仔馬生まれしこと二行  
馬

鯨のこどもひらがなを読む  
乃

詰襟の詩人が憎い海の風  
〃

夜間飛行の香り腕に  
紀

薔薇の名が獄舎の壁に刻まれて  
悟

DOCCOMOで買ったコード使はず  
代

パチンコは二項分布と分裂分布  
馬

尻のポッケにや俺の髑髏が  
一

列島の放物線に揚げる月  
北山建穂

黄色いハンカチ振るハンカチの木  
純

落書きの<sup>まんじ</sup>卍<sup>えいえん</sup> 小鳥来る  
馬

背戸を通るは良寛さんか  
一

ナウ風の昼にふるさと見失ふ  
悟

引金をひくアル中の指  
馬

あめ鱒の過去岩が根を遡る  
一

物種浸す屋上庭園  
紀

面白う花びらを受け増女  
悟

ねむれねむれとゆれるふらここ  
穂

平成十年十月三十日首尾

(於・文京区「松聲閣」)

半歌仙 『初虹や』

沖津秀美捌

初虹や瀬戸大橋を祝ぐごとく

沖津秀美

杉菜堤を蒸気機関車

西岡恭平

いろいろに帯とり合はす春裕

美

アングラ劇の楽日打ち上げ

平

十六夜の広場にシャドウボクシング

美

梢に残る木守の柿

平

ッ民宿の御赦免料理いわし雲

美

しんぼちの胸去来する翳

平

ひっそりと匂ひの深き女ゐて

美

遠火事うつる窓に抱き合ふ

美

DNAボク縄文人？弥生人？

平

ひとりでに鳴る銅鐸の怪

美

豹の眼に哀しき月の灼けし檻

平

ゆらりゆらりと焼酎の酔

美

クレーンでモアイの像を引き起し

平

沖の尉舞ふ海原の紺

美

乾坤に花の溢るる一壺天

平

春の星よりとどく信号

美

平成十年八月十八日首  
平成十年八月十八日尾

(FAX文音)

和漢行 半歌仙 『水軍の郷』

渡邊陽行捌

水軍の郷 渺渺や春浅く

渡邊陽

行

新鶯 声 緩 跳

植松晴

子

しまなみの三連の橋霞むらん

伝言板にまじる異国語

夜月 紅 柑 染

秋風 白 藕 揺

タレントのイベントに湧く文化祭

港町ではマドロスの恋

放浪記ゆかりの宿で睦びあふ

蔵をめぐりて利き酒に酔ひ

巡拝 西日 光

来 踞 大山 桃

送 涼 波 月

留 湿 海 門 潮

回 首 芸 州 遙

環瀬戸内 圏ル ー ト 整 ぶ

祝 ぎ 踊 る 伊 予 万 歳 に 花 吹 雪

浮 鯛 歛 乃 謡

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

行

〈詩形〉

五言・下平声蕭韻○印韻

平成十一年二月二十日首  
平成十一年二月二十五日尾

(於・香川県多度津町四箇公民館)

▽紅柑 〓 紅く染まつたみかん▽白藕 〓 蓮の白い花▽西日光  
〓 耕三来▽大山桃 〓 大山祇神社▽海門潮 〓 せまい海峡・来  
島海峡▽浮鯛 〓 鯛漁法



半歌仙 『流し雛』

守口津夜子捌

流し雛相寄りゆくも縁かな

守口津夜子

目路を遙かに光る斑雪嶺

藤村貴美

浅蜷賣り戸毎に声をかけ行きて

池田澄子

垣を一重に母屋新宅

越智美代子

望の月ジャングルジムの際に照り

渡部朝茂

ホームスパンを秋のスーツに

宮道鈴板

ッ死人葦その冷たさにおののける

夜

土塀伝ひに夜每逢瀬を

朝

尼御前は般若湯など呑み干して

澄

誰にも告げずそつと旅発つ

美

ながながと訳の分らぬ長電話

貴

世紀末とてひよんな世の中

朝

石槌に早の月が美しく

貴

水盗人は従兄なりけり

鈴

ひっそりと婆がひさげる昔菓子

美

聖書の塵を払ふそよ風

澄

光淋の流れに浮かぶ花筏

夜

貰らった猫に匂ふ白粉

鈴

平成十年四月三日首尾

(於・壬生川公民館)

歌仙 『花の宰相』

矢崎硯水捌

まほろばの花の宰相美を語れ  
矢崎硯水

夕虹消えてほの白き宵  
山本秀夫

川沿いのジョギングロード軽快に  
軍司路子

バスの窓から手を振れる人  
矢崎妙子

屋上に猫背伸びする月の弓  
沖田泰子

間遠になりし残る虫の音  
水秀子

円空の里のほど芋味増して  
水秀子

茶房の隅にじつと向き合い  
水秀子

はじめてのデート何やらぎこちなく  
水秀子

ぎつちよのペンでラブ・ユート書き  
水秀子

斬新なみそひともじの掛軸が  
水秀子

鑑定人が高いお値段  
水秀子

長短のつらら照らして浸る月  
水秀子

熱爛に添え海鼠腸の皿  
水秀子

取り寄せし漢方薬の効如何に  
水秀子

結果よければ総てよろしき  
水秀子

糸桜ひと差し舞えばさ揺らぎて  
水秀子

紋白蝶のもつれ合う空  
水秀子

ナオゆく春を並んでござる六地藏

飛驒の山脈ひびく篠笛

若干は旅のバッグに透きのあり

使いはたして財布からつぼ

ひねもすを口あけて待つ燕の子

粽<sup>ちまき</sup>食べ食べ「パパを下さい」

「誰ですか？あのおじさんは」通い婚

呪文とともにもに女昇天

白樺が似合うシャガール美術館

黒葡萄など籠に盛らるる

政局のゆくえ危うく雨の月

菊人形は時の人なり

ナウ悪しき夢食わせる糺を飼い慣らし

クレッシェンドに頌歌朗朗

万国旗ペイントしたる顔と顔

アモンの神も在<sup>ま</sup>してうららか

しあわせは児らに満ち満ち花一枝

鯛網漁の豊かなる声

平成十年五月二十八日首

平成十年十二月二十四日尾

(文音)

妙

水

秀

路

妙

水

秀

路

妙

水

秀

路

妙

水

秀

路

妙

水

秀

路

妙

水

秀

路



歌仙 『山 泊』

西 幾多捌

炉に焼けて岩魚香ばし山泊り 小松崎爽 青

深き庇にかかる風船 福田安 呼

アルバムは姉妹よく似し目元にて 石田酒 栄

袷紗さらりと捌き品良き 飯泉仙 葉

月のぼり美しき文字句碑に浮く 大竹多可志 多

結いの稲刈り終る寧けさ 西 幾多

ッ念願の叶ひ嬉しき秋通路 呼 栄

恋占ひはすこし難あり 栄 呼

暗がりに俯く頃いとほしく 葉 多

ボトルの酒の少し残れる 志 多

旅立ちと言へば帰りて来るものを 多 呼

竹の葉擦れに湖のさはだつ 呼 栄

鳩鳩ははや寝落ちたる冬の月 栄 呼

膝にふんはりシヨール編みをり 葉 志

テーブルに珈琲の香の馥郁と 志 多

親子で車磨く休日 多 呼

なだらかな中千本の花盛 呼 栄

弁天池に蝌蚪がゆらゆら 栄

ナオ遠足の誰かが列をはみ出して 葉

電子メールで届く恋文 栄

ばついちと聞けど飛切りいい女 呼

糊をきかせて浴衣干しあぐ 多

好き嫌い有無を言はず泥鰌鍋 志

双子もをると子沢山なり 葉

対岸の煙突白きけむり吐き 栄

イラク辺りの焦臭きこと 呼

買溜を性懲りもなくしてをりて 多

昔話に居眠りが出る 志

月の差す座敷にふはと能衣裳 葉

なにごとともなき枝の蓑虫 栄

ナウ栗飯のはやふつくらと炊きあがり 呼

町内会に同じ顔ぶれ 多

そこそこの健康維持を大切に 志

趣味がいつしか本職となる 葉

叙勲祝ぐ集ひに花の咲き満ちて 多

空晴れ牧に跳ねる馬の子 志

平成十年五月十日尾 (文音)

歌仙 『秋 風』

西 幾多捌

浮かみ来て何見る鯉ぞ秋の風 小松崎爽 青

横笛復習ふ月光の窓 黒澤都茂黄

大小の木の実の独楽を作るらん 滑川美 智

節太の指なぜか懐し 鈴木美 代

アンテイクの店は昔の蔵にして 片野弥 恵

漬物石の冷えきってをり 西 幾 多

四方山の話つきざる置炬燵 代

黒猫そつと膝に乗りくる 黄

便箋は夢二の絵入り握りしめ 伊香佳 都

夜ごと枕を濡らすせつなさ 智

不況とて人の減りたる町に住み 黄

時鐘が遠く流れくるなり 〃

湯あがりの団扇の白き月の庭 恵

ひやし珈琲運ばれて来る 都

放映はブラジルよりののだ自慢 黄

人工衛星修理するとふ 智

樹木医のいささか酔へる花の昼 〃

五色の風船ゆらりゆらりと 代

二才国会の審議は遅々と目借時 都

疲れ知らずの女熟年 〃

秘め事の酸いも甘いも良しといふ 恵

いつの間にやら恋のサロンに 多

合作の版面を壁に高々と 黄

外はつめたき雨の日曜 代

赤福を買うて終りし伊勢詣 智

望郷の歌口ずさみをり 都

サッカーのサポーターにと張切つて 代

慶喜館に老いも若きも 都

望月に湖の浮島くつきりと 代

鴉来てをる柿の熟れ頃 智

ニッ案山子どの派手な帽子ででんと立ち 黄

ガレージセール賑はひてをる 恵

饒舌な友をのがれし夕べにて 黄

蛇口がゆるび叩く水音 恵

訪ね得し万朶の花の籠屋に 多

京の干菓子に和む長閑さ 代

平成十年七月二十三日首尾

(於・日立・多賀公民館)

歌仙 『今年竹』

新井佳津捌

家業継ぐ子の眉太し今年竹  
 軒端涼しう吹きぬける風  
 沖に出てタンカー向きを変へるらん  
 羽 翻 し 鷗 飛 び 交 ふ  
 笛の音の唳々月が昇り来し  
 蓮の広葉にまろぶ白露  
 ッ連れ立ちて行く若きらの爽やかに  
 恋知り初めし肩の細さよ  
 ひっそりと舗道に影を重ねゐて  
 夢見心地にともるガス灯  
 教会の鐘鳴りひびく港町  
 ぴんと尖りし三毛猫の耳  
 月白に代々木の森のくろぐろと  
 温 め 酒 は 少 し 辛 口  
 サッカーの熱戦秋の汗しぼり  
 膝に拡げし縫ひかけの布  
 お花見へ手作りの菓子たつぷりと  
 蝶の行方を追へる幼な子

津 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代

ニオ永き日がガレージセール賑やかに

ちらりと見えし薔薇の刺青  
 火の匂ひして七半ななはんが走り抜け  
 失楽園は所詮他人ひとごと事  
 貰うたる香水ちよつときつすぎて  
 涙脆きは母ゆづりなる  
 公約は選挙終ればうやむやに  
 高層ビルが魔物めくなり  
 還暦の旅のプランに熱中し  
 太鼓でんでん大津絵の鬼  
 まどかなる月が湖上に浮かびたる  
 観音さまの眉目のつゆけき  
 ニッ脇床に名残りの小菊活けられて  
 どんと置かれし鯛の兜煮  
 杓き世の木簡あまた並べられ  
 テレビカメラに人が集まる  
 滝のごとなだるる花のくれなるに  
 風土記の丘の春は酣  
 平成十年七月二十五日首尾  
 (於・小出たみ居)

子 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代 鼓 女 子 代

歌仙 『鵜捕場』

西 幾多捌

オ鵜捕場は寂然とあり秋の濤

小松崎爽 青

月煌々と照らす松ケ枝

滑川美 智

朗詠の爽やかにこそ流るらん

伊香佳 都

熱き珈琲ふるまはれをり

鈴木美 代

グループの一泊旅行決りたる

黒澤都茂 黄

目を細くあげ見上ぐ老犬

片野弥 恵

ッ風もなき牧場の昼の森閑と

西 幾 多

肩を並べて山にヤッホー

恵

抱かれし髯の痛さも嬉しくて

黄

またの逢瀬をしかと確む

代

白内障癒えたる後の予定表

智

急に空きたる渋滞の道

恵

誰が吹く口笛寒き窓の月

黄

裏のおでん屋混み合うてをり

都

仲見世に浮かれ巾着切にあひ

恵

いつもの鴉かあかあと鳴く

都

早々と花の下には蓆延べ

代

紙風船に頬がふくらむ

黄

ナオ永き日を遊び呆けて叱られし

ダンス教室流行るこの頃

都

裾つかみ連れて逃げてとせがまれて

恵

燃える思ひをもてあましをり

代

口づけの夢にびっしより汗をかき

黄

団扇片手に涼む縁台

都

浮雲に梵鐘の鳴り治まれば

智

へのへのもへじ睨み返さん

黄

三兄弟跡取りはまだ決めかねて

恵

同じタンゴを流すスーパ

代

手びねりの壺に芒を月祀る

恵

母の遺せし秋袷縫ふ

代

ナッ吊し柿障子に影のちらちらと

黄

暗誦番号忘れ棒立ち

智

翌鏢と賞を受けたる媼にて

代

海原はるか白き帆船

〃

花万朶神峰の句碑を装へる

多

そぞろ歩きについてくる蝶

恵

平成十一年四月十五日首尾

(於・日立・多賀公民館)

歌仙 『冬木原』

上田溪水捌

オ午の陽が静かに脹れ冬木原

小松崎爽 青

時じく洩るる藪の笹鳴

新井佳津子

分校になじみの顔の集りて

福田安子

取り落としたる飴がころころ

黒岩秀子

有明の古びし碁盤さしはさみ

伊藤延子

新名人の笑ひさはやか

上田溪水

ッ世直しの答弁いつもそ寒う

飯泉葉子

一氣に空を焦がす窯火かまど

石田栄子

何も彼も捨てて悔なき旅衣

佳

ちらり横切る母の面影

中村奈美子

太棹のひびきによよと泣き崩れ

小出民子

蛇身となりて渉る紀の川

水

月光に水着のあとのほの白く

河野玲子

子の宿題を親もてこざる

田川節代

残されし相続税のいかばかり

松岡綾子

吹き霽るる野の風の甘さよ

高島三津子

花の雲鷗尾の耀き遠く見て

木崎節子

郷里くの土産に浅蜷ひと籠

大竹多可志

ナオ師を囲む春の暖炉の和やかな

大城和子

土砂降りの雨いつか上りし

佳

Yシャツの袖がからまる洗濯機

玲

向ひの窓へそつと目くばせ

水

あさなさの合せ鏡の艶なまめきて

栄

ニューハーフとはとても思へぬ

安

セザンヌの壁の小人が嗤ふなり

栄

影絵の狐ぴんと耳張る

玲

口笛を吹きつつ行くは誰ならむ

奈

呆けたふりして渡る世の中

安

姨捨に大いなる月昇り初め

民

はやばや終る冷まじきロケ

水

ッひと肌のまろき新酒を配られて

佳

谷間にかかる村営の橋

和

恐竜の卵の化石出たといふ

安

新世紀まで生きる願かけ

玲

杖あまた添へし老木花万朶

葉

島穂やかに暮るる春の日

延

平成九年十二月二日首  
平成十年八月二日尾  
(文音)

歌仙 『十三夜』

上田溪水捌

弁慶の雑魚の乾びや十三夜

上田溪水

金色なせる庭の穂芒

田川節代

青年の笛の高音に秋寂びて

木崎節子

お服加減の舌にほどよき

新井佳津子

雪兎つぶらな瞳叶えられ

小出民子

いつか寝落ちし姉と妹

福田安子

新築のカーテン淡き幾何模様

石田栄子

向ひ同士で軽きウイंक

節子

遠廻りして急ぎたる思ひ川

安節

赤いポルシェがついと出てゆく

代安

うら若く天に召されし人のこと

佳代

野に累々と地雷埋もるる

民佳

月光に殻透くばかり蝸牛

栄民

絵本読んでとせがむ幼な児

節民

丸木舟太平洋へ漕ぎいだし

栄民

渦めくるめく縄文の土器

佳栄

千年を枝垂れし花のふぶくらん

安佳

呼べば馳せ寄る牧の若駒

安佳

ナオ 嬰が蹴る四肢の光りに春闌けて

寺宝に残るマリア観音

来る度びに変わる古里ま淋しう

飯泉葉子

はぐれ鳥にちぎりやる菓子

節子

駆け落ちは昔のこととうそぶかれ

葉子

ふつと消さるる閨のともしび

栄子

はたた神激しく鳴って通りけり

水子

夏炉 囲める落人の裔

民子

七十の遊びせむとやホ句詠んで

安子

些か派手な菊の道行き

葉子

下町の軒連らねたる月今宵

安子

廣重ゑがく橋のさわやか

代子

ナウ 贗良しと鑑定団の大笑ひ

水子

地酒の酔ひに本音ほろりと

節子

をところは男坂ゆく年の暮

代子

明けしみ空にかかる角凧

佳子

城山のけぶるがごとき花の雲

葉子

旅の衣にまとふ双蝶

民子

平成九年十月十四日首  
平成十年十月三十日尾  
(文音)

歌仙 『二直線』

松下京子捌

名月や出漁の船の一直線

清水一 與

雁渡り行く淡き島影

塩村外茂枝

きのこ飯卓いつもにぎやかに

松下京子

形揃はぬ壺は手捻り

南出雅子

塗装業夜は正装パーテンドー

林秀巴

少年剣士寒風を斬る

伊勢宗純

街角の六地藏にも冬構

枝

くもりガラスにのの字重ねて

與

のぞき見る彼の言葉の裏側を

京

猫語でじゃれて騙されたふり

雅

聴診器当てられ別のことと思ひ

巴

冷酒の銘に萬歳楽と

與

月も居て夜干の浴衣おどけ舞ふ

純

篠笛の音に心洗はれ

枝

古都の旅叙情詩集忍ばせて

雅

をんなかしまし哲学の径

京

花は降る実盛が塚白く染め

枝

老いは無聊ぞやたら日永に

巴

ナオ鼻ピアスぼっくり靴も卒業子

たぶんB型ドナー登録

刈込みしとなりの芝も抵當に

収入家柄計る天秤

可隣なる悪女の役が大受けで

胸の谷間がなんと眩しく

氷水ジャックとベティは同級生

ライカ抱えて戦場に散る

ふるさとの夢の断片枯野駆け

寄木細工の小宮文箱

待宵にランプの精を封じこめ

まず深山を染む龍田姫

柿ひとつくれてやらぬと竹矢来

ニポニアニッポン殻をとんとん

奥能登に鬼が跳ねたり御太鼓

目刺丸ごと骨も頭も

半世紀眠るカプセル花のもと

流せずに愛である流雛

平成十年九月二十七日  
平成十一年五月二十日

(於・一の折小松市の松下宅  
二の折文音)

與 京 純 枝 雅 與 純 京 巴 純 與 枝 雅 純 京 與 巴 純 枝 雅 純 京 巴

短歌行 『ままごと』

坂手手留捌

ままごとままごとに似たる似たる仏具仏具や冬立冬立ちぬ  
八木山 羊

門清からかに石路石路の花  
川岸絢 子

寒雀朝礼寒雀朝礼了えて散りて行き  
平田宏 子

熱く歌える「翼下さい」  
小向敏 江子

満月に昨日の嘘ましろが影落とし  
坂入啓 子

宙返りしてましろ酒さけ飲む  
宮脇瑞 草

つづれさせ母の揃えし絹の糸  
渡辺実 枝

茶髪かき上げ海鼠壁塗る  
斎藤靖 子

靴ずれの痛みは告げず逃避行  
福田純 子

胃の左右する色つきの恋  
坂手手 留

天仰ぐ猫に花びら降りかかり  
矢部節 子

瀬戸の鱭うなぎを味噌漬にする  
川 子

ナオセンバツの敗将の瞳めのかいやぐら

グレン氏軒昂来世紀にも

「美味なり」の小書き明治の回春剤

紡げぬままの陶枕の夢

喜雨ありて百済観音高笑い

大魔神社をしまいわずらう

坂無月自動販売機を灯となせり

塩辛蜻蛉進路うみ変更

ナウ釣り舟に霧の流れうみて湖静か

肩はずされし二人三脚

リヤドロの遠きまなざし花の窓

ウイーンの森に囀るアムゼル

平成十年十一月九日首尾

(於・東京多摩 花林舎)

靖 宏 羊 絢 啓 純 実 瑞 宏 川 敏 手

注(オ 4)「翼下さい」 サッカーの横浜フリューゲルス讃歌。

(ナウ 4)「アムゼル」 ヨーロッパにいる春の黒い小鳥。



歌仙 『轉り』

池川蝸谷捌

轉りにゐて轉りを忘じけり

池川蝸

谷

忙中閑の憩ふ春陰

小倉静

波

ふわふわと柳の絮の飛び初めて

戒能多

喜

逆巻く濤の噛める荒磯

喜

月見とて芋、松茸をとり揃へ

喜

案山子担ぎて帰る柚人

喜

鹿垣のトタンが光る畑境

喜

滅法強い酒にマージャン

喜

恋文の金釘流もそれなりに

喜

その気になって寝たる一夜さ

喜

北鮮へ日韓米が手を繋ぎ

喜

あまり暑くて効かぬ冷房

喜

木の枝を洩れ来る月の涼み台

喜

子らの喧嘩に親が出て来る

喜

特急の禁煙席は満員で

喜

水の減りたる川の淋しき

喜

楊貴妃と銘ある花のあてやかさ

喜

野中を急ぐお通路の笠

喜

ナオ引き潮を追ひ追ひゆける汐干狩り

脚と腰とに貼りし膏葉

谷

団子屋のダンゴの歌につらされて

多

掛けた眼鏡を探すしばらく

谷

湖の面に見えつかくれつ鴨の陣

多

幼き愛の育つかまくら

多

昔日のこと語り合ふ老夫婦

谷

宅のおたから二束三文

波

銀行へ公的資金投入し

多

慈善家ぶって数多猫飼ふ

谷

台風の過ぎて大きな望の月

多

夜長の庫裡で囲碁に興じる

波

父の香をいとおしみ出す秋裕

谷

妻の替りの授業参観

波

ピカピカに磨きぬかれし愛用車

多

オンブズマンの夢はのんびり

谷

元禄の花は如何にと旅重ね

多

のどかに暮るる弘前の城

波

平成十一年三月二十日首尾

(於・川内町立中央公民館)

歌仙 『磯の香』

小倉静波捌

初夏や磯の香しるき汐だまり  
小倉静波

ヨットレースの走る沖合  
池川蝸谷

安全な農作物を規定して  
波

班に分れて校区探険  
戒能多喜波

満月の庭に家族の開く宴  
谷

添水のひびき溪に訝す  
波

法楽の連句繙く一遍忌  
多

友に頼んで渡す恋文  
谷

戦場へ送りし君の慕はしく  
波

日に夜をついで励む内職  
多

建て替へし家の造作やつと終へ  
谷

志野の茶碗で口切の茶事  
波

玲瓏と氷湖のスワン照らす月  
多

コソボ紛争つかぬ見通し  
谷

ひたすらに野村阪神突っぱしり  
波

おまわりさんが困る迷ひ児  
多

峽里を舞ひ上りたる花吹雪  
谷

角を落して群れる神鹿  
波

ナオ青虫の蝶になるまで観察し

快癒記念に巡る温泉

宿帳へ素知らぬ顔で妻と書き

枕の端を濡らすきぬぎぬ

鮎釣りのいかな動かぬ川の渚

親父ゆずりの紺の甚平

東山魁夷を偲ぶ遺作展

国旗国歌を決めるとは云ふ

私流ガーデニングが大はやり

車を止めて道を訊く人

富士暮れて名月昇る空真澄み

松茸飯を炊く匂ひする

ナッピル街を吹き抜く風の肌寒く

杖をつきつき渡る石橋

竹篋を上手に使ひ掘る遺跡

猿がひよっこり覗く山畑

散りかかる花を惜みつ花に酌み

子の手をはなれ逃げる風船

平成十一年五月二十日首尾

(於・川内町立中央公民館)

歌仙 『クラシックホテル』

衆判捌

風薫りクラシックホテルの午餐かな 小川雅世

名物シェフの鮎アラカルト 松井青堂

高々と弾むボールに追ひついて 田中広四郎

三十路越えれば転職もよし 我妻民雄

侘住ひ定年間近月を待つ 三村善美

故里はいま初紅葉なり 水上栄二

愁ひつつ朝霧の径ふみしめて 世

天城峠に刻む初恋 堂

思ひとはかく傷ましき舟別れ 郎

髯ぼうぼうと頭陀袋下げ 美

若者は個性個性とはやしたて 雄

ここは本郷菊坂あたり 二

代の移り見たる大楠冬の月 世

忘れたところに吹く神渡し 堂

遠ざかりゆく登音も消え果てて 郎

だあれもいないサーカスの小舎 雄

花篝ほんのり庭を照しをり 美

春 高 楼 に め ぐ る 盃 世

ナオ十六の深き翳りを暮かぬる 堂

不毛の土に萌える薬ひこばえ 郎

あとふたり似非是清になりそこね 美

バブルのツケに御殿売り出す 世

まつわりてのうぜんかつら妖艶に 堂

のがれられない女郎蜘蛛の困 郎

紅殻の格子もいまは縄のれん 美

もつれつつ行く赤目溪谷 雄

片思ひあれこれありてお友達 世

世紀の終り不安重なり 堂

川渉る百姓一揆月蒼し 郎

穂の出た稲も土砂に埋れて 美

ナウ西方に迫り出しのあり鱗雲 世

予報信じて外出する妻 郎

いまいちど六吟歌仙夢に見て 美

熱海鎌倉上野深川 堂

焼跡に花を求めて五十年 郎

日が射してゐる春野芳し 世

平成十年五月 首 (文音)  
平成十年十月 尾

●19句の「十六」は一ノ谷で討たれた平敦盛(十六才)の能面

歌仙 『奈良の秋』

秀峰十八句迄捌  
昇十九句より捌

鹿鳴けば我もまる寝や奈良の秋 石 叟  
 虫の音すだき月写す池 宗 嘉  
 雁一羽茜の空に飛来して 宗 文  
 おつにすまして炬燵で子猫 芳 岳  
 夕立のあとで山車ひく夏祭り 玲 香  
 日足短かしフィヨルドの旅 秀 峰  
 ベイスター不景気とばす大魔神 文 香  
 イメージこわす初恋の人 香 岳  
 山あいの谷の出湯に影二つ 岳 岳  
 株価を下げる小渕宰相 岳 嘉  
 和歌山のカレーがもたらす大事件 嘉 岳  
 防衛庁もガタガタとなる 岳 岳  
 空冴えて月も凍てつく湖の宿 岳 岳  
 家族揃って初詣する 宗 良  
 日本橋老舗デパート店終い 岳 岳  
 核燃料はどう始末する 宗 庭  
 弘前の城はしだれの花盛り 良 岳  
 春風の中お遍路の旅 岳 岳

ナオコ  
 児等集いかげろう燃える河川敷 咲子  
 うなぎ上りは医療費ばかり 岳  
 凍れる眼心みすかす広目天 嘉  
 五十鈴川にて玉砂利を踏む 岳  
 踏切を待つ間に一句蟬の声 文  
 乙女が闊歩原色裕衣 岳  
 淀長の語りなつかしサヨウナラ 良  
 別れし彼に未練を残し 岳  
 お昼寝の夢の中でもときめきて 嘉  
 宙返りするミスターグレン 岳  
 三五夜の月は桶にて汐を汲み 文  
 秋風の中古書の市立つ 良  
 ナウ  
 マイク呼ぶ栗より美味いと誘う声 咲  
 孫に教わるゲームソフトを 文  
 金メダルアジア大会今一步 岳  
 朝のお散歩仔犬にひかれ 岳  
 醍醐寺は桜吹雪で見えかくれ 嘉  
 コートぬぎすて春を求め 昇

平成十年十月二日首  
平成十年十二月十一日尾

(於・東京千代田区伊藤宅)

歌仙 『炎 暑』

小池正博捌

道すがら人まばらなる炎暑かな

大久保孟 美

打水をするモノクロの街

小池正 博

顔洗う猫に予報を外されて

内山尚 美

なんでなんでと駄々っ子になる

酒井保 典

やわらかなチエロの響きに月不惑

松永直 子

四・五本でよし鶏頭の赤

孟 子

ッいつになくおかわりをするきのこめし

伊藤 馨

門を出ていくまでの決心

直 子

観覧車君のほくろのなつかしく

正 直

晴着をたたみため息をつき

山田美智子

寝不足ももう終わりですW杯

孟 子

身代金を値切る悪党

馨 子

雪女郎障子の月は皓々と

美 子

姨捨山に寒孤狩る

正 子

どちらでもいいんじゃないか総選挙

中野智 子

ごみ箱からもはみ出した缶

智 子

花の中遠く油田の基地へ飛ぶ

三ツ木尚 子

水温んでもするダイエット

保 子

ナオ知恵詣親のロマンが加速して

保 孟

あのじいちゃんが東大出なの

尚 孟

飼い主を養っているタレント犬

尚 孟

ジンタに乗って玉をころがす

美 孟

このへんで昔は酒が出ましたね

孟 尚

遣らずの雨もおあつらえ向き

尚 尚

肌燃えて罪の疼きも癖になる

尚 馨

ベッドにピアス残す約束

馨 馨

引き潮に首長き鳥憩う瀉

馨 馨

万葉仮名の読み定まらず

直 直

疲れぎみ七重八重にも見える月

尚 直

逆さ蟪蛄抜き足をすする

保 直

ナウ高々と紫苑伸びきる廃校舎

直 保

かくれんぼしたなわとびもした

孟 保

ゆつくりとスタンダールに線を引き

保 保

しおり代わりに挟むかげろう

美 正

油絵に花降りかかる隠れ寺

正 正

都踊りは春を誘う

執筆

平成十年七月十日首尾

(於・アウイーナ大阪)

歌仙 『松花堂』

小池正博捌

天高し 隠遁僧の古茶室

松永直子

月影照らす 蹲の苔

山田美智子

そぞろ寒もはや 灯油を商いて

伊藤馨

とろりとろりと 猫はひねもす

内山尚美

じいちゃんに なりたくないが になりました

大久保孟美

汗もほどほど 恥もほどほど

尚美

ッ心太 噂話に盛り上がり

美尚

同窓会で 消息を知る

池原圭子

最高の 伴侶なのだ と見栄虚栄

直美

小脇には さむ英字新聞

美直

リヤカーに 寝る人も いるターミナル

馨尚

社会鍋 って何 を煮る鍋?

尚馨

戦跡の 経る年月 に月冴えて

直美

水無瀬の 宮に舟を 漕ぎ出す

美直

久し振り 病院で 会い酔い つぶれ

孟馨

崖下に まで三味線 の音

馨美

立兵庫 そぞろ 歩きの花 の陰

美孟

霞の奥 に塔の 上層

孟美

ナオ 弥生 尽スケツチ帳は白紙にて

小池正博

キテイ・ピカチュウ 必需品です

馨尚

いざという時に 備えて 地下シェルター

尚馨

大魔神にも 泣き所あり

馨美

空涙見せて みるのも テクニック

美馨

終夜走って ハーレムに行く

馨直

山麓に 粗壁続く 過疎の村

直尚

カラカラカラ と 矢車に風

尚直

何事か 箝口 命を破る朝

直直

清く生きよと 乳母の 便りに

直直

雲はなし 期待高まる 月今宵

孟直

八幡祭の 長き石段

直正

ナウ 奥津城に 眠れる人よ 秋深む

直直

我を 難じる 幻が いる

美直

来てみれば ノスタルジアの 誘い水

直直

卒業旅行 写真セピアに

尚直

自画像の 花の主は 松花堂

直正

風船ひとつ 屋根越えて ゆく

美直

平成十年十月二十四日首尾

(於・松花堂庭園)

草間先生御快癒  
歌仙 『万 緑』

草間時彦捌

オ万緑の生氣を得たる庵の主

大輪靖 宏

おぼつかなけれ橋渡る脚

草間時彦

昼灯す畳に風の通りきて

堀口みゆき

ふつとなにかに物あたる音

宏

数本のマストの間の望の月

恩田侑布子

秋の山には子らの声する

藤井弘 美

栗飯の炊き上りたる台所

宏

裁縫教師 正岡律女

美

ひとり身の想いは胸に秘めしまま

宏

脱がせて貰ふルーズソックス

子

折れやすき鉛筆の芯とりかえて

き

ピツコロ吹きに寒き月影

き

ニューヨークファイルでオープン新ホール

美

どこかに地図を売ってるないか

き

郊外にやつと買いたる家遠く

宏

お茶とまんじゅうおやつたのしみ

美

花びらの付きたる犬が戻りきて

き

春のゆうべはいまだ明るく

宏

ナオ中庭の朝餉に亀の鳴けるなり

天気予報の午後からは雨

ああすればかうなるものを連立ちて

キスし続ける来世紀まで

足の指こんなによいと知らなんだ

蚊取線香持ってきたくれ

向日葵は地平線までつづくなり

ポップアートのバケツ三百

立智如来どうぞ御知恵を貸し給へ

インド国境おだやかならず

湖の舟を浮べて月を待ち

べったたら市に幻の酒

ナウ故郷を出て二十年秋暮れぬ

遺影の母を連れて旅ゆく

空晴れて思ひ残せしこともなく

たてがみ光る厩出しの駒

北海道静内町の花の道

目高を飼へる瓶のさまざま

平成十年六月二十五日首尾

(於・大磯鳴立庵)

美

き

宏

子

美

き

美

子

美

子

美

き

宏

子

宏

子

美

き

短歌行 『初晴や』

柴田由乃捌

初晴や大漁旗に富士聳え 高橋水生  
 軽トラックで来たる獅子舞 柴田由乃  
 長電話目は三毛猫に遊ばせて 黒下好子  
 紙人形のおばさんであり 長谷部紫苑  
 ッ尖塔のかげくつきりと月明かり 早川京子  
 コーラン頌の街のややや寒 紫生  
 地下にある馴染みの店に袖釜出で 紫生  
 無精ひげ撫でぼそと告白 京生  
 家付いて婆もついてる婿養子 乃紫  
 「タスケテクレ」と夢で声出し 乃紫  
 樹木医の丹精に花よみがえり 紫生  
 入学祝ひ地球儀とききめ 紫生

ヲオ産砂の社殿の前に鳥交る 好京

中島端

ゆきつもどりつ遂に万引 好京  
 息と息ふれあひ覗く蛍籠 好枝  
 願の糸に恋の青僧 好生  
 おとうとが情死遺体を引き取りに 好生  
 帰りの席の酔ひに強酒 好生  
 冬月のモンマルトルを楽しみて 紫生  
 前を後を舞へる綿虫 紫生  
 ヲウ国鉄の借金返す煙草吸ひ 紫生  
 音をしぼりてビートルズ聴く 紫生  
 千年の中将姫の花遅く 紫生  
 朝靄を衝き蜺採る舟 紫生

平成十年一月九日首  
平成十年二月九日尾

(於・岐阜市中央青少年会館)



短歌行 『苔の元』

大久保春香捌

嶮	や	坂	本	積	の	苔	の	元	大久保春	香
山	を	下	り	く	る	雪	解	け	本屋良	子
春	座	敷	雅	の	友	の	集	ひ	高松正	水
品	定	め	す	る	俳	画	あ	れ	成瀬貞	子
旅	の	僧	軽	き	荷	物	を	肩	瀬尾千	草
古	墳	の	丘	を	照	ら	す	夏	粟野眉	月
遠	花	火	合	ひ	し	女	の	薄	船渡文	子
愛	し	て	ゐ	る	と	声	の	野		草
シ	ー	サ	ー	の	貌	も	ほ	こ		貞
紅	型	染	の	あ	で	や	か	に		文
普	茶	料	理	し	だ	れ	桜	を		水
風	車	子	に	買	へ	と	せ	が		文
										ま
										れ
										て

ナオリヤカーで谷戸から谷戸へ浅蜷売

意外と多い婆のへそくり

あちこちへ遊びに來いと電話して

炬燵の定座猫が居眠る

哲学書読んで詩人は夢の中

ねーおまはんのええよにしんさい

抱き合うて夜の更けるまで閨の月

ぴたりと当たる野分の予報

ナウ猿酒に引き寄せられし獣道

小島頓宮歴史秘めつつ

花に明け花に暮れるる歌の里

腹式呼吸習ふのどらか

平成十一年四月九日首尾

(於・揖斐郡池田町願成寺  
禅蔵寺)

良月香草文月良草月文月良草月文月良

歌仙 『座り地蔵』

古池五十鈴捌

若葉風座り地蔵の笑み静か

古池五十鈴

やなか小路は打ち水に濡れ

天野収一

金魚売昔の辻を廻り来て

田中義久

思いもよらぬ宇宙遊泳

収一

三日月にかけた細引き手に戻る

井口権二郎

すすきを飾ることもなきまま

斎藤とみ江

虫の縁赤糸巻きし糸車

飯沼麻奈美

アン・シャーリーは今はいずこに

収一

馬駆ってケベックを行く伊達男

義久

格子戸に貼る大寄席の札

木越保晴

積翠城朝を告ぐる時の鐘

権二郎

のらりくらりと生きてみたけど

義久

湯けむりをへだてて眺む冬の月

収一

決意新たに黒髪を切る

収一

止まるとも行くとも見えず観覧車

保晴

篠笛響く古都の街角

麻奈美

西城で夢見たものは花の舞

義久

独活を酢味噌にギリシアのワイン

とみ江

ナオ 杣の春酒落とばさらで日を送る

収一

鼠取る猫猫らしい猫

保晴

陶磁器のふるさと語る異邦人

麻奈美

ホエールウォッチングを君と二人で

義久

空念誦脳天をうつ青き梅

権二郎

仰ぎて気付く星のまたたき

収一

美術館写楽の口元一文字

保晴

板踏みならし大見栄を切る

収一

軽やかに新体操のリボンゆれ

麻奈美

塩辛トンボちよつと寄り道

義久

満月の浜辺に伸びる椰子の影

権二郎

夜間飛行で危機抜ける秋

とみ江

ナウ 電話口安否気づかう声嬉し

麻奈美

熱燗ぐびりさしつさされつ

とみ江

紫の光艶めく江戸切子

麻奈美

明日の野点の茶杓けづれる

収一

幾度も香たきこめて花衣

五十鈴

豊穰告ぐる遠き春雷

義久

平成十年五月二十三日首  
平成十年五月二十三日尾

(於・郡上情鶴佐 後藤別邸)

歌仙 『背凭れ』

渡部伸居捌

背凭れの椅子や春眠おのづから

渡部伸居

枝を渡りて絶えぬ囀

曾我部登志子

げんげ田に児等はボールを捜すらん

小池芳惠

新任巡查二人連れだつ

藤田節子

月はもう出てゐるらしき厨窓

菊野暁子

机の下の秋蚊しぶとき

居志

今年酒地元の店へ先づ卸し

志

夢は叶ひてみのる初恋

芳

ウエディングの片腕パパにあづけつ

節

しまなみ海道やつと開通

暁

冬麗の反り美しき寺の屋根

居

老友会で作るお手玉

志

盛り上がるビヤガーデンへ月の照り

芳

犬にも与へ冷やし素麵

節

策略を誤爆と枉げし噂たち

暁

降りみ降らずみただ曇る空

居

レンズ越し錦帯橋に花の散り

志

燕指さし語るわらんべ

芳

ナオ 携行の電話ぶらさげ急ぐ通路

祝賀イベントあちらこちらに

ドア開けて久方の友郁子さん

脳死移植に命広がる

頂きし薬酒少しを囲炉裏の辺

釣りし寒鮎焦げめ程良く

スーパーの百円市に立ち寄りて

逢ふとて化粧いとも念入り

街角の別れ「じゃあね」と眼で合図

復活されて走る S L

恒例の月の墓場の肝だめし

テレビの中も外も蝸

ナウ 榎紅葉山の湖澄みわたり

締切迫る稿も捗る

暁天に消えし機影をまなうらに

遺品となりし愛用の靴

雨あがり吉野の花も咲き初めて

句碑の玉垣めぐる永日

平成十一年四月二十日首  
平成十一年五月十八日尾

(於・松山市久米公民館)

節

居

志

芳

土井 栗

三好郁子

節

居

暁

志

栗

芳

郁

節

居

栗

暁

志

歌仙 『秋 風』

東浦佳子捌

秋風や宗鑑の碑の寂びまさり

東浦佳子

こぼれしままに散り敷ける萩

永見徳代

御自慢の料理もちよる月の宴

児玉俊子

いつのまにやらゴルフ談義に

佳

棒切れの波に漂ふ船溜り

徳

双眼鏡で探す隼

俊

環境の保護訴へる旅寒く

佳

愛想つかして不倫する女

徳

カーゴには恋の媚葉の密造酒

俊

沙漠の町の赫い太陽

佳

社運賭け耐久レース苛酷なる

徳

ペットの写真守り袋に

俊

草笛に誘はれ昇る月細く

佳

李かじりつつ一人るす番

徳

持ち株の暴落の報暗然と

俊

無心に子らの遊ぶシーソー

佳

池の面に影の揺れゐる花大樹

徳

蝶伝ひゆく寺の階

俊

ナオ 国宝の錫杖凜と春の朝

固い握手で約す再会

徳

肌白き少女の匂ひ仄かなる

俊

もののけ嫁を写すプリクラ

佳

夕闇に森は大きくくろぐると

徳

毛糸の帽に残す父の死

俊

胸ぬちに聖書の言葉凍てつきて

佳

厨の灯しもつと明るく

徳

決まりたる異国の妻の里帰り

俊

松虫が鳴き鈴虫が鳴き

佳

満月に電波衛星飛び交へる

徳

美術展への油彩完成

俊

ナウ ハイブテイー心の凝りのほぐされて

佳

茶房の窓の張り出せる湖

徳

雨の筋見えて遠つ嶺茫茫と

俊

家路を辿る耕しの爺

佳

花吹雪お伽話を目のあたり

徳

漸く癒えて暮れかぬる庵

俊

平成九年十月二十六日首  
平成九年十一月十日尾  
(文音)

歌仙 『野分星』

磯直道捌

野分星一かたまりに海へ墮つ  
磯直道

おどろおどろに荒れし秋草  
長濱喜代子

別荘の窓を開ければ鳥渡り  
宇田川貞子

無心に歌う子等は幼く  
仁杉とよ

噴水のしぶきは月にかかるらん  
東浦佳子

ビルの谷間はしばし涼しき  
青山瑛子

ッコンピュータなかなか馴れぬいらだちに  
貞子

ついほださされる上役の情  
古田悦子

三度目の離婚騒ぎで懲りたはず  
悦子

記者会見もちらりほらりと  
悦子

だんだんに冬の五輪が近づきて  
佳子

冴えわたりゆく中天の月  
と

舌頭にまろばせている亡き師の句  
と

手酌の酒のこち良き酔  
渡辺梅子

湖と富士が自慢の古き宿  
西尾み

百嘔りの絶えぬひねもす  
永見徳代

剝落の仁王の像に花吹雪  
喜

卒業式は袴姿で  
喜

ナオ寄せ書きの色紙はみんな丸い文字  
佳

明日退院の病室の壁  
み

両の手に溢れんばかりメロン抱き  
瑛

妻に従う夏の朝市  
佳

愛の巢は玩具のような新世帯  
と

お稲荷様は隣組なる  
と

ボス猫のぶちは大きな顔をして  
梅

煮魚も好き天麩羅もすき  
み

接待の疑惑にゆれる金融界  
舟木美代子

妖しく炎ゆる赤き鶏頭  
徳

朗々と誰が吟ずるか既望の賦  
佳

虫の音に和し心澄みゆく  
瑛

ナッパリからの友の絵葉書卓の上  
と

ジャンヌダルクの金色の像  
美

降出した雨にいつしか濡れそぼち  
佳

蛙ころころよろこびて鳴き  
河合澄江

爛漫の花に匂える朧月  
佳

汐の香の濃き千金の夜  
梅

平成九年十月十五日首  
平成十年四月十七日尾

(於・北沢タウンホール)

歌仙 『秋思の譜』

磯 直道捌

雲点々ちぎれ秋思の譜をなしぬ

磯 直道

ふと懐しむ故里の月

日笠靖子

穂芒も野菊も壺に活けられて

渡辺ハツエ

木の香漂う新築の家

水野治夫

沖はるか浮ぶ小島を借景に

鈴木佳子

浴衣のままにぶらりぶらりと

石橋未どり

河鹿鳴く沢程近き出湯の町

高原牧子

失樂園を気取るカップル

高原牧子

ひっそりと縁切り寺は門をしめ

小川廣男

しやれにもならぬ無策増税

小川廣男

健康の為と度をこす赤ワイン

廣 廣

幻のごとと櫓の鈴の音

廣田節子

雪原を照して月は冴えわたり

牧 牧

魁夷の青は美しく澄み

牧 牧

好きなもの見る幸せの定年後

牧 牧

永き日かけて橋をめぐれる

未 未

舟棹の雫とかかる花の宵

掘尾春海

風そよそよと蝶が舞いたつ

佐渡谷ふみ子

芳名録の懐石茶屋の縁先に

小谷伸子

新しい形の葬式悪くない

節 節

愛唱曲が流れ涼やか

節 節

還暦も赤いリユックで夏の山

田村昌江

喚声あげるゴンドラの妻

靖 靖

すれ違うクラスメートは恋敵

未 未

産土神様も棲みなれた町

昌 昌

賑かに豊年おどり輪となりて

節 節

案山子の顔はへへののもへじ

ふ ふ

虫の音も間遠になりし後の月

ハ 牧

室内犬を枕がわりに

牧 牧

風水の占いにより模様換え

昌 昌

ころばぬ先のあわぬ算用

荒川ゆうし

なかなか景気回復はかどらず

ハ 八

刻を忘れて春はたけなわ

ふ 八

城址の花咲き満ちてにぎわえる

ハ 八

遠嶺の空に立てる初虹

昌 昌

平成九年十月十五日首  
平成十年四月十七日尾

(於・北沢タウンホール)

歌仙 『講義室』

磯 直道捌

講義室のガラス曇りて冬めきぬ

磯 直道

重き実をつけ耐ふる南天

室井秋 紅

なれし友同じ話を来る度に

田淵遊亀女

金平糖でおうす一服

田辺公 惠

まなかひの丘なだらかに望の月

飯沼しほ女

草むらもるる鈴虫の声

八尾南 風

ッ休暇とり熱海に行かん紅葉忌

直

青春の夢追いもとめつつ

秋

二人居て背と背合せて手をにぎり

遊

ポリユームいっばいCDの楽

公

タマゴツチ売り切れの札店頭

し

運河に浮ぶ月の涼しく

南

大鰻やつと釣りたる嬉しさよ

直

腰をのぼしてあげる歓声

秋

コアラなどみやげに持ちて帰りたく

遊

搭乗口へ車椅子にて

公

無事解放されて故国の遅桜

し

山の湯できく四方の囀り

南

ナオ野遊びのつかれを知らぬ子らはしゃぎ

ナツプザックにおにぎりころり

人影もなくて静まる街と化し

美男も美女もあつという間に

兆しきし恋の予感に買う日記

ついで詣りの終天神

居酒屋の赤提灯をわきに見て

傘からたれる雨の水滴

難聴の方とは知らず道を聞き

秋の暮れがたいとおぼつかな

月の出をいざなふ琴を弾きはじめ

八景うつす池の水澄み

ナウ殿様が愛でしお庭も今公園

佇みおれば強き汐の香

裁断の鋏の音も軽ろやかに

派手な春着に心うきたち

入り合ひの鐘に落花のひとしきり

風にゆらるる白いぶらんこ

平成十年五月首尾 (文音)

南

直

秋

遊

公

し

南

直

秋

遊

公

し

南

直

積

遊

公

し

歌仙 『零雨先生追悼』  
大隣寺

磯 直道捌

緑陰に師の面影や大隣寺

磯 直道

香煙ゆらぐ梅雨晴の中

やからどち久闊を叙しにぎやかに

皿も小鉢も不揃のまま

故里の山夕月をかかぐらん

眼路の限りに光る穂芒

ッ骨折もようやく癒えて秋裕

妻の炊きたる赤飯の味

云えなくてそつと伝えし目出度さよ

わけ知り顔の飼猫の三毛

サッカーの入場券は隠れんぼ

北窓塞ぎつものる淋しさ

へそくりも残り少なく返してし月

おみくじ引けばみんな小吉

徳利を四五本倒し上機嫌

湖を見下す囀りの宿

青空の命輝く花盛り

しゃぼん玉吹く子等のはずみて

ナオ古時計止まりしままの遊園地

ポケットベルの音にそわそわ

暗がりにはついち同士手をつなぎ

挙動不審で職務質問

高速をまっすぐ行けば海が見え

カフェーテラスの白いテーブル

火焰樹の炎え立つ旅の思い出よ

三伏の汗ぬぐう手拭い

手にする日近き巻頭発句集

ブランド物のスーツオーダー

月煌々傘寿の翁の矍鑠と

吹き抜けてゆく爽かな風

ナウ不景気といわれながらも秋祭

ヴィデオカメラを廻す外人

次々と由緒あるビル壊されて

陽炎の中記憶薄れる

花の精ふわり枝垂れて匂いたち

零雨忌近きみちのくの春

連衆（田坂八重子、佐野とし子、小谷伸子、日笠靖子、堀内一子  
仁杉とよ、鈴木安一、田村外男、田村登喜子、渡辺ハツエ  
東浦佳子、鉢中縫、西尾みる、田村昌江、宇田川貞子、河合澄江  
永見徳代、廣田節子、佐渡谷ふみ子、猪俣光子、中村幸子  
鈴木美砂子、樽井靖夫）

平成十年六月二十四日首尾

（於・岳温泉あづま館）



歌仙 『花火待つや』

磯 直道捌

花火待つや水の匂いに溺れつつ

磯 直道

雨上りたる風の涼しさ

永見徳 代

ピカピカの四輪駆動庭の隅

東浦佳 子

落した鍵を探しあぐねて

小谷伸 子

十六夜に句会の客の来る時間

田村昌 江

新酒と古酒の用意万端

直 江

ッ棚経の僧は肝臓薬飲みつ

徳 直

妻は離婚をほのめかしたる

佳 徳

色褪せし恋文の束燃やすべく

伸 昌

ダイオキシシンが今や問題

昌 伸

名園の雪吊りの松枝傾げ

直 昌

寒月尖り狐鳴く声

徳 直

懐の軽うなりたる旅の果

佳 徳

車止めだけ残る廃線

伸 昌

開拓のおらが村長銅像に

昌 伸

蜜蜂飼うて終る一生

直 昌

山脈の連なるところ花万朶

徳 直

風船飛ばす屋上の子等

佳 徳

ナオ塗り直すお稲荷さんの赤鳥居

総裁となる小渕恵三

円安をインターネット伝えたる

直 昌

汗が瞬時の冷汗となり

徳 直

お見合の正座の膝に油虫

佳 徳

男心をそそる嬌声

伸 昌

新宿のスクランブルの交叉点

昌 伸

ハンバーガーの袋抱えて

直 昌

月光ゲに雁渡りゆく淋しらに

徳 直

影あわあわと吾亦紅揺れ

佳 徳

いつまでも踊り太鼓が耳の底

伸 昌

狂いがちな自律神経

昌 伸

ッ大学はレジャーランドとなりさがり

直 昌

高き理想に就職もせず

徳 直

陶窯の扉開くを楽しみに

佳 徳

手枕をすする陽炎の中

伸 昌

愛犬も桜吹雪に身をまかせ

昌 伸

うららうららと墨堤の春

八幡敏 雄

平成十年七月二十五日首尾

(於・永見邸)

歌仙 『軽鳧の子』

磯 直道捌

軽鳧の子に武蔵野の川つつましや

磯 直道

水面狭めて茂る青芦

渡辺ハツエ

若人の声賑かに響ききて

ハ

公園通り並ぶ店々

ハ

月今宵父母健やかにおわすらん

田村昌 江

秋興に酌むいささかの酒

堀尾春 海

ウ 民宿の庭のコスモス咲き乱れ

佐渡谷ふみ子

裾と背中をはたき合う仲

小川廣 男

なりゆきにまかせた果のデキチャッタ

石橋末どり

酔の物ばかり出さる食卓

廣田節 子

トントンと冬將軍が戸を叩き

日笠靖 子

寒三日月に消ゆる狐火

ふ

コルセット腰支えつつ杖を引き

木村寛 水

派閥召集かり出されぬ

春

金太郎飴のごとくに知った顔

昌

ガレージセールいつも盛況

荒川由美子

ひらひらと美しく舞いくる花の下

ふ

眠気もよおす暖かき昼

節

ナオ 礼状の山を崩して蕨餅

廣

純国産はまれのまたまれ

春

CMの男性髪不快感

春

婚姻色はいつか薄れて

廣

仲人の持ち込む話だけ待とう

佐野とし子

青柿ころと落つる音しつ

ふ

梅雨曇恩師の忌日近づける

ハ

掛け替えすみし床の間の軸

ハ

ペカペカと残る暑さの捨て団扇

ふ

耳をすませば蟋蟀の声

ハ

うっすらと雲がかかれる十三夜

ふ

炭を焼きつつ過ごす一生

靖

ナウ 枯萩に郷愁の念ひしひしと

田中はつ子

友人に似し狒犬の貌

靖

近くにはホテルマンション建ち並び

ハ

こども広場にゆれるブランコ

高原牧 子

待ちかねた花の蕾はピンク色

昌

水車の音にけぶる春雨

春

平成十年 五月十七日首  
平成十年十一月十五日尾

(於・北沢タウンホール)

歌仙 『洗い鯉』

磯 直道捌

江戸川の風は緑や洗い鯉  
磯 直道

一輪挿しに鉄線の花  
舟木美代子

新築の町の交番明るくて  
古田悦子

学習塾へ通う子供等  
仁杉とよ

ハモニカを吹けば傾く夕月夜  
東浦佳子

便りしたたむ秋灯の下  
美と

三回忌無事に済ませてやや寒く  
永見徳代

取るもの取ってまずまずの仲  
宇田川貞子

口紅を濃く刷き離婚判を押し  
渡辺梅子

性転換の手術成功  
佳子

街路樹にライトアップのクリスマス  
梅

サンタを乗せて月の橋来る  
西尾み

背を伸ばし孫出演の童話劇  
佳

携帯電話顰蹙をか  
徳

ウン・ア・ソオ・オイ・オイ・ジャアネ・ピ・ピノピ  
悦

力合せて燕巣づくり  
佳

花大樹底にかかると出湯の宿  
悦

落味噌で酌むささやかな贅  
み

ナオ誕生日自分で買ったネックレス  
森田英子

職場の局キャリアアウーマン  
美

ほら見ろよ若いツバメが鞠躬如  
永雄もりえ

入道雲にヨット呑まれて  
河合澄江

はかどらぬレポートにらむ夏休  
青山瑛子

小淵総理と渾名付けられ  
徳

クラス会会費安いと出席し  
英

夜行列車の固い寝台  
美

家づとの籠の松茸よく匂い  
瑛

七年ぶりの在祭なる  
佳

名月に今宵こそはと句を案じ  
堀内一子

足袋のこはぜの痛き縁側  
も

ッ寒雀ふくらみ日ざし柔らかく  
澄

太極拳に集う公園  
悦

ぽつぽつと降り出す雨を気にしつつ  
佳

卒業式の紅白の幕  
美

咲き初めし花に楽の音響ききて  
と

陽炎ゆるるる長き堤防  
美

平成十年五月十七日首  
平成十年十一月十五日尾

(於・北沢タウンホール)

歌仙 『残る鴨(一)』

木部八千代捌

残る鴨一つ離れて輪を描く

木部八千代

流るる雲に笑ふ山山

山口安子

紫の藤房濡らすおぼる月

三喜玲子

母の童話に聴き入りし子ら

米谷志奈英

その昔金の成る木のあつたげな

浜崎琴代

いつの間にやら積もる新雪

安子

ッ着ぶくれてお寺詣りの急ぎ足

渡辺常子

サイレン鳴らし走るパトカー

田尻禮子

駈落のふたりひっそり潜む宿

安子

いのちと彫りし白い二の腕

安子

滔々と大河の流れよどみなく

安子

芒刈萱吹きぬける風

禮子

ぼつぼつと雨降りだして無月なる

常子

抱え持ち出すどぶろくの壺

琴子

長びきし病癒えたる嬉しさに

琴子

ふと口ずさむ古里の歌

玲子

宮の花枝垂れしだれて咲き匂ひ

玲子

陽炎もえてつづく坂道

志

ナオ 関跡に鶯笛をひさぐ爺

遊覧船の浮かぶ湖

志

和歌山の砒素禍にゆるるテレニュース

常

売り上げ減に嘆くスーパー

玲

日雷ごろごろ鳴りてあわただし

志

墳墓の丘に茂る夏草

安

八訃見の言ひしひとこと忘れず

琴

目だちだしたるお腹さすりて

常

姑の急にやさしく嫁と呼び

安

夫婦そろってねだるマンション

志

天心の月は下界を照らしつつ

禮

更けゆく静寂すだく虫の音

志

ナッ リストラの職みつからずうそ寒く

玲

旅行ハットに映画半券

常

吉四六の井飯は大盛に

常

陶を並べる広き庭先

安

おちこちの残んの花を遠眺め

琴

春を惜しみてあげる盃

禮

平成十年五月九日首  
平成十一年五月八日尾

(於・北九州市立白銀公民館)

歌仙 『残る鴨(二)』

木部八千代捌

残る鴨一つ離れて輪を描く

本部八千代

ありなしの風なびく青柳

広渡雪路

夕ぐれの街に朧の月見えて

大江加代子

さようなら言ふ仲よしの子等

松田千佐代

好物の手作りのパンふつくらと

千

松葉牡丹は庭にいつぱい

白石喜代子

ッ伝統の祭太鼓が遠くより

池田昭子

ワールド杯に湧きしフランス

千

ぼつちりとブランドものの二人連れ

加

逆玉に乗る男優しき

加

経済を立て直します新首相

昭

秋暑きびしく止まぬ腰痛

喜

臥待の月はこよなく澄み渡り

佐藤ゑつ子

鮭戻りきてひびく瀬の音

ゑ

白神は太古のままに山毛櫨の森

福泉淑子

遺稿となりし歌集届きて

ゑ

見上ぐれば紅も仄かに花匂ふ

千

春を惜しみて回す盃

雪

ナオ大寺の黄金の鷗尾に風光り

ハイウエーでき様変わる村

かっこいい茶髪の彼は車好き

婢 天下で家庭安泰

あれこれと過ぎて迎へる年の暮

銀世界なる雪はまぶしく

特賞を目指して写真撮る旅路

お守り袋そつとしのばせ

松手入れして安らかな昨日今日

いづくともなく寄する初潮

師を囲む月見句会に集ひ来て

掛軸の「和」は床にびったり

ナウ遠山の稜線しるき土用明

汗をふきふき抜きし雑草

もてなしのお茶とお菓子に憩ひつつ

沖をめざして水尾をひく船

はらはらと小次郎の碑に花の舞ひ

遅日の雲に揺るる鞆鞆

平成十年五月九日首  
平成十一年五月八日尾

(於・北九州市立白銀公民館)

加

加

千

千

喜

千

加

淑

ゑ

雪

ゑ

千

加

喜

昭

淑

昭

八

歌仙 『道祖神』

寺岡情雨捌

菜の花や眠りて在す道祖神

寺岡情雨

山峡深く響く囀り

井上弥生

画架を手に尋ね歩くも楽しくて

武知千代

自慢の地酒そつと勧める

永井政子

白寿翁上座に開く月の宴

弥生

忘れ扇の香りほのかに

前原四月

ッ逝きませる俳追へばうそ寒く

千

老舗の暖簾守る後添ひ

四

風鈴の音こやみなき夕まぐれ

情

金魚鉢置く吾子の病室

水 吉金白

食品に異物混入次々と

政

世紀末てふ末世末法

情

最北の城趾の月の冴えまさり

四

不安をそそる狼の声

白

市議選にわれもわれもと立候補

千

二重人格居士と云はるる

情

石手寺の見返り桜咲きそめて

四

水陽炎の揺るる小流れ

弥

ナオ 軽やかに機音聞こゆるのどけさに

杉浦朝子

地球儀廻し旅の計画

政

はした女の恋に身を焼く裏長屋

情

不倫の末に遂に妊る

弥

ファッションの些細な事に云ひつのも

情

原爆ドーム寒々と立つ

四

おでん屋の灯りもやがて消ゆる頃

千

納得ゆかぬ詩論続出

情

独りだけ茶髪青年農こまる

千

ネクタイピンが光るサファイヤ

情

望月に島波架橋くつきりと

政

呆気の予防にいちよう葉と云ふ

情

ナッ 落鮎を手土産として友を訪ひ

弥

夢を托して書道三昧

政

夏座敷湖よりの風ほしいまま

朝

子規漱石の句碑が並べる

弥

咲くも花散り敷くも花渌ぎよく

山田久栄

曾孫誕生弥栄の春

白

平成十一年五月十三日首尾

(於・寺岡情雨郎)

歌仙 『落葉焚く』

寺岡情雨捌

落葉焚く思ひを遠き日に戻し 寺岡情雨

静寂の底に眠る山々 前原四月

烏骨鶏数羽を庭に遊ばせて 杉浦朝子

いつまで続くピアノレッスン 井上弥生

月の宴準備あれこれ忙しく 永井政子

広間に匂ふ懸崖の菊 武知千代

ッ色褪せし母の形見の秋袷 四

恋知り初めしあの頃のこと 千

角帽の貴方の姿一筋に 千

携帯電話シヨルダーの中 朝

砒素疑惑話題の人の顔写真 情

狂ひしやうに舞へるかわほり 朝

島巡る納涼船に月蒼く 弥

げに心地よき樽酒の酔ひ 弥

肩書きをさらりと捨てて気兼ねなく 四

句帳片手に俳句三昧 千

整然と池尻落つる花筏 四

風暖かきていれぎの里 政

ナオふらここの順番決めるジャンケンポ

カットバン貼る足の擦り傷 四

宿帳に妻と偽る志摩の旅 四

白粉彫りの浮かぶやは肌 弥

ほつほつと雨となりたる昼下り 四

夏越祭の幣がひらひら 四

汗の掌をじっくり覗く占ひ師 情

期することあり望む市議選 四

ハイテクの犯罪つとに増え続け 千

入江三里を匂ふ初潮 政

むら雲に月は怪しく包まれて 朝

柘榴笑ふと笑ふ気違い 四

ッ新造語遂に辞典に乗るらしく 情

ぞくぞく寒き推理小説 四

闇汁をいぶかりながら掬ひ上げ 弥

ロンドンテポドン話もちきり 千

爛漫の花か霞か花の雲 情

幸せに酔ふ還暦の春 朝

平成十年十一月二十三日満尾 (於・寺岡情雨邸)

歌仙 『私といふ交流電燈』

蓼艸捌

「私といふ交流電燈」望月夜 瀬間信子

誰のものでもない虫が鳴く 市川千年

赤い羽根行く手行く手に咲き出でて 織田紋女

メインストリート ピザ宅配便 あんのあのこ

冗長なパッサカリアと暖房と 川野蓼艸

鯨の心臓かすか光りて 村野夏生

何者か海から来たる足の跡 信子

我を背負ふは母かイエスカ 紋女

青嵐に傷の深さを聞いてみる 信子

やさしさごっこの長きたそがれ 夏生

獣となつて貴女に逢ひに行く 千年

まるで隣に移るやうに死にませう 夏生

押入より布団被つて現れる 吉田三津子

「出た出た月が」狂女凍てつく 紋女

河口まで旋律流され消えにける 千年

人はやっぱりレアよりウエルダン 夏生

雲片寺まで花まとひ髯引きて 千年

ミトコンドリアささやきの春 あんのこ

ナオホーキング宇宙理論のシャボン玉 信子

モデルの女ボーズ解きたり 信子

口移しされたるワイン臍あたり 紋女

言訳ばかり一枚の舌 蓼艸

幼年の記憶にももの鱧えしこと あんのこ

蛍の光入り乱れたる 夏生

四次元よりの合図解読せし夜更け 信子

ボスニア遠く響く銃声 夏生

夢つづる明恵の日記今も冴え あんのこ

瓔珞を置く冥き天平 夏生

名馬逝く横浜野毛の緋月よ 千年

ナッせめてのことに香れ残菊 紋女

衣被食むぞいざ子等寄れよかし あんのこ

親指の爪透け痛むてふ 夏生

銀行の合併話あちこちに 千年

土筆つくづく溜息をつく 紋女

槌音は鬼彫る音か花冷えに 蓼艸

いかるが工房うらら曙 あんのこ

平成十年十月三日首尾

(於・種月庵)



歌仙 『しまなみ架橋』

岡本 眸捌

岡本 眸

しまなみの架橋は高く卯波寄す  
天に向ひてもゆる新緑

森 教子

グローブを担<sup>かつ</sup>げる子等の楽しげに

西本 加代

リラックスして捲<sup>めく</sup>るカタログ

永井 政子

進みゆく科学時代の月まどか

長戸 弥香

椋鳥眠る街の公園

大西 八重

萩咲ける唐招提寺訪ね来て

川嶋 七重

握り返せる熱<sup>あつ</sup>き掌<sup>てのひら</sup>

眸 香

今更にどうにもならぬ帯を解く

眸 香

医療のミスは何が原因

教 加

演説の總理のジョーク通じかね

教 加

口笛吹けば跳んで来る犬

政 七

月蒼く意気の昂ぶる寒稽古

政 七

純米酒なら爛酒が良し

教 八

おしゃべりと無口が何故かうまが合ひ

教 八

オペラ舞台はなべて夢色

眸 加

古里は心やさしき花の雨

眸 加

皿に盛られて匂ふ草餅

眸 加

窓越しに遠足の列伸び縮み  
高木 潤

デジタルカメラ値踏みして買ふ  
紀伊 郁子

三高の見合ひはとうに廃たれゐて  
眸 潤

あつけらかなと既に身ふたつ  
潤 //

アラ不思議どこから入れるラムネ玉  
潤 //

蟻地獄なるコソポ紛争  
郁 子

前倒し成るか總裁候補多々  
福井 泰子

土手にはびこり揺るる雑草  
眸 子

染め分けるスカーフの色はんなりと  
郁 子

素人手品うける特養  
泰 子

悠久の月を賞でつつ語り合ひ  
郁 子

鰯料理はなつかしき味  
潤 子

ッよび物の喧嘩神輿の勇ましく  
眸 子

山の上まで続く段畠  
泰 子

風切つてアシストバイク軽やかに  
潤 子

龍馬の像は未来見つめる  
郁 子

吹き盛る花に自由詩書き留めん  
潤 子

姉妹都市までかかれ初虹  
泰 子

平成十一年五月十三日首  
平成十一年五月二十日尾

(於・松山市高木邸)

歌仙 『椋 鳥』

佐藤 淳捌

椋鳥の賑はふ頃や柿の里

佐藤 淳

軒端に乾く千振りの束

堀越ふみ子

今日の月御伽噺をねだられて

小山百合子

カラクリ時計評判となり

阿部 昭

新刊書枕となして大昼寝

佐藤敏 勝

暑中けい古に通ふ謡曲

淳

ッネクタイの柄吟味して急ぐ駅

百 淳

書類に挟む逢ひ引のメモ

百 昭

子の中に床の嬉しき新所帯

百 昭

名物団子残る一串

百 淳

折り込みのチラシ俄かに重くなり

百 淳

あれこれ迷ひ宝ぐし買ふ

百 淳

風止みて雲間に浮かぶ凍る月

百 淳

点滴の窓揺れる山茶花

百 昭

お馴染みのチリ紙交換ご無沙汰に

百 淳

清き社を守る世話役

百 淳

吾妻路に一望千里の桃たずね

百 淳

手製飛行機くぐる初虹

百 淳

ナオ水温み平和を願ひ流し籬

社交ダンスの特訓を受け

電話して彼の不在が気にかかり

はたと止まった連弾ピアノノ

代々の遺影揚げる麻暖簾

入道雲の兆す夕立

青蛙不吉な鳴き音世紀末

鬼弁慶も泣き処あり

富本銭日本の歴史書き変はる

塩せんべいをバリバリと咬み

名月に拝観謝絶禅の寺

とんぼの空に光るゼット機

ナウ豊作のニュース明るき社会面

連載漫画奪ひ合ひして

馬の背に揺られて登る外輪山

カメラが覗くワイン工場

ホームレスほか弁開く花の下

賑はふバザー陽炎の立つ

平成十一年九月二十日首  
平成十一年一月二十日尾  
(文音)

筆 勝 昭 百 淳 淳 昭 百 淳 淳 昭 百 淳 淳 昭

短歌行 『唐辛子』

稲田千寿捌

唐辛子買うていきやと朝の市

稲田千寿

野分も過ぎし島の残月

矢崎 藍

CDのフルートの音の爽やかに

由川慶子

布を噛んでる背なのファスナー

八木聖子

ウしつとりとふさいだ唇の過去未来

藍 寿

生き残りたる冬の雌蜂

聖 寿

雪しまく山の窯場へ続く道

聖 藍

しめきり迫るコラム抱えて

藍 慶

とつておきシャトーワインを空けちやおう

慶 慶

造園主任二十七歳

慶 慶

花の昼母の小さな経机

慶 慶

大河ゆったり流る春陰

藍 慶

ナオ石鹼玉ビルの窓より吹かれおり

老後とはさていつからのこと

紅型に帯はやっぱり黒い縞子

枕絵はらりめくる灯

あの世まで恋の鞆当て持ちこんで

大統領の首筋の汗

月暑しどこにも合わぬ鍵ひとつ

テトラポットを舐める白波

ナウ名を呼べど呼べど少年駆けてゆく

角を曲がれば猫の病院

しずごころなく降る花の日曜日

パン焼き上がる夕べのどかに

平成十年九月二十九日首尾

(於・桜花学園大学二二三講義室)

寿 聖 藍 慶 慶 藍 聖 慶 藍 慶 藍 慶

短歌行 『夏 薊』

福井直子捌

夏薊人なき野辺の昼下がりがり

福井直子

今年はことに蟬のよく鳴き

由川慶子

不器用な針の運びは母に似て

原みね子

私をにらむスケジュール表

小野芳梅

ッロングヘアハーレーに乗り月の道

黒木美代子

踊りの輪より君に投げキス

み

新妻のやさしき笑みと新豆腐

美

白いカーテン木洩れ陽に揺れ

梅

ドイツより古城巡りの招待状

慶

三大美声の響き朗々

み

花の雨降りてはやみてまた降りて

直

逝く人多し暮れてゆく春

慶

ナオ 忘れ潮いそぎんちやくを見つけたり 加藤治子

ジャンケンポンで負けてばかり 直

パソコンのメール仲間に謎多く 矢崎 藍

しじまを破る梟の声 み

花魁を待ちくたびれし堀ごたつ 藍

恋のかけひき絡みもつれて 直

昼の月ばかりと嵐過ぎさりし み

新酒携え急ぐ師のもと 治

ナウ 蚯蚓鳴くなんぞと蒔蓄傾けて 藍

肥満猫めが大欠伸する 々

子守歌聞かせ育む花の下 治

田を返す手に力漲る 筆

平成十年九月二十九日首

平成十年十月二十日尾

(於・桜花学園大学二二三講義室)

短歌行 『天地凍つ』

原みね子捌

清貧の悠々自適天地凍つ

後藤東潮

ふくら雀の群れる庭石

山田たみ子

公民館ママさんコーラス響きいて

稲垣渥子

忘れた時計出たと留守電

矢崎 藍

ッ梯 梧咲く海岸通り月昇る

渥

切子グラスにワインなみなみ

々

嬰誕生キャンパス長き恋実り

潮

気が弱いけどやさしいの彼

藍

肥満猫呼べば尻尾で返事する

原みね子

押しつけ合いのゴミの処理場

渥

縦横に高速道路花吹雪

潮

ザビエル像に満ちる春光

渥

ナオ鳥交る人は大河に生計得て

潮

そろりとはずす舟のともづな

八木聖

子

山際に一番星を見つけたたり

小野芳

梅

戦火の町に忍びあう女

聖

少年を伝令にして「好きです」と

柿本時

代

ブーケ・ド・アムール老いて明るく

潮

熱帯のかそけき秋の果実市

々

今宵の月は青い宝石

藍

ナウ新米をほっこり炊いておむすびに

時

磨き上げてる古いハーレー

聖

花の旅漢ひとり泊めぬ宿

潮

暮れかねている北国の空

み

平成十一年二月十九日首  
平成十一年二月十六日尾

(於・桜花学園大学二二三講義室)

歌仙 『初雪や』

片山多迦夫捌

初雪やわが初旅を荘厳し  
片山多迦夫

去年今年なく翔ける大鷹  
矢崎 藍

海鳴るか山鳴るかとも寒明けて  
八木聖子

パンふくらむをのどやかに待つ  
由川慶子

庭下駄を借りて散策朧月  
後藤東潮

孫の電話は「ら行」もどかし  
谷本守枝

ッパパとママシャルウイダンスしているよ  
深津三郎

甘いアルトで誘はれたころ  
聖潮

Amie欲し恋も不倫もあるものか  
潮聖

日ごと茗荷を刻む清貧  
聖潮

水中花忘れしまま咲きつづく  
慶聖

研究室の書棚ぎっしり  
聖藍

お頒けするこの肝臓の三センチ  
藍守

母より継ぎし物捨てぬ性  
守郎

月さやか参河俳諧連衆に  
潮郎

今が飲みごろ杣の猿酒  
潮藍

方便の嘘なんぞつき遠花火  
藍守

刑事ドラマもつひに最終回  
守郎

ナオ温暖化進む不気味さわが地球

一億人の急ぐ靴音

枯野出てこれより道は海沿ひに

塩鮭やはり焼いて食ふべし

ペルシャ猫抱いて和尚の気障なこと

定価五円の春画数枚

紅直す男帰したかはたれに

水曜日には粗大ゴミ出す

残業に高層ビルにすだく虫

枝豆ぷちりとばす支社長

月照らす下天はしよせん夢ならむ

探しあてたる道三の墓

混迷と不信みなぎる世紀末

ジグソーパズルまたも振出し

ささやかな荷造りをして核家族

昼まぼろしのでふてふがとぶ

咲きほこる花の吐息を聴きむたり

風きらきらと光る瀬頭

平成十一年一月八日首尾

(於・桜花大学四三四研究室)

潮藍聖慶藍聖藍慶藍聖藍聖藍聖郎

廿韻 『七彩の夢』

小林しげと捌

ナオ ちらちらと雪の降り出す無双庵

枯枝かれえに並ぶ鴉動かず

浅沼小

ひび割れたガラスのハート抱きしめて

ペアストローでボジョレヌーボー

赤道を航く月明の豪華船

どんぐり握り老化封ぜん

ナウ 気のそまぬ過去はさっぱり捨てました

諸行無常の写経三昧

紅白の幕に万朶の花明り

ひばりと遊ぶ浮雲の詩うた

平成九年四月十六日首尾

(於・浦和東京電力お客様相談室)

葦 摩 樹 葦 摩 洋 樹 〃 葦 摩

七彩の夢育まんさくら草

小林しげと

木の芽風吹く学生の町

引地冬 樹

春昼の亀の子文字に戸惑いて

川口摩知子

とぎれとぎれに竿売りの声

沢田洋 々

ウ 水打てば向かいの屋根に昇る月

樹

夫婦気取りで啜る素麵

洋

愛の手をインターネットで分かち合い

摩

占星術にはつと目覚める

洋

カエサルはルビコン川に陣を布き

と

衣の下に保々の策略

樹

半歌仙 『ざわめきの』

城戸崎丹花捌

ざわめきの師走をよその一座かな 井手櫂 晴

大礼服を吊れるぼろ市 城戸崎丹 花

独楽廻す軸は大地を削るらん 名古屋 子

騎士団ごっこ剣をきらきら 丹下尤 子

月白の遠山の秀にしみつつ 晴

里人帰る露繁きなか 窪田素 規

票割れし住民投票やや寒う 規則

どつちつかずの煮え切らぬ奴 規則

むし返す別れ話の切れ目なく 晴

気になつてゐるあの泣き黒子 尤

偽だったゴッホ・ゴーギャン・ルノワール 晴

上向き給う角のお地藏 規則

月射して売れ残りたる金魚桶 尤

井戸端会議涼みがてらに 規

ひっかけた酒で景気の良い親父 規

高級外車職安に行く 晴

川三筋落合うあたり花ぞ散る 丹

ポンポン船の往き来のどけし 規

平成九年十二月十二日首尾

(於・浦和・東京電力お客様相談室)



歌仙 『卒業』

鈴木春山洞捌

切れし生徒はアルバムも無く卒業す

鈴木春山洞

子供知らざる親心コ春

大本まこと

白木連色さえぬまま散り落ちて

倉本 淑

海埋め立てるダンブ行き交ひ

林 半 星

小波さきに映る月いまダンスする

弓崎雅 美

壺に投げ入れ薄錦木

井門可奈女

収穫ウを神に祈りつ機器整備

ま

母かあちゃん農業寄りかかる頃

洞

手際良く姉さん被りしてみせる

半

荒れ果ててゐる手を無でてやり

淑

害虫むし除けの首輪厳しき猫の首

奈

がつくりと後ト見す娘こ悲しき

雅

月てらすカットグラスでワイン酌み

洞

糊の効きたる浴衣ソックス

ま

闇に消ゆ新内流し二人連れ

淑

犬の遠吠え村外れにて

半

無人駅見捨てる花の咲き乱れ

奈

夜遊び疲れ伸びてゐる若い

雅

ナオ 入学児カメラそれぞれわが子追ひ

ブリッジ渡る煙 D 5 1

ま

死に体に橋竜なりし噂立ち

洞

露西亞・米利加に頭ぺこぺこ

奈

焼芋をオーブントースターにてこなし

雅

電子レンジで熱燗にする

ま

今日もまた同じ電車に彼と逢ひ

淑

示し併せて旅にこつそり

奈

「別別の部屋は取るのよ」宣言す

洞

ニュージールランドに一人フライト

雅

観月会月の出待たでぶつぱじめ

ま

干し柿並ぶすだれ彼方此方

淑

ナウ 稲雀人の気配にぱつと飛び

奈

朝シャン始めヘルメットせず

雅

キスシーン地震情報中断し

ま

客人めつきり減少の街

淑

花前線北海道に到達す

洞

世界地図とも蛙ひきの傘咲く

ま

平成十年三月二十四日首  
平成十年四月二十八日尾

(於・愛媛県立生活文化センター)

冠沓付愛媛 『初富士』

鈴木春山洞捌

オは 初富士や幾たび愛でき河口湖

松根東洋城

馴じみの宿に汲める若水

鈴木春山洞

つ 摘草の嫁と姑仲よくて

大本まこと

バレンタインに義理のイタチョコ

林半星

ふ くり返りくり返り見る朧月

倉本 淑

とぎれとぎれに水流れ落ち

井門可奈女

ッじ 寺塔たつ古き都に雪降りて

洞

野暮な言葉はいひだしにくく

ま

や 「やつれるわ」貴方の電話ひたに待ち

半

二人でひろふ美女桜の葉は

淑

い 石段を上る社に願をかけ

奈

びしりとたたたく秋の残りの蚊か

洞

くるま座に紅葉の宴の始まりて

ま

野末の案山子忘れ忘れき

半

た 旅に出る装い幾度も変へてみる

淑

春風に乗り踊る衣手で

弓崎雅美

び 美男子の肩に花の枝かつぎ持ち

洞

遠足の児等乗る車止め

ま

平成十年十月二十七日首  
平成十年十月二十七日尾

(於・愛媛県生活文化センター)

歌仙 『落し文』

菅谷有里捌

山裾の羅漢の肩や落し文

林惠津

唄口ずさむ片蔭の道

田仲真喜

夏座敷白ワイン酌む職退きて

松本朝子

両手高々縁起屋の猫

内田光子

庭先に窯変並らぶ月代に

寺田悦子

小菊浮かべて露天岩風呂

山本孔子

晩学の連句勉強秋深む

新家敦子

恋の出会いはパートタイマー

菅井てい子

求愛はムンクの叫びのような顔

吉田多輝

押しかけ女房遂に地を出す

菅谷有里

世の中はとかく涙と笑いにて

悦里

凧と入る回転ドア

輝孔

月皓々モンスターめく樹氷林

孔輝

人工受精、神もおどろく

恵孔

語り部は永遠にサヨナラ、サヨナラと

恵孔

しぶきを上げて餌に寄る鯉

敦喜

花びらの野点の傘に二三ひら

敦喜

ボタンは光る入学児童

い喜

ナオウららかに駅伝競ふ北大路

自自連立で覆盆成るか

絵手紙の余白にそつとハート描く

彼の反応しかと受け止め

裏二階ひっそり持った新生活

マニキュア指できざむ玉葱

一瞬に水煙かすめ不如帰

世界遺産となるかまほろば

飛行機翁名を汚したる三代目

成果実らぬ景気対策

ナウたくましき男鹿の角は月に伸び

柿の渋さにあわてふためき

未だ消えぬ戦火の後の身に泌みて

超特ダネをホーム話題と

幻の名城めぐるロケ撮りに

老舗和菓子の銘は“残雪”

拷問に耐えし義士の碑花の奥

佐倉へ急ぐ惜春の旅

平成十年六月二十九日首  
平成十一年一月二十九日尾

(於・鎌倉市教養センター)

朝光 惠敦 里惠 孔悦 光敦 悦孔 敦喜 里輝 悦里 朝光

歌仙 『月の庭』

鈴木春山洞捌

面白や影踏み遊び月の庭

鈴木春山洞

踊り出さん腹打つ陶狸

後藤波久

錦秋の山路岩壁下り来て

矢野勝三

機織りの音窓ゆ流るる

楊井桑男

あれこれと水着手に取り品定め

松田靖夫

苺の皿に銀の匙添え

井門可奈女

ッたつぷりとどろりとミルクかけてをり

洞波三

不適切行為てふホワイトハウス

三波洞

抱きつけば嫌よ嫌よも好きのうち

三波洞

歎<sup>すなり</sup>歎<sup>な</sup>は次第に愉悦歡喜へ

桑三

奨められ飲むバイアグラだめ男

靖奈

テレビ賑はす政治折衝

奈波

月寒く暮れ六つの鐘居酒屋で

波洞

縋袍の背中丸め酌み交ひ

洞桑

達磨ぎよる目この世の乱れ見据ゑたる

桑三

金融再生世界注視す

三奈

花筏碧潭に浮く景の中

奈靖

うつらうつらと麗かな日々

靖奈

ナオ揚げ雲雀聞きつつ草に寝ねており

洞

児等の喚声あちらこちらで

靖

国民は不景気どん底たゞ中に

井ノロカズ子

身売り相次ぐ銀行サッカー

奈

短パンはお尻くつきり夏帽子

靖

弾け飛びびたる豌豆の粒

桑

乱雑に男女の靴の出合茶屋

カ

覗き穴なる組んずほつれつ

洞

無重力逆姿の千秋ラブコール

靖

政界マッパ離合集散

三

ほとこの毛に銀交ぢる月明かく

洞

紅葉の城を湯槽に仰ぐ

カ

ナウ奉公は死語ともなりて牧閉ざす

カ

趣味に蒐めし銘酒数々

靖

大和路へ古墳調査に連れだちて

三

杣道を行く木樵三人

奈

舟仕立て花をめあてに逆上り

洞

若鮎おどる淵の岩陰

桑

平成十年九月二十九日首  
平成十年十一月二十一日尾

(於・松山市民会館)

半歌仙 『著莪の花』

華 尤子捌

すがしきや欠かせぬものに著莪の花 丹下博之

故郷さららに遠き母の日 中野恵永

なつかしき悪童よびて酒酌まん 原伸一

窓を開ければ磯の香のくる 小池ゆみ子

月皓々島影藍に透きとおり 華尤子

家族で囲む松茸の飯 小池信子

ッ気もそぞろ太鼓打ちだす秋祭り 松下英雄

ミニスカートも闊歩する村 永

ゲタ履きにピアスの似合う青年団 一

人目気にせぬ恋のあれこれ 一

円高も株価下落も無関心 信

あつという間に財布冬ざる 尤

三十年栄華のあとの月凍てて 之

列柱ばかり空に突きだし 々

エーゲ海白き帆船濔ながく 永

どこ吹く風も春の囁き 一

雪洞に人波つづく花の道 雄

お寄りやすえと長閑なる声 信

平成十年五月十二日首尾

(於・丹下博之居)

半歌仙 『それぞれの』

松下英雄捌

それぞれの旅やひとまず年忘れ

丹下博之

冬至梅咲く床の大鉢

中嶋桂竹

山上の古き館に独りいて

松下英雄

オカリナ作る大き手の男

華尤子

月待ちて暮れる平凡これもよし

小池信子

パン撒く庭に遊ぶ鴨

中野恵永

秋空に何を思いて二人連れ

原伸一

忍ぶ恋路は鄙びたる宿

永

利き腕のちがいし人に今は添い

信

驚かないさ自自の連立

之

教会の前で演ずる仮面劇

尤

青鳶わたる一陣の風

永

眠られぬ病床覗く夏の月

雄

末の子描く父の似顔絵

之

爺さまは酒をくらいて目出度がり

竹

寝釈迦の影のすこしゆがみて

尤

陽を浴びて一片二片花の散る

雄

頂き遠く名残雪見ゆ

信

平成十年十二月十五日首尾

(於・丹下博之居)

半歌仙 『初 買』

付け廻し

初買は亀甲に似し独逸パン  
加藤望子

子等の羽根つき威勢よきこと  
佐久間淑子

にぎり江の土橋無言の風景に  
石田京

新聞配達足早に行くと  
藤井治

月よぎる飛機の尾灯の点滅す  
金子九星

稲妻よりも迅きたまゆら  
西山真樹

秋袷似合いしひとのなつかしく  
小林梁

思わず知らずストーリーカー達  
高畑自遊

女装して囹捜査の刑事さん  
伊藤綾志

種を明かせばあつと驚く  
戸田貝江

笑い声寄席入口を転げ出し  
渡辺博

路地をのし行く力士肩巾  
芳田龍子

夜濯ぎの水静まりて光る月  
徳住 羚

ビール一缶酔いのほどほど  
大石勝五

集めたるレコードの数御自慢な  
田村真智子

お神楽もあり声明もあり  
山本房子

方々の花は静かに開きゆく  
宮下太郎

春の盛りとなりしたため息  
執筆

平成十年二月二十七日首尾

(於・俳句文学館)

新春初懐紙

歌仙 『とら猫』

三吟

とら猫の髭を立てたる御慶かな

宮下太郎

大俎に流す若水

伊藤稜志

断崖の果ての漁家あたたか

西山真樹

卒業証書持ちて帰れる

太稜

しゃぼん玉上り真昼の月となり

稜太

折々降らす白い貝殻

眞真

アトリエに横たわりいる三女神

太稜

抱き寄せられし胸のふくよか

稜太

恥じらいのない乙女は眼を閉じて

眞真

ぽっかり洞の開くる神杉

太稜

徳川の埋蔵金を追い求め

稜太

生かす蝙蝠殺す蝙蝠

眞真

名月の少しぼやけて広縁に

太稜

けずり取られし椽の実の渋

稜太

菊膾今宵の客は誰ならむ

眞真

まずはそろりとくしゃみ先生

太稜

山頂の天守閣より花吹雪

眞真

遍路の笠の消ゆる峠路

眞真

ナオ春愁は渚の昼に募りきて

夢二が描く半襟の色

芝居小屋旅芸人の厚化粧

恋はご法度なれど恋しく

めんめんと口説けば氷柱折るる音

三寒四温一喜一憂

真鶴の魚付林黒々と

女子衆はみな腰のしまれる

念願のホールインワンフルショット

ぬるぬるとせし馬糞茸あり

ぼた山に月昇らせて酒酌まん

破れ障子をまたも切り張り

ナウ減税の決断遅き暮の秋

嘴太鴉尿をちびらす

指揮棒は止まり拍手は鳴り止まず

セロの奏者の真白い髭

花の舞通り抜けてもまだ続き

別れ霜敷く明けの明星

平成十年新春起首  
同年四月吉日満尾

太

眞

稜

太

眞

稜

太

眞

稜

太

眞

稜

太

眞

稜

太

眞

稜



歌仙 『銀色の』

三吟

銀色の鋭き芽吹きありにけり  
宮下太郎

ちぎり絵と似し早春の雲  
小野淳子

入学児長き祝辞に倦みもして  
赤松よう子

また新しきファミコンを買う  
太淳

古伊万里の皿に盛り上ぐ月見芋  
淳

糸爪の水は壘を溢るる  
よ

爽やかに運動会の万国旗  
太

美人教師と二人三脚  
淳

やさしくて無口のひとが理想です  
よ

夫婦の墓は海を向きたる  
太

遠ざかる週に一度の通い船  
淳

密航せしは黒犬のゴン  
よ

月暑しテレビニュースに缶ビール  
太

軒の浜木綿真つ白に咲く  
淳

寺の池鯉増えすぎて捕獲せむ  
よ

殺生という言葉ありけり  
太

花びらの張りついている洗い桶  
淳

都踊りへ家族出払う  
よ

ナオ 囀りに双眼鏡を向ける父

W杯の行方気になり

キヤミソールドレスがやはり世紀末

若けりやいいというものでなし

お休みの口づけだけは変わらずに

漢方薬の効能やよき

雪催龍骨という何の骨

太古の空に凍てるシリウス

青銅の仮面の謎も解けぬまま

物草太郎酒におぼるる

月読の尊を祀る郷社にて

ぶらりぶうらり縞烏瓜

ナウ 無伴奏チェロのバツハの身に入みる

たんす預金に秋の深まり

信託の合併記事のでかかど

東風吹く頃に決まる良縁

文金に八重の花房重たげな

蛤ひらく漆黒の椀

執筆

平成十年四月吉日起首  
同年 六月吉日満尾

歌仙 『木遣り歌』

三吟

春浅しオリンピック木遣り歌

宮下太郎

ぼつと明るき泊夫藍の金

徳住 羚

水温む洗い物みなはかどりて

大石勝五

鳩サブレーの味を楽しむ

太

大屋根の上に月あり写真展

羚

切符売場に柿の籠見え

勝

みちのくは鮭の産卵始まりぬ

太

鏡の奥にふと熱い息

羚

初めての旅の褥の柔らかかに

勝

また湧きだせる浅間噴煙

太

健康も気掛かりなれば赤ワイン

羚

友とひさびさ菩提樹を和す

勝

月涼しでんでん虫が角を振り

太

佃祭りに締める六尺

羚

不景気も掛け声だけが甲高く

勝

あれも買わないこれも買わない

太

花の山うす紅にけむりつつ

羚

濡れにまかせるあたたかき雨

勝

ナオゆるると小さき蛙の一人旅

太

越すに越されぬ川止めの宿

勝

階段を踏みはずしたるその時に

羚

抱きとめられしあこがれの君

太

眼を閉じてすぐに口づけとはいかず

勝

パトカー停まる町の騒然

羚

雪催ノートルダムのガーコイル

太

寒夜に吠ゆる魔除け狼

勝

母さんのひどい肩こりほぐそうよ

羚

太郎次郎の仲のよいこと

太

道草は芒の土手の薄月夜

勝

秋の彼岸にお墓建立

羚

ナウ雁帰る南の国かはた北か

太

銀座の老舗売りに出たとか

勝

コンビニで立読みをする週刊誌

羚

新政権にきつい悪口

太

懐かしき同胞と逢う花の茶屋

勝

鶯餅も囀りのなか

執筆

平成十年三月吉日起首  
平成十年八月吉日満尾

歌仙 『夏近し』

三吟

夏近し甲斐駒走る牧の原  
矢野禪 巖

裾野の町を跨ぐ初虹  
渡辺 博

絵筆持つ翁は虹を打ち払い  
宮下 太郎

鍾馗の軸を掛けし床の間  
禪

麻雀にうつつを抜かす望の月  
博

豊作なれど下がる米の値  
太

店先の輸入松茸売れ残り  
禪

地球儀回す若きカップル  
博

三年は子供つくらぬことを決め  
太

女ばかりの妻の家系よ  
禪

過去帳を繰れば聞こゆる鐘の音  
博

関ヶ原から落ちる奥美濃  
太

月涼し客もガイドも寝静まり  
禪

日焼けの背ナがむず痒くなる  
博

突然の動き出したる大地にて  
太

土龍顔出す庭の片隅  
禪

散りやまぬ花は己れと同じ歳  
博

句帖に記す金婚の春  
太

ナオ 四月より変わりしバスの時間表  
禪

ポストも口を二つ開けたる  
太

新しき総理小物か大物か  
博

ばななの台をたたたく寅さん  
禪

温泉地覗いてみたいヌードショウ  
太

そつとささやく彼女ほろ酔い  
博

今度こそ別れはしないいつまでも  
禪

新雪の上血潮点々  
太

罨抜けし狐は穴へ帰りゆく  
博

越後信濃の国境なり  
禪

月さやかまかり出でたる太郎冠者  
太

篝火かげる紅葉の杜  
博

ナウ 秋祭り神輿次々担がれて  
禪

引つ繰り返すソース焼きそば  
太

懐かしき少年の日に思い馳せ  
博

涙をこすりし袖の光れる  
禪

沖遠く船が行きかう岬の花  
太

カラスの声に交じるうぐいす  
執筆

平成十年五月吉日起首  
平成十年十月吉日満尾

歌仙 『鶴亀の』

蛭海停雲子捌

鶴亀の飾りが覗く初懐紙

加藤マサ子

寒九の水に酔い醒ます貌

蛭海停雲子

早梅へ細くかかるは月ならん

赤田玖實子

径を辿れば村の前山

保坂武義

鮮やかな赤色のシャツ良く似合う

鴨志田智恵子

プラの団扇はオートメーション

雲

ッ言い出せぬ心のたけに汗をかき

智

嗅ぎ分けている匂い艶めく

雲

全盛の遊女も今は地に還る

マ

ピルを飲み過ぎ不調これあり

雲

眠られぬ夜は白白と明けそめし

義

昼月ほのと浮かぶ蒼天

智

爽やかに歌声ひびく公会堂

マ

須弥壇に棲むえんま蟋蟀

雲

浅沓に笏を正して威をそなえ

智

カタカナで書く鉢の苗札

雲

漲りし花さんざめく隅田川

マ

幼ナ兒膝に揺らすふらここ

智

ナオ電 気量使い放題叱られて

五十三次浮世絵の真

吹替えの機内映画はフィンランド

假病の振りをさらりいなされ

ポプヘヤーカットがさえる黒き髪

掬いし金魚わりに長生

悪食は蠍の活けを喰べるとか

藩が保護する薬り行商

埃つむ家紋の盃は棚の上

消えてしまった小型台風

師の俤月に重ねつにじむ悔

冬も近しと眉をひそめつ

ナウ新しい郵便番号簿の厚さ

交際の知恵うまいおとぼけ

クッションの刺繡模様は吉祥文

机に並ぶ折り紙の雛

老木は添え木にもたれ花清雅

変わる古代史董とく闌け

平成十年一月十三日首尾

(於・上鶴間桃天樹)

〃

雲

〃

〃

マ

智

雲

玖

義

智

雲

智

義

智

マ

雲

智

玖

歌仙 『カンパニユラ』

赤田玖實子捌

含羞のうす紅を賞でカンパニユラ 加藤マサ子

皿に開かせ銘菓あじさい 姪海停雲子

土用浪砂丘の下に押し寄せて 鴨志田智恵子

山ふところへ月は等しや 赤田玖實子

鈴虫を分けて貰いぬ甕の底 智

冬の支度に心せかされ 大谷繁子

顔見世に粹をこらした女紋 玖

賀状積み上げ家族弥栄 雲

執着す位相幾何学曲面に 智

ああ言えばこうこう言えばああ 雲

サッカーも野球も実力次第です 智

刺青シールペディキュアもする マ

昇りくる月の花燿へ瀧飛沫 智

涼しきニユース古墳発掘 マ

肝臓をとことん信じ酒に生き 雲

漢詩の軸に梅の燻香 繁

讚美歌がもれくる門に花は満つ マ

長元坊が橋に巢造り 智

ナオ遺伝子の組替食品氾濫し マ

やたら買い込み消えたストレス 繁

初時雨さあと濡らして通り過ぎ 雲

三の酉かよ火事は北かい 雲

故もなく未成年者に遠慮がち 繁

封が切れてる和印の本 玖

メコン川往き来の舟も旅遙か 智

利権あさりに国政はよそ 雲

好景気願うばかりの糸を掛け 繁

月の兎も今は棲み憂く 智

引板は刈入れが済み納屋の隅 雲

落とした鍵は何処の鍵だか 智

ナッピカピカのシステムキッチン羨みぬ 雲

佛像修理供養してから 玖

冠が傾いている段の雛 智

小網で掬う桶の白魚 臣永宗次郎

たおやかな若木の花を慈しみ 智

惜春の怪人と行き交う 雲

平成十年六月九日首尾

(於・中和田自治会館)

歌仙 『萩の葉や』

赤田玖實子捌

萩の葉や煌めき発<sup>はな</sup>つ露の玉

赤田玖實子

吹く風の先懸かる残月

蛭海停雲子

古物屋の隅に砧は置かれて

鴨志田智恵子

本を読みつつ皿の焼鳥

加藤マサ子

牡蠣むきに糊の利きたる割烹着

玖

煤掃きを逃げ映画繁昌

智

きっぱりと性転換の手術受け

マ

弾道ミサイル頭上飛び越え

智

他所の庭近みちにする太い奴

玖

神に守らる椰は亭亭

マ

袋掛ふとした科の阿那にほれ

雲

アンバーの香が官能を刺す

〃

月雫夏の花火の大変化

智

闇を拭いし清閑の空

マ

飼主は犬の心境察すれど

雲

ものは言いよう意味もとりよう

智

曲水に流るる盃を見送りぬ

玖

独り寂しく畑を打つ影

智

ナオ紫の漂う藤の棚広く

マ

循環バスは毎時一回

雲

コンビニの隣りに自動販賣機

智

長銀破綻蟻の穴から

雲

断層が表れ地震続くとか

智

こそばゆ顔で御慶交わしつ

〃

里の母下着ルックで来ないでと

雲

積み重なりしからの靴箱

マ

武勇伝かくしていても囁かれ

玖

宗全籠にいける七草

大谷繁子

月光に慈悲忍辱の弥陀の像

玖

さ男鹿の恋啼けど答えず

臣永宗次郎

ナウ宝石の美しき増す放射線

繁

旨さそれぞれ和菓子洋菓子

玖

何もかも人類学は包括し

〃

土産に求む踏絵銅製

宗

北上の花を追いゆく気儘旅

玖

青き苗田は瑞やかに伸ぶ

繁

平成十年九月 八日首  
平成十年九月二十五日尾

(於・中和田自治会館)

冠沓付  
愛媛 『自由奔放』

鈴木春山洞捌

おい 生きてゐる七十九歳長閑かな  
鈴木春山洞

伴走は犬タンポポの道  
奥村時雨女

き 汽車の窓遠足の児は鈴なりに  
沖野ますみ

濤碎く景見惚れへなへな  
松本あきこ

て 手拍子と唄の聞こゆる秋の家  
白方多 恵

赤のまんまを挿す句座静か  
宮崎みさこ

ッる 居待佳<sup>よ</sup>き物干台に宴<sup>ゲ</sup>あり  
時

影の重<sup>かさ</sup>なる恋の二人か  
ま

る 留守番の炬燵の部屋に點<sup>つ</sup>く灯<sup>シ</sup>  
多

口移し嚙む冬の水喉<sup>ド</sup>  
中野恵 依

七 七つから席異にして育てられ  
み

悠々と牛遊ぶ青き野の  
ま

じゆう 自由奔放男女混浴昼プール  
洞

サマードレスも豊かなる老<sup>イ</sup>  
み

き 究極のものを掴みし芭蕉翁  
多

俳諧行<sup>あんざや</sup>脚<sup>ぎや</sup>似る遍路笠  
ま

ゆ ゆくりなく枝垂るる花の盛り観る  
洞

春の楽園耳に霊鳥  
う 時

平成十年六月十五日首尾

(於・松山市道後鷺谷  
大和屋別荘)

歌仙 『寒さかな』

國島十雨捌

鶯の肝つぶしたる寒さかな  
各努支考

やはらかにして春の水音  
國島十雨

畦塗りの鍬を揃へて門先に  
伊藤白雲

衣桁にかけし作務衣ちぐはぐ  
梅村卓矢

月餅を皿に盛りあげ望の夜  
尾藤静風

芳香放つ庭の楹棹  
堀野恒範

ッ日展へ苦心の作を搬入し  
恩田静村

若きッをんなの柳眉流行  
春日井朱雀

婚約に笑みをこぼして記者の前  
高松正水

ハワイ帰りの連れが異なる  
山口英利

海流に見え隠れする潮佛  
山下陸雄

飾り窓より雀出入り  
石田富恵

天瓜粉尻に子供の遊ぶ月  
梅村五月

胡麻たっぷりの心太喰ふ  
松野弘子

温泉の里の山が削られ化石出る  
川島支川

ゴルフの球を犬が銜え來  
井口ひろ

道標新しくなり花の舞  
中尾青宵

団地住居に霞む夕映え  
松岡裕子

ナオ復活祭仕立直しの服を着て  
川島四郎

老若男女三部合唱  
堀内洋子

シャンペンをラツパ飲みして旗を振り  
瀬戸昭三

思ひ出言葉ロケットに秘め  
武仲登志春

かまくらに唇あはす幼な恋  
後藤嶺子

畳替して待てる仲人  
山村忠男

この道の遙か西とも東とも  
竹下一政

ぴんと張りたるヴィオロンの弦  
園部志げ

黒々と一筆描きのだるまの絵  
本屋良子

にらみあひする対岸の村  
雲

合掌の家向きくくに  
小川守

穴に入れぬ蛇がうろつき  
成瀬貞子

ナウ背負籠に木天蓼の実をどつきりと  
唐渡北勢子

インターネットで株の売買  
田辺桂月

こびと出てからくり時計正午告げ  
げ

洗ひ桶には貝のつぶやき  
高木和子

まほらまは三輪の里なる花万朶  
雨

天にとどけとふらここを槽ぐ  
筆筆

平成十年三月二十二日首尾

(於・獅子庵)



歌仙 『大根引』

國島十雨捌

鞍壺に小坊主乗るや大根引

松尾芭蕉

時雨の雲が隠す山の端

國島十雨

黒檀の机どっかど置かれるて

唐渡北勢子

しびれ切らして待てる賓客

大野鶴士

浮きあがり月昇らせる池の鯉

伊藤白雲

寛の庭に萩のこぼるる

本屋良子

秋愁ひ紫煙ふかりと輪を描き

松岡裕子

飼猫の名をモンローと云ふ

船渡文子

バツイチは魔女にも似たるテクニク

堀内洋子

鼻高な子が生まれ喝采

井口ひろ

果実酒の甕を提げてくる神父さま

石田富恵

核廃絶を叫ぶ地球儀

森川淳子

夏の月軍艦島に波砕け

川島支川

宿の浴衣を左前にし

松野弘子

古九谷の真贋いまだ定まらず

士

イベントに湧く町の賑はひ

尾藤静風

紅白の幕ゆらゆらと花吹雪

良

琴弾鳥を籠で鳴かせて

春日井朱雀

ナオ 谷間に霞を食べる孫悟空

肺活量は五千CC

良士

焼却炉ダイオキシンを作り出す

勢

何とかしてよ日本沈没

田辺桂

月

国引きの神を迎へる大社

雲

乙女の髪に山茶花を挿し

良

誰よりも君を愛すと文長く

高木和

子

抱かれしまゝに刻を忘れる

月

振ってみて土産に買ひし陶の鈴

園部志

げ

庭石磨く老の一徹

月

小望月明るき星を従へて

士

ぺっぴり虫が居間にとび入り

瀬尾千

草

ナウ 裾分けのまたお裾分け菊脛

小川

守

椀を乾かす風の軽さよ

和

ふんはりと紙飛行機が宙返り

成瀬貞

子

温泉出たと記者ら集まる

高松正

水

散る頃は薄墨となる花万朶

雨

趨ぬれぬれと生るるぎふ蝶

執筆

平成十年十二月六日首尾

(於・岐阜公園内華松軒)

歌仙 『落葉川』

伊藤白雲捌

宮人よ我名を散らせ落葉川

松尾芭蕉

風に乗り来るひとひらの雪

伊藤白雲

古時計太き柱に掛りみて

清水青瓢

お伽噺に集ふわらんべ

唐渡北勢子

乾杯の地酒に上る望の月

田辺桂月

狭庭の隅にすだく虫の音

堀内洋子

うそ寒むの鐵路かけゆく終列車

松岡裕子

リサイクルとて雑誌・空缶

大橋正子

飛ばされて野球帽子のころころと

浅野繁子

茶髪娘に恋の手ほどき

久世竹水

歌麿の枕草紙が教科書に

杉野ちゑ子

ソープ遊びで濡れる毎にち

西脇美智子

月涼し露座大佛がほほ笑める

高松正水

汗かいて寝る俳諧の旅

高田久正

塵芥拾ひ出不足金で御放免

高田久枝

檻の中から睨むライオン

河合勝洋

城壁の隠し矢狭間花吹雪

河合勝子

種案山子立て守る伝統

内藤安子

ナオどんたくも振り鉢巻締め直し 木村和喜

ちんぷんかんでクイズ難解 堤民女

補聴器の電池切れても知らん振り 美

内緒話が何時も筒抜け 忍

逢ふを秘め誰も通らぬ枯葉径 曾根須恵子

炬燵の中で足をからませ 雲

一度だけお許し下さいお星さま 小林美苑

ビツクバンにて沈む銀行 水

箱詰の白紙台帳棚の上 安

嘘つくことを鳥も覚える 常

名月は窓いつぱいの宇宙船 田中湖城

文化の日とて胸に勲章 裕

ッぱちぱちと剪定鋏さはやかに 勝

まさかの勝利ホールインワン 竹

太宰府のあれやこれやお土産に 沢島郁子

すつぱい匂ひ唾を呑み込む 月

花大樹根の張りも良し結びの地 勢

陽炎の立つ西の山々 執筆

平成十年十一月二十二日首尾

(於・大垣・円通寺)

歌仙 『春のうぶ声』

唐渡北勢子捌

伊吹より春のうぶ声風にのり

後藤富美子

紅梅匂ふ俳諧の里

河合勝子

巢立鳥安楽椅子をゆするらん

伊藤白雪

水墨展に友を誘ふ

清水志江

月見舟揃ひ宴のはじまれり

清水春一

手もて払ひぬまどふ溢蚊

寺井淑子

菩提樹の実をつなぎたるネックレス

田中湖城

愛染堂が橋のたもとに

田中加代子

来る来ない神籤占ひ恋心

清水青瓢

あなたの熱でとろけたいわよ

民田三千子

のつぺらぼうゲゲの鬼太郎アニメーション

早野さと子

忙しすぎる眼科先生

田辺桂月

涼しさに開け放ちたる窓に月

唐渡北勢子

西瓜の種をぶつと吐き出す

堀内洋子

けたたましいピーポピーポと救急車

久世竹水

落ち合ふ場所を電話連絡

清水巴女

花筵日時計の指す港跡

野呂しづ女

名代草餅土産にと買ふ

北村幸子

どんたくと囃子も連れて戻る家

高木和子

大きな顔で猫のねむれる

杉野ちゑ子

禁煙の誓ひみつかで反古として

市橋みち

紙屑籠はすでに満杯

さ

ひたすらにセーター編む娘愛育ち

豊永芳子

風疼く夜はまう離さない

松岡裕子

外っ国で挙式出産重なりて

幸

すねかじりして生計楽々

水

ダービーで大穴当てたと嘘をつき

洋

豪華船にて世界一周

勝

月宮殿夢さまさずに航行を

本屋良子

胸に客引赤い羽根つけ

雲

新走り愚痴も酔ふほど声高に

裕

あらぬ噂が巷横行

勢

ぼんと石投げてお堀の水騒ぐ

ゑ

香具師の揃ひ荷台並べる

後藤みどり

花ざかりお茶壺道中しづしづと

雨

史跡訪ふ麗かな昼

執筆

平成十年九月二十七日首尾

(於・大垣市赤坂「梅竹」)

短歌行 『百代の過客』

膝送り捌

百代の過客俳諧水の秋 國島十雨

訪なふ先は紅葉深谿 柴田広志

盆点前月待つひまのつれづれに 森川淳子

小柄な母の着物蚊絣 岡本満智子

平積みノベストセラ―の色表紙 松波幹治

地ビール工房バスが立ち寄り 瀬尾千草

背伸びして空蟬を採るお下げ髪 端元涼子

恋の手管のあれやこれやと 小川守

ええ男「のぞみ」に乗れば言ひ寄られ 成瀬貞子

乱れ太鼓のクライマックス 本屋良子

紅白の幔幕揺れる花の宴 唐渡北勢子

仔猫三匹貰ひ手がつき 深谷久砂

ナオウらうらと 鏝絵芸術PR 田辺桂月

唯彼に似る羅漢阿羅漢 高松正水

方言で唄ふガイドのにこやかに 伊藤白雲

はちきれさうな胸の膨らみ 松岡裕子

襖ごし思はせぶりな咳払ひ 園部志げ

墓を抱きて眠る里山 後藤キヌエ

のろし台跡より出づる寒の月 大野鶴士

人慣れの鳩けふも又くる 堀内洋子

ナウ新しきベンチに坐る午さがり 久世竹水

お巡りさんは口笛を吹き 八木紫暁

天領の風おだやかに花筏 小瀬渺美

陶の亀鳴く淡窓の家 雲

平成十年十月二十三日首尾

(於・国民文化祭・おおいにて 連句大会IIのぞみ号にて)

短歌行 『葉牡丹の渦』

本屋良子捌

葉牡丹の渦に日のある花時計  
後藤嶺子

ふくら雀がまるぶ公園  
宇野久恵

ワiproに類といふ字を作り出し  
本屋良子

お茶にしやうとひとつ伸びする  
園部志げ

ッ荒城を巡る水濠月浮かべ  
小川守

アベックで行く木の実降る道  
井口ひろ

プロンズの乳房がやけに身に沁みて  
成瀬貞子

現世にある眩暈の因  
後藤キヌエ

ふーちやんと言ふ菓子につく黒砂糖  
武藤みう

かくれんぼうの鬼は先生  
恵

花爛漫佛の眠気もらひたる  
貞

村里遠く春蟬の声  
嶺

ナオ風はらみ枝にもつれる奴風  
ろ

ふいに切れたる太棹の糸  
貞

たまさかに逢へば仇も懐かしく  
エ

優しき言葉に心乱れて  
良

サーファーは恋の頂点はめたる  
貞

写真機堤げてSLの旅  
守

名月の宿に酌み交ふ土地の酒  
げ

高値やうやく太郎兵衛の馬  
ろ

ナッ紋付の着物つつぱるおどろかし  
エ

老を忘れて踊るブルース  
う

獅子庵に連衆集ふ花の昼  
良

句碑ふところに笑ふ黄山  
守

平成十年十二月十五日首尾

(於・岐阜市ドリームシアター  
藜杖社)

非懐紙 『春の蠅』

ぼと生あれてぼと翔ちたるよ春の蠅

西野文代

霞へひひらく白き鎧戸

渋谷道

まろやかな水平線の端に船

代

サルガツソよりのがれ還りし

道

今日ことにきげんの悪しきファクシミリ

代

昔のひとと飲み明かしては

道

口説文廓ことばでありんすえ

代

螺鈿づくしの室の涼しさ

道

河童忌のしづくしている暁の雨

代

背ナに大きく屋号しるして

〃

親子とも左利きなる道具箱

道

始発の便にやつと間に合う

代

前山の傾きははや紅葉して

道

とぎれがちなる月光の曲

代

フォアグラの味もそぞろの決算期

道

大観覧車まわり出したり

代

平成十年十二月二十八日首  
平成十年十二月十日尾

(文音)

歌仙 『亀 鳴 く』

坂本孝子捌

亀鳴くとすみだの堤越えにけり

坂本孝子

柳の糸を吹き流す風

井上蘭石

爐を塞ぐ母のかひなのふくよかに

中村磁鏡

ポーカ―ゲーム少しづつ勝ち

井上鶴鳴

有明にとり出す旅の備忘録

小林蜷汁

蜻蜒の翅の乾ききる閑

日下悟乃

背の高き青道心に秋深む

柳川靈鶯

飴色になる前挿しの櫛

石乃

プレゼント抱へ佇む楽屋口

乃石

寿退社カレの外車で

石乃

灯台の下にくだける波頭

汁石

歩哨の仰ぐ夏の満月

鶯全

水蟲が疼いて想ふ父の癖

全鏡

LSDが見せる極楽

乃鏡

接待費一部は使途の不明にて

乃石

ゴルフバッグを床の間に置き

石汁

新しき帽子の鏝に花の雨

汁乃

まだ名のつかぬ仔猫ふところ

乃

トオ 曳売りの蜷しじみと城下町

執行猶予残る二ヶ月

幼な児に紙ヒコーキを折ってやり

石のベンチに石のテーブル

家柄も人も良けれど悪趣味で

鮫鱈に似て糟糠の妻

着ぶくれの乳房に遠き身八口

布に染め出すカレワラの詩

草草に小さき神の宿りゐて

燐寸擦る間に泣いた一生

新任の知事も夢みる月の塔

踊りの渦のゆるやかに揺れ

ナウ 処女作が平積みとなる西鶴忌

電子メールで送るウイルス

路地裏にスパイの描いた×印

油の壺はみんなからっぽ

花續紡美味百珍に酒を賞で

小径にひろふ山鳥の羽根

平成十年四月二十九日首尾

(於・東砂・游月亭)

鶯

全

鏡

石

鶯

鏡

乃

鳴

汁

鏡

石

汁

鳴

鏡

汁

乃

子

鳴

歌仙 『早春賦』

井上鶴鳴捌

早春賦土塀の道の七曲がり  
小倉川太郎

やうやく声の揃ふ鶯  
小林蜷

あいなめの仕掛けとりどりひろげゐて  
井上蘭

ビデオ予約が覚えられない  
中村磁

水湛ふ惑星越しに月登る  
日下悟

貰ひしあけび蔓の乾けり  
神崎破

ッ冬近し汝の電話を願ひゐて  
鷹野風

ホームページの皇女の顔  
柳川霊

ひたぶるに恋を恋するお年頃  
鏡

門限間際駆け上がる坂  
鏡

首都高速恐竜の骨横たはる  
鏡

アダムの臍の謎を問ひかけ  
乃

月影に蒼く濡れゐて子は裸  
汁

風を朶んだ杏あまさう  
庭

ふるさとなんの恨みはないけれど  
鏡

反日感情消せぬ隣国  
庭

花の庭仏所護念の掌  
鶯

酔味噲で和へる馬鹿貝のぬた  
乃

ナオ海市から来た男のうすわらひ

少年ひとり消え去りし午後

痛恨の満塁ホーム弧を描き

琴で奏でむイーリオン古歌

懺悔室たゞ黒髪を梳き合ひて

最終便で雪女郎行く

独りもの見やう見まねの玉子酒

カモにされても好きな麻雀

反時計回りに嵐吹き荒れる

老将軍の突撃の夢

躁鬱の月だけがぼくのともだちだ

黒牛ばかり群れるうそ寒

ナウ誰に見す紅天狗茸屹立し

四角い眼鏡かける手品師

八景のその三景を描き終へて

碁笥蓋裏に那智産の石

花よ花父の歩みにいつまでも

ズームでとれば肩に蝶々

平成十年二月二十八日首  
平成十年十二月十七日尾  
(電脳文音)

於・NIFTY Serve  
パソコン通信ネットワーク  
現代詩フォーラム・紫明庵

鏡

汁

石

六條紫

鳥

庭

鏡

全

乃

汁

鏡

橋本古

代

乃

代

全

乃

井上鶴

鳴

乃

鴻



歌仙 『晩 菊』

日下悟乃捌

晩菊や身を雲はせて咲きにけり

鷺川 霞

洗ひざらしの空に残月

横田其 筋

田番小屋軒に雀の呼ぶならん

日下悟 乃

ひとつ折込む紙の飛行機

柳川靈 鶯

初めての子守笑顔にあやしつつ

森 麻 冥

涼しげな風アカシアの丘

井上鶴 鳴

城壁に武勇を誇る蟻の列

鷺 乃

旗振れ赤と白を両手に

乃 鶯

頭巾気の時勢の波に遅れじと

椎名竹 柏

ハローキティのりボン大きく

鳴 鶯

初恋のかるびすうおたあ薄味で

冥 鶯

同窓会に化粧やや濃き

乃 鶯

狼と渡世の月と裏街道

鶯 乃

焚火に次の出番待ちをり

小林蜷 汁

\*ドラコニア・ワールドの中めくるめく

鳴 汁

アンドロギュヌス振返る午後

乃 汁

花朧二〇〇一年近づきぬ

汁 乃

春の苺を箆に取り置き

井上蘭 石

ナオむくつけき兄おしこめて雛の客

中村磁 鏡

大日本史は言はぬ北朝

乃 鏡

誰やらん杖の根元のされかうべ

汁 鏡

解剖学者もフーズクに行く

鏡 庭

ミノとタンカルピレバ刺あとビール

神崎破

庭 鏡

冷房代も経費節減

汁 鏡

結跏跏座墨染め衣動かざる

乃 鏡

欲情の果て開く瞳孔

鶯 鏡

自分でも知らないあたしのおんなとこ

鏡 乃

ランゲルハンス島の潰瘍

乃 鏡

三日の月蒙古の馬のたてがみに

鏡 乃

風の占ふ紫雲英蒔時

乃 鏡

ナウ焼林檎丁子を少しかけてみる

庭 鏡

老人会で流行る「鉄拳」

鏡 鶯

口笛の音色楽しき散歩道

鶯 鏡

タイムカプセル探す夕暮れ

鏡 汁

水底の舟にも花の散りかかる

汁 鶯

鱈輝かせ上りゆく鮎

鶯 鏡

平成九年十一月三日首  
平成十年七月十八日尾  
(電腦文音)

NIFTY Serve  
於・パソコン通信ネットワーク  
現代詩フォーラム・紫明庵

ドラコニアワールド…故・渋澤龍彦が自身の博物誌的世界に名付け

た言葉。

ネット間交歓 『雲の峰』  
三吟歌仙

衆議判

オ大屋根に登るや雲の峰近し 横田其 筋N  
 巴瓦を仰ぐ若竹 宮内志 乃A  
 シロフオンの練習曲の滑らかに 椿無 耶P  
 走り書きする広告の裏 井上蘭 石N  
 家計簿のかたぶくまでの月を見き 海野海 砂A  
 黙然として案山子立ちをり 杉浦兼 坊P  
 ッ落鮎をどこぞの坊や届け来て 沼谷香 夜N  
 白癬菌のまた増えし頬 日下縄 文A  
 風の日は身を伏せてゐるもぐらもち 佐藤砂 男P  
 転生輪廻九界寂滅 筋N  
 曾根崎の七ツの鐘を聞きおさめ 砂A  
 あなたとならぶ多分幸せ 耶P  
 月光に水面の氷燦々と 渡辺玄 鴻N  
 チーズフォンデュに懐手解く 乃A  
 パソコンで犯行予告送り付け 翠川み どP  
 地上絵示す永遠の謎 石N  
 羽布畳め万朶の花のただなかに 文A  
 もろともにいざ春の祭典 男P

ナオ荷風忌のストリップ小屋の出べそ前

手に入るのは見えるものだけ 橋本真 鴻N  
 光速の二乗に質量掛け合はせ 文A  
 ごはん炊くのは毎日のこと 中村磁 鏡A  
 リムジンの車窓で直す旅化粧 林宗 海P  
 同性愛の噂消せない 乃A  
 欲しいんだ黄金色の冷蔵庫 井上鶴 鳴N  
 描くことに倦む島のつれづれ 佛淵健 悟P  
 眼球の模型が見てる水平線 砂A  
 カタパルトにはガンダムが立つ 鳴N  
 遺されし子の王国に月白く 耶P  
 振るたび音のちがふ麻の実 乃A  
 ナウ丸暗記とうもろこしの輸出高 鳴N  
 ハローワークに通ふ元ボス 耶P  
 山猫の馬車別当でございやす 文A  
 入れたて番茶ふうふうと吹く 小林蜷 汁N  
 碁敵のお住持待てば花明かり 海P  
 さへづりとほすひがなひねもす 砂A

平成九年七月 八日首 (電腦文音)  
 平成十年九月 十四日尾  
 (於・パソコン通信ネットワーク  
 PCIVAN・ABOUT・NIFTY)

百韻  
TV賦し物 『北の大地』

神崎破庭捌

初キツネ呼ぶ北の大地の淡き恋

井上鶴 鳴

いつか渡そう編んだ手袋

渡辺玄 鴻

渾身の消える魔球は真ん中に

井上蘭 石

みるみる変はる馬はタイヤへ

鳴

名月を雲が覆ふを憂ひみて

鴻

涙と共に義眼落ちたり

鴻

腐海てふ汚辱を浄化する処

石

赤青分けたスケルトンボディ

庭

初裏消えたのは良いが冬には風邪をひき

小林蜷 汁

友という名の電話番号

乃

日産もトヨタマツダも減益で

鴻

愛し恋しと勲章を受く

庭

さよならがただ響くだけ瓦斯灯に

鴻

靴音の消ゆ夜の倫敦

孤

能弁のパパの背後に望の月

鴻

お伴の犬は三身変態

庭

大発見この金属は生きてゐる

鳴

スーパーひとしくんを賭けたり

カ

今週の第一位―ジャカジャカジャン!

鏡

夢のハワイへあなた誘ふ

石

南海の空飛ぶ少年飛行兵

汁

つつぱり達が作る弁当

庭

(透明人間)

(笑っていいとも)

(自動車CM)

(ガッチリ買いましょー)

(日曜洋画劇場解説者)

(シャーロックホームズ)

(9時のニュース特派員報)

(新造人間キヤシャーン)

(アストロガンガー)

(世界不思議発見)

(ザ・ベストテン)

(アップダウンクイズ)

(0戦はやと)

(茜さんのお弁当)

二表キクちゃんはわしのもんだす西一

鳴 (いなかっぺ大将)

運河の舟に東家は住む

庭 (アニマルNO1)

逃げつつも犯人探しと人助け

狐 (逃亡者)

大立ち回りパンツちらちら

庭 (プレイガール)

変身のおときは絶対見逃さず

鏡 (キューティーハニー)

少年忍者竜巻の中

石 (少年忍者のフジ丸)

電線に雀が三羽とまっていた

鳴 (見ごろ食べごろ笑いごろ)

○をもろうて家庭円満

庭 (減点パパ)

歯磨けよ宿題やれよまた来週

鏡 (八時だよ！全員集合)

猫馬鹿騒ぎ出発の笛

庭 (八時だよ！出発進行)

メーテルは機械の身体あげるわと

歩 (水須歩)

歌はいいねと云ひし渚に

狐 (銀河鉄道999)

ピッコロの肩をじゃじゃ丸そつと抱き

汁 (新世紀エヴァンゲリオン)

男の意地はど根性なり

鳴 (お母さんと一緒)

二裏地獄まで柔の道を歩みゆく

庭 (柔道一直線)

超一流のヨクデキマシタ

鶯 (柳川霊)

甦るアイアンシェフの腕如何

鏡 (NOVA)のCM

貫ふ褒美の口づけの味

汁 (料理の鉄人)

笑はない女が最後に笑ふとき

歩 (SMAP×SMAP)

春の都に揚げひばり鳴く

汁 (沙粧妙子最後の事件)

花咲けるニューヨークまで行きたいか

鏡 (紅白歌合戦)

日本人が悪だくみする

鳴 (アメリカ横断ウルトラクイズ)

印籠で注入したい公德心

汁 (ミュタントタートルズ)

全国行脚伴に胃薬

庭 (水戸黄門)

万歳と拍手のなかで菰被り

鴻 (食いしん坊バンザイ)

くれくれくれとタコがうるさい

庭 (選挙速報)

朝一番ちなつのオナラ嗅ぎたいぞ

石 (くれくれタコラ)

ひと箱空けるティッシュペーパー

汁 (ウゴウゴルーガ)

(海賊チャンネル)

三表作るだけ後の掃除は母がやり

(つくってあそぼ)

ひとりのでできる予定だったの

(ひとりのできるもん)

少年が二挺拳銃オートバイ

(まぼろし探偵)

大逃走の果て安楽死

白鳥光良

昼行灯八丁堀は婿養子

(スーパー競馬)

女剣士は父を慕ひて

(必殺仕事人)

ロケットの中の写真は誰の顔

(刺客商売)

背中にふたつブースター付け

(眠れる森)

音を立て二人の身体絡みあふ

(光速エスパ)

白球弾む芝草の上

(大相撲ダイジェスト)

頑固なる親父はいつも五分刈りで

(プロ野球ニュース)

そんな大人は修正してやる

(寺内貫太郎一家)

キンキンはロバの中から登場す

(機動戦士Zガンダム)

おやつのみルク配るケロンパ

(おはよう子供ショー)

(ロンパールーム)

三裏海原を走れる蒸気機関車だ

(走れK100)

ナハナハナハと笑ふ英雄

(おれたちひょうきん族)

金色の蝙蝠だけが知ってる

(黄金バット)

酒と泪と男と女

(演歌の花道)

刀傷塗って直さうオロナイン

(とんま天狗)

戦の舞だ槍を掲げよ

(ジャングル黒べえ)

わんわんと犬が吠えれば胸躍り

(少年ジェット)

だけでも僕は飛んでいくのさ

(オバケのQ太郎)

薄衣透くイスカンドルの使者の肌

(宇宙戦艦ヤマト)

怪しく揺るる黄金の髪

(チャリエンジン)

吸血鬼対馬場! うなれ十六文!!

(旧)日本プロレス)

人助けとは難しいもの

(がんばれロボコン)

男にはいろいろあるさ妹よ

(男はつらいよ)

楳円の球に賭ける青春

(われら青春!)

名残表懐にクドちゃんライター忍ばせて

鏡 (探偵物語)

何がでるかな何がでるかな

鶯 (ごきげんよう)

なまず髭呼ばれ飛び出てジャジャジャジャン

庭 (ハクシヨン大魔王)

世界の悪魔倒す火の鳥

立元 潮 (科学忍者隊ガッチャマン)

金星の侵略阻む快男児

汁 (ナシヨナルキッド)

頭と手足ラツパみたいな

歩 (キャプテンウルトラ)

君の子もいつの間にやらカネゴンに

鳴 (ウルトラQ)

鏡の中は二次元の国

狐 (ミラーマン)

悪戯な天使求めて旅続く

庭 (夢のクレヨン王国)

一糸まとはぬ妖精の舞ひ

汁 (聖戦士ダンバイン)

制服に罪を覚悟の恋をして

鴻 (プライベートアクトレス)

真実の愛を求め傷つく

庭 (世紀末の詩)

つらいことあれば助けてあげますよ

歩 (笑うせえるすまん)

桜田門に響くハミング

鴻 (七人の刑事)

名残裏美少女が美少女を産む月の夜

汁 (美少女戦士セーラーMoonR)

同情するならお金おくれよ

鴻 (家なき子)

貧乏の果てに晒され笑われて

鏡 (愛の貧乏脱出大作戦)

知力は無用ドタバタと落ち

庭 (吉本新喜劇)

リモコンをクイクイすれば吼える声

汁 (鉄人28号)

昔床の間今は壁掛け

鴻 (テレビ愛源器変遷)

暖色に染まる曲線花便り

汁 (開花速報)

千代に八千代に巖のどけし

庭 (NHK番組終了テロップ)

平成十年十二月二十四日首  
平成十年十二月二十四日尾

於・NIFTY Serve  
パソコン通信ネットワーク  
現代詩フォーラム・紫明庵

歌仙『父の日』

いぬじま正一捌

父の日や娘のくれし赤ワイン

久我妙

鮎が釣れたら送る約束

いぬじま正

パソコンの初級はすでにクリアして

是行修

窓を開ければ不意に鳴く鳥

紺野笙

明月に水車黙して光るのみ

紺野愛

干されて揺れる赤き南蛮

正子

芋煮会幼なじみに誘われる

妙修

さらに一泊延ばす好天

正愛

訝する六根清浄無我の境

笙修

好きで打ち込む喜劇ひとすじ

正愛

いごつそうともつこすが居て風呂熱し

正妙

サイレン高く救急車来る

妙修

おでん酒駅裏屋台月白く

正妙

たかが水っぱなされど水っぱな

正愛

人類の苦難の気配世紀末

正妙

脱出魔術アブラカダブラ

妙修

花便り思いの文も書き添えて

正妙

春灯ゆれる白きうなじに

妙修

ナオ 頰杖の向こうに遅き日の陰る

料理講師の声の貫祿

子育ては男もせよと詰め寄られ

主婦で賑わうカラオケの店

御神輿に黄色い声も威勢よく

冷汁好きは今墓の下

地獄絵の岩穴に栖む青の鬼

じゃんけんぽんでわらわらと散る

海上に道あり月に到るなり

瓢が語る古代の暮らし

畑荒らす猪の捕獲に乗り出して

護らんとするぶなの森林

ナウ グライダーのこの鳥瞰を妻にこそ

和服の目立つホテル昼時

御祝儀をはずむ男の見栄っぱり

拍子木鳴って下がる緞帳

邯鄲の夢か信夫の花霞

空の青きへ吸われゆく蝶

平成十年六月三十日首  
平成十一年五月二十三日尾

(文音)

笙正妙修笙正愛妙修笙正愛妙修笙正愛妙修笙正愛妙修笙

半歌仙 『黄落や』

中野芳子捌

黄落や時には激つ堰の水 望月精光

子等と離れし苑の小春日 成田圭子

物差しが鉛筆立てをはみ出して 伊藤稜志

テレビ見ながら竿の手入れを 五十嵐木綿子

道しるべ月に面てを照らさるる 中野芳子

裏作の柿鳥にさらわれ 圭

ッ二斗樽に腰掛けて売る夷講 芳

ちらと覗かす白い太股 精

マンションを貢ぐ政治家芸能人 稜

秘書が秘書がと逃げの口上 芳

教会の賛美歌を聞く石畳 精

犬のエステテに外車で通り 圭

湘南の海水浴場月昇る 稜

甚平の糊ぱりと剝がし着 芳

梵鐘の由来を説くはボランティア 圭

銀行員にガードマン付く 精

花屑をのせ番傘と蛇の目傘 木

お蚕の休みは好きな雑魚釣り 稜

平成十年十一月十九日首尾

(於・前橋文学館)



半歌仙 『冬めきぬ』

相沢富子捌

昼過ぎの雲の重さや冬めきぬ

相沢富子

大根引きに精を出す夫

春山美代子

通勤の発車のベルに間に合つて

南博子

温水プール肥満列なし

田村光子

羽衣を掛けたる松に月さやか

博

山の彼方に鹿の鳴く声

光

ッ好きな娘に嫌いな素振り秋惜しむ

美

シネマのごとく過ぎてゆく女

光

失恋のカレーの鍋にヒ素を入れ

博

郷土力士の又も連勝

美

お賽銭縁あるように五円玉

富

息子の結婚心待ちする

光

火取虫月に向かいて飛び散りし

富

渋の団扇の吐息に酔いぬ

美

釣り上げし大きな鯉に船傾ぐ

富

キャンセルされし温泉旅行

博

鶴ヶ城朝日に光る花吹雪

博

赤い鼻緒に揺るるふらここ

光

平成十年十一月十九日首尾

(於・前橋文学館)

歌仙 『寒明の雨』

小林静司捌

寒明くるしるしの雨と思ひある

岩永極鳥

箸休めには露の臺味憎

小林静司

有為の門新任教師大志もて

菅谷有里

電子辞書など座右に離さず

鳥司

噴煙の月下に虫の声しげく

鳥司

芒千里の銀波渺々

里鳥

持ち込みし新米五升湯治宿

鳥司

少し増えたる孫の仕送り

鳥司

ハミングの一人女の気安さよ

里鳥

素敵な騎士がきつと現る

鳥司

吾が好み白馬が駆けるウイスキー

鳥司

免税品で空港の混み

里鳥

北極の陽は地を這って月淡く

鳥司

凍土ゆるみてマンモスの牙

鳥司

愛読の少年倶楽部遠き夢

里鳥

パソコンゲーム野球サッカー

鳥里

なまこ堀ロケに花散る時代劇

鳥里

風七光り二代目の芸

鳥里

ナオ おきらぎ

未来都市めく埋立の街

鳥里

高利追い資金藻屑と消え果てて

鳥司

ホームレスにも五分の言ひ訳

鳥司

車座で自由人権まくしたて

里鳥

固き冬芽に風渡るのみ

鳥司

一周忌まではと縁談引き延ばし

鳥里

心の渴きいかにとやせん

鳥里

恋泥棒ハートを盗む素早さよ

鳥司

血に膨れたる秋の蚊が這ふ

鳥里

月細し神備山の茶毘のあと

鳥里

盆を灯して化野の原

鳥司

ナウ今語りおかねば消ゆる大戦記

鳥司

こけし並んだ珈琲の店

里鳥

セールスマン重きノルマも耐えに耐え

鳥司

シルクパンツで縁起直さん

里鳥

マラソンのゴールは近し花浴びて

鳥司

白バイ進む陽炎の中

鳥司

平成十年二月一日首  
平成十年二月二十八日尾  
(文音)

『俳諧之連歌』

松籍を背に歩き継ぐ旅爽やか  
 瀧 蟻 踏 と 千 歳 の 月  
 車座の猿は酒を醸すらん  
 几右の旧き詩薬繙く  
 手枕のかたんとはづれ昼寝覚む  
 遠雷届くビルの地下室  
 ッタッチの差バス男等を置き去りに  
 ドコモ操るミニのタレント  
 降るやうなウイंक時雨躲しては  
 たつたひとりで突くすき焼き  
 胸に揺る遺品の琥珀ネックレス  
 水からくりの太鼓単調  
 根をほぐす斑入り万年青に月涼し  
 古稀過ぎてなほ投手現役  
 マージャンで飲屋の借りを帳消しに  
 窓際に来て欠伸する猫  
 見返りの弥陀みそなはす花吹雪  
 草餅ちぎる濃きも淡きも

名古則子  
 吉田茂穂  
 土屋実郎  
 小林しげと  
 和田忠勝  
 菅谷有里  
 杉浦ちる  
 今村佐久子  
 山口良子  
 近藤薫肝  
 近藤栗子  
 林 惠津  
 小林静司  
 小張昭一  
 蛭海停雲子  
 新家敦子  
 大林柚平  
 和久井八重子

店先に散らす菓薬を片付けて  
 郵便配る人は新米  
 ぼんぼりの和紙の色冴え段葛  
 セルフタイマー孫と並んで  
 ウェディングドレスに秘めし裏の恋  
 噂絶えなない夢多き女  
 枯れ芒生命充電野は静か  
 盲導犬の息白く添ふ  
 子の願ひ遠くの島へ行ってみたい  
 一寸法師の舟はお碗よ  
 やうやくに晴れし句筵の月仰ぎ  
 銀杏黄葉の中の玉垣  
 笑みたまふ先生の髭秋うら  
 掌の餌をつゝく文鳥  
 カラオケの前に飲むべし音楽酒  
 韓国の長深む友好  
 「新しみ」を語らひ和み花の下  
 わが身にあまる祝辞あたゝか

岩永極鳥  
 白井暎子  
 菅井てい  
 山本孔子  
 和田洋子  
 秋山よう子  
 村上敦子  
 高島幸子  
 フランコオズニ  
 川名将義  
 引地冬樹  
 東明雅  
 上田溪水  
 高津明生子  
 杉内徒司  
 若尾よしえ  
 宗匠  
 宗匠  
 宗匠

貴賓  
 鶴岡八幡宮宮司  
 信州大学名誉教授  
 連句協会会長  
 義仲寺連句会代表  
 連句協会常任理事  
 国士館大学教授  
 清水飄左先生御親族  
 吉田茂穂  
 東田明雅  
 上野夏生  
 村野黍穂  
 浅野夏生  
 福田真空  
 清水敬信  
 宗匠  
 脇宗匠  
 知司  
 執筆  
 座配  
 花司  
 配硯  
 名古則子  
 土屋実郎  
 小林しげと  
 小林静司  
 和田忠勝  
 高島幸子  
 小林祐理子  
 熊倉雅子

平成十年十月十一日

(於・鎌倉 鶴岡八幡宮直会殿)

歌仙 『いろはにほへと』

大西貞子捌

波がしら波がしらにある月今宵 村田治男

海桐の実爆ず岬の島島 大西貞子

獨り酒口あたりよく呑みすぎて 尾崎重子

机に開く大世界地図 村田静子

子等と見るテーマパークのカーニバル 中野たつ子

郭公の声ひびきくる径 前田てい

祢宜さんが「いい話だ」とひそひそと 治

デートの場所はEメールにて てい

縞柄のエプロン似合ふ妻となり たつ

バレエボールの初戦快勝 重

つつましく三時のお茶の時間です 静

待ちかねてるし歌舞伎見物 貞

月照らす島路の山の冬紅葉 貞

ふつつつ湯気の寄せ鍋を食ぶ てい

先生の受賞の話めでたけれ たつ

みんなきれいなテレビ言葉で 治

花吹雪いろはにほへとはにほへと 静

陽炎へ向きトウシューズ脱ぐ 重

親馬に仔馬甘えてはしやぎをり てい

向井飛行士再度宇宙へ 貞

あああれはミレーが落穂拾ふ態 貞

劇薬よろし毒薬は不可 静

跳ねるたる鯉卓上の洗膾なり 治

窓辺に揺れる風鈴の音 たつ

ひと息に「ヨーン爺ちゃん」読みあげぬ 重

老いらくの恋何とひたむき 貞

お祝の晴着何とか間に合って 治

笑ひあふのは健康のもと 静

待ちかねし個展の準備月昇る たつ

いっぽん植ゑし葡萄初なり 重

炊きたての松茸御飯お吸物 貞

熊野古道へ連れ立ちゆかむ 重

土産物戸板に無人販売所 静

旗手直立しマーチはじまる 治

父がゐる母も来るなり花の寺 てい

磯遊びせむ準備ととのふ たつ

平成十年十月二十六日首  
平成十年十二月十六日尾

(於・猿田彦神社)

半歌仙 『忙中閑』

田中一火女捌

忙中の閑あたたかや橋巡る 田中一火女

のたりのたりと瀬戸の春潮 武田 健

文机に梅の香りのただよひて 森川 年

白き仔犬はカットシャンプー 森川 寿

行きずりの人振り返る十三夜 年

落す田水の縷のごとき音 健

下戸なりしひと酌みゐる今年酒 寿

愛の言葉を受けし留守電 年

筒井筒切なき逢瀬かさねつつ 健

カチューシャの唄偲ぶ雪の夜 火

マイセンのカップに熱き珈琲を 寿

病持つ身の魅さる薬膳 年

月の浜流木乾く夏の果て 健

はまゆふ叢むらは皓しろき香にたち 寿

秋篠寺剥落縷々と伎芸天 火

何時まで続く自自の連立 年

廃坑の幣あたらしき花の頃 火

雉のほろろと古里の藪 寿

平成十一年二月二十二日首尾

(於・東予市楠河公民館)

半歌仙 『梅雨晴れや』

上島登志彦捌

梅雨晴れや竹百幹に風の色

繁原敏 女

ごきげんようと訪える芭蕉布

久田結 花

リトグラフ下までおろしごろ寝して

海老名史於理

鰯をさばくハサミ縦横

西脇智 子

大漁の満月浮かぶ子らの笑み

伊藤益 臣

名前そろわぬ秋の七草

花

ッ駅からの道の遠さも興となり

立石洋 一

蹴出しの艶がおとす切札

理

抱きしめるきっかけ絶叫マシン様

一

蘇堤白堤虹の梁置く

上島登志彦

王女には願ひ届かぬ泉にて

伊藤実 和

クラブ新調シャンクばかり

子

神迎え杣もほろ酔い月夜坂

臣

しつけほどいていざ顔見世へ

和

羊猿牛コピーして次ぎはなに？

一

休耕田は蝶でふくらむ

高橋厚 生

この辺に名所あるらし花の川

生

お陰参りのあがり古市

彦

平成十年六月六日首尾

(於・愛知芸術文化センター)

歌仙 『今朝の春』

内田 素舟捌

出羽富士に瑞気漲る今朝の春  
 恵方詣に交す挨拶  
 町興す寒鱈まつり賑はひて  
 おばさん族の咲かす井戸端  
 煌々と高層ビルに月清く  
 引つ越す庭にすだく虫の音  
 ッ練り歩く山車絢爛な豊の秋  
 椰子の実ならぬ麻薬漂着  
 約束を決めて抱き合ふ宮の松  
 男前より惚れし財産  
 角界のお家騒動綱重く  
 仁王目をむく不況変らず  
 夕月を裸で仰ぐバーベキュー  
 水絡繰りに集ふこども等  
 パトカーは制限速度で前を行き  
 使ひ過ぎたるバーゲンの店  
 下戸上戸地酒を立てて花の宴  
 陽炎の中届くカラオケ

内田素舟  
 斎藤孤柳  
 八戸一橋  
 坂本露香  
 庄司籟山  
 小野梅久  
 荒木宝章  
 荒木遊仙  
 三上溪人  
 斎藤一葉  
 高橋雄悦  
 高山桃里  
 渡辺竹園  
 浅野目弄風  
 阿部一笠  
 伊藤緑雨  
 熊谷喜楽  
 斎藤一竿

ナオ道連れに心を許す遍路宿

影沢笑山

昔語りの好きなきな長老

山崎榮香

北陽の里に展げる新幹線

大川耕月

地吹雪猛り延びる逢引

富沢比佐女

婿入りの夢は炬燵で指を折り

市川澄水

貸し渋りする二審抵当

浅沼葛子

愚痴こぼす焼鳥串はタイ生まれ

青柳柳翠

派手な法被で娘呼び込み

小川庭水

悠々と母なる川に育つ鮎

荒木吉峰

碑古き俳諧の郷

門脇桃園

馬子唄の山に流るる月の道

峰

菊の膾でかわす盃

桃

ナウ僧正の経長々と冷ゆる雨

章

寄進の鐘の余韻かすかに

籟

知事選に揺れにゆれたり永田町

澄

白のエプロン似合ふお袋

橋

九重の歴史刻みて花匂ふ

舟

賓客迎へ句座の麗らか

村松恣風

平成十一年二月二十三日首  
 平成十一年二月二十七日尾  
 (於・新庄市勤労者福祉センター)

半歌仙 『片 蔭』

高山 桃里捌

赤信号片蔭のある車道 高山桃里

揃い浴衣で涼む縁先 斎藤一葉

新橋を親子三代渡るらん 伊藤緑雨

樽酒囲み唄も華やぐ 門脇桃園

豊穰の里にあまねく今日の月 内田素舟

床に活けたる桔梗撫子 坂本露香

山寺の鐘を遠くに鴟の声 園葉

金髪嬢のウイंकに惚れ 園葉

カーテンを引いて口付迫り来る 香里

総裁戦の抱負数々 里

昇給を妻が箆笥に仕舞込み 舟里

出世稲荷を雪囲いして 園

寒月に疎林影濃き松の道 香

瓶で米搗くテレビ懐かし 里

蔵の中我が者顔の古鼠 雨

雛人形は祖母の手作り 葉

潑刺と選抜球児花万朶 里

鮑開けば匂う草餅 葉

平成十年七月二十四日首尾

(於・新庄市勤労者福祉センター)



半歌仙 『秋高し』

荒木宝章捌

秋高し季節の移る風の色

荒木宝章

峰より出ずる清き夕月

大川耕月

飛石を渡る庭下駄露踏みて

阿部一笠

チャイムの響く防災無線

笠月

蟬の声はたと止みたる昼餉時

章月

プールで遊ぶ児らの賑やか

章笠

若者が農を見捨て、村を去り

笠舟

観光で売る棚田千枚

内田素

好きですと指で字を書くこぼれ酒

月章

ひよんなことから契る神様

章雨

シンデレラ迎えの馬車が気にかゝり

伊藤緑

一夜で変る新雪の里

笠舟

狼の唸る疎林に月高く

舟笠

大河あふれて揺れる中国

笠月

重文の寺を尋ねて古都の旅

月雨

鶯餅に舌鼓打つ

雨章

杖をひく老母の手を取り花の席

席

ラジオ鳴らして畑を耕やす

月章

平成十年八月二十二日首尾

(於・新庄市勤労者福祉センター)

二十韻 『青葉』

内田素舟捌

隻眼の像を覆いし青葉かな  
 大河狭んで郭公の声  
 村を挙げ介護福祉に奉仕して  
 難民救う募金集る  
 寝静まる里に昇りし望の月  
 毬を離れし栗の鮮やか  
 恋実る人工孵化の佐渡の鶴  
 笑うえくぼに肩の寄せ合う  
 古寺巡る行脚の僧の破れ笠  
 振興券ののぼり立つ街

内田素舟  
 斎藤一葉  
 荒木遊仙  
 青柳翠  
 荒木宝章  
 翠  
 仙  
 葉  
 章  
 翠  
 仙  
 葉  
 章  
 翠

ナオ 爛酒に老生きいきと舌軽く  
 明日退院の窓に寒月  
 尋ね来る竹馬の友に軸を変え  
 儲け話は嘘でかたまる  
 許されぬ仲に姿を暗まして  
 枕の夢は誓う神前  
 ナウ 京の旅土産両手にあみだ帽  
 鬼女の如く嚙る焼鮓  
 校長が助手持ち上げる花筵  
 霞棚引く出羽の山脈

章  
 仙  
 葉  
 翠  
 章  
 仙  
 翠  
 章  
 仙  
 葉

平成十一年五月二十二日首尾  
 (於・新庄市勤労者福祉センター)

歌仙 『研究所』

名和未知捌

野遊に防虫スプレー持参する  
ジンギスカンの鍋をつつきつ  
鞆に玉のやうなる子の生れ  
白雲の果海といふもの

外 民 夫 知

オサルビアの咲き何やらの研究所

名和未知

日焼けしたサーファー通る潮の町  
浴衣の似合ふ外国美人

外 民

白衣の人の憩ふ噴水

吉成正夫

丸きもの身八つ口からちらと見え

知 夫

愛読書旅行カバンにしをばせて

岩堀門外

生傷のもと惚れ易き癖

夫 夫

黄金の国は東方にあり

酒井夢

鐘に入り蛇になりたる女ゐて

外 夫

きらきらと稲穂の照れる望の月

夫

沈みし沼に浮く青き月

民 夫

世をさわがしと思ふ新涼

知

よきものはとろろに卵うまき酒

夫 夫

猿酒に酔つてまたぎの独り言

民

人になりゆく秋のみどり児

知 夫

死ぬか生きるか坊主になるか

外

<sup>ナウ</sup>ミサイルが近くに落ちて大慌て

民 知

ホレイシヨの哲学よりも恋が好き

知

鼻の曲がった魚のふえくる

外 知

道を説きつゝやは肌に触れ

夫

海沿ひの旧道さびれゆくばかり

知 夫

冬月の懸かる四条の橋の上

外

地図を頼りに古都の散策

夫 夫

白朮詣の火も賑やかに

民

ひっそりと携帯電話花の下

外 夫

万華鏡つい懐かしく手にとって

夫

鳥雲に入る遙かなる空

民 外

挫折を知らぬ少年なりき

知

平成十年七月二十九日首

知 夫

栄光の夢は儚なくただの人

民

平成十年九月六日尾

知 夫

場末のキネマ又も閉館

外

(文音)

知 夫

花枝垂れ田村酒造の黒き塀

知

知 夫

てふてふを追ふをみなごふたり

夫

知 夫

歌仙 『葉 鷄 頭』

名和未知捌

オなんとなく移る季節や葉鷄頭

佐伯俊之

地虫鳴くなり柴折戸の外

中島亜希

月の夜は心まかせに酒買って

名和未知

五言絶句に詩人の思ひ

田辺才蔵

アカシアが咲くと末尾に記しあり

希蔵

父の日に見しセピアの写真

之

ッ出征の門出鳥居に凭りて立つ

蔵

万葉集と歳時記を手に

知

吾妹子と書いてほんのり頬を染め

之

はかり難きはフェミニストたち

希

ふわふわと鳥の柔毛の舞ひるたる

知

白きは雪か硝子窓ごし

蔵

月天心寒行の鈴遠くより

希

過疎の町にも汚職の噂

之

お向ひの床屋の親父眇にて

蔵

流人の裔といふのが自慢

知

八丈の一足早い花の文

之

夢かうつつか初蛙聞く

希

ナオ夏近し新駅に客ただふたり

知

あすの宿りは山のあなたに

蔵

発掘で歴史変りし縄文期

希

古代まんじゅう茶店にありぬ

知

濡れ髪之年増白地の絁着て

蔵

離れて寝てと夏の夜の床

知

予約した前立腺の検診日

之

安いつアーに苦情たらたら

希

一言も読めぬアラビア文字の宿

知

情なきかな師を超えぬ弟子

蔵

月さやか大政走るしみづ道

希

稲刈りながらうなる浪曲

之

ッ山葡萄摘みて童に返りをり

蔵

動物園の象にたそがれ

知

黒光が印度の志士を匿って

之

大河ドラマで幕末人気

希

花時の地を這ひ来る鐘の音

知

うつらうつらと過す春宵

蔵

平成九年十月七日首  
平成十年一月十八日尾  
(文音)

半歌仙兄 『寝転んで』

中尾青宵捌

薬よりアロマテラピー勧められ  
あれやこれやと競ふアイデア  
挿す枝の句会の内に開花して  
手作り帖は春のぬくもり  
美 宵 尚 祐

平成十一年二月六日首尾

(於・青宵柴庵)

寝転んで人の噂や日脚伸ぶ  
加藤亀 女

したり顔にて帰る恋猫  
内田美 子

八十八夜近く出小屋を繕ひて  
寺田喜八郎

声たかだかど蜆売り来る  
黒住尚 子

嫌といへず習ひに通ふマンドリン  
鈴木圭 子

月光曲の譜面忘れる  
中尾青 宵

滑走路直下野分けの埴輪塚  
藤沼和 恵

昔は柿を盗み喰ひなど  
渡辺祐 子

ジーンにカットはボブで大股に  
宵 美

バイク仲間も一目を置き  
美 宵

世紀末恋など流行らないけれど  
祐 美

触れぬに絡む指のあやしき  
恵 祐

イニシャルを入れしライター煙の輪  
亀 尚

雨の夜毎にサザエさん読む  
尚 圭

もう知事に出馬しないと宣言し  
圭 尚

軽嶋の子が濠へ引っ越し  
相川英 子

夕涼みがてらの道や大き月  
喜 子

湯宿の下駄は鼻緒ゆるけり  
喜 子

注 「半歌仙兄」は、半歌仙の裏の句教を延伸して時間の許す限り心行く迄楽しむ形式とする。

半歌仙兄 『菖蒲湯』

中尾青宵捌

父母を越えて伸びよと菖蒲の湯

渡辺祐子

覗いては去る夏のつばくろ

内田 蜷

乾きける代田へバイク乗り入れて

加藤亀女

スーパードだけが開ける連休

中尾青宵

大きい月鉾杉の上に出にけり

寺田喜八郎

技芸天吹く風の爽やか

小林節子

誘はれて又も飛棧にて鱸釣り

祐子

宿の女将の例の挨拶

亀

色黒の娘だけが指名かち合はず

宵

怪し瞳の酒百文の徳

喜

アイデアが冴えて受賞の映画祭

蜷

香港島に時ならぬ人

亀

鶴ならば紙漉村まで参らねば

節

与兵が月に雑炊の鍋

亀

誤爆して女子供を殺すなり

蜷

鐘の音渡る湖のさざ波

節

イグアナと一眠して目の覚めし

同

発句の五文字遅日やうやく

蜷

花の下薔薇の芽はまだ棘あらず

祐

餅に糞せしむかし鶯

宵

平成十一年五月八日首尾

(於・青宵柴庵)

注 「半歌仙兄」は、六々形式。但しとは十二句以上伸ばす考案とす。

獅子の子 『身の縮む』

中尾青宵捌

もういいかい置き去り知らぬみそつかす 田川 知  
春の雲の霏々と降る中 渡辺さやか  
生涯にたった一信花しをり 宵  
垣 繕 ふは 指 切 の 指 蜺

平成十一年六月四日首尾

(於・青宵柴庵)

身の縮む事も知りけり夏衣

蒲原常盤

昔男の菖蒲吹く風

中尾青宵

馬上杯琵琶奏で行く暁に

加藤亀女

転ぶ植輪に仄と残月

松本杏花

邯鄲の夢の続きを山の宿

内田 蜺

秋の小滝へからと朴下駄

寺田喜八郎

好きな橋それは普通の田舎橋

小林節子

頭剃りたる人も佇む

金久保淑鳥

単純なところ集めて魔神像

渡辺祐子

伊勢崎町の甦る良し

鈴木圭子

暖まる少数族の紅雪茶

藤沼和恵

凍て月を背に踊る怪しさ

原崎弥生

布靴のおつと危い猿の糞

黒住尚子

殻こつこつと嘴打ちを聞く

節子

注 「獅子の子」形式は、四x又は四x四。

xの長さは自由。一又は二月・一花。

冠沓付 『す ら り』  
愛媛

鈴木春山洞捌

の 飲めぬ酒強ひられてゐる牡丹かな 鈴木春山洞

聞こえて来るは軒の風鈴 浅木一 耕

め 目に見えて孫の背丈の伸びてきて 高橋蘭 水

勇気を出せよ卑屈になるな 梶野浩 楽

ぬ 塗りかけの筆を休めて月仰ぐ 山本青 芝

野分の吹ける高原遙か 藤本純 一

オさ 山村の里起こしなる椽の餅 今井比呂夢

すらりと脱いすすつぽん 長井南茶亭

け 結婚の約束きつと守つてね 耕

女の要求どぎつうなつた 洞

し 仕送りもどこほりつつ離れ行き 楽

みかけは良いがお代はなんぼ 水

ひ ひたひたと波寄する湖月冴ゆる 純

城の堀にも白鳥来たる 青

ら 羅漢像浮世の塵を薄く着て 南

群れゐる蝶を眺むる老居 夢

れ 煉瓦建て明治も花の時代なり 洞

麦踏む孤児にのぼる愛の手 耕

平成十年六月二十五首尾

(於・松山市総合福祉センター)



歌仙 『大運河』

中野睦治捌

綿弓の音おぼるなり大運河

中野睦治

豆粒のごと種子を蒔く人

谷敷寛

金眼銀眼美しき仔猫を自慢して

式田和子

漫画の本は親に隠され

田中正能

つれづれに見上げし空に望の月

薄井康夫

新蕎麦食はす店の賑い

菊地一寛

ッ連立ちて潜る赤門黄葉踏み

寛

蛇之助ぶるも心純情

睦

いとけなや妻にまだある扁桃腺

正

検診ブーム一寸下火に

和

形代を神に供へて御祈禱

一

炉端に偲ぶ旅順攻略

康

雪深き山小舎に射す月澄みて

寛

連絡無線感度良好

睦

SLのカメラチャンスを狙いつつ

和

時計眺めて煙草一服

康

花の夜どの家も留守電気つき

正

猫恋う声は江戸屋猫八

一

ナオ御隠居も春の陽気に誘はれて

低い金利も気にならぬ態

W杯オウンゴールが二度もあり

甕を叩けば沈む子子

思惑のそれぞれありて選挙前

髪分け目に募る愛憎

初めてのデートの仕種忘れかね

七里が浜に寄せる小波

白き富士挽歌流るる墓碑寒し

手傳はされし障子張替

心なき事も云いけり後の月

初颯風は未だ生れず

ッ独居はテレビ許りを友として

やつつけ仕事編みし蔓籠

答案をちつとも書けず焦る夢

弥生の朝はポチに起され

校庭の記念樹の花語るらく

東踊りの茶屋の総見

平成十年四月十日首  
平成十年七月九日尾

(於・東京・神田 学士会館)

睦

寛

康

和

一

正

睦

康

寛

和

一

寛

康

一

和

康

寛

一

歌仙 『月今宵』

菊地一寛捌

幽かなる神異ありけり月今宵

菊地一寛

実を結ぶなる一山の竹

式田和子

鉦叩沈思の耳にかそけくて

谷敷寛

テレビ横目に遊ぶ幼兒

薄井康夫

お引越どら焼食べてそのまんま

中野睦治

大根干す家紅葉散る家

一

憂国忌凜々しかりける楯の会

和

汽車の窓から握るやわい手

寛

今様は電話し乍ら投げキッス

康

ビツクバンなぞ屁とも思はず

睦

良寛の山家住いに訪ね人

一

源氏螢は空の低目に

和

上弦の月森閑と青簾

寛

バンドネオンのタンゴ響きて

康

テキーラもセニヨリタも夢の中

睦

禁と知りつつ越える国境

一

手をつなぎ幼等はしやぐ落花飛花

和

入学御礼湯島天神

寛

ナオ鶯も籠の中にてホーホケキヨ

優勝監督口説く阪神

サッカー籤期待する人しない人

狐狸の競う集団

战友会仏顔して鬼軍曹

土産の品はバーの彼女へ

誰彼と撫でられる腕水洗い

ひもが守りする赤子抱きしめ

自転車の籠に一杯紙おむつ

小走りに来る老の足音

宇宙船見下す彼方円き月

気密室だよ鬼灯の中

秋深し野口五郎のリサイタル

箱物建てて議員当選

只酒で乱痴気騒ぎ腰抜かし

河原の寝覚め雲雀飛立つ

満開の花の下にて記念祭

人目気にせずつまむ草餅

平成十年九月十一日首  
平成十年十一月十三日尾

(於・東京・神田 学士会館)

康

睦

一

和

寛

康

能

一

和

寛

康

正

一

和

寛

康

正

寛



歌仙 『コラージュの花野』

川野蓼艸捌

満月に向けて蝦夷地を離陸かな

川野蓼艸

初嵐来る雲の墨色

坂本孝子

コラージュの花野全図の呼吸して

村松定史

親父ゆづりのパイプくゆらす

島村暁巳

表象の帝国に住み詩人たる

上野遊馬

半音階づつ虹は消えにし

工藤 蘭

手鏡を水葬にして夏終り

吉田梨江

香水の香をまとひつつ行く

大家雅子

デイトリツヒ サヴォイホテルに乗りつけて

高橋豊美

私の情夫詰めたトランク

暁 巳

戒厳令探照灯に目がくらみ

定 史

どこかでクロール次々と生れ

梨 江

悔恨を積み残したるオムニバス

定 史

シルク・ハットをボロ市で買ふ

遊 馬

膝に猫復習ふ義太夫着ぶくれて

豊 美

人間五コと茶髪言ひけり

梨 江

昇り来る月を花びらよぎる宵

定 史

孔雀の前で春は足踏み

遊 馬

ナオ 蝌蚪の群小湊内閣誕生す

暁 巳

我関せずとドラム叩けり

雅 子

広げたるストレス指数一覧表

遊 馬

理科教室に骸骨のゐる

暁 巳

雪国の酒とくとくと海鳴に

孝 子

増ゾウの面の外せない嘘

孝 子

鶏卵は無の重量か寂しさか

遊 馬

サンタ・ルチアのイタリアの町

蓼 艸

鼻唄の男丸太を担ぎ来る

雅 子

現像液に浸す印画紙

遊 馬

良夜なり魂ひとつ送るなり

孝 子

トタンの屋根を银杏の打つ

豊 美

綴ドゥ子ナ着た蓑虫ぶらと枝の先

定 史

逆立ちすれば空に漣

梨 江

留守宅に電子メールの溜りゆく

豊 美

はたく臍くり御開帳にと

孝 子

花霞背景に騎手鞭を入れ

蓼 艸

種の袋を吊す風船

梨 江

平成十年八月三十日首尾

(於・豊島区勤労福祉会館)

註 ナオ六句目、増の面・若い女の能面

不動 『霞裏漉し』

上野遊馬捌

馬が皆海に向かひて秋澄めり

工藤 蘭

昼月白く灯台の丘

神山みち

重陽に癒見の面を彫りあげて

川野 蓼

隣の部屋で羊羹を召せ

吉田 梨

雪畑を突つ切る駅の抜け道に

葛城 真

帽子まぶかに初弥撒の例

島村 暁

機関銃ゴルフバックで運び出し

村松 定

涙で書くは母といふ字よ

村田 実

屋上に優勝の旗へんぼんと

真 定

鳴らぬ携帯鳴らす携帯

真 定

マチネーは「寝取られ宗介」走り梅雨

巳 定

紐をほどけば返品の亀

定 巳

複葉機花の万朶に骨を撒く

定 巳

方丈に栖霞裏漉し

巳 定

ナオ暮れてなほ春蚕首振る繭の内なか

梨 艸

縛られ地藏にメビウスの輪を

早 梨

唇塞ぐホワイトハウスの執務室

早 梨

シユミレイションは臨界を超え

真 定

打出しの太鼓は月を押上げて

定 巳

べつたら市まで酔ひを曳きずる

巳 定

やや寒の標本箱に旅の石

ち 巳

水切りの波ゆがむ泣き顔

岡山 朱

藍 ち

光陰は尿しとをする間も夢の間も

艸 藍

「熱情」「運命」「悲愴」「英雄」

早 艸

ナウ分析の結果は砒素と判明し

藍 藍

白をころがす萬愚節なり

藍 藍

残る花スルメに切手貼りつけて

上野 遊

馬 藍

春の音聴く階段教室

巳 馬

平成十年十月十日首尾

(於・与野市コミュニティーセンター)

\* 「不動」は二花二月二十八韻の新形式。この日が不動明王の縁の日なので、こう名付けた。

歌仙 『草 矢』

森 三郎捌

遠き日に草矢で撃ちし人と添う

町田節子

茜の空に明き夏星

森三郎

子供らの揃う歌声近づきて

森恒子

心足りたる絵筆滑めらか

杉野弁一郎

いくたびも雲を逸らせて月渡る

節

枝もたわわに実る早稲柿

真下草

過疎の村太鼓さびしき秋祭

石川光

老老介護が現実となる

笠男

ポケベルに孫の目喜々と輝きて

光

バスト・ウエスト凹凸の妙

恒

ひたひたと潮の寄せ来る由比ヶ浜

節

北の風吹く夜は眠れず

弁

ふところ手我が影踏んで月の道

恒

音信絶えし族同胞

弁

室町の多宝塔のみ残りたる

郎

放生池に鯉の悠々

市川美代子

一団のリユックとりどり花の山

笠

糸の切れたる風船の旅

節

ナオ 関跡の石碑眺めて青き踏む

節郎

ポン菓子おこしまぶす黒糖

美

仲見世に駒下駄の音小刻みに

弁

常連客は皮肉ばっかかり

恒

行水に薄荷油垂らす工夫して

美

素足の指のチョキが出来ない

美

クラス会宿の一夜の思い出が

節

秘めたる恋の辛く切なし

恒

然り気なく枕代りの膝寄せて

笠

光源氏を重ぬあなたに

節

山越えの阿弥陀か月は昇りくる

郎

伊良湖岬を鳥の渡れる

笠

ナウ 夜の無い庭はひよわな菊ばかり

弁

通貨相場は亡国の兆

美

足るを知る訓えを胸に生きてきて

節

一合の酒注ぎ分けし友

笠

見上ぐれば包み込むかに花万朶

美

春の気は凝りておもたき

郎

平成九年九月二十八日首  
平成九年十月二十六日尾

(於・寄居町無腸庵)

歌仙 『雪搔く』

森 三郎捌

ナオ以降 (眞下草笠)

幾たびも門の雪搔く町医かな 町田節子

ひそかに赤く覗く万両 森恒子

写真展昔を語る画面にて 市川美代子

親に貰った名前美し 柏原知子

観月は漢字検定受く友と 眞下草笠

秋の七草朗々と誦す 藤野勇太郎

城跡を訪ね色無き風に立つ 柏原和宏

左といえば右を向く嫁 石川光男

その意地を飾る若さの眩まし 森三郎

大統領を震わせ恋 杉野弁一郎

肩書きのない者同志車座に 節

響け喇叭よ不況はじいて 勇

飛車角を落して打って月涼し 笠

額に汗の光る川越え 光

葛橋かけ替えている祖母の谷 光

野鳥の声に落人の唄 知

現世を放下したかに花の散る 郎

転寝すれば夢に蝶舞う 美

ナオかげろうに包まれながら遠ざかる

流るる水の行方定めず

金婚の旅の坂道石の街

ロザリオ胸に白髪の人

秩父嶺の化粧下手なる斑雪

補欠選挙の声の寒々

バス停に佇ちて中々乗りもせず

肩越しにくる紫煙憎らし

菩薩とも夜叉とも変る心にて

ここぞとばかりダイヤ強請らる

月光にほとりと落ちる露一つ

言うに言われぬ新酒の味

火の山の空に溶けこみ鳥帰る

庚申塔に猿の三態

幟立てマリオネットの小屋かかる

春のうららか独り占めして

雪洞に浮かび紅増す花の夕

動くともなく耕人の影

平成十年二月二十五日首  
平成十年二月二十八日尾

(於・寄居町無腸庵)

節 笠 知 節 勇 弁 節 光 和 光 節 弁 勇 知 光 節 弁 知 光 節 笠

歌仙 『迫々の梅』

森 三郎 捌

迫々の梅賞でて行く墓参かな

森 三郎

見上げる孫の語る入学

森 恒子

碑は背なに春日を匂わせて

柏原和 宏

島の奥まで響くオカリナ

市川美代子

月光を崩して寄せる波頭

柏原知 子

秋刀魚の漁に船を走らす

杉野弁一郎

鷹渡る一群空の高みまで

藤野勇太郎

伊良湖岬を不夜城として

眞下草 笠

湯を弾じく妖しの肌のほの白く

石川光 男

飽かずに壺を撫でるのは誰

知 男

美味求心産地訪ねる楽しみに

郎 知

口程もなく利酒に酔う

笠 郎

月冴えて佛の相の彫り深く

光 笠

遠き日のこと母の鞍

弁 光

乱れうつ一揆の鐘の峡圧す

笠 弁

猫の恋する蔵の物影

郎 笠

瀬の音に沿うより花の道となる

和 郎

愁を抱いて行けばかげろう

美 和

ナオ行く春を睫毛の長き異邦人

ロケのカメラの廻る音して

節 知

海青き日向七浦バス連ね

恒 和

齒痛の頬を窓に押しつく

和 恒

凍蝶の祈る如くに翅合わせ

節 和

不惜身命いのちなる君

光 節

折々に昔を偲ぶ所作見せる

勇 光

桂馬飛びして恋の建て引き

郎 勇

薄明り笑った顔のすさまじく

光 郎

絵草紙片手に香具師の口上

弁 光

ふるさととはとつくに何處へ月の宿

和 弁

ワインに添えて茹でた枝豆

節 和

ナウコスモスを揺らせ渡れる野路の風

知 節

入江の孤舟人を待つ如

弁 知

永らえて待てば宇宙の旅も又

勇 弁

実験槽のめだか游々

光 勇

特攻機消えたる方え花吹雪

恒 光

眼裏熱き若駒の群

知 恒

平成十年三月二十二日首  
平成十年四月二十九日尾

(於・寄居町無腸庵)



歌仙 『青葉潮』

岡本耕治捌

青葉潮はるかに曾良は果てにけり

岡本耕

治

山時鳥鳴き渡る島

木村緑

茶

陶芸師無心に轆轤同しいて

木村文

子

街騒さけて草の庵に

田島竹

四

論考の筆遅々として窓に月

田島ま

り

陣中見舞に届く栗飯

未枯に発破こだますダム工事

治

龍神伝説手ぶりまじえて

恋人と泣いて別れて玉の輿

四

しゃんしゃん馬が婚の荷を曳く

嫁姑得意料理を競ひあい

り

世の常ならむ世代交替

雪の原八面一色月照らし

文

マタギ射止めし剝製の熊

ふと傍受SOSが無線機に

四

底の見えないじり貧の株

大地震に耐えし老樹の花万朶

治

ふらここゆらし吹過ぎる風

文

好みのままに地酒地ビール

組閣には派閥均衡またしても

四

昔の夢を今も見続け

成金が札束燃やし靴探す

文

宇宙談議は炉端囲みて

毛糸編み赴任の夫を想ひおり

四

ペアの時計が刻む秒針

焦るほどスランプ深く迷ひ入る

治

ルーキーはやもあげし十勝

魂の抜ける病室月さして

文

青き瓢の揺れる軒先

正調の木曾節ききて爽やかに

四

秘伝と称す蕎麦打ちの技

高僧の衣捌きは気品満ち

しずしず出づる啓蟄の虫

乳母車押して夕べの花堤

手を振る別れ陽炎へる野辺

平成十一年六月二十三日首

平成十一年九月三日尾

(文音)

治

四

文

茶

治

り

四

文

茶

治

四

文

茶

治

り

歌仙 『初鎮守』

浅野黍穂捌

初鎮守賽銭箱はなかりけり

浅野黍穂

注連縄かけし櫛の大木

今泉忘機

散歩翁杖より早く歩き来て

穴澤篤子

饅頭ひとつ茶うけの馳走

沢木智恵子

遅き宵身は一人の月の客

田口猛康

花瓶に活けし秋の七草

高畑自遊

ッラスコに飼鈴虫の元気よく

中島まさし

パリツと糊をきかすワイシャツ

佐野千恵子

クラス会マドンナ今もふし目にて

高島茂雄

河原の木蔭初の口づけ

小谷参木

葎切の巢にカツコーの子が育つ

星野恵則

ウォン助けよ円も馬鹿安

穂

月涼し総理は昔剣術家

機

坊ンの頃から変へぬ髪型

篤

湯気立てる薬缶の向から銀世界

智

本の山には唸る引越

康

二階から隣家の花で酒を酌み

遊

鯉節つけ仔猫を譲る

し

ッオしやぼん玉色かはりして路地の外

ブランコで見える空の教室

来ては去る児ら吃驚の風いづこ

逆断層の切り通し径

掲示板「緑守りましょう」と市役所

再生繊維着心地の良し

猿之助おっかけギャルはカメラ持ち

をんな兎角に苦勞がちとは

蠟燭の炎にあぶる罪の恋

ひやり一筋涙の雫

われは魚嫦娥の青い夜を泳ぐ

すすきばかりの無縁欲界

ッ幹太きいてふの大樹影向寺

勝て今度こそ研くベীগマ

むち打ちを逆手に猫背直すべし

アスクレピオスの杖に巻く蛇

庭の隅清めてなほも花の宵

やゝの疲れの春の午後二時

平成十年一月十一日首  
平成十年十二月十三日尾  
(於・東京女子医大精神科小会議室)

千

雄

木

則

機

康

し

遊

雄

子

子

雄

し

則

穂

木

千

機

歌仙 『落のたう』

佐藤義子捌

遠目にも野路の旅人落のたう

佐藤義子

はや一陣の音に引鴨

笠間文子

春障子辞書の残像映りゐて

星野恵則

立ち見の切符買ひそびれたる

中島まさし

オペラ出て歩行天国月明り

文義

木犀薰子骨董の店

義

鈴虫は掛けし帽子の蔭に鳴き

し

細き便りを頼る水茎

則

「割鍋に閉じ蓋あつてよいでせう」

文

紙吹雪舞ふ中のカップル

義

歲月は騙せず愛の化の皮

小谷参

旨しと褒める質の「寒梅」

木

箏消え上弦冴ゆる競技場

し

善光寺さま近き鐘の音

義

法律の数を殖やして罪殖やす

文

黄金劇の代官今も

木

花の山わが曳く影も花の色

則

行く先定まる仔猫それぞれ

し

ナオ詩集読みたくも蛙の目借時

義

ミンツのガムのもはや品切れ

文

キレぬかと戦々競々若教師

木

こころ失せたる技の跳梁

則

ものみな乾きし世相悲しめる

齊藤信

子

手拭淡く波の紋様

し

納涼の書割舞台風孕み

文

嫁の手際の茄子の茄子紺

義

布団干す耳たぶまでも紅くして

則

ケセラセラセラ恋の泥沼

木

肩よせて眺めしことも十日月

信

夢二の忌には酔づけままかり

し

ナウ牛車連れ時代祭の衣冠練る

義

コンピューターを神頼みせり

文

衛星映す地球は魑魅の睨みあひ

木

どこかで弦の合はぬ楽団

則

孵行く墨堤十里花万朶

し

降りみ降らずみ啓蟄の午後

信

平成十年二月八日首  
平成十年三月八日尾

(於・東京女子医大精神科小会議室)

歌仙 『蒲団叩く音』

今泉忘機捌

暖かやそこここ蒲団叩く音

今泉忘機

竿竹売ののどかなる午後

佐野千恵子

アスールの春衣すらりと着こなして

高畑自遊

歡喜の調べ五州を結ぶ

沢木智恵子

梢先弓張月のくつきりと

千機

一原すべてこほろぎの声

千機

太平洋越えて電話の届く秋

智遊

「早く帰って」と傍で娘が

遊機

年寄に若き夫婦を頼もしく

機遊

棟上げ近し二世帯住宅

千機

遺伝子にエトワズ加えんわが魂で

遊機

鄙びた社に巫女はまばゆき

智遊

鷹巢の峰より出る夏の月

穂智

カットグラスにビールを受けて

千機

往昔のキャリアはいずこ世紀末

機智

埋まりし田圃車群れなす

智遊

御菌生におちこち茶席花の下

遊機

短足犬と遊ぶうららさ

康遊

ナオ聴雨忌の三宝寺池絵筆とる

畏友何人皆故人たり

玉手箱開けてみるまで事もなし

撮られしビデオあつとおどろく

与三郎京都訛が疵となり

穴あきデニム単車暴走

テレクラの通ふ日々なり空しくて

眉細く剃る極道の妻

きぬぎぬの言葉はさがすが女にて

旧街道にほのと灯火

有明も明星も亦薄れゆき

舟のマストに虫の鳴きゐる

ぼっぺんをチャンポンと呼び放生会

生まれ変らん石炭の町

廃坑に狸と暮らす定年後

貸渋り受けわが社倒産

花便り北上するごとと胸騒ぐ

大試験パス親にファックス

平成十年二月八日首  
平成十年三月八日尾

(於・東京女子医大精神科小会議室)

穂

機

千

遊

智

穂

康

千

機

智

遊

康

穂

機

千

康

智

遊

半歌仙 『きさらぎの』

渡邊陽行捌

きさらぎの花に西行偲びけり 渡邊陽行

おぼろにゆらく草庵の跡 古川千代亀

囀をまとひし子らの駆け抜けて 福島敏子

ひとり点前で佗をたのしむ 高森秋義

絹雲を杉に照らして渡る月 堀金清子

秋潮高くしのびよりくる 堀金清子

ッ町興しメーンは伝統の里祭 義敏

相合傘に濡れる片袖 敏亀

熱愛の果にテレビでいがみ合ひ 敏亀

覚悟を決めて胃カメラをのむ 敏亀

外人が目立つフリーのマーケット 義敏

茶髪金髪女高生たち 清亀

月の出に大見得を切る夏芝居 清亀

野の石仏お顔涼しく 敏亀

官僚のたかり身分のへだてなし 清

地酒地ビール地ワインもあり 義

咲き満てる桜の下で句座開き 行

山うららかにグライダー舞ふ 亀

平成十一年二月十二日首尾

(於・四国電力・多度津お客センター)

歌仙 『行く春の』

行く春のとどろき山菜料理かな

山口みづえ

鳴き交しいる四十雀らし

安江真砂女

スケッチの翁に風の光るらん

宮下太郎

スパークリングワイン注げる

芳田龍子

飛行機のどの窓からも銀の月

村川雅子

降り立つ人の肩に秋灯

み

ポケットに焼栗ありて抱き合う

真

一寸苦めの朝の珈琲

太

論文の構想練れる椅子固く

龍

蝶の標本千種超したり

雅

昨日ミニ今日はロングとモード変え

み

水泳教室いつも繁盛

真

夜光虫船が乱せる月暑し

太

団扇片手に松原のなか

龍

賛美歌の低音遠く聞こえ来る

雅

養護施設に送る折鶴

み

移し植う岩崎邸の八重の花

真

惜春の情ひそやかにして

太

穂高嶺に雪残りいる山車囃子

龍

退職金で建てしペンション

雅

行けないなワールドカップのフランスは

み

そしてこうして孫の算段

真

突然に豊満熟女現わるる

太

腕を取りつつ消えし暗やみ

龍

隧道の先どこまでも冬の海

雅

石路の黄色のしるき点々

み

週刊誌橋龍去就書き立てて

真

ビッグバンてう始まれるなり

太

雲払う真如の月を映す池

龍

一刀流のひらり芒野

雅

ナッ利酒の新酒はまさに鬼ころし

み

有為転変の世とは思えど

真

荒寺に木魚の音の聞こえくる

太

宝石きらとうたたねのなか

龍

生涯を花守として紫綬褒章

雅

雨あたたかく濡らす黒土

執筆

平成十年四月二十四日起首

龍

平成十年八月吉日満尾

雅

（後半文音）

筆

（於・世田谷材木亭）

『非懷紙』

烟出の煙は峽へ雁渡し

秋山正

明

道祖神がまとう紅き蔦の葉

藤原繁

子

チェンバロの練習曲のいつまでも

西川 巴

つくづく見れば下手も絵のうち

明

歴とした血統書付き子犬ドン

繁

藍の浴衣をしゃんと着こなし

巴

境内の鬼灯市をひやかして

明

ひと目はばかり合わす唇

繁

ゆっくりと効目あらわれ安定剤

巴

なお散りかかる花の褥に

明

春月をのせてつやめく能登瓦

繁

酒場を出れば遠き潮騒

巴

音なしの構えでしばし過すべく

明

歳時記どれも使い古りたる

繁

休日は鮫鱈鍋にうち集い

巴

百円玉を拾う四ツ辻

明

パドックの葦毛栗毛の美しく

繁

あつという間に世紀末なり

巴

平成十年八月十五日首  
平成十年十月十四日尾

(文音)

半歌仙 『秋 韻』

上田溪水捌

秋韻や縄文土偶子を抱き 藤沼和恵

兎棲むてふ雲出でし月 若松藍香

金柑の甘露煮仕込入念に 土屋実郎

卒寿祝のはなむけにせむ 原崎弥生

一差しの姿凛々しき舞扇 上田溪水

水琴窟のひびく涼風 香

夕焼に嵯峨の林の色深く 弥

杖とことこと山頭火来る 水

置手紙墨痕太く滲ませて 恵

思ひとどかぬ項うなじ頤おとがひ 郎

カーナビの指図狂ってラブホテル 香

仏拾った底曳きの網 澤田洋々

豎縞の布子を照らす月蒼く 郎

五臓六腑にしみる熱爛 恵

エリツインの演説又も空廻り 弥

お山の奥へ帰る鸞鳥 水

母親と花の大樹に隠れんぼ 洋

手許はなれし赤き風船 執筆

平成十年十月二十九日首尾

(於・中央区立産業会館)



歌仙『滝』

土屋実郎捌

心病む青年瀧に打たれ打たれ

花巻珠枝

岩を染めぬる紫陽花の彩

萩谷悦子

蚊遣香茶室の隅に吊されて

城依子

ピザパイ頼むフリーダイヤル

柴田寿賀

駐在も手持無沙汰の居待月

浅沼小葦

赤い羽根さし迷ひ犬くる

土屋実郎

ッ廃線のフォーム転がる新松子

藤沼和恵

栗飯炊いてつくるおにぎり

賀子

丸顔の少女を囲む誕生会

須田幸葦

整形外科の医者はハンサム

依彦

したたかに酔ふて一線踏み外し

依彦

気がつく頃は共白髪なる

伊藤藪彦

しんしんと月光降れる大晦日

依彦

熊の寝息のいとも平安

沢田洋々

伏し拝む大慈大悲の観世音

彦

ボスを決めんと密議続けて

恵

任侠に別れを告げて花の旅

葦

つつかれて出る穴の馬刀貝

郎

見はるかす干潟の果の薄霞

彦

NGOの政府動かす

郎

半音が狂ってるよな流行歌

葦

野外ステージプレミアムつく

賀

卯の花のはらりはらりと女坂

葦

同時進行汗の火遊び

洋

俳優を追っかけいつかストーカー

恵

銀のナイフを栞がはりに

葦

山の辺を行く葬列の鉦かなし

依

頭上大きく輪を描く鳶

葦

満月に洞ほころ出て子等声上げる

洋

芸術祭に捨ふ流木

恵

ッワンカップもぎたて胡瓜味噌つけて

依

人畜無害キャッチフレーズ

賀

このごろは遣句上手とおだてられ

郎

薬研堀にも夢二館あり

彦

黒い猫走り落花をうながせる

洋

幸先よろし初蝶は黄

幸

平成十年七月十六日首尾

(於・中央区立産業会館)

歌仙 『余 寒』

小林しげと捌

川風に残る寒さや大路小路

小林しげと

やうやく開き初めし盆梅

杏花

雀の巢見付けて子らのはしやぐらん

伊藤薺彦

ティーパーティーでピアノ演奏

澁谷盛興

月昇るコンドミニウム海に向く

と

羽の韶の姿さままぐ

彦

古代裂鞋に仕立て、置く扇

杏

身八ツ口より白き柔膚

子

野球拳負けつぱなしの伊達男

伊藤哲

興

仕手株買つて儲け損ひ

興

有難や夢を違へる地藏とは

哲

遅速を知らず落ちる点滴

杏

山霽れて涼しき月の伊那平ラ

彦

ざゝむしつまみ冷酒で持て成す

柴田寿

賀

駆引きは卍巴の都知事選

杏

木戸を賑わす寄席の出囃

興

花が散るくくフリーマーケット

哲

子犬を膝に揺らすふらこゝ

寿

ナオ 厨房の浅蜷儂き身を嘆く 彦

振興券でCDを買ふ

姪海停雲子

懐かしきライムライトのチャップリン

哲

ベイブリー柄の粋なネクタイ

杏

ザンザ降りシティホテルで忍び逢ひ

興

障子の穴がちよつと気がり

杏

河豚鍋をつゝき法悦境に入る

哲

波間を照らす崖の燈台

興

郷愁を誘ふエーゲの月清ら

雲

廃墟に伸びる草の黄葉

彦

くるみの実指圧がわりにもて遊ぶ

杏

じゃんけんぽんで決める世話役

雲

祭神は城の栄枯を見そなはず

興

楼の欄間に龍と唐獅子

彦

ちよこざいな舌は三代目一代

哲

地虫が出たか土の蒿ばり

と

花むしろ座りのわるき紙コップ

杏

春惜しみつゝ賭ける駅伝

雲

前半平成十一年二月十九日  
後半平成十一年三月二十四日

(於・中央区立産業会館)

歌仙 『草団子』

藤川祐子捌

寅さんの来さうな間口草団子

藤咲ひろし

春の夕べの駒下駄の音

藤川祐子

蝌蚪泳ぐバケツをさげし児等居りて

増山山肌

特に大きなポスターの文字

塚本忠太郎

早々と月見の用意整ひし

城依子

床柱背に秋の声聞く

久富勝義

金賞の菊へ一服茶を献ず

海老名衣子

不意の地震に池のさざなみ

宮本得志

来る来ない占ってゐる街の辻

祐

成らぬ仲とは思つてゐても

郎

次の世は夫婦と決めて呷る盃

依

夕波千鳥羽を休める

義

寒の月高速道路いづこまで

肌

結城袖をゆつたりと着て

衣

若者の携帯電話声高に

志

間もなく閉まる店のシャッター

郎

公園に猫があつまる花の果

依

ちちははを連れ陽炎の中

肌

ナオ春日傘大宮人となり歩く

酒と肴が用意してあり

脱ぎしものたたむ指先みつめられ

泳へきれずにはづかしき声

幽谷の白い大蛇が岩を抱く

夢見る様に夏の霧湧き

だんだんに鎮痛剤が効いてきて

地藏菩薩の笑みのやさしさ

飛び石にぼつりぼつりと雨の粒

いまは流行らぬ立志伝読む

追憶も淡くなりたり十三夜

モノクロームのパリの末枯

ナツどこからとなく秋蝶の現はれて

縞のネクタイ少しきつめに

選挙区へ久方振りに顔を出す

ひっそり閑と工業団地

ポケモンの帽子まっさら花の昼

染卵手に歌ふ讚美歌

平成十年四月二十二日首  
平成十年九月二十二日尾

(文音)

義 祐 衣 志 依 郎 肌 依 志 衣 祐 肌 郎 依 志 衣 祐 義

歌仙 『鯉の群』

遠藤嘉章捌

鯉の群急流となり風薫る

遠藤嘉章

せゝらぎの末そゝぐ夏海

鶴沢治久

自転車で来る郵便夫日に向きて

白井風人

峠の小径番犬吠ゆる

章久人

追分の茶店の縁を月渡る

章久人

庭の茂みに蟋蟀の声

章久人

さんま焼く路地の煙に行きなやみ

章久人

夜昼もなく働く夫婦

章久人

たまさかの二人の外出手をとりにて

章久人

渡しの舟のぐらりと揺れる

章久人

寅さんの寺の護符なり杉匂い

章久人

神と間違え二拍一礼

章久人

境内に近道をとって冬は月

章久人

一雨ごとに寒さまさりて

章久人

不意に鳴る呼子捕物始まれり

章久人

ねずみこゝぞと猫にかみつ

章久人

晴天に長屋一同花の友

章久人

いつ笑うかと山を見つめて

章久人

春日和昔も今も馬鹿は馬鹿

閑つぶしには深川歩く

団子屋の前に社の鳩が群れ

力士の手形皆たくましく

なまじ風あれば西日の猛々し

バンガローから黒人夫婦

それとなく娘の気持聞きたゞす

わりない仲と里の噂

戦争と平和はいつも裏表

爆弾テロに友を失う

月天心異郷の廃墟深沈と

十六羅漢並ぶ芒野

平家琵琶静かに語り蚯蚓鳴く

民の怒りは政治動かす

日曜も休めぬ地検特捜部

婆々はせつせととげぬき詣り

温顔の石佛蔽い花吹雪

墓穴を出て仰ぐ遠山

平成十年七月二十三日首  
平成十年九月二十四日尾  
(文音)

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

章久人

歌仙 『初しぐれ』

引地冬樹捌

弥勒佛目つむりて聴く初しぐれ

引地冬樹

無限の時に遊ぶ綿虫

南條巷子

まどろめば鏡の中へ誘われて

岸田和子

女役者が猫を抱きおり

上野弘子

月のもと一弦琴を奏でんと

樹子

香りかぐわし蔵元の古酒

坂根慶子

ッ見送りて港にたたむ秋日傘

弘子

尼僧なれども恋をゆたかに

巷弘子

さよならと云いつつなおも絡む指

和樹

チャルメラの音が夜を曳きゆく

樹慶

うとうとと居眠りのでる受験塾

慶弘

駅のテラスで紅茶一服

弘慶

梅雨あけの旅人染める赤い月

慶巷

サリ―ひらりと径をまがりて

巷雄

鳥葬の骨の乾びし大砂丘

猪口義雄

コバルト色の空に溺れる

和樹

宇宙士が覗けば窓に花列島

樹雄

水をひからせ燕飛ぶ頃

雄

ナオミサの鐘遠く朝寝の夢ゆすり

樹

選挙のピラの風にはためく

巷

杵酒をなみなみと注ぎ乾杯し

雄

妖しくほめく黒き瞳よ

和

ジプシーと踊れば星の降ることく

樹

チャドル脱ぎたる君は牝狐

カ

軽やかな嘘はかざはな世は楽し

中村信子

箒に乗って天をゆく魔女

水谷常子

巷には職を追われし漢ども

信

利子も株価も奈落まで墮ち

常

黄金の満月牽ける帆曳き船

慶

明日は晴れると鰯のホラ吹き

和

ナッ生き下手の肩揉ませつつ聞くお螻蛄

樹

ラーメン食べてハワイへ行こう

慶

開店のチラシふり撒きチンドン屋

弘

かの懐しき寅さんも来て

信

舞い狂う花の宴の花枝垂れ

巷

鶴がひきゆく里の山々

和

平成十年十二月九日首  
平成十一年五月十一日尾

(於・稜光倶楽部六本木本社)

二羽智子連句集『虎落笛』上梓祝賀

歌仙 『筑波路』

膝送り

郭公の筑波路に鳴く佳き日かな  
引地冬 樹

身を軽々とそよぐ若竹  
二羽智子 子

紙芝居好きな子供等集い来て  
木上紫 雲

夢のふくらむ瞳いきいき  
吉本芳 香

フライトの翼を照らす月今宵  
子 子

朱の大盃に新酒酌むらん  
樹 雲

ッ渋鮎の味を自慢の季節宿  
雲 樹

湯上りの肌ほのと匂わせ  
香 香

キスすればトレモロのごと夜半の雨  
樹 樹

金融破綻なおも尾をひき  
子 子

核家族一斗の米を買いかねて  
雲 雲

ころり転がす張りこの仔猫  
香 香

虎落笛いのちなきもの歌いおり  
樹 樹

冬の月さす那谷の石山  
雲 雲

爪先へ躊躇いながら置くもぐさ  
子 子

舞いひとすじに古稀迎えたる  
香 香

花こぼす旅万歳の袖袂  
樹 樹

孕みし鹿のしきり啼くなり  
雲 雲

ナオ 畦を塗ることにも慣れし力瘤

手づくりパンの形いろいろ

デスカバリー女もすなる宇宙服

毒殺はやる日本見おろし

汗握るラブ・ストーリーに血が騒ぎ

さそり座の君とても強引

婚約のまとまりし事知りながら

恋の帳尻合わす損得

ふくよかな如意輪観音伏し拝み

越中着倒れ加賀何とやら

煌煌と薨イラカの鯨シヤチを照らす月

朝寒なんぞ飛ばすジヨギング

ナウ 枯露柿の皮剥く早さ競い合い

懐メロ流すラジオ番組

アルバムにいつも笑顔の夫いて

忌明けの札をはがす暖か

わびさびの粹尽くしたる花の園

海原遠くあがる大風

平成十年 九月 七日首 (文音)  
平成十年十一月二十七日尾

子

香

雲

樹

子

香

雲

子

樹

雲

香

子

雲

香

樹

雲

子

香

密田靖夫編『芭蕉・北陸道を行く』上梓祝賀

歌仙 『北陸道』

膝送り

北陸の道かがやかせ朴咲けり

引地冬樹

人來ぬ峠渡る涼風

密田青々

名水もまた泥水も味はひて

密田妖子

ピエロの仮面脱ぎしこの頃

樹

ヴィオロンのため息流れ月白し

青

一羽後れて迷ふかりがね

妖

笠深く秋の遍路の顔見せず

樹

黙して忍ぶ恋は曲者

青

そんなことあったかしらととぼけ妻

妖

百鬼をひしぐ尻で店守り

樹

三代目血眼になるラスベガス

青

明け方近くツキも落ち果て

妖

弓張の冴ゆる屋根より猫の声

樹

枯木の如く朽ちる頼政

青

亜硫酸をそつと混ぜたと自白する

妖

庚申塚に小石積み上げ

樹

花吹雪今宵は夢もくれなるに

青

臙の中を揺るるふらここ

妖

ナオ二のウラのなかなか付かぬめかり時

そつとしておく八十の父

明日はまた良きことあらん夕鳥

天女気分て宇宙遊泳

羽衣を脱げば熱砂に身も灼ける

汗に貼りつく君の黒髪

高原の風にテニスのボレー上げ

浅間の煙淡く流るる

姦しくバス借り切つて婦人会

笑ひころげて外す大顎

寄席はねて嘶家ひとり月の道

屋台でちよいと温め酒やる

ナッお稲荷の狐ふりむくそぞろ寒

剣の銘は小緞治宗近

あれこれとブランドものを取り揃へ

茶髪洗へばすでに銀髪

花の枝の奥に筑波の浮かびるて

鐘の音遠き春の東雲

平成十年九月七日首  
平成十年十二月十四日尾  
(文音)

樹

青

妖

樹

青

妖

樹

青

妖

樹

妖

青

樹

青

妖

青

樹

妖

歌仙 『寒明け』

二羽智子捌

暁闇を破る糶り声寒明けぬ  
二羽智子

東風颯颯と透る 蜚町  
藤江紫虹

げんげ田の遠近に牛放たれて  
舟橋玉枝

よちよち歩く新らしい靴  
細山吉女

満月の影踏み遊びきりもなく  
水野道代

舌であやつりふふむ鬼灯  
山本比佐子

ほちほちと糶殻焼きの燻りつつ  
藤田小夜子

いつしか逢うて忍ぶ恋仲  
加藤定雄

衿足のくちづけの痕夜々疼き  
紫智

自分史の稿書いてまた消す  
智

学歴じゃ優位の効かぬ娑婆となり  
吉

窓際ばかり混めるスナック  
玉

微笑める聖母マリアへ月涼し  
比

照れ隠しにとサングラスかけ  
道

山あいの洒落た別荘地にひそみ  
定

覚醒剤をどんと押収  
小

お巡りが迷子をあやす花の昼  
紫

都おどりに競う絢爛  
吉

ナオ干拓の沃野ひらけて揚雲雀  
玉

ハツと閃き名句ものになす  
智

連覇への手答え確とクラブ振る  
道

あたり外れの週間天気  
比

しんしんと塗り替えてゆく雪の白  
小

暖炉に凭りてビデオ楽しむ  
定

少年の夢がふくらむ宇宙服  
紫

婦唱夫随の親を鑑に  
智

情炎のおもむくままに辿りきて  
吉

うつら居眠る御仏の前  
玉

ポロローンとピアノ洩れくる月の橋  
比

長寿な爺の好むどびろく  
道

ナウ松茸の香も逃さじと柵堅し  
定

不況つづきで貿易黒字  
小

成立の介護保険は誰のもの  
道

弥次郎人形揺れる指先  
比

魅せられし花に酔いたる花疲れ  
玉

能登富士かけて霞たなびく  
紫

平成十一年四月八日首  
平成十一年五月十二日尾  
(文音)



歌仙 『ほつほつと』

酒井愛子捌

ほつほつと灯ともる雪の散居村

酒井愛子

ときおり匂う庭の寒梅

宮嶋 茂

南国の先輩がふと訪ね来て

加納俊子

珍しかろと郷土料理を

高山眞由美

縮跳ねるしぶきも愉し月見舟

紙谷湖 秋

豊年祝う歌湖畔より

村上町子

ッ羞じらいの色もて林檎熟れそむる

細山芳 絵

隠れて一寸直すお化粧

前山優美子

ダブルスのテニスの息もぴったりと

愛 茂

遂に誕生石原都知事

茂

振興券だんご兄弟何買うや

俊

迷うた果は又もとの店

眞

月上げて尾山祭の神の門

町

兼六園をゆする青嵐

湖

屑籠に小説の反古あふれさせ

芳

当なき旅へ不意に発ちゆく

愛

花の雲抜けては廻る観覧車

優

仔猫の瞳驚きいっぱい

茂

ナオ涅槃会へ腰の痛みを堪えつつ

俊

晴ゆく空へ「ありがとう」言う

眞

町議選候補がばったり四つ角で

湖

頼むはパソコンからの情報

町

出稼ぎの荷が片隅に冬座敷

芳

いつか本音を吐ける熱燗

優

能登人は声荒らけれど優しくて

愛

諸肌脱ぎの彼忘れられず

茂

連れ添うて更に深まる夫婦愛

俊

短編できるよビデオ継げば

眞

月へ翔ぶ魔女にも似たる鳥巨き

芳

夢の中にて採った松茸

湖

ナウ仮橋を架ける作業衣露しとど

町

犀星詩碑は瀬鳴聴きをり

優

愚痴ひとつ分かつ友あり帰り道

茂

肩押しながら入る縄のれん

愛

花の散る中に静まる美術館

俊

霞をまとう遠近おちこちの峯

眞

平成十一年四月七日首  
平成十一年五月十日尾  
(文音)

歌仙 『雪霏々と』

谷本綾子捌

雪霏々と成人の日を浄めたり

谷本綾子

国旗はためく松過ぎの門

多田芦畔

囀りに栄転の報舞い込みて

中村瓔子

向う三軒配る草餅

小薔照子

沖へゆく船もかげろう昼の月

西佐代子

箔打つ音も絶えし路地裏

赤坂久子

ッ鍵っ兒がじゃんけんぽんと石を蹴り

出見世裕子

雨が来るよとそつと背を抱き

中田風来

いやいやの素振りでいつか帯を解く

綾来

蜘蛛の囀張れる窓開け放し

芦

焼肉でキュつとビールが飲みたいワ

瓔

西武ファンの胸のたかぶる

照

傾むきしでづくり小屋へ月の客

久

芒の風に笛を吹く影

佐

やや寒の卯辰工房明けはじめ

裕

裾野を流る川の滔々

風

都知事選終りて仰ぐ花の雲

芦

同行二人蓮如忌詣

綾

ナオほどほどに暮す年金緑摘む

あれもこれもと趣味の講座へ

源平の歴史を辿る歩こう会

公害のなき空の清らか

縁側で作務衣繕ろう冬ぬく

梅を探りてめぐる外濠

見習いのガイド時々間違えて

不倫の旅に誘うウイंक

引き際は修羅場となりし深情け

なかなか効かぬ頭痛の薬

叱られて猫がとびだす宵の月

八幡宮に萩のこぼれる

ナウ余生とは淋しき言葉濁酒

上着を肩に寅さんサラバ

巡業は相撲甚句でご挨拶

次の世紀は平和をねがい

花のせてノシヤップ岬出航す

いざなえるごとと蟹気楼たつ

平成十一年四月十一日首  
平成十一年五月十五日尾

(文音)

照

瓔

久

裕

佐

風

綾

芦

瓔

佐

照

裕

風

久

芦

瓔

風

照

歌仙 『入園の』

吉本芳香捌

入園の大き名札もうれしけれ  
吉本芳香

裏山に鳴く鶯の声  
田川利公

早蕨をゆでる香りの漂いて  
尾山村雀

幻想めける床の掛け軸  
本田滋子

栈橋は島の玄関望の月  
藤田暁夫

枝もたわわに柿の色づき  
小川ひろ子

ッ里祭豊作祝う笛太鼓  
芝田祥子

きりり束ねる長い黒髪  
永多澄枝

清清しきつぷの良さについ魅かれ  
芳利

掘出物をさがす店先  
利村

虫喰いの江戸築城の図面あり  
村暁

道中手形腰にぶら下げ  
暁村

宇宙への夢を誘いて月涼し  
滋村

アイスビールをひと息で飲み  
澄利

この齢になるまで医者知らぬ身で  
利村

犬もいっしょに軽くジョギング  
村ひ

花むしろ領分守り小半日  
ひ村

だんごの歌をのどろかに聴く  
祥

ナオ兄弟の競いてとばすしやぼん玉

ハワイの家ですごくす週末

省エネのシンポジウムに招かれて

言うは易くするは難し

SLの雪見列車の止まる駅

吐く息白く廻る托鉢

新しきテーブルカバーは刺繍入り

彼の家庭をそつと窺い

父無し子どうしてくれると泣きつかれ

ころり転がる手毯おしゃぶり

世を忘れ憂さを晴らして月の宴

ちちろ虫なく部屋の片隅

ナウ遠くから眺めてばかり初紅葉

震災の地にボランティアの輪

グループの皆が生徒で先生で

温泉めぐる老いの朗らか

九頭龍のダム湖に長き花筏

ふつくら浮かぶ春の綿雲

平成十一年四月七日首  
平成十一年五月十五日尾  
(文音)

暁

澄

芳

利

村

滋

ひ

祥

滋

芳

利

澄

ひ

祥

芳

滋

暁

村

短歌行 『初明り』

山岸れい子捌

初明り神馬は高く嘶けり  
高山孝子

破魔矢受けし子晴れやかな顔  
中北ひろみ

盆栽の手塩にかけし甲斐ありて  
河村こう

閑けさの中小鼓の音  
孝

自転車で警羅の巡查月まどか  
西村みゑ子

ガレージセール閉ぢてやや寒  
榑原由美

銀杏散る画廊の窓のルノワール  
美

マドモアゼルは帽子ま深かに  
山岸れい子

財もなく名もない私でいいですか  
美

筋目どほりに割れぬ割り箸  
孝

にぎやかに女系家族の花筵  
美

霞の中に揺るる町騒  
孝

ナオ鷺の巢の千枝ちまたにひそむ水明り  
美

煙草の火借る駅の待合  
孝

偶然に出遭ったふりの旅なれや  
み

ひとり寝癒す豊潤の酒  
美

IOCC秘帳簿のどこへやら  
美

シャツフルをして配るトランプ  
い

軍港の町に凍てつく月織し  
美

しくしく痛むあかぎれの指  
美

ナウオニ決めるジャンケンポンのかくれんぼ  
み

雛の調度の小さき鏡台  
美

研修を了へし若者花の中  
い

夢を託して飛ばす風船  
美

平成十年十二月三日首  
平成十年十二月二十六日尾

(於・なかむら館)

久木田朱美子さん一周忌追悼

協起り  
歌仙 『骨董ひとつ』

桜餅骨董ひとつ手放せり

久木田朱美子

淡き灯のもとまた落椿

高岡粗濫捌

朝ぼらけ牧の仔馬の群なして

岡山朱藍

ライダー達の道も狭せに行く

川野蓼艸

書割は箔の月掛け村芝居

井出櫂晴

秋の茄子のとどけられたる

若松藍香

赤い羽根胸に飾りて改札へ

浜本青海

化粧ポーチの忘れ物あり

石飛千可良

想ひ秘め毎日蕎麦を喰ひにいく

良香

誰が吹くのかはるかオカリナ

香

東西の塔の合間の陵よ

海

リアルタイムで駈ける世界史

晴

トラトラトラ パールハーバー月凍てて

藍

狸座りの爺の着ぶくれ

晴

平叙語の語尾つりあげる癖流行り

良

「癌め」気になりちよつと立読み

香

薄墨の花訪ひもせず友逝きし

香

雛菓子に添へ珈琲はモカ

濫

襲名の切符の列の日永なる

護岸を洗ふ波の豊かに

富士遠く鎌倉アルプス低き尾根

迷ひ入りにし騙絵会館

サングラス腹の中まで黒々と

曲線包む水着絢爛

かけ落ちの与謝の小駅の昼下り

壺の薬を焼き捨てにける

経済を立直したる伝記売れ

ハンコ屋ばかり潤ふ合併

満月にウエーブ起こる千駄ヶ谷

黒いベレーに鴨の糞

ナウこぼれたる濁酒舐め独居なり

「寅さん」映画繰返し見る

半額で昼のカラオケケ・セラ・セラ

湯治の舟の舳並べて

明日は咲く花は微かな熱をもち

しばしを峽に聞ける松蟬

平成十年三月二十二日首尾

(於・勝鬨橋畔「双葉亭」)

艸

晴

良

香

藍

艸

艸

藍

海

晴

艸

良

艸

香

海

藍

濫

子

麻

子

歌仙 『脳髓洗ふ』

川野蓼艸捌

望月夜蔵の木偶たち瞬かす

残る燕も熟睡の頃

うそ寒し青春の旅笛吹きて

群衆の中紙切が飛ぶ

Cの字を胸にアンカーなだれ込む

在宅勤務緑陰にして

アイス・ティー音のからからしたりけり

アフター・ファイブ キヨスクに待つ

にと笑ひ手管のうちの薄情

紅唇きりと切札を切る

聖人像の背後に高き避雷針

帽子の中より鳩を飛ばせて

幼き日亡き父親の肩車

電気釜言ふ「炊けましたよ」と

寒の月刺青者が泳ぎる

なだめすかせて酒を熟成

花吹雪禁苑包む朝なりき

一輛電車紫雲英田をゆく

海子ち樹早藍樹海筆子藍早藍海子ち樹早藍樹海筆子藍早藍樹海筆子藍早藍樹海筆子藍

ナオ 遍路宿手甲脚絆のむれ出づる

見る程のものなべて見つとか

ミサイルを奴に放てば地の軌む

やるまいぞとて太郎冠者追ふ

ぶるぶるとりオに脳髓洗ひけり

君と隠れむオゾン・ホールに

レダ眠る羽毛をまとひ天空に

桜桃を盛る淡き朱を盛る

影に影重なり世紀末暮るる

ダブルの枢の注文の来て

塗師は今銀箔の月研ぎ出だす

鱈売る声三番町に

ナウ 縛されて目を開け猪は吊されて

夜中に直すパチンコの釘

既視感の高楼の街揺するなり

祖父の棚田に祖霊集まる

花満ちてトランプットの咆哮す

曲水の宴ひねもすの歌

平成十年九月十三日首尾

(於・調布市たづくり会館)

海子ち樹早藍樹海筆子藍早藍樹海筆子藍早藍樹海筆子藍早藍樹海筆子藍

漢和行  
歌仙

『萩』

『叢』

赤田玖實子捌

月光こぼる瓢箪の池。

蛭海停雲子  
松本杏花  
赤田玖實子

電映見二鶴来一  
掌上依亀移。

夏料理広き座敷に饗されて

試作の冷酒喉を滋ス

妙音耳朶漂

飛仙領巾麗

寝乱の床に残りし深情

鏡にはしる皺を窺ウ

城趾翳石垣

虎の仔ミサイル北鮮の鎚。

閣僚は無力を知らず鬼やらい

月は寒しとふるえいる願。

薬り湯の梯子春めくクアハウス

種痘痕昔悃。

花盈賑二佛陀一

藤散寂二神祇一

〃 玖 〃 雲 玖 杏 雲 杏 雲 〃 杏 〃 雲 杏 〃

ナオ横丁をするりと抜けて難を除け

俠骨伊達熙

異名美稱多

竿高掲二画旗一

不景気で鴨川踊りやや淋し

未央柳が群れて咲く時。

陶磁器と塗りの片口コレクション

宵も早やから里芋を炊ク

清しさが漲っており十三夜

山田悠

秋風拂二玉綏一

叔媛英才蔵

賢良方凶危

ナウ一割のおまけがついた商品券

太い柱で梁を支ル

非二浮浪一定住

眺めておれば穴を出る蛇。

大地花瑞瑞

中空桜戲戲

平成十年九月一日首  
平成十年十二月一日尾

○印は因の韵

(於・上鶴間桃夭榭)

雲 〃 杏 悠 玖 杏 玖 雲 玖 雲 子 雲 玖 雲 玖 〃 雲 〃

歌仙 『帆 柱』

鈴木 漢捌

一月は帆柱太きギリシヤかな 斎藤梅子

鏡に映す喇叭水仙 鈴木 漢

おもむろに退職の日は髭剃つて 高田保二

産土の地にすする朝粥 阿部文 明

サッカーの若者駆ける有明を 漢

ピザ・パイ熱く馬肥ゆるころ 梅

探し見る迷路の出口すすき原 文

腕をこまねき思案投げ首 保

川岸のベンチそれぞれ二人ゐて 梅

マニユアルどほり恋のおさらひ 漢

月玲瓏硯の海に蚊の溺れ 保

学校の指示「池で泳ぐな」 文

制札に似顔絵なども描き添へて 漢

椰子の木立に憩ふ青年 梅

彼方なるガダルカナルをな忘れそ 文

慰問袋は母の送りし 保

初花の触るるばかりの窓に倚り 漢

ほつれ髪にも風光る庭 梅

ナオてふてふの動かざること舫ひ舟

ときをり羽根を展く愛しさ 保

キャラメルも天使印の包装に 漢

浮いて来いとは懐かしきもの 梅

より速くより高くめざせ国体を 文

時間空間夢幻のごとく 保

抽象画展にて脳裡混沌と 梅

串焼きの具の丸や三角 漢

霧霽れてあれが噂の紋次郎 保

月夜に後ろ姿去り行く 文

紫苑とも野菊ともなす面影に 梅

靡くそぶりも艶かしくて 漢

ナウ冬ざればなほ眼の奥の冴えざえと 文

吊されしまま冷ゆる草鞋も 保

凧に門前町のなんでも屋 梅

鮑屑など飛び惑ひをり 保

やれ折るな花の命は短きを 漢

乙女椿の麗しき園 文

平成十年一月首 (文音)  
平成十年七月尾



ソネット

『月

蝕』

ルナ・エクリプス

名月を食<sup>は</sup>みて風雅を投影す

梅村光

明

「し」の字で挑む大鱸釣

鈴木

光

美<sup>は</sup>しき児を産め紫の桔梗売り

鈴木

漠

バックコーラスハモる揺り椅子

鈴木

漠

高砂の嫗、翁に陽<sup>ひ</sup>はこぼれ

鈴木

漠

胸の奥にも埋<sup>うづみ</sup>火<sup>び</sup>を抱き

鈴木

漠

薄氷を覆<sup>ふ</sup>まざるもよし朝まだき

鈴木

光

尾曲り猫は希<sup>ま</sup>れな傍<sup>そば</sup>惚<sup>ぼ</sup>

鈴木

光

芹なづな杉菜酸<sup>すか</sup>模<sup>はんぼ</sup>ジャワ更紗

鈴木

漠

童話紡ぎぬ花の朧<sup>おろ</sup>に

鈴木

漠

茜雲消えて春月徐<sup>おもしろ</sup>に

鈴木

光

棗包みの紋の清らさ

鈴木

光

遠雷を異郷の町に妹<sup>いも</sup>と聞く

鈴木

光

虹の中より手と手つなぎ来<sup>く</sup>

鈴木

漠

平成十年一月首尾

(於・徳島・マリニピア)

歌仙 『柚平先生九十一歳祝賀』

名古屋子捌

金メダル得ての笑顔や春の雲 大林 柚平

祝杯に映ゆ梅の紅白 土屋 実郎

蛤に描かれし雛も飾られて 近藤 栗子

孫や曾孫の名前まぜこぜ 近藤 蕉肝

佇ちつくす風の見えねど月揺れる 岩永 極鳥

萩の垣より猫のあらはれ 名古屋 則子

ウ嫁が来て案山子に着せる洒落れたシャツ 鳥 則子

恋の遍歴隠し通して 栗 則子

論文は泉式部の暮し振り 肝 栗

あいつはできるニユースキヤスター 肝 栗

スコープで覗けば白虎いきいきと 肝 栗

宇宙のどこに時は生れし 肝 栗

ステテコにリュック背負ひて月旅行 栗 則郎

三疊下宿暑さ耐へかかね 栗 則郎

叡山の門前古き漬物屋 栗 則郎

損益分岐点に真心 栗 則郎

観潮の眺めは花の岬より 栗 則郎

霞む夕陽に出船入船 栗 則郎

ナオふらここの児は浮雲を蹴り上げて

ホームレス氏がかつと目を剥き

宝くじ拾ったそれが大当り

性格反対夫婦円満

このところ見知らぬ女家の前

浴衣ハツ口のぞく刺青

ハンディホン汗の指先ねばりつき

ざぶん・どぼんとたかるシャブシャブ

ボロ市に流転の仏立ち給ふ

街道筋に歳晩の月

バイカル湖帰国祈りしこともあり

盲の詩人バラライカ弾く

ッ单位数足るや足らずや若者等

趣味が嵩じてプロの写真家

テデイベア午後の茶房に黙しみて

タマゴツチにも駄々をこねられ

靖国の社に花の薪能

五選町長囃す囀

平成十年三月二十二日首尾 (於・双樹庵大林柚平居)

鳥 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

栗 則郎

『第十回青時雨忌追善俳諧連歌』

「髓」を読むことを日課の柿若菜  
座敷幟へ窓よりの風  
温暖化熊蟬の声都心にて  
宿題忘れ遊び呆けし  
マイカーに紅葉のマーク月を友  
芸術祭へ出品の壺  
鱸釣沙入川に汐ふくれ  
五右衛門ぶろに新酒匂はせ  
サークルに思ひがけなきラブチャンス  
カラオケルーム揃ふデュエット  
出前寿司ネタもごはんも大振に  
予算審議に党の駈引き  
満塁に代打の代打ホームラン  
鳥も凍て、神宮の月  
木枯に甘酒屋台大繁昌  
何でもありで困る世の中  
祝事のつぎつぎつぎく花の山  
鐘の音ひびき渡舟かげろふ

土屋実郎  
小林静司  
和田忠勝  
秋山よう子  
蛭海停雲子  
菅谷有里  
小張昭一  
近藤蕉肝  
高島幸子  
近藤栗子  
杉浦ちゑ  
山口良子  
和田洋子  
和久井八重子  
村上敦子  
大津博山  
岩永極鳥  
白井暎子

南東にふわりと飛んでゆく風船  
双手をあげて駈け抜ける児等  
長野にはホテルホテルの後遺症  
いぶる蚊遣に顔をしかめて  
電子辞書文字出ない筈電池切れ  
送るばかりのテレパシーなる  
クラス会初恋の人やもめとや  
そしてこうしてあとは何やら  
宇宙船耐用期限とうに過ぎ  
仏よろこぶ俳筵の月  
爽籟を来て一門に乱れなく  
卒寿の秋を将棋三昧  
ナツ口笛も軽くステップなほ軽く  
低カロリーの餌の売り出し  
スポーツに流行るイメージ訓練法  
雉子の親子みえつかくれつ  
髪美しき師を偲びつつ花の頃  
春を借しみて忌を修しけり

貴賓東明雅  
宇水冬男  
清水敬信  
宗匠名古則子  
脇宗匠土屋実郎  
知司小林しげと

執筆  
花司  
香元  
座配  
硯配  
小村静司  
今村佐久子  
和田正勝  
蛭海停雲子  
村上敦子  
高島幸子

小林しげと  
高津明生子  
柴田寿賀  
今村佐久子  
名古則子  
藤沼和恵  
引地冬樹  
宮下太郎  
渋谷盛興  
清水敬信  
上田溪水  
東明雅  
丹下博之  
赤田玖實子  
沢田洋々  
宗匠  
執筆

平成十年五月二日

(於・浅草伝法院大書院)

半歌仙 『伊東桃庵翁追善』  
寒雀

土屋実郎捌

何事も我慢我慢よ寒雀

桃庵仏

冬芽ふっくら読書三昧

土屋実郎

豆剣士打ち込む竹刀距離とって

小林静司

際立つ個性大器晩成

村上敦子

月影に復元なりし火焰土器

菅谷有里

連峰遠く水澄める川

和田洋子

新米のキリタンポはや安売りに

和田忠勝

景況指数すべてマイナス

小張昭一

少子化にアダルトビデオはどめかけ

蛭海停雲子

永久とわかに変らぬ愛はなきもの

秋山よう子

今日の運ギツクリ腰に要注意

高島幸子

金属探知鳴って冷汗

白井暎子

甚平着て地雷廃止を月に説き

岩永極鳥

秘蔵の銘酒派手に振舞ひ

今村佐久子

勲章と系図は家の宝物

小林しげと

老いて初めて見ゆるものあり

杉浦ちゑ

ひと一人浄土へつゞく花の道

名古則子

師友と句筵嘔の中

高津明生子

平成十年二月二十一日首  
平成十年三月十六日尾

(文音)

半歌仙 『僧庵に』

田中きみ捌

僧庵に湯の滾りをり冬牡丹 屋代孤月

背戸の葎に笹子鳴く頃 田中きみ

刻忘れ大道芸に見とれいて 滝田政敏

唐三彩の皿をいたただく き

新築の薨を照らす今日の月 政

遊歩のみちにすすき揺れおり 高梨ゆり子

山里に番とんぼの殖えてゆく 孤

ネオン届かぬ町裏で逢う 菊岡実

指切りを交して送る終電車 政

シャンソン流れステーキはレア 実

齒科院の金属音になやまされ 孤

氏神様に深々と礼 き

夏の月竹馬の友と酌み明かす 孤

波打ち際のキャンプ賑やか ゆ

中国の朱鷺を迎えし佐渡ヶ島 実

嬰を背負いて棚田下りくる ゆ

花びらを糸に通じて首飾り 政

瀬頭のぼる若鮎の群 実

平成十一年二月十五日

(於・屋代孤月宅)

歌仙 『夏に入る』

二村文人捌

果物に目のなきわれは夏に入る  
志田素 諷

すずしき風の渡る中庭  
北野真知子

じゃんけんの後はしばらく声もなし  
いぬじま正 一

角を曲がって紙芝居来る  
江沼半 夏

水平線まるき月洩る海女の小屋  
富尾翠 苑

運動会のシャツを繕う  
藤縄慶 昭

蜂の仔を掘りて信濃に住み馴れし  
夏

大振りの杯交わす一献  
滝沢尚 子

いつからか裏木戸少し開いており  
浜田今日子

耳朶に残れる甘き囁き  
大畑蛍 魚

授からぬ子供を願う鬼子母神  
一

水に折れこむ枯蓮の骨  
蓮花静 子

冬の月いつもどこかで戦の火  
平沢敏 子

誤爆にだれも謝りはせず  
山中狐 太

熟年のふところにある三くだり半  
大村歌 子

野性に戻る血統の犬  
松永幸 子

夜神楽の和合ひと幕花簪  
魚

足元近くきぎす飛び立つ  
宮村千鶴子

ナオパリに来て遙か故国の春想う  
昭 真

トツプモデルのショーの始まり  
一 尚

会う時は傘を忘れぬ雨男  
尚 一

なじみの顔の揃う釣掘  
尚 一

暮れ初めてくぐる蕎麦屋の麻のれん  
夏 幸

原稿用紙マス目埋まらず  
夏 幸

雑踏のときに途切れる風の辻  
夏 幸

今更ながら老いらくの恋  
静 昭

「ケータイ」と「茶髪」のデート流行る世に  
静 昭

直球勝負挑む頑な  
太 昭

鯖雲に紛れまた出る昼の月  
静 太

無縁仏に手向けたる菊  
尚 静

ナツ干柿に猿よけの網めぐらせて  
尚 静

怖い話しにしがみつく孫  
一 真

カラオケで「もののけ姫」の曲流れ  
太 一

煙ひとすじ走る S L  
真 太

花大樹ふと真似てみる師の身振り  
二村文 人

髪と肩とに蝶を止まらせ  
内田湫 子

平成十一年五月九日首尾  
（於・富山県知事公館）

半歌仙 『真夏日や』

砂井斗志男捌

真夏日や亭にひびきしハイヒール  
砂井斗志男

出合うれしき石に打水  
吹田健児

それぞれに松の姿を讚うらん  
竹内守善

緋の傘を立て野点弁当  
真田ゆかり

細竹の丸窓透ける月明り  
斗健

少年の来る秋のたけゆく  
健斗

ウ琅玕の池に蓮の実はらりとぶ  
守健

部屋しめきつてそつと頬寄せ  
ゆ斗

突然に鳴り出す携帯「あなた好き」  
斗健

高嶺より見るふるさとの寺  
健斗

ぼんやりと釣り糸垂らすこの至福  
ゆ守

南原総長短歌の碑建つ  
斗健

冬月を異郷の空に見る孤独  
斗健

熱燭ちびり眼鏡くもりぬ  
健斗

この国の戦後貧困快哉快  
守健

ナイフをかざす今の世は闇  
ゆ斗

たこ焼きの小屋は落花の中にあり  
斗健

燕ひらりと名園の使者  
健斗

平成十年七月四日首尾

(於・栗林公園内「泛花亭」)

『透ける波』

初風や貝殻白く透ける波 四十九院科

松百態に青む冬草 鶴田秋甫

昨夜の雨太き氷柱の下りゐて 大野利丘

齡を忘れて赤きマフラ 高橋溪声

月まくる单身赴任の夫の上 藤代羽都江

ほのぐ包む湯煙りの宿 塚腰朝子

ウ冗談を話す仲なり酒を酌む 秋甫

香りはいつもシャネルの五番 利丘

片思ひ互いにそれと思ひつめ 科峰

年の割には初なお二人 溪声

陶芸の夫婦茶碗で飴湯呑み 羽都江

今宵困むは下戸ばかりなる 那須信子

峡の底灯の点々と月清し 秋甫

休耕田に揺るるコスモス 信子

秋日和古墳の壁画美女の群 朝子

石佛二体辻々に建つ 秋甫

山の辺のせせらぎ埋める花笈 利丘

ジョギングの頬撫づる春風 溪声

ナオ 鶯笛口開けて鳴くよき機嫌 科峰

どれも懐かし駄菓子屋に入る 羽都江

消えかけた下町の情残し居て 信子

味噌醬油の貸し借りの仲 秋甫

凍てる朝千枚漬の樽洗ふ 利江

堀抜き井戸に湯気立つ寒さ 溪声

同窓会教へ子ともに木の葉髪 科峰

古典講座に雅びな恋文 羽都江

不倫にも四十女の一理あり 秋甫

どこかで疼く背徳の責め 信子

黄金色尾を引き海に月昇る 利江

紅葉踏み分け奥宮につく 溪声

ナウ 河原にてはらから集ひ芋煮会 科峰

街の灯りがまばゆいばかり 羽都江

さんざめくパチンコ店に誘はれて 信子

心臓手術離陸する飛機 朝子

畑弁当開く下総花の里 秋甫

春日やはらか縁側を差す 利丘

平成十年九月一日首  
平成十一年三月七日尾  
(文音)



歌仙 『葉桜や』

葉桜や子らハミングし帰り来る

吉藤一

郎

とつぜんぱつと高き噴水

田島も

郎

義理に聴く講演眠くよそ見して

田島竹

郎

碁敵の顔消えつ浮かびつ

郎

望の月陶の狸のどんぐり目

郎

稲刈機来てあつけなく済む

郎

ッどぶろくの祭に弥宜も酔ひつぶれ

郎

どの娘もみんな楊貴妃に見え

郎

チャンスにはなぜか言へないプロポーズ

郎

ダンスパーティーはねた街角

郎

六地藏倒さんばかり暴走車

郎

涼しくさつと鼠捕り抜け

郎

憧れの月の氷河の縁に立ち

郎

巨泉も移り住める魅力よ

郎

土産にはメープルシユガー匂ふ菓子

郎

珈琲豆をかるやかに挽く

郎

みちのくはあつといふ間の花ざかり

郎

あがりし雲雀垂直に落ち

郎

ナオサイレンに海市のたつとどよめきて

郎

恋しき彼がみごとなシュート

郎

胸きゆつと涙こぼるるひとことを

郎

演技うるさき鬼の監督

郎

ゆき詰まり尺蠖天を仰ぎをり

郎

順番待ちの政権病者

郎

夢の中桃源郷も疲れ果て

郎

頬被りして歩くぬかるみ

郎

びゅうびゅうの風に後ろを向く人も

郎

屋根の上からオバQの声

郎

遠巻ける警察犬に月青し

郎

諸齧りつつ試験勉強

郎

ナウ菊干して枕作ると母の言ひ

郎

空気がうまいふるさとの駅

郎

名を成して錦を飾る書道展

郎

枯山水に白砂敷きつめ

郎

花吹雪渦を巻きつつ城堀へ

郎

もたれ合はせて栄螺焼く網

郎

平成十年五月二十九日首  
平成十年九月十八日尾

(文音)

半歌仙 『道観の門』

坂手手留捌

星雲は星のゆりかご木の実降る

石崎 葵

月光に佇つ白髯の翁

杉田 茅

無人店うろぬき大根並べいて

柳沢そ の

アンドウトウロアと釜の蓋とる

葵

せせらぎに合わせゆる通し鴨

岡本夕 子

沛然として喜雨の到れり

坂手手 留

夢うつつ夫運びくるアールグレー

夕 留

ブイヨンのあく掬いつつ歌

鈴木六 美

手をかさね蠟燭越しに目で話す

香林 香

ヴィヴィアン・リーの若き戯れ

平田宏 子

NIKIHOUSE大迷惑の黒いシャツ

その

たくらみの糸単純に編む

手 六

地震激し血の色のごと冬の月

六 手

枯野を行けば道観の門

茅 手

人間の絆薄れて川流れ

手 夕

背のびしている衣更着の子ら

夕 葵

異国への荷に初花の一枝添え

葵 宏

宇宙帰りの蝌蚪のすこやか

宏

平成十年十二月八日首尾

(於・東京下北沢 にほんご舎)

半歌仙 『桃の籬に』

窪田阿空捌

谷の家は桃の籬に覚めつるか  
窪田阿空

巢箱の卵もう孵る頃  
園江りん女

春愁い少年の瞳に海ありて  
空

白いヨットの描く航跡  
空

ギター弾く今宵の月をエトランゼ  
空

なびく薄の穂むら見渡し  
り

ッ初狩の弓手り、しく野を駈けり  
り

霧の晴れ間に物濯ぐ影  
空

嫁としてカナダのとある町に住み  
り

噂話もおおにほどほど  
空

この頃は忌に来る人もちらほらと  
空

酒に浮かべる刻の一片ひとひら  
り

冬月夜千恵子の切絵あどけなく  
り

深きしじまに眠る小兎  
空

インターンのメス走らせる無影灯  
り

鶯餅に草餅の旗  
り

気まま旅名も無き寺の花に会う  
り

弥生七日の濃やかな空  
空

平成十年三月二十日首尾

(於・池袋滝沢)

歌仙 『一步出て (K98・67)』

—祝小出きよみ句碑建立—

窪田 薫捌

一步出てつひに二步出づ墓 小出きよみ

三々五々に蟻達の午后 窪田 薫

パンの生地布巾しめらせ包むらん 式田和子

サボかたかたと少女歌へり 山元志津香

満月に吾ら見られてゐたるなり 八木莊一

山黒くして澄む川の水 海野金魚

凹凸の空 罐動員鳥威し 笠間文子

萬物はみな戀と言ふべき きよみ

ああロミオロミオは何でロミオなの？ 薫

別れやしない凍れくらゐで 山澤壮彦

雪まろげ砕けて散りし道の果 永田圭介

伊能忠敬制作の繪圖 佐藤俊一郎

遠眼鏡都の様子逆様に 齊藤基生

俯瞰は不可と城は壊され 文子

初蝶の吹きあげられて寄り處なき 志津香

芽生えは宇宙に於ける現象 圭介

月おぼろ媼舞ひくる花篝 宮下太郎

能のことなど儂やわからんのう 薫

ナオ 聲明とギリシャ魔法よく似たる 文子

香たちこめる夏の暁 澁谷 道

風涼しバキュームカーの走る町 圭介

草茂り熊蜜を嘗めをり 中野嘉 弘

チラシには「低利で融資致します」 塚本田天志

隣りなにするひとぞ冷まじ 文子

この秋はフロッピー・ディスクでする讀書 道

文化の日には晴れて結婚 狩野康子

飛行雲寝待ちの月をよそにして 足立かほる

くすりのみのみ羊數へる 佐藤千賀子

ありがたやかたじけなやと坐る猿 きよみ

どう轉んでも忘れないでね 四方章夫

ナウ ○候補景氣回復できますか？ 嘉 弘

葱を背負ひて鴨よ來い來い 薫

問屋でもさうは卸さぬ炭俵 千賀子

合はぬ帳尻合はせニンマリ かほる

無限なる花片穢土に降りそそぎ 康子

鶯こぼす糞ふんだんに 莊一

平成十年五月十九日協起 (文音)  
平成十一年五月 七日満尾

出花 『宝 船』

岡本星女加朱

宝船七福神はたれたれたれぞ 岡本星女

いとにぎやかに初荷囃せり 林道子

旅支度紙衣を忘れたまうなよ 村田はるお

雨のあがりし干傘カラフル 福井翠

アルテミス射る弓に似て三日の月 葦生はてお

新蕎麦を打つことがもてなし 田伏博子

つくばいに鶉の来てとみこうみ 若林りえこ

ヒエログラフのラブレターとか 星野焱

今業平お見合い二十六人目 民岡照子

猫の妻にはひげがもしやもしや 星

治豊酒にかこつけ過ぎす「窓の梅」 博

風まかせなる赤い風船 え

車折くるまざきとは読みにくきこの地名 焱

板戸の鯉の夜毎ぬけ出す 照

瓶子へいし倒れ候いぬとぞ俊寛は はてお

鬼才投身自殺のニュース 翠

揚花火伊賀の奥なる島ヶ原 はるお

山ほととぎすにしらむしののめ 道

平成十年一月四日首尾

(於・俳諧寒菊堂)

十二調 『廊踏めば』

岡本星女捌

廊踏めば鳴く鶯も老いたりや

岡本星女

メイストームにさき濁る川

安田ただし

コンビニの山菜おにぎり百三十円

奥本詩流句

大阪かたぎ阿吽のかけひき

歌川山 黛

萩のみち風にうねくくねくと

村田はるお

何のそのとて露をしとねに

黛

うきひとのひそめる鐘を三巻き半

星

赤のワインにボンゴレパスタ

句

月読命の駈けたまうなり冴えわたり

お

旅の鞆に正露丸など

し

つれあいも春ともなれば寝ぼけがち

奥本晋 介

暮れかねている遠き山々

黛

平成十年五月十七日首尾

(於・京都・知恩院和順会館)

賦物お化けづくし

十二調 『カラコロと』

カラコロと灯籠の灯の近付き来

鈴木長 駆

盆の仏を閻魔じろりと

星野 焱

理科教室夜は骸骨踊るらん

岡本星 女

ろくろつ首のもつれて縮まず

星 焱 駆

蛇じやともなりやわか渡らで日高川

星 焱 駆

鬼火の困む芳一の琵琶

星 焱 駆

のた打って狼男月に吠ゆ

星 焱 駆

雪女とは美人なりけり

星 焱 駆

ドラキュラに秘めたる恋のありやなし

星 焱 駆

腕取り戻しあらわす正体

星 焱 駆

猩々舞い出でよめでたき花の宴

星 焱 駆

お玉杓子のえらい化けよう

星 焱 駆

平成十年八月二十三日首尾

(於・京都・梅の花)

俳諧寒菊堂三つ物連句碑建立記念

歌仙 『今あらば』

今あらば着てましもの、紙衣かな

岡本松濱居士

かき均したる埋火の灰

岡本春人居士

雪女郎となりよりそはんきみがもと

岡本星女

ひとりでしまる庭の枝折戸

田伏博子

雀チュツチュツ有明月のしらみつつ

林道子

どんぐり独楽のよくまはること

若林りえこ

ッしづしづと奉納相撲の土俵入り

民岡照子

畑も作り御塩田も守る

奥山とみ子

居酒屋は單身赴任の溜り場に

岡田陽邨

ふと目が合つて忘れぬ人

山根於京

大胆にそれからのことひそひそと

村田はるお

泣いて笑うて未練たつぷり

岡本耕治

ひと夏の終りを月の見てをりて

福井翠

秘仏は十一面観世音也

岡本道子

九十翁に肩お貸しする石畳

由川慶子

母ゆづりなる笑顔うつくし

岡田麗

連句碑へ盛りの花を翳さばや

近松寿子

日本のへそといふ地のどやか

林由子

歌川山黛

逝く春の頼政まつりゆゆしくも

星野焱

気の向くままに降りてみる駅

奥村勘甫

時計屋の時計みな十時十分を

杉本一夫

おしくら子燕巢より落つなよ

小林樹巴

行きつ戻りつ河原に翡翠探す汗

辻静穂

魍魅魍魎のまつはりつく夢

堀井寿郎

浴室の鏡に老いのありありと

田島竹四

丹精の臨画虫魚百態

葦生はてお

オフエリア月の光にただよひて

二上貴夫

ふつつつ石榴の実噛むジェラシー

持株は底値知らずに秋深む

隣り合はせの地獄と極楽

ナツ空つ風何やら飛んでゆくらしき

岩橋史郎

藤田美根

清水幾湖

高本時子

二塚元子

民岡あきら

永井一子

筑波に縁る道ひとすぢに

平成十年四月十五日首

平成十年八月二十六日尾

(文音)



半歌仙 『恋づくし  
恋の陥穽』

初懐紙膝送り

初懐紙恋の陥穽待ち受けし 中尾青 宵

一杯の屠蘇うかと頬染む 彦坂範 子

捧げるに束は菜の花恥ずかしく 若松藍 香

卒業待たず君の懐ろ 赤松よう子

異国語で愛確かめん瀧月 大島柳 絮

もどかしき宵触れよ柔肌 蒲原常 盤

ウ王たちを虜に卑弥呼神獸鏡 加藤亀 女

写されて知る過去のロマンス 藤沼知 恵

好きといふ地酒取り寄せ四畳半 岩永極 鳥

手練手管の尻尾見え見え 寺田喜八郎

ぬめやかにルソーの女豹寝そべりて 山元志津香

心の臓まで食らふお鉄漿 浅沼小 葦

弔ひの月夜の閨に漏るゝ声 福永千 晴

われ泣きぬれて鴉の生贄 範

枯野原想へば昔おくてなる 藍

文集の詩多き告白 よ

美少年肩へひらりと花衣 恵

厩出しの馬妙にめんこき 絮

平成十年一月九日首尾

(於・藤が丘地区センター)

短歌行 『何のつもり』

福永千晴捌

ナ裏町の小店ですけど来てください  
 緋のモンペこつまなんきん  
 星座より星のかけらが落ちこぼれ  
 バタフライナイフおしり掌の内  
 ゲームメーカーのみが不況を横に見る  
 走馬灯なり世紀いま逝く  
 そよぐ椰子たゆたふ波を月の帯  
 ブレンド香水誰の名を付く

宵美 宵雲 宵千美 雲

梅散りしあとの大雪何のつもり  
 中尾青 宵

出でたる地蟲顔も目も丸  
 寺田喜八郎

卒業歌ロックバンドも加はりて  
 内田美 子

とにかくボタン押せば音する  
 蛭海停雲子

同僚と酒に迷ふも十三夜  
 福永千 晴

ご存知ないか諸の田楽  
 美 郎

唱へるは阿呆陀羅経よ茸の城  
 宵 美

折れなんうなじ艶の若後家  
 郎 雲

溝板をくぐる猫みな濡れ鼠  
 郎 雲

山門の道しんと霜晴れ  
 郎 雲

富士仰ぐ返り花かな二つ三つ  
 郎 雲

手漉の紙に走る絵の筆  
 美 郎

松尾馳 男

旅に出ているいろ恋はしたけれど  
 御油赤坂の短かかりけり  
 花篝時のいのちのほのめきに  
 狂ひ鳴くかのやふな春蟬

宵 千 雲

平成十年三月六日首尾

(於・藤が丘地区センター)

歌仙 『宗旦忌』

松澤晴美捌

<sup>起</sup>濃茶ねる小間の静寂や宗旦忌

松澤晴美

佗びに徹する露地の石露

谷田男児

先進の科学技術を学ぶらん

阿部朝子

追いつ追われつ追われつ追いつ

臼杵游児

島々の影面白き浦の月

中野稔男

父を恋いつつゆるる蓑虫

中野稔子

<sup>承</sup>訪ね来し落葉松紅葉燦然と

中野稔子

秘湯のいわれ今に伝えて

中野稔男

笠とれば鄙にはまれな美女であり

中野稔男

心は燃えど手足悴ける

中野稔男

煩惱をおとすひと撞き鐘の音

中野稔男

スクランブルに渦巻ける街

中野稔男

月涼しビルからビルへ見え隠れ

中野稔男

青磁の皿に盛らる鱧鮓

中野稔男

三世代卒寿を祝う宴果て

中野稔男

明治の写真貴重品なり

中野稔男

大川に花の筏はきりもなく

中野稔男

新入生の並ぶ校庭

中野稔男

<sup>オ</sup>行く雲に情かよわせ惜しむ春

朝

ときどき疼く膝の傷跡

朝

金利ゼロ筆筒予金を頼りとし

朝

晴耕雨読なるようになる

朝

ほととぎす声を落して湖よぎり

朝

しやれた車の止まる別荘

朝

伊達男いくつも付けしイヤリング

朝

当てにはならぬ閨の約束

朝

知らん顔見て見ぬふりの道祖神

朝

だんごタンゴのはやる世の中

朝

スキーヤー月にはしやぎて雪まみれ

朝

暖炉にゆらぐ炎美し

朝

<sup>オ</sup>故郷のむかしむかしが本となり

朝

エアポートは海を埋めて

朝

共生が合言葉なり新世紀

朝

孕める鹿の瞳やさしく

朝

花の奥心豊かに花の酒

朝

田打畑打農のせわしき

朝

平成十年十一月二十五日首  
平成十年十二月十六日尾

(於・江東区芭蕉記念館)

歌仙 『朝寒や』

中野稔子捌

<sup>起</sup>朝寒やコーヒーに浮くミルクの輪

中野稔子

ビルの迫間に有明の月

松澤晴美

南天の実にさそわれし鳥ならん

阿部朝子

山から谷へ続く鉄塔

三枝霧子

工事夫は目切雪帽真深にし

谷田男児

大きな氷柱をたたたくわらんべ童

朝晴

<sup>承</sup>光背の炎のめらめらと青不動

朝晴

寮歌流るる学園の街

白杵游児

美少女のあまたよりどりみどりにて

朝霧

そつと渡したエアーチケット

朝霧

融けあつて愛の泉にコイン投げ

朝霧

虎の子なくし元の木阿弥

朝霧

月涼し夢は果てなくかもされる

朝霧

待つほととぎす姿見せず

朝霧

図らずも啼き声高き電子辞書

朝霧

そつとほじくる重箱の隅

朝霧

酔客は元禄花見踊り舞う

朝霧

蟹楼消ゆる幽玄の刻

朝霧

<sup>ナオ</sup>ガラシヤの井戸端に墓あらわるる

霧

嘘も真も名口上で

稔

政治家につける薬はないと言う

稔

投網にかゝる魚の数々

霧

恋の華砂の日傘の陰に咲く

霧

短夜明くる抱擁の果て

晴

引窓の少し開かれ詩集編む

稔

火酒あおりてツンドラの民

男

鈴鳴らし郵便ソリがやってくる

男

刀自は目鏡を首にぶらさげ

稔

回天の出撃の島無月なり

霧

水際に立てる色変えぬ松

男

<sup>ナウ</sup>霜降の神籬聳え聖なす

霧

<sup>結</sup>キャンバスに置くイエローオーカー

男

悲しきは孤独な「星の王子さま」

霧

笑いころげる万愚節の日

晴

花冷えのサラダにまじる貝の殻

霧

鞆こいで宇宙さかさま

男

平成十年十月二十八日首尾

(於・江東区芭蕉記念館)

『白梅や』

阿部朝子捌

<sup>起</sup>白梅や空に広がる無垢の詩

阿部朝子

フルートの音の乗れる春水

篠崎ゆき

若駒のたて髪たてて走るらん

平沢茂雄

大円形に添えるスタンド

天津伎依子

十五夜のおとぎの国へ誘われ

岡田透子

急に鳴子のからからと鳴る

ゆ

<sup>承</sup>秋をせき母の危篤に駅を次ぐ

伎

ささくれ立ちし海の凧ざたり

朝

仮装して客の深酔う赤道祭

透

耳をくすぐるハスキーな声

ゆ

ロザリオをかけてあなたに染ります

朝

枯るるまでなおすがる寄生木

透

織月に木菟の目玉のまん丸く

伎

ふくれつづける不良債券

透

次郎長も忠次も所詮義理人情

茂

二十世紀も早や世紀末

朝

花守は頑固に薬使はざる

宇咲冬

男

逃水追いて旅券落せり

ゆ

<sup>ナ</sup>一宿も一飯もある放哉忌

透

<sup>ナ</sup>縁日に昔のままの飴細工

清水うた子

疼く虫歯に会議長引く

川岸富貴

校長はつんぼ棧敷の飾り物

朝

国境越えて自由交際

う

甘い蜜いつしか道を踏み外し

ゆ

Fワンレースただひた走る

う

碧い眼の人形だけが留守まもり

透

芝生の庭は荒れ果てしまま

富

水音のかすかに聞こゆ夏の月

朝

波璃に張りつくやもりキョロキョロ

ゆ

<sup>ナ</sup>釣忍さげ来し老父矍鑠と

富

<sup>結</sup>将棋にしようか囲碁にしようか

う

顎まで沈めし心地よき風呂

ゆ

窓に展ける淡き山脈

ゆ

城跡に楊貴妃と言う花散りて

透

遠のく翅音蜜蜂の群

富

平成十年九月九日首  
平成十年十月二十日尾

(於・芭蕉記念館)

『神話の星』

宇咲冬男捌

<sup>起</sup>山眠る神話の星の語りだし

宇咲冬男

ときおり低き木菟の声

志摩知子

春隣ひとり揺椅子ゆらすらん

衛藤圭子

画筆に見入る青き瞳の美し

知子

煌々と地球の裏に月育ち

飯田春紅

整う垣に添いし南天

沼尻香寿子

<sup>承</sup>短冊のかかりて古りし千代女の忌

知子

伝言板に見憶えの文字

圭子

欠点も嫌と言えずに好きになり

紅香

きびきびとしたパーサーの所作

香

動かざる木靴工房鳩時計

圭子

運河を繋ぎ舟の行き交う

平北ハジム

寒月光母はどうして在すやら

阿部朝子

やや濃き味の大根の煮え

圭子

頭陀袋ふくらまし来る修業僧

ハジム

販売機より缶がとびだす

圭子

爛漫の花を呼び込む花筵

香

逃水追いて漕げる自轉車

紅

<sup>オ</sup>天界に空席のあり揚雲雀

加舎逸子

<sup>オ</sup>ダイオキシンの見えぬ恐さよ

小林志保子

卓上の夫の遺せし筆一本

知子

今日もコロツケ明日もコロツケ

志

試着して財布ついつい軽くなる

圭子

開店祝いに急に招かれ

谷田男児

地ぼとりと汗の匂いと酒の酔い

圭子

「失樂園」を倣う夏の夜

香

街をゆく男はみんな使い捨て

紅

ゴミ埋めたてて文化都市現る

児

爽やかにテニスコートを照らす月

花巻珠枝

芒を揺らす高原の風

児

<sup>オ</sup>病室の壁に馬追いすいととび

紅

<sup>結</sup>門限やぶることの天才

珠

望まれて宰相らしき顔となり

香

雪代岩魚三宝に乗せ

珠

花遊行今年は貴船去年は嵯峨

逸

はるかに展く末黒野の景

朝

平成十年三月二十日首  
平成十年四月二十日尾

(於・芭蕉記念館)

世吉 『風の師走』

大野鶴士捌

轟々と空吹く風の師走かな

大野鶴士

葉の一枚の残る裸木

村瀬仁子

黒釉の茶碗にうすき茶を点てて

藤塚晶子

旅に立つ子と羊羹を食ふ

清水貴久彦

親時計なにごともなく時刻み

松尾一保

銀漢越ゆる宇宙遊泳

安藤美保

はるばると月に帰りし姫訪ね

河内克彦

静かの海に蕎麦の刈らるる

大坪洋子

盗族の一味の宴はどぶろくで

大坪洋子

寝押しのスボン線がダブルに

大竹恵子

Postar がプレイガイドにべたべたと

大竹恵子

洋画みたいにキスもできたし

大竹恵子

言ひ訳を三つ考へ朝帰り

大竹恵子

猫見つめつつ珈琲を飲む

渡辺美子

アロハシャツハワイはどこも日本人

渡辺美子

拳銃の捨てられし夏草

渡辺美子

白玉は父の好物月涼し

渡辺美子

年金の価値落つるこの頃

渡辺美子

内定を取り消す電話手短かに

渡辺美子

慰める彼そばにゐてこそ

渡辺美子

宇野千代も逝きたり花は薄墨に

渡辺美子

山奥の村春はふたたび

渡辺美子

ナオ 燕来る役場・学校・駐在所

義士祭迎へ惚ぶ大石

なによりも減塩料理心がけ

柵の劇薬知らぬ姑

枯葎土蔵の壁のはげ落ちて

なまこの首はどこに目は手は

モンスタージュ写真の顔をつくづくと

逃亡暮らしすでに三年

お互ひの連れ子にさらに子供増え

ねずみ講にもありし限界

検疫でコレラとわかるツアー客

箸袋までアルバムに貼り

竹林の影こまやかに月昇る

案山子は一人夢を見るらん

棟梁と肩組み走る運動会

目を閉ぢて聞く国歌斉唱

今日もまた朝刊ためるドアの内

真正面に都庁聳える

屋上に稲荷を祀る百貨店

遠雷のまま終はる春雷

花の雲ボートを池のまん中へ

蝌蚪泳がせる水の明るさ

各務恵子

彦一 仁洋 仁紀 彦士 保晶 仁晶 惠彦 紀一 仁彦 惠一 子

平成九年十二月二十一日首  
平成十年二月十日尾

(於・岐阜西柳ヶ瀬羽酒)





半歌仙 『青鬼灯（しりとり）』

片桐半一捌

オ雨だれの青鬼灯にはねにけり 片桐半一

栗単がひらりと風鈴の軒 今村佐久子

季刊誌の編集後記書き上げて 久

天麩羅うどん注文するか 伊藤孝次

篝火に舞ひあざやかな月を浴び 久

美酒酌みてをり豊年の席 半

ッ啄木鳥のまた戸袋に穴を開け 久

化粧直して彼にアタック 孝

崩れしは私の心砂の城 久

ロザリオ飾るルルドの泉 孝

嶺に立つ喜び満ちて車椅子 半

筋書き通り運ばぬもあり 山口和義

理解してやれと凍月囁きぬ 久

抜きさしならぬ借金の山 栗原暁子

摩訶不思議仏の力現はれて 岩波浩吉郎

天気予報は春の雪とか 栗原宗八

かえり見る岬は花の衣纏い 久

一家総出であげ連風 孝

平成十年七月十日首  
平成十年八月二十七日尾

(於・東京都港区港南区民センター)

冠沓付  
愛媛

『更

衣』

井戸可奈女捌

オそ 袖掬ふ風の季節や更衣

鈴木春山洞

樹々をすかせる初時鳥

矢野勝 三

で 木偶でくの坊云ひしころから仲間にて

松田靖 夫

珈琲飲んで右と左へ

へ 井門可奈女

す すすく育つ吾が孫月高し

井ノ口カズ子

珊瑚う熟れて籬まがき華やか

か 楊井糸 男

ウく 空海の巡錫の地に水澄める

後藤波 久

ジーパン姿似合ふ二人も

も 力 糸

ふ 振り向けばどのカップルも真つ最中

糸 力

他言は無用放れぬ心

ろ 力 三

か 貸し倒れ公的資金救はれて

三 奈

中国洪水テレビ見入る児

こ 奈 糸

ぜ 膳所の浜芭蕉も眺む凍てし月

糸 力

地酒を酌んで交すおでんやや

や 力 波

の のんぼりの票を集める予備選挙

挙 波 靖

春の潮に網を引きつつ

つ 靖 奈

き 汽車の行く野山に花の咲き乱れ

れ 奈 波

山椒魚もぐの潜る水の瀬

せ 波

平成十年八月十九日首尾

(於・松山市民会館2F)

冠沓付 愛媛 『夏野』

鈴木春山洞捌

オカ 隠れ沼一片光る夏野かな

鈴木春山洞

山鉈腰に袖の薫風

井門可奈女

く 九分九厘出来上りたるハウスにて

大本まこと

ナイスボールを投げる児良いかな

弓崎雅美

れ 連獅子の白髪に月遮さへぎらる

倉本淑女

秋笛を吹く女は誰方か

林半星

ウぬ 滑茸ぬめだけの味噌汁盛りし赤き碗

奈洞

手料理出すもおもてなしなの

奈洞

ま 真つすぐに暑き沙漠を恋いち途ず

雅洞

浴衣の乱れ直し直しつ

ま洞

ひ ひらひらと落ちてゆくもの音もなし

半洞

男好みの趣味あるさうな

淑洞

と 朋輩とも誘ひ凍て月の下繰り出す

淑洞

テレビ観戦密柑ほうばる

奈洞

ひ 火の車アジア経済それぞれに

ま洞

蛇穴を出で草に潜るか

雅洞

ら 礼拝堂十字架に美はし花の雨

淑洞

困む恩師に柔き春の陽ひ

半洞

平成十年六月二十三日首尾

(於・愛媛県生活文化センター)

歌仙 『囀 や』

宇都宮柏葉捌

囀や日吉神社に文化財 宇都宮柏葉

遠足の児の黄帽子の列 渡部伸 居

招かるる雛祝の座敷にて 長井實 平

古りし時計の刻告ぐるなり 渡部就 子

裏山を離れし月の青白く 小池芳 恵

手に手に持てる穂芒の束 居 葉

晩秋の由緒の寺を経めぐりし 平 居

彼の好みのでレス新調 就 平

コンサート聴きに出かける二人連れ 居 葉

医者 of 洩らせし言葉気掛り 芳 就

政策も民もそちのけ都知事選 居 葉

笑顔の会釈雑踏へ撒き 平 居

納涼の屋形船にて月を待ち 就 平

風鳥草は庭に揺れつつ 芳 就

温泉宿の客それぞれの里訛 「だんごの唄」でオウム宣伝 居 葉

散りやまぬ花の嵐の中に佇ち 居 葉

ナオ 牧場を駆ける春駒の群

凧合戦若人達の威勢よく 就 平

研修終はり地方配属 芳 就

君が代の是非を論じて時忘れ 平 葉

世相を映す新聞の記事 就 平

Jリーグ野球に迫るファンの数 芳 就

熱燭呷り口のなめらか 平 芳

過疎村に残せし父母の身を案じ 就 平

週に一度のデート楽しむ 葉 平

駆け落ちで暮せし頃の思ひ出も 芳 葉

絵手紙に見る友の近況 大野順 子

月天心我が夢叶へさせ給へ 就 子

奥入瀬川の紅葉訪ねて 葉 就

ナウ 鮭を糺る嘎れ声響く北の町 平 葉

親子で通ふ福祉センター 順 平

宇宙旅後に続けと千明さん 就 順

惑星縦に並ぶ西空 平 就

満開の桜樹囲みて花の宴 芳 平

隴のなかに聞ける笛の音 順 芳

平成十一年三月二十五日首尾 (於・松山市小野公民館)

半歌仙 『花一望』

山根於京捌

才伏屋とて花一望の奢りかな

若松徳衛

酒溢れさす大鮑貝

松井郁子

旅鞆ルルルと電話うららかに

山根於京

くじゃくが羽をひろげたる時

御辺卯徑

良夜なるタンゴ聞きたし踊りたし

衛京

帯は手描きの秋のくさぐさ

京

ッ鈴虫に困まれて住む老和尚

徑

赤提燈はおいでおいでを

郁

不透明なる空間のある二人

京

親を説きふせもらひたる嫁

徑

牧牛の大きな目玉でにらまれる

郁

ガリ勉効なくまた落ちこぼれ

京

神楽殿早や閉ざされて冬の月

徑

着ぶくれいとはず藪医者先生

郁

振り売りの志摩訛りとはなつかしく

京

「若布のみち」を煮るか漬けるか

徑

櫻狩バスは大ゆれ小ゆれして

郁

浮灯台に遊ぶ春潮

京

平成十年四月九日首  
平成十年五月十日尾

(於・山根於京宅)

半歌仙 『電 撃』

西関 清捌

電撃の結婚聖子五月かな  
中尾青 宵

更衣とてドレス純白  
西関 清

晴れたれば空の高みに鳶舞ひて  
加藤亀 女

植林かくす遊歩道なり  
大島柳 絮

露天商閉めて月光仰ぐ妻  
大木圭 菟

生活といふ語負へるや、寒  
巖 涼 江

隣家より貰ひし魚は菊添へて  
関戸逸 朗

子等それぞれに見ては手を打ち  
野田満 水

久々に旅へ誘ひの電話受く  
寺田喜八郎

男浴衣に裾からませて  
宮沢敬 男

ひらひらと星の落ち来る気配する  
宵

縦走の小屋遙か彼方に  
江

寒月に水少なくて溜り鮒  
八

青梅マラソンスタートを切る  
朗

マクガイア七十本に到達し  
水

白黒の豚評価わかれる  
菟

山と野の花は濃淡競ひるて  
八

浮き雲一つ春の曙  
朗

平成十年五月二十五日首  
平成十年九月三十日尾

(於・菱川クラブ)

歌仙 『六月の男』

無耶捌

次々拾ふヒツチハイカー  
病む長は炉心溶融予言して  
流木寄せて作る方舟  
水くぐる河童も妻のありぬべし

悟ど 文悟 砂男

六月の男めでたき菖蒲かな

無耶

胡瓜の反りに袖濡るるめり  
勝手口音なく開ける御用聞

砂 砂男

手びねり碗で回す冷や酒

健悟

時計の針は八時十分

文

けもの道尾根筋遠く途絶えして

宗海

五回裏乱闘に散るワンサイド

丁那

翡翠原石谿に埋もるる

縄文

秋刀魚焼きすぎ猫も食はない

由

有明に銅鑼の音高く船出せむ

みど

やどろくの描く満月のちと歪み

耶

秋の燕と雲を追ひかけ

梨乃

冬の支度に蚊帳を曲げくる

骨皮

芒の穂冠にして遊ぶ子ら

唐辛子

破れ庇無住の寺もはや三年

砂

洗面台に美顔クリーム

文

驢馬が旅して馬になる夢

海

指先でそつと触れたる唇に

乃

ブリキにも心めばえるオズの国

砂

罨でもいと想ひ募らす

真由

車椅子から初虹を見る

ど

国境の向うは米もあると言ひ

兼坊

それぞれに花散りかかる花の宴

悟

海坂藩に育つ若党

海砂

ドラム響くよ山鳥の羽根

些考

ちりちりと福耳を噛む寒の月

悟

ハスキー犬と氷下魚分けあふ

ど

平成十年六月十一日首  
平成十年九月十一日尾

些考

懺悔して使徒信教の五百遍

文

(電脳文音)

些考

だんまり芝居鬼の登場

耶

(PC-VAN  
パソコン通信ネットワーク)

些考

幔幕にお罌粟が並ぶ花盛り

海

些考

豊の饅頭淡雪のごと

砂

些考

ナオ  
ト  
ラ  
ツ  
ク  
も  
春  
燈  
め  
き  
て  
坂  
の  
ぼ  
る





賦物歌仙 『大江戸尽』

無耶捌

浅漬をぶらさげ行くや左門町

砂男

月に名残のつきぬ棒振り

些考

鶉籠殿御所望と聞こえきて

無耶

振るへば塩の落つる狩衣

海砂

お留守居が札差に会ふ芝居茶屋

帆夢

幟はためく川筋の屋根

耶

ッ冷や酒をあふりて白刃抜き放つ

考

袖に縫りて小紫泣く

男

かたかたと薬篋の唐人参

耶

ふたりづつ立つ舟のしよんべん

砂

習ひとて身投げ男は救はずに

耶

熊野牛王を嘘吐きに為す

文

後朝の月に烏か霜の声

男

口切りの茶を引きし傾城

考

少女をがらがら煎餅買ひにやり

耶

尼になつても好きな当てももの

男

さくらさくら城代家老の隠し芸

砂

莫大小ぱつち春風邪に履く

耶

ナオ 朧夜の鼠小僧と歌はれて

砂

罌の仕掛はエレキテルてふ

男

白河の清き流れに魚も絶え

耶

南蛮渡り隠す長持

み

ど

大奥で瘦せ細りゆく優男

耶

御子は六十三人といふ

男

赤門も建てよといはれ汗を掻き

耶

谷中の塔を守る棟梁

男

道楽は万年青の鉢を掛け並べ

耶

湾内深く火炮とどろく

砂

蒸気船たつた四はいでうんの月

男

お馬の前の溢れ蚊を追ふ

耶

ッ手鞠つく老の襪褌に秋の風

男

南無阿弥陀仏唱ふ牢前

耶

鳥追ひの笠差しのぞく暇もなし

男

つちかぜけぶる内藤新宿

孝

花魁も更け住替への春の暮

唐辛子

猫が産する辻の水茶屋

宗海

平成九年九月二十八日首  
平成十年四月二日尾

(電脳文音)

(PC-VAN  
パソコン通信ネットワーク)

半歌仙 『鴉日 和』

内田さち子捌

鴉日和せんべいカリツと香ばしや 鈴木ア ヤ

ぬける青さに淡き昼月 名古則 子

大案山子役目終へしをほ、えみて 小林美智枝

双生児のベビーカーを押すマ、 日高美灯子

ゆつくりとハミング軽き坂の町 内田さち子

メロン土産に友を訪ねん 小林純 子

ッ縞々や水玉パジャマLサイズ

あやふさ知らず娘十七 ち

より添ふて暮れなづむ街急ぎゆく 枝

ワイニンググラスに透ける恋唄 純

振り向いてこぼれる笑顔コマーション 枝

国にのさばる風邪ひかぬ奴 ヤ

ピシピシと豆腐凍らせ月三更 ち

依頼原稿迫る 切 純

ナイスガイ演技続けし疲れ出て ヤ

初虹見やる長き人影 枝

花便り開けばおつる二三片 ち

春の窓辺にキャンデイの缶 純

平成九年十一月二十六日首  
平成十年七月二十五日尾

(第六句より文音)

歌仙 『土筆摘む』

品川鈴子捌

行きずりに指を差しては土筆摘む

小原みどり

遠く近くに鶯の声

竹下昭子

風紋の移ろうさまも麗かに

池田かよ

ほったらかしの赤い自転車

岩田登美子

月あかり次の一手に息つめて

昭

縞の袴に秋扇さす

み

ッ運動会おんなせんせのドラえもん

か

あのやんちゃくれ逢えば思い出

み

馴れ初めの嘘ちよぴりとばらされし

か

入れ歯ゆるみて鳴らぬ口笛

み

台杉と北山杉の丈くらべ

か

遺伝子論を書きおろしして

み

輝いて月のプールのさざれ波

み

メロンの蔓はちよん鬚のごと

か

かけもちの僧卒塔婆を書き損ね

み

天へと昇る竜ににらまれ

か

花びらを懐石膳にあしらい

み

春水満たすスペインの壺

か

ヲオ雛納む来年もねと云いながら

登

贋作ならぬ貨幣せんべい

み

くるくると公約変えて立候補

か

貫い泣きするテレビ小説

登

高野なる五輪の塔に雪の帽

み

庭の落葉を燃やすひととき

か

努力賞感謝状をと睦まじく

昭

歌の心は旅愁そぞろに

み

片言の日本語で恋打明けて

か

イエローカードなんのこれしき

昭

連れの犬紐とき放す月の浜

登

たまに案山子の衣着せ替え

み

ナウにじり口しだるる萩を括りては

か

金融界の首領と見なされ

昭

ほろ酔いにからんころんと宿の下駄

登

語り部となり余生たのしむ

み

焚き添えてどつとほむらの花簞

か

鐘の音わたる丘のかげろう

登

平成十年 九月十八日首  
平成十年十二月 八日尾

(於・阪急教室)

歌仙 『酒蔵』

品川鈴子捌

酒蔵の影傾きて秋深む

岡田禎子

掬ひし水にまどかなる月

岡田麗

秋草の線の交はる机上にて

寺柚啓子

九官鳥がおはやうといふ

高橋三千子

山峡の木の間隠れに道おしへ

禎子

虹をくぐりて飛行機が着く

右近忠子

古はがき地震の後はどこへやら

啓子

夢にうつつにしのぶ面影

禎子

ダイアナ妃世界のブーケ一人じめ

麗

保険ごまかす知恵のしたたか

啓

ねんごろに禰宜が取り出す玉手箱

三

修学旅行の子らやかましく

麗

切崖の怒濤に哭きて冬の月

啓

むささびの棲む森をめぐれば

三

ミサイルをふい撃ちにして世紀末

禎

一歩前進 三歩後退

麗

やごとなき人形遺る花の寺

三

ローランサンの春の彩り

啓

ナオ病床の友の絵だよりチューリップ 坂井信子

訛りの多き駅のおしやべり

禎

信貴平郡由緒ありげなお社が

忠

協力約す巨頭会谈

信

夏袴はきて避地のPTA

三

太き腕の汐に灼けたる

信

堀もあり昔のままに残る城

忠

ベサメムーチョと客引がいふ

三

首尾いかに星座に託す片思ひ

禎

ひそひそ話に聞き耳をたて

信

居残りてビルの谷間の月仰ぐ

忠

初鴨来たる昆陽の池

禎

ナウレコードのさ揺らぎながら夜の長し

三

ワインブームでまた酒量増え

信

見慣れたる丘の鉄塔塗り替はり

忠

お洒落な犬を連れて散歩に

三

花ふぶき紙燭翳りの渡り廊

信

沖風はらむばらもんの凧

禎

平成十年十月二十三日首  
平成十年十一月二十七日尾

(於・柿衛文庫)

歌仙 『竜頭船』

藤田鷗山捌

竜頭船月見の池に漕ぎ出づる

石神芳枝

判官びびいき思草とて

堀田未知子

赤い羽根目標額はきりもなし

早川かつ

多きいねむり始発電車に

芳

出張の続きし後の肩たたき

未

浴衣がけにて覗く骨董

か

マニキュアの手入に耽る洗面所

山

見上ぐる君の日々に頼もし

未

いそいそと嬌恋の道ゆきかえり

鷗

すぐに盗られる人気ポスター

芳

兄弟の選挙争ひなげく母

か

ダイヤの指輪質に流して

芳

失業者街に溢れて月冴ゆる

鷗

蓮根掘りの泥に尻餅

未

垢ぬけてパリ帰りの選手たち

芳

さらりさらりと茶漬一杯

鷗

鳶職もじっと待ちをる遅桜

か

登り窯より蝶の飛び立つ

未

ナオ連休の恒例となる潮干狩

泣く子は育つ誕生祝ひ

芳

検診を転ばぬ先の杖として

か

座禅の行も板につく頃

未

夕立にビニール傘の売り切れて

未

てんやわんやの蟻の門渡り

鷗

黙々と働きものに暖簾わけ

か

砂漠を越ゆる長き婚の荷

芳

恋ゆえに腕失ひし庵主さま

未

なんでも書ける落書ノート

か

皎々と湖面を照らす望の月

芳

鬱金の花の咲ける楽園

鷗

ナウ村芝居お軽の役に里帰り

か

ドラキュラ出ると閉める裏口

鷗

大小の堤灯形さまざまに

芳

おどけて渡る青の信号

か

太閤の花ふくらみし上醍醐

未

金の鯨越ゆる風船

鷗

平成十年十月二十三日首  
平成十年十二月二十三日尾

(於・柿衛文庫)

歌仙 『鳴神に』

品川鈴子捌

鳴神に沙漠の一樹選ばるる

島田雄作

触るれば熱き鹿の若角

品川鈴子

いごつその父に厳しく仕込まれて

品川鈴子

お得意さんの名前覚える

品川鈴子

月に繰る単語カードのよれよれに

品川鈴子

尾鰭傷めて下る落鮎

品川鈴子

ッ喰れし節のなぐさみひよんの笛

品川鈴子

そつと囁く電話番号

品川鈴子

指触れて気をそそられるひとところ

品川鈴子

破れ気球のやうな垂乳根

品川鈴子

解散はしたが政策あやふやに

品川鈴子

御布施ばかりが気になつてをり

品川鈴子

月の洩る背戸に目貼りを重ねては

品川鈴子

炬燵の猫と遊ぶ毎日

品川鈴子

推敲のあとあばかれて翁ぶみ

品川鈴子

裏に廻りし火星探査機

品川鈴子

二十四の瞳に映る花の色

品川鈴子

春日傘とてくるくるまはし

品川鈴子

ナオ 炬塞ぎて停年の身の置き所

シルバーカレッジ狭き門にて

法王庁にも抜穴のある時勢

丸い羊羹切り様で四角

子午線の街にまたがる雲の峰

癌センターに虎鷄鳴く

その話もう飽きくと源三位

かなふもの無き相聞の歌

火酒呷る会ひたくてただ会ひたくて

いつの程にか失せしロザリオ

鬼貫が艶治に詠みし閨の月

柿衛文庫柿の色づく

ナウ 空腹の猪むつくりと起き上り

登り窯より出づる大甕

公園のすみにD51据ゑられし

根付の鈴の音もかすかに

いざ発たむ真澄の空に花吹雪

大橋くぐる鮎子の群れ

平成八年八月二十八日起首  
平成十年四月 五日満尾

雄

鈴

雄

鈴

雄

鈴

雄

鈴

雄

鈴

雄

鈴

雄

鈴

雄

鈴

雄

鈴

歌仙 『冬木立』

佐紀夫捌

冬木立ち言葉飾らず嘘飾る

小菅信一

着膨れている漢おとこ三人

村木佐紀夫

過疎の村農政不況誹りつつ

和食博明

たまたまツケに思案投げ首

明夫一

盈る月欠ける月ある世の習い

明夫一

露しとどなり塞翁が馬

明夫一

天高くカーナビ頼りに旧街道

明夫一

弁当ひら忘れても傘を忘るな

明夫一

一張の中に睦みの言葉あり

明夫一

惜しいところで醒めるうたた寝

明夫一

占いは凶と出ながら旅に出て

明夫一

刀枕やとに鬼おにの霍おと乱

明夫一

中天の月に乾杯生ビール

明夫一

影とまらせて夜の樹の鬱

明夫一

幕揚がるロシヤバレエの晴舞台

明夫一

「イヤ」とは云えぬ付合あいもあり

明夫一

頼たの母子もしの流れは花の緋毛氈

明夫一

かぎろいわたる茅葺きの村

明夫一

甘茶ナオ五寸の御身に慈悲無限

発泡酒もて咽喉のどを潤す

不都合なことも心の持ちようと

歯を食いしばる若き判官

幼な妻時代変わればヤンママと

毘怒愛憎の仮面持たずに

なか／＼に落ちると見えて綱渡り

ドラマ演じて年の暮れゆく

石笛で彩を流さん初景色

涙こぼるる伊勢のみあらか

良夜にて咳することもはばかられ

虫の言葉をなんと読み解く

黄落ナウの道ひたすらに尋とめゆかん

終着駅に人影はなく

明日までは動きを持たぬ時間帯

夢の浮き橋つなぐフロイト

人生の長短問わず花ふぶく

犬の前足までも陽炎う

平成十年六月三日首  
平成十年八月五日尾

(於・広野連句会場(村木居))

夫一明夫一明夫一明夫一明夫一明夫一明夫一明夫一

半歌仙 『翁 堂』

若尾よしえ捌

翁堂訪えば蛙の目借り時 若尾よしえ

楓の花がこぼる池の面 稲葉道子

畑を打つ親子の会話流れ来て 川澄みよ

ジーンズの泥払う若者 小野シズ

塾の灯の漸く消えて月高し 町田順風

入賞祈り吊す七夕 越野文子

秋場所に夢にまで見た大銀杏 ズ

右手を上げた招福の猫 え

ぴったりと寄り添い歩く老夫婦 文

エアーズロックへ金婚の旅 え

競泳に記録更新たゆみなく 道

汚職退職憶の金額 風

杉の秀に月煌々と神の留守 ズ

するめ肴に直会の酒 み

朗らかな笑顔で五体不満足 風

よさこい音頭曲に合わせて み

山里の花を見下ろす観覧車 道

風船追って駈けるおさなご 文

平成十一年五月二十九日首  
平成十一年五月三十日尾

(於・梅丘会館)



半歌仙 『桑の実や』

町田順風捌

桑の実や一枝卓に巻く歌仙

町田順風

公民館の梅雨晴れの間

若尾よしえ

蒸気船音軽やかに行き交いて

小野シズ

帽子とばして駈ける幼子

川澄みよ

ミツキーと月を配して撮る写真

越野文子

きりぎりす鳴く街灯の下

稲葉道子

若き娘の踊浴衣はお揃いで

ズ

鼻緒を伸して履かす桐げた

み

もしかしてあのひと言がプロポーズ

文

行方分らぬ難民の群れ

み

シナイ山おろそかならぬ神の十戒

え

沙漠の涯に仰ぐ凍月

ズ

爛酒にほろりと酔えば里ごころ

道

老いたる母へ送る羊羹

ズ

人生は無常迅速夢の如

え

緑の牧場走る若駒

文

桜鱒釣師に落花惜しみなく

え

小綬鶏の巢避けてゆく徑

道

平成十年六月十三日起首  
平成十年六月十三日満尾

(於・梅丘会館)

歌仙 『秋 彼岸』

中島啓世捌

秋彼岸セピアの写真遠き母 橋本満喜

想い出流る望月の空 山本八乃子

小鳥来る絵画教室誘われて 藤田克子

楽しく過ごす今日も明日も 橋本六三

夏川の泳ぎに暮るる村の子等 牧岡歌子

屋敷門には蟬のしきりに 藤井弘美

お台場の近未来ビル次々と 弘美

肩抱く二人浜のベンチで 満歌

失恋の数かぞへつつ又恋し 満歌

鍵丹念に旅立ちの朝 井上南

宮島の赤き鳥居の能舞台 果

都井の岬に馬の群れゐて 八

古き家の二階の窓の凍る月 克

しよつつる鍋を囲む連衆 弘

巨人びいき広島びいきはらはらと 克

道路工事で回り道する 六

お江戸には花の名所の十指ほど 歌

塩味旨し桜餅の葉 満

ほけ心うかれ心も春の山 八

グッチエルメスみんな欲しいの 弘

鼻下長のパパはパパでも別口よ 満

完全試合頑張った野茂 六

涼しさの箒目たてて青海波 歌

遙か彼方の雲の峰なる 弘

テノールの世界の巨匠胸張りて 満

オペラのアリアみんな恋歌 弘

逢ひたいと携帯電話で燃えあがり 克

果ては心中仕候 弘

月満ちぬ芒峠になびきたり 満

うす紫に匂ひきしむべ 啓

ホイリゲに流れ来る霧手風琴 六

才女と呼ばれついに嫁がず 満

杖ついてテクテク歩く老の坂 歌

小糠雨降る傘の雫よ 八

花吹雪散り行く碧き日本海 八

瞳きらきら仔猫じゃれあふ 克

平成八年九月二十日首  
平成八年九月二十日尾

(於・藤沢藤が谷連句橋本宅)

歌仙 『寺』 山

高橋路草捌

百合残し寺は裏山より暮るる  
高橋路 草

流れに添ひて蛍飛び交ふ  
飯田輝 子

待ちかねし移動図書館巡り来て  
鈴木玲 子

老父喜ぶ平治半七  
高橋美智子

月光に角を研ぎたる街のビル  
土屋清 市

色なき風の野面を渡る  
長田友 子

今もなほ瞼にありぬねぶたの燈  
田口明 子

懐しき声窓下を行く  
高木ト シ

花言葉選びて心打ち明ける  
清

遺跡に丸き百穴の翳  
大庭初 江

飼犬も主あるじの妻もダイエツト  
後藤文 代

課外授業の紙を漉く子等  
高木千代子

江戸城の歴史を語る冬の月  
ト

予報通りに大雪となる  
唐鎌節 子

漂泊の詩人気どりて旅の果  
清

赤きワインを透かすソムリエ  
輝

聞き上手話し上手も花むしろ  
鈴木芳 子

雉子遊べる大富士の里  
友

見廻りに蝶が来ている婆の店

とかくこの世は狐と狸

過疎の地に異国の娘嫁ぎ来て

押し返したい少子化の波

梯子して一番鶏に明易き

グリークラブの涼やかな歌

樹医といふ医者いて森の健やかに

太陽浴びて二人の世界

抽斗に片割れとなる耳飾り

あの手この手のSF商法

玻璃窓に故国を偲ぶ後の月

廃虚に鳶のボンベイの家

何ごととも無かった如く障子貼る

湯治場で聞く大蛇おろち伝説

由緒ある曲り屋移しそば処

どっしり座る百年の白

双体の道祖神なるといとしむ花の陰

永き日了る里の梵鐘

平成十一年五月十六日首尾

(於・市立東西公民館)

文 千 玲 節 路 輝 美 明 美 明 美 友 輝 清 文 節 千 初 路 明

歌仙 『赤かぶ』

狩野康子捌

赤かぶの畝を外れてゐて赤し

山田史子

深く眠れる遠き嶺々

狩野康子

ゆったりと枯淡の境の母座して

高橋玻斗子

万頭に押す祝の焼判

佐々木嘉宇

沈船の育む魚群月今宵

木田真智子

ふんはり桐のひと葉舞ひたる

佐藤千枝子

ッ工人の一徹ゆかし明治節

真

湯上りの児はタオルすり抜け

玻

名講義時にはふらんす小咄も

玻

貞操帯と涙壺とが

枝

「お地藏さん」借金地獄の門を開け

真

鏡の面を人が出入り

史

月光にてらてらとして雨蛙

康

縁台将棋は待った連発

宇

隣り家のきがる食堂仕込中

史

夜間高校減ってしまった

宇

花万朶紙きれ吐きしテレックス

玻

ピカチュウふうせん夢に漂ふ

史

ナオ瘦せ犬に何か着せたとし草若葉

真

春相撲告ぐ太鼓かろやか

宇

村長の蔵の下なる核シエルター

枝

輪廻の果てはひとひらの雲

康

懺悔する女は鶴の風情あり

史

解かしてしまつた雪男まで

康

冬ぬくし空のリフトが降りてくる

史

ほめ上手なり旅の道連れ

枝

天衣借り星のシャワーを浴びたしと

宇

引っかかかつてる月の端っこ

玻

刈田越し銃砲店の看板が

史

オートメの如食ふきぬかつぎ

宇

ナウ新酒利く知らない顔も混じりゐて

枝

栞挟んで本は閉じられ

玻

ベース音腸に響くジャズなりき

枝

湖畔の道は徐行すべしと

真

満開の都故郷は花三分

宇

希望の種を植ゑし苗床

執筆

平成十年十二月 八日首  
平成十一年 二月二十四日尾

(於・高橋玻斗子宅)

歌仙 『喪の仕度』

秋田てる子捌

喪の仕度くちを閉ざした白桔梗

符野康子

珊瑚の数珠を濡らす霧雨

谷田部弓子

二日月胡弓・三味の音流れ来て

秋田てる子

ゴルフバックの肩に重たし

垂石よう子

フレックスタイムとやらが上陸す

松井洋子

雪溪踏んで漢らの列

熊坂昌子

触角を震わせ天牛羽化終る

弓子

溢れだしてゐるエステ広告

て

憧れの後姿を玻璃に追う

弓子

引越の事誰も知らない

昌子

しっかりと薬袋を抱え込み

よ

ミツキーマウスも七十歳に

洋子

デイリーラーの気になるサッシュ凍ての月

弓子

突っつき合ってる針葉樹林

昌子

猿嘯を聞いて踏み出すかざら橋

康子

使い込んだる歳時記と在り

洋子

風流人よ集いて酌まん花篝

よ

大臣の頬の紅き豆籬

弓子

ナオ遠足のはしやぎて地底ミュージアム

安定角度で立つシヨベルカー

新社長得意気に蕎麦打ってみせ

砒素砒素話 嗤う妖怪

片陰の犬もいっしよに身を寄せて

地ベタリアンと呼ばる若者

恋人をアトランダムに検索中

水も弾かん肌に溺れる

船頭の最終告げる声響き

満月を背に外資系ビル

ラマダーン解けてやま盛る秋の味

芋虫は肥え聖者瘦身

ナウ関取をちびっ子力士とり囲み

「親不孝通り」名のみ残りぬ

評判のハイブリットカーに試乗して

時空の壁にぼんとぶつかる

花の山阿弋流為の魂遊ぶらし

ようよう日永となりしみちのく

平成十年十月九日首  
平成十年十二月十一日尾

(於・双葉ヶ丘集会所)

昌

康

よ

弓

て

昌

康

洋

弓

洋

よ

康

昌

よ

洋

よ

康

昌

籬 『マント脱ぐ』

喜多さかえ捌

ナオ 齒が立たぬ相手と知れどマント脱ぐ

茂

箱根越さずの東京弁で

杉本しげ子

10を3で割って余った1不憫

茂

苞よりのぞく苑のぼうたん

幸

寒の月山黒々と里遠き

し

グリが起きだしグラが拗ねてる

喜多さかえ

ナウ つんつんと胸のとんがり恋知らず

茂

彼と父とが詰将棋差す

西山和子

媒酌は理事か教授かドレス揺れ

茂

初めての蝶風のまにまに

幸

花ふぶき浴びつつ祝の酒配る

和

心も軽く春いろの靴

し

平成十年十月十五日首尾

(於・いせトピア)

大寺の瓦の反りや月明り

山口手卷

虫すだく音に混じる横笛

西村幸子

赤い羽根市長は就任挨拶に

杉本静子

新規講座に登録をする

手

深鍋にじっくり寝かせたビーフカレー

竹内茂翁

陶器と磁器の触れる涼しさ

静

ウ次々と弾けはじめる爪紅草

静

貧しき王女の恋はうたかた

幸

死や否や曾根崎あたり石唄ふ

茂

回る速報株価暴落

手

日輪と彩を競へり花の雲

茂

礁の波に舞ふ海つばめ

幸



歌仙 『句碑いくつ』

青野竜斗捌

句碑いくつ建てる鹿島や風光る

小倉静波

春の渚に遊ぶ群鳥

長井実平

そつと吹く蒲公英の絮いづこらむ

曾我部登志子

こどもの城の竣工を祝ぐ

青野竜斗

山の端を染めて出でたる望の月

荻山玲幸

忘れ扇を拾ふ宴席

波

秋祭り神輿を担ぐ勇み肌

平

見合ひ話の嫌なしがらみ

志

入籍の決断せまる彼のゐて

竜

国を追はれて難民となる

玲

リストラにをのきつゝも課長どの

波

くるくる回る肘掛けの椅子

平

月青く植田の小径どこまでも

志

浴衣に靴の今の若者

竜

菩提寺の和尚も茶髪のばしをり

玲

ドナーカードで臓器提供

波

爛漫の花の下なる野球拳

平

道後平野に炎ゆるかげろふ

志

ナオ調教の仔馬たてがみ靡かせて

ビヤ樽作る職人の技

日本を探る不審な漁船あり

胡弓の調べそこはかとな

母よりの電話大雪知らせくる

ちり鍋囲み一家団欒

土地がらで振興券もいろいと

老いを化粧でかくしおデート

孫ほどの彼を連れゆくラブホテル

留学生をちよいと預る

岩風呂に名残りの月の照りわたり

秋炉に依りて古典繙く

ナウ虫の音を肴に酌める独り酒

のむら阪神巨人ながしま

辛辣な御意見番は早口で

泥沼化するコソボ紛争

故郷を偲びつ眺む落花霏々

露店売りする壺焼きの香

平成十一年三月三十日首尾

(於・愛媛県緑化センター)

竜

玲

波

平

志

竜

玲

波

平

志

竜

玲

波

平

志

竜

波



歌仙 『饅 絵』

渡部伸居捌

陽炎や土藏の饅絵鶴と亀

渡部伸居

いかのぼり売る古き店先

青野弥幸

若芝に寝転び歌ふ地唄にて

村上雪香

夢を展けば浮かぶアイデア

永井政子

屋根付きの橋に集へる月の宴

戒能多喜

ぼとりぼとりと落つる銀杏

河本津也

奥深き平家の里の秋祭

居也

見目の気品に残る倂

弥居

なで肩をそつと抱きしめ人を避け

香居

何時まで続くユーゴ空爆

政香

対岸のことにも犬の吠え止まず

多津

ほおづき市を今日はぶらつき

津多

夏の月彫金の台覗き込み

居津

都知事選挙へ候補乱立

弥香

頼朝の勘気に触れて郷を落ち

香多

故意か過失か謎の遭難

多政

球場の球の飛びくる花筵

政津

鶯餅に添へるお抹茶

津

温泉の宿に春の風邪引き籠りたる

弥

真似合掌の厚き萱葺き

居

まなかひに白帆をうかべ広き湖

政

香華手向けて祈るご先祖

香

雪を来し玄関ベルに応へなく

津

ポインセチアの鉢並びたる

多

遺言書き少し安堵と言ひし母

弥

暁のひとに一ト目逢ひたく

居

またしても酒の肴にあの噂

政

昔偲べる里の細径

香

せせらぎに写りし月のきらきらと

津

景気は底を這へるうそ寒

多

ナッ恐ろしや薄暮の原の鬼芒

弥

あやされし児の全身の笑み

居

弁当は筋子いくらをたつぷりと

政

ハミング軽く叩く俎板

津

花愛でつ外ッ国びとも輪に入れて

香

彩とりどりに野遊びの服

多

平成十一年三月三十日首尾

(於・愛媛県緑化センター)

歌仙 『姿 見』

戒能多喜捌

姿見の奥まで晴れて寒に入る

戒能多喜

障子に匂ふ彩美しき和紙

菊野暁子

創作の人形劇を楽しみて

土居栗

口笛吹きつ 帰る畦道

藤田節子

山の端を離れて澄める望の月

曾我部登志子

壺に溢るる 秋の七草

多

ッいそいと名残の茶事の準備など

暁

若宗匠は 憧れの 的

栗

この頃は寝ても覚めても君のこと

節

気球に乗って地球一周

登

外国の不審な船を追跡し

多

いり乱れたる都知事候補者

暁

流暢な言葉に月も涼しさう

登

宿の浴衣で歩くつれづれ

節

道楽のホームギャラリー開設し

多

クイズマニアが当てし賞金

栗

眼鏡橋くぐりつつ航く花見舟

暁

母はしやぎて芹なづな摘む

節

ナオどさんこの鬩なぶる春の風

登

ドナー登録了へて安らぐ

多

早過ぎる自伝を出せば騒がれて

節

俗世の事を思ふ暇なく

暁

降る雪も「五穀の精」と尊ばれ

多

縞のラガーは今も現役

登

手作りのフルーツワイン如何です

暁

孫のじまんは止める術なき

節

基地にまでいたづら鴉出沒し

登

月に古りたる子規の胸像

多

貧乏な暮しに馴れて秋刀魚買ひ

節

彼と別るる肌寒き駅

暁

ッ愛憎の絡みし果の捨て科白

多

国旗君が代つづく論争

登

母屋より妙なる琴の流れ来て

暁

おぼろの中に棲める妖怪

栗

咲く花の大樹を守りつ半世紀

登

遠足の子の弾む足どり

節

平成十一年三月二十五日首  
平成十一年三月二十五日尾

(於・松山小野公民館)

歌仙 『落葉ふむ』

井上弥生捌

落葉ふむ音に追憶からまりぬ  
吐く息白きジョギングの道  
くつきりと天守小天守浮かびいて  
真鯉ここだく遊ぶ池の面  
月の客迎ふ支度の忙しく  
一服の茶に心爽やか  
神前に供へまいらす今年米  
馬籠妻籠を巡りゆく旅  
肩を抱き声もはづみてカラオケを  
まだまだ若い恋もしますよ  
実現の脳死移植も経過良く  
たつぷり満たした匂ふ菖蒲湯  
山の端にかかり涼しき月の影  
静けさ中に響くオカリナ  
ひっそりと草に埋もれし地藏様  
そぞろ歩きに匂帳携さえ  
咲くも花散るも花なる花の宴  
墨絵の如く霞む吊橋

井上弥生  
永井政子

河本津也子

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

津政弥

ナオ義経のゆかりの里は春たけて  
欠伸する猫つつく子供ら  
中村通仙

ダンディな彼は女の気も知らず  
あの娘に色目この娘も好きと  
松永静雨

とりどりのビーチパラソル立ち並び  
汗しとどなるトライアスロン  
津政通

応援の父としつかり手をつなぎ  
助け求める難民の群れ  
津政通

決着のつかぬ会議の長引きて  
ちんちろりんといえんま蟬  
津政通

芋煮えて月の明るき広碓  
若い市長が新酒ひつさげ  
戒能多喜通

ナウ道楽のゲーディングも板につき  
明治の時計今も現役  
津政通

坂の上雲湧きあがるお歩町  
頭に止まり翅たたむ蝶  
河野夏彦

夜桜のはらりと散りて薪能  
この世彼の世を隔つ長閑けさ  
津政彦

平成十年十二月十日首  
平成十一年五月一日尾

(於・松山市紀の国亭)

半歌仙 『茶の花』

杉浦喜久代捌

ひっそりと茶の花白くたそがるる

野口敏子

門口に佇ちははずす肩掛

倉橋澄子

念願の歴史叢書が今ここに

内田さち子

記念切手の図案さまざま

今村佐久子

杉の秀に貫かれたる月まろし

ち

独り言ふと秋の句となり

ち

老達は本領發揮浦祭

白濱節子

行こか止めよか君の住む街

久

ライダーはしがみつく娘に技を見せ

久

若紫が攫はれてゆく

高月三世子

パス取られ敗れた選手土叩く

鈴木アヤ

年代物の焼酎の甕

久

汗疹の子やっとな眠りて窓の月

小林純子

戸締りをする角の駄菓子屋

小林和恵

旅すがら地藏の唇に紅をさす

深井玲

体験刈りのふわり羊毛

菅野陽子

浅黄空雲ぼつかりと花の頃

小林三千子

春の書齋に手のり文鳥

杉浦喜久代

平成十年十一月二十一日首尾

(於・東京女子大学同窓会館)

歌仙 『蝸』 の

佐野千遊捌

蝸の一しきり鳴き鳴き仕舞う

佐野千遊

粧いそめし裏の山々

野崎昭子

夕月に厨支度をのぞかれて

河原喜美子

釣の仲間の魚拓さまさま

岩井秀子

サーフィンの波ははるかに寄せてくる

道嶋淡水

クリスタルガラスの皿の重さよ

昭水

工房の隅に神棚つつましく

岩井魚水

この恋心告げる勇気を

藤原繁子

木枯の夜のハーブティほろ苦き

昭子

すり寄る猫を軽く蹴り出す

喜繁

がんがんと道路工事の掘り進み

昭魚

弥生時代の下駄らしきもの

昭魚

螢火のか細き命灯しけり

昭魚

越前和紙にうす墨の文

秀淡

万葉のロマンを追うて人集い

秀淡

仏の衣たなびいて舞う

魚繁

盃の月をこぼして花の宴

魚繁

タカラジェンヌの永き一日

秀繁

ナオ春昼の炭酸煎餅サクサクと

機を休める西陣のまち

お披露目の芸妓せわしき日暮時

箸紙に書く電話番号

ハネムーンのホームに夜の霧下りて

BGMに月光の曲

蓑虫に流行色を先取られ

雨の舗道に足をすべらす

タイミング外れて開く自動ドア

激辛カレー舌をやきけり

高々と冬の銀河の冴えわたり

狐火過ぎる風のあやしく

ナウ橋ゆれてここは源平古戦場

クルージングの鮮やかな色

少年の声晴々と呼び交し

稽古を終えて困むごった煮

池の面さざ波立ちし花の冷え

視界はるかに帰りゆく鳥

繁魚

淡昭喜繁魚秀繁秀魚繁喜昭淡

平成十年七月二十三日首  
平成十年十二月十日尾

(於・神戸市学習センター)

半歌仙 『若葉風』

鎌田耕仁捌

唐破風大本山は若葉風

今井水映

あたりに響く老鶯の声

鎌田耕仁

久濶の帰郷の舟に酒提げて

広谷青石

浜でばったり幼な友達

水映

月天心侍屋敷静かなる

耕仁

紅葉狩には役者揃はず

青石

寝くずれし御駕の中の女頭人

水映

連子に映る影がもつれる

耕仁

十字星兵達が湧く大芝居

耕仁

コソボの悲劇誰が裁くか

青石

片手落ち松の廊下の犬公方

水映

反省だけなら猿でも出来る

水映

柚子風呂に孫とくつろぐ宿の月

青石

巨人嫌いの話はずんで

青石

決算期苦虫を噛む社長さん

耕仁

モダン校舎に尊徳の像

水映

落慶は花の盛りに兒等燥ぐ

水映

かぎろひたちて敦煌はるか

執筆

平成十一年六月五日起首  
平成十一年六月五日満尾

(於・広谷邸)

女頭人ニ十月十日金刀比羅宮御大祭の頭主として男女の幼兒が選ばれる

村田治男理事長 三重県平成文化賞受賞を祝して

歌仙 『北十字星』

喜多さかえ捌

白鳥座嘴<sup>はし</sup>鋭角に北十字

喜多さかえ

詩の銜<sup>は</sup>する雪嶺の涯

山根於京

顕彰を寿ぐ紙面コピーして

岡本耕治

同級会の会場を決め

中田泰左

天守閣の姿全き月今宵

恒岡成弥

揺るるともなき萩のひと叢

さ

地虫鳴く仮名文字の跡濃く淡く

於

源氏ひとすじ須磨明石まで

耕

触れもせで征きたる遺影凱旋す

泰

津々浦々に肥る生<sup>なま</sup>足<sup>あし</sup>

成

時空超えユーロ硬貨に富本銭

さ

詐欺師は例のサングラスかけ

於

月涼し映画の試写に招かれし

耕

犬が嗅ぎゆくのれん横丁

泰

総理殿やんはり外らす胸の策

成

毒も薬も神のみこころ

さ

淡墨の花の命のとしなへ

泰

焙炉の匂ひしるき茶処

於

企業戦士たりし日遙か春惜しむ

新車を買って旅に出やうか

カザルスのチェンバロいよよ高鳴れる

盃を重ねて友とまどろみ

右かれひ左ひらめの寒鯉

頭巾まぶかに弱法師なり

長編はやがて佳境に入るところ

あなたを追ってローマ空港

難民の群に嬰抱く束ね髪

ベトン割って生えてくるもの

万象の蒼く鎮もり後の月

翁の像に栗を手向けぬ

虫すだく厨に誰かひとりごと

立体絵本仕掛けあれこれ

退院の準備おほかた整うて

タイムトンネル抜けてのどけし

街騒のとだえ落花の舞ひあがる

霞の彼方に未来明るき

平成十年十一月二十日首

平成十年十二月二十日尾 (文音)

耕

成

於

泰

成

耕

於

泰

於

泰

於

耕

成

於

泰

於

耕

於

泰

歌仙 『花女』

付け回し

祖母は名を花女と云いし冬日暮 瀬木慎一

野越え風邪越え伊東で個展 齋藤吾朗

日の本の赤の絵描きとうたわれて 宮下太郎

異郷旅するダビンチの村 林紀一郎

天才は月まで腑分けしやがれる ヨシダヨシエ

寄せてかえすは秋の白浪 伊藤哲子

お稲荷に幸せ祈る柿供え 須藤美保

黒猫抱く烏髪ひと 河合規仁

愛人はふたり夢もまたふたつ 河合規仁

昔を今に万葉の歌 太

後朝の君の残り香いとおしく 水谷三佐子

想いつのりて石を踏みしむ 小湊栄子

夏の月ここは句の里連句の里 南條巷子

そろいの浴衣で氣勢あげよう 安江真砂女

新しいメディア道具に犯す罪 石渡蒼水

ゆるびて漏るる水道の栓 中根明美

まっすぐに花のトンネル湖へ 大野千代子

蛙合戦すでに終れり 吾

谷みほ子

福井敬行

からくり時計中空に鳴る 水

広告を大きく出して大きな利 水

ダンスホールで派手な生活 永澤芳子

真摯なる生き方をして冬薔薇 金子恒子

伊豆を旅して一年の計 行

池ひだり握るアイアン血がにじむ 朝岡一司

鯉が恋して乙女に化けし 朝岡佳子

更にまた赤絵に焦がれ熟女たる 三矢暁美

家族旅行でちよつと一服 行方克巳

遠く来て月に望みをかなえたり 右田和

君まつ虫のひそやかに鳴く 右田幸

休んでは見 休んでは観る 加藤 K

もう後は来ないだろうと思いつゝ 倉石陽子

とんぶりは物忘れに効く 杉田英治

モノクロの銀幕に咲く花の色 水谷敦子

春の息吹きの紅やよし

平成十年十二月五日首  
平成十一年二月二十八日尾

(於・伊東・池田二十世紀美術館)  
齋藤吾朗の世界展会場



歌仙 『旅 硯』

原田千町捌

芭蕉忌や手に入るほどの旅硯

原田千町

落葉を寄せて丸くなる猿

幸喜みゑ子

家族撮りフォトコンテスト応募して

町淑子

エアロビックス週に一回

平野美子

満月の池に浮びし笹の舟

内田公子

虫籠の音をこぼしゆく吾子

小泉義重

ッ錆鮎のにはかに酔ひの深まりぬ

紅露ゆき子

恋占ひのジョーカーが邪魔

ゑ

ざこ寝だと云ひつあなたのお隣に

淑

商品券の元は税金

美

宇宙より五七五を呼びかけて

公

喜寿罌鑠と月の涼しき

ゆ

懐かしき路地を歩めば浮いてこい

公

飴で賽銭釣ったお仲間

淑

パリコレの夢の試作の集まりぬ

重

韻は踏まないシャンソンの歌詞

全

花万朶精神病棟誰の翳

ゆ

おぼろの中に母のかんばせ

ゑ

ナオ急流に揉まれし鳴門若布干す 延平いくと

夜逃の荷物人形の泣く ゑ

赤ワイン身体によしと薦められ 須賀一恵

瑠璃の蜥蜴を攫ふ白猫 美

夏籠りの僧につめ寄る女ゐて 公

奈落の底に見たる悦楽 淑

不可思議な物音のする会議室 美

すっぽり嵌る皮張りの椅子 と

もつたいたいなどと云ひつつ粗大塵芥 重

押しくから饅頭伸びてつぶれる 淑

玉環を仰ぎて貴種の流離潭 恵

ほのと秋灯こぼす産土 ゑ

ナッキリストの涙と名付け青葡萄 恵

いつの間にやら読み終へし本 淑

補聴器を使ふ判事の皺深き 重

初鶯のよぎる飛火野 と

降り込みて花は古墳の褥なす 町

次の世紀へ放つ風船 と

平成十年十一月十二日首尾

(於・神宮前区民会館)

歌仙 『白牡丹』

原田千町捌

たましひの色とやいはむ白牡丹

原田千町

苑辺にひびく郭公の声

幸喜みゑ子

ルービックキューブに吾子の挑みゐて

延平いくと

また取り寄せる雑誌カタログ

紅露ゆき子

空の旅丸窓の月道連れに

須賀一恵

茸料理に三星の店

恵

ッ恐龍の骨のブローチロザリオ祭

ゑ

勘違ひより始まりし仲

と

雨となるきぬぎぬ杳隠そうか

恵

歌集を抱き戦場へ発つ

ゆ

新知事の国立て直す気概あり

と

居間の障子に切り張りの跡

町

猫二匹はべらせてをり冬の月

ゆ

ユースサッカースペインに負け

ゆ

泥棒市路地の奥まで並べられ

と

杯交はし皆んなな友達

恵

大江戸の母なる川の花筏

ゑ

風船が行くビルの裏側

恵

ナオ  
貫つたものですべて間に合ふ

ゑ

長引きし医療救助に顎の髯

ゆ

空爆誤爆面目もなし

ゆ

冷めたピザ味まづまづと毒味され

と

チェーザレボルジア妹が好き

恵

恋敵狐罨より怖しく

と

僧形となり踏む霜柱

ゆ

Eメール噂がひとり歩きする

ゑ

不老不死なる薬みつかり

恵

名月に手のとどきそう小海線

と

音さわさわと茶立虫かや

ゆ

挿絵画家催促肴にぬくめ酒

恵

鉄砲玉が他所で名を挙げ

ゑ

神宮の池の大鯉亀と棲む

ゆ

灸据えの日が丁度明け番

と

見し夜は夢にも花の吹雪舞ふ

町

臥遊録には山笑ふとぞ

執筆

平成十一年五月十三日首尾

(於・神宮前区民会館)

半歌仙 『ヤマゴボウ』

衆判捌

初秋や楚々と咲き出すヤマゴボウ 渡辺まさ子

月上りりくる街騒の中 小島信子

かまどうま読みかけの本裏返し 渡辺博

八十翁向うワープロ 宮下太郎

青梅に朝から雨の降り止まず 博

腰までつかり鮎を釣る人 博

とつぷりと日暮れし宿の露天風呂 福田房

硫黄の匂い髪を乱せる 信

山の音ふと身籠りし気配あり 太

静御前は何も語らず 信

千年の大楠が見たる夢 信

阿弥陀如来の金箔の笑み 博

雪催いつのまにやら世紀末 房

鮫鱈鍋をかき回しいる 太

八人の家族右より左より 信

飲まず食わずで走る恋猫 信

花衣褸とり舞うも酒の酔 博

ものの芽みんな膨らんでくる 房

平成十年九月八日首尾

(於・上目黒住区センター)

半歌仙 『啓 蟄 や』

堀越ふみ子捌

啓蟄や墨の滲みのやわらかし

堀越ふみ子

つくばいに浮く椿一輪

小山百合子

春場所に鬢のかおりを追いかけて

阿部 昭

思い出幾つ雨垂れの音

ふ

月光に一句吐き出すファクシミリ

百

難民キャンプ雁渡り来る

昭

ッ山里に万葉植物実を結び

ふ

橋のたもとで簪買う僧

百

捨てられて何時か覚えた酒の味

昭

道具なくなり家広くなる

ふ

ふる里は遠くに地域振興券

百

お子様ランチ売れるこの頃

昭

湖底の村に揺れてる夏の月

ふ

閻魔詣りに下駄を鳴らして

百

銭湯へ肩車して子を誘い

昭

ようやく取れた腕の繃帯

ふ

散る花に競艇ラト50なり

百

まほろばに聴く百鳥の謳

昭

平成十年三月十五日首  
平成十年四月三十日尾

(文音)

胡蝶 『地軸揺らぐ』

喜多さかえ捌

一線の沖より生るる雲の峰 藤岡よし子

岩を噛みゐる卯波さざ波 杉山寿子

母と子は合作絵本に弾むらむ 小西澄子

パスタ料理にハープたっぷり 中井信子

高層の窓光りあひ月今宵 大西貞子

爽籟に聞くそののちのこと 片山又夫

<sup>ナカ</sup>新綿の商ひいまも続けられ 寿子

抽出ふかく片道切符 信子

絡ませた小指の記憶疼くなり 澄子

炎の酒にのみどを焦がし 〃

ノラつてどんなひとなの 爪磨く よし子

千年杉に漲る 淑気 寿子

冬の靄鶏の影あそばせる 貞子

仮面のひとり通り過ぎゆき 信子

潜在的因数分解依存症 寿子

焙じ茶の香に心ほぐれつ 貞子

望の月踊りの振りのどれも似て よし子

穴に入る蛇風が見てゐた 澄子

ウラ椎の実のこぼれ思ひ出ぼるんぼろ 貞子

発表の曲「ブルグミュラー」 澄子

荒馬の放屁に地軸揺らぎたる 又夫

おぼんでがすと新萋玉子 澄子

蒼天を支へて花の万朶なる 寿子

春の愁ひの砂に吸はるる 執筆

平成十年七月三十一日首尾

(於・伊勢市観光文化会館)

胡蝶 『遮断機あげて』

前田圭衛子捌

朝風や舫ちやひにならぶ鳥の影

木村文子

ていねいに積む一箱の茄子

村田治男

山小屋を訪ねる客の賑はひて

山口手卷

赤きワインにともしびも揺れ

西山和子

満月のどこから始まるものがたり

治

菊人形は菊の太刀持つ

文

<sup>ナカ</sup>年ごとに祖父が自慢の猪の垣

治

こつくりと煮て皿に盛る味

和

待たされて貨車を数へる幼な恋

〃

遮断機あげて拾ってあげるわ

手

あざやかにあざやかに君は卵か

治

野辺の仏は鎮座まします

文

立ち弾きの津軽三味線雪を呼び

手

尿しとをこらへる冬の国境

文

こだはれば遊び足りないMボタン

前田圭衛子

「子象生まれた」ニュース飛び込む

手

月砕け水晶砂の環りゆく

文

明ける気配に太る瓢かくべら

手

ウラ嗤ふ貌して蛇穴に惑ひたる

写真の俺はいつも隅っこ

教卓の「生活指導」薬歎鳴る

まだかまだかと力むふらここ

追憶は水の匂ひか花曇り

電池を入れて春見送りぬ

平成十年七月三十一日首尾

(於・伊勢観光文化会館)

治

手

文

治

手

執筆

短歌行 『炎帝や』

中林あや捌

炎帝や頸の真珠のふと重し  
中林あや

爽竹桃がつづく高速  
中村澄子

子供べや壁の落書き塗りかへて  
物江晴子

貰ひしヒヨコはや関をつげ  
中島英子

残月を淡く浮べる余呉の湖  
高木厚子

ころ柿出荷広報に載る  
英子

二科展の君がモデルの抽象画  
や

ここもあそこも僕のものだよ  
澄子

おおいお茶今は空気に老夫婦  
英子

タンゴブルースシャルウイダンス  
澄子

羽衣を織りあぐるかに花の風  
晴子

羊の毛刈る山間ひの村  
英子

ナオ店番の評判もよし農具市

臓器移植になほ擬議のあり

懸賞で古城巡りの旅を当て

ブランドづくめの彼女つかまへ

ずるずるとファックスでくるラヴレター

振り大仰にさばく鮫鱈

軍港と凍月ぐいと睨みつけ

懺悔の台は最新型に

ナウ北斎が悪ぶってまた宿酔ひ

思ひがけなくホールインワン

花の昼とまりしままの時計塔

青を深めてかかる初虹

平成十一年五月二十日首尾

(於・相模原市大野南公民館)

厚

晴

英

厚

晴

厚

英

や

厚

晴

澄

厚

歌仙 『はせを碑や』

山元志津香捌

はせを碑や年繩ふはり王禪寺  
山元志津香

遠田近田に若菜摘む人  
有賀元子

春障子ねそべる猫の影見えて  
津田葉月

背<sup>ナ</sup>の赤児に雛あられ買ひ  
大和撫子

薄絹を引けば捕れそう朧月  
藤原りくを

長考はつしと桂馬打つ音  
葉

掛け持ちのカルチャーセンター飛び歩き  
撫

冒険野郎の夢はいずこに  
葉

抽出しの離婚届の蒸し暑く  
志

ブロンドの娘と泳ぐワイキキ  
元

チャペルへの階段白く白く照り  
を

二十世紀へシャンパン不足  
葉

月代の飽食鳥あほあほと  
志

休暇明ければなるようになる  
撫

芸術祭富岳霊峰県知事賞  
元

湯のもと入れて唸るひと節  
を

吹雪く花米軍基地の柵越えて  
元

路面電車の過ぎて長閑けし  
を

祀られる豆腐御難の針供養  
元

裏も表も見えしこの頃  
撫

待望の明石大橋初渡り  
撫

テレビ実況俳句王国  
元

日おもてに一枝華やぐ冬紅葉  
志

わたしの話します炬燵で  
葉

酌むほどに口より足がものを言ひ  
を

産まれし嬰はすごい別嬪  
撫

DNA先祖たどればアイスマン  
葉

五千年忌はプリンで修す  
志

竹山<sup>ちくざん</sup>の太棹とどく月の暈  
葉

葭戸を外す漆喰の家  
葉

秋場所の番付表は宝物  
撫

怪我は油断とスパルタの母  
を

神鈴を思ひきり振りうにやむにやと  
元

川にぶつかる駅からの道  
葉

花守も停年となり惜しむ花  
撫

けふよりあすの風光るらむ  
を

平成十一年二月十四日首  
平成十一年二月二十五日尾

(於・相模原市大野南公民館)



半歌仙 『探梅や』

水谷純一郎捌

探梅や谿を辿れば清水湧く

佐藤 正

あちらこちらでお茶を摘む唄

榎鶴しのぶ

春障子老母の部屋に陽を入れて

渡辺すえ子

古き時計のとき刻む音

し

叢雲に月をよぎれる雁の竿

水谷純一郎

運動会から帰る子供等

八木紫 暁

秋祭り並ぶ夜店の懐かしく

し

幼馴染が集ふ駅前

し

洗濯のコインを忘れ君に借り

純

姉さの生れ豊前山国

紫

この頃は先行き読めぬお役人

し

自棄の深酒検診を受け

す

熱帯夜眠れぬ窓に月かかり

純

どししょうを鍋にしこむ民宿

紫

自主トレに励む石段磨崖佛

す

紺碧の海遠く船ゆく

し

初舞台踏む娘の肩に花吹雪

正

風に流され蝶のもつれる

純

平成十年三月二十九日首  
平成十年四月 二日尾

(文音)

半歌仙 『晩節』

土屋実郎捌

晩節や折目正しく梅雨の傘 土屋実郎

縁の下よりまかり出し墓 小張昭一

ルーキーの次の打席に期待して 坂田武彦

放送時間再度延長 一郎

更待ちの月も待ち兼ね山の端に 一郎

葛咲く道の九十九折りなる 彦

ッ色鳥の朝比奈峠疾くこえて 一郎

兄と弟にそれぞれの恋 彦

さりげなく口説きにかかり手が肩へ 一郎

胸のクルスがことのさまたげ 一郎

一盗二婢蓮如上人子沢山 彦

ゴルフコースに汐越しの松 一郎

月あげて沖の鱒網弓なりに 彦

楯つぎたして嘆く円安 一郎

出藍の三冠果たす血統馬 彦

予定は未定縁は異なるもの 一郎

注ぎねえととんと見知らぬ花見客 彦

天衣無縫の声のうららか 一郎

平成十年六月九日首尾

(於・浦高同窓会事務所)

半歌仙 『式部の実』

土屋実郎捌

ぶらり入る日比谷図書館式部の実 土屋実郎

更待月にひそと消灯 坂田武彦

閑林の小径に白き風ありて 戸谷是公

矢尻ちよこんとのぞく断崖 彦郎

半袖で古陶真贋論じあひ 彦公

酒がはひれば天下泰平 彦公

ッカラオケも寮歌軍歌をこもごもに 彦郎

ミキサーガールミニでてきぱき 彦公

恋に生き恋に果てたる一代記 彦公

己の始末頼む弁護士 彦郎

冬木立夕月透かす五六本 彦公

根深汁出す寺町の店 彦公

餌付けせし孫の梟ほうと鳴き 彦郎

夢の枕にたちし曾我殿 彦公

旅先の瘡おこりの床に気の弱おろり 彦公

今朝の地引網じびきに入りし権瑞ごんずい 彦公

花堤ポートレースの人混に 彦公

期待集めて生あれし馬の仔 彦公

平成十年十月十三日首尾

(於・浦高同窓会事務所)

歌仙 『防風林』

磯直道捌

ホ句の秋防風林の唄聴かむ

磯直道

稲を育てて夜露朝露

福島時子

蝗とり袋ガサガサ月も出て

今井楊子

寢息正しく児らは夢路に

野坂民子

濃い色の浴衣流行って下駄ばやり

時子

夕風の湾遠き人影

白井久子

ッ思い立ちフェリーで目指す釧路港

高山佳子

彼女の電話「できちゃったよ」と

楊子

老年の恋に遺言確かめる

矢口美穂子

部屋に飾りし古九谷の皿

内田たづ

はじめての美術倶楽部の競に勝ち

久

小判に月の熊手をかつぎ

時子

ふぐちりと赤提灯にさそわれて

久

あつと驚く隅に債鬼が

福島新吾

息こらすエレベーターの箱の中

楊子

春雷鳴りて突如停電

新新

交差するライトの中を花吹雪

新新

啄木忌とて集う友達

楊子

ナオ久方に酒酌みかわし歌うたい 井口昌亮

手水の鉢の黒き石肌

新

隠れ湯に「失樂園」の愛のごと

時

まああの顔で不倫とはねえ

美

雨乞に神主祝詞朗々と

時

夏蝶二つゆるやかに舞う

た

パソコンに再起をかけし五十代

た

気功が効くか腰痛の癖

新

ウォーキングえのころ草をつけてくる

楊

茶店の軒に「新蕎麦あり」と

美

観覧車人去りし後月乗せて

民

至福の時を思い返しつ

佳

ッ何時よりかどぼん・ざぶんに腐り果て

新

論語の好きな古里の父

楊

曲屋に馬いなないて大家族

民

昼餉の目刺し黒く焦げおり

新

花に惚れ花に死するもむべなるか

新

蟹気楼立つはるか砂浜

時

平成九年十月九日首  
平成十年四月九日尾

(於・世田谷区代田区民センター)

歌仙 『街騒に』

磯直道捌

街騒に馴れて瘦せたり残る鴨

磯直道

ビルのはざまにゆれる藤浪

内田たづ

春日傘マネキン窓を飾りいて

福島新吾

名代の店に鯛焼きを買い

今井楊

雨上がり無月の宵は一人なる

高山佳子

椎の実の打つトタン古屋根

白井久子

訪える五合庵とて秋深み

福島時佳

たらいの舟でわたりし恋路

福島時佳

浪曲は三味線ひきが女房で

福島時佳

肩の膏薬口の毒舌

福島時佳

すててことちぢみが夏のユニホーム

久

蟬かしまししく淡き昼月

久

ドタキャンでワールドカップツア―泣く

矢口美穂子

テレビの前であおるやけ酒

明石潤子

うにもよしトロも脂がのつており

新

孫は医学部トツプ入学

久

見事なる大樹に育ち花吹雪

た

根方にひそと愛犬の墓

佳

ナオ Eメールペットの自慢次々と

会つてみようかコードX

美佳

目印の冬ばら抱いてメトロ駅

楊

手袋とつてしつかり握手

時

誰も彼もおいしい話選挙前

楊

深海魚なる老人世帯

時

本棚は全集ものがぎつしりと

た

はらりと落ちる万札五枚

時

香りよく松茸飯が炊けました

た

耳鳴りなるか蚯蚓鳴くかや

時

月明に伽藍の鴟尾の躍りいて

楊

今夜も観てる黒沢映画

楊

ナウ世紀末ぐるり時代は移るかに

時

ローマに学べ巨視的に見よ

佳

長靴のすねのあたりにトゲがある

新

晴耕雨読清く正しく

潤

産土神の花爛漫と咲き乱れ

新

ボートレースの遠きざわめき

久

平成十年五月十四日首  
平成十年九月十日尾

(於・世田谷区代田区民センター)

半歌仙 『邪馬台国』

福島時子捌

邪馬台の国のまほろば帰る雁

福島時子

すみれ摘む子に風のががやき

井口昌亮

万愚節うまく担いで笑わせて

今井楊

アールグレイの香り妖しく

矢口美穂子

ゆらゆらと揺り椅子ゆすり月ゆらし

楊

柿はたわわに熟れしままなる

時

秋しぐれ門付け替女の三味の音

美

白き肌染めひたと寄り添う

美

新妻と珊瑚の海のスキューバー

楊

ぐつと呑み干すビールだいご味

亮

兜町場立ちの指の景気消え

時

ギロリ目をむく閻魔大王

楊

寒牡丹囲いを洩るる月明かり

美

火鉢を中に故人の噂

亮

いつとなく母の愛猫膝にきて

楊

夢二の版画ようやくに買い

楊

御所築地上ル下ルの辻の花

時

袴とりどり卒業の歌

美

平成十年四月三日首  
平成十年四月十日尾

(於・世田谷区代田区民センター)

歌仙 『風の唄』

磯 直道捌

秋なれやカーテン揺らす風の唄

磯 直道

遠くの山にかかる夕月

佐渡谷ふみ子

豊年にうかれて町に繰り出して

猪俣光子

故里しのぶ飴売りの声

中村幸子

駅長は幼馴なじみの餓鬼大将

榊中 縫

薄雪積もる長い棧橋

柏村誠子

冬休名所ゆかりの地を尋ね

笠原悦子

温泉宿はギヤルの行列

小川廣男

先頭は生真面目そうな老教授

廣 男

学会サボリしばし充電

三浦秀弥

違い棚白磁の壺の置かれたる

誠 弥

雨蛙鳴く庭の片隅

ふ 誠

南国の便り届いて月暑く

悦 誠

切っても切れぬ深情けにて

悦 誠

欲しいのはあなただけなのお願いよ

悦 誠

親元離れ朝寝むさぼり

縫 秀

桜咲く夢を浪人わびずまい

秀 縫

雲雀の声ののどかなる空

誠 秀

ナオ川端に新内流し三味の糸

身を寄せ合って小さく生きおり

中国の残留孤児も年重ね

無縁仏のお顔のっぺら

寒椿落ちても凜と気を張りて

咳こむ肩の薄く愛しき

筒井筒ほのかに異性意識しつ

淡き陽受けて光る芦の湖

渡り鳥立ち去り紅葉あかあかと

頬杖つきてにごり酌みたる

煩惱をはるかにゆかす望の月

寂聴が説く人の世の道

ナウ一つづつジクソーパズルはめ続け

シヨールウインドは能の装束

ゆるやかに鏡がわりに写す影

遠 足 近 く 靴 新 し く

しらじらと眠れぬ夜の花吹雪

浅 蜷 商 う 母 の 声 せ る

平成十年一月 日首  
平成十年三月 日尾

(於・読売文化センター川口)

光 幸 誠 廣 縫 誠 光 誠 秀 幸 悦 縫 誠 光 悦 光 誠 光 悦 幸 縫

歌仙 『大 初 日』

引地冬樹捌

盆栽の松もめでたし大初日

引地冬樹

御慶を申す孫の高声

堀越ふみ子

桜餅食べつつ句集取り出して

樹

仔猫をじゃらす塗の文机

子

キャンバスを昇りそめたる月おぼろ

子

艇庫の施錠たしかめて来る

樹

ッ欠伸して河原鳥が杭の上

樹

いつまで続く若き抱擁

子

きぬぎぬに背のフアスナーをかけもする

子

身上書など何もいらぬ

子

青縞の走り勝魚を三枚に

樹

しみじみ酒は飲むべかりけり

子

牧水の短冊掛ける月の宿

子

芋の葉に寝る白玉の露

樹

野の佛それぞれ木の実供えられ

子

ジャンケンポンで石を蹴る子ら

子

花万朶蔵のとびらを開け放ち

子

春塵払う和綴じ本など

子

ナオ慶応の合格電報遂に來て

九官鳥はオハヨ・オハヨと

自動車の免許も既に取りました

あの手この手の就職運動

携帯で囁きながらウイंकし

スケートさげてガール・ハントへ

技見せん間際にあわれ尻をつき

素知らぬ振りで乗りし替馬

塞翁サイオウのたとえもありと落第し

社長となりて髭を豊かに

月高き太平洋を航くひとり

録音で聞く乙な虫の音

ナッ信楽の壺にあふるる山紅葉

寝ても覚めても読経さんまい

古里の蝦夷の山やま遠く見て

鯨もどりし浜の朝焼

花一枝突き出す海の國境

新世紀待つ囀りの中

平成十一年一月四日首  
平成十一年四月三十日尾

両吟文音

樹

子

樹

子

樹

子

樹

子

樹

子

樹

子

樹

子

樹

子

樹

子



歌仙 『新 緑』

萱場健之捌

新緑や髪なびかせて少女行く 中島房子

衣更えせし通学の朝 若生芥子

遠くより棹竹売りの声がして 伊藤南三

空地に建った木造アパート 房

拓本の李白に向きて秋の月 宮腰 滝

焼き栗屋さん三代目とか 高橋 径

F・Mを止めていなすま待つ窓べ 佐藤鈍子

ブザーの主のシルエット透く 房 滝

向うみず妻のおること忘れおり 鈍 房

雲間に望むヒマラヤの峰 鈍 房

ひらひらと色あせし幡風に舞う 滝 芥

賽の河原に香を手向けて 芥 滝

みちのくの木肌あらわに冬の月 南

スキーウエアゲレンデの華 鈍

合併の噂飛び交うウインドー 滝

無聊をかこち尺八に凝る 房

花吹雪土手をころがる園児達 芥

中也の詩集春の日の午後 鈍

ナオ 地下鉄を行ったり来たり四月馬鹿 佐藤無風

金毘羅代参無事に終了

航跡の白く続ける昼の海

「今夜は何を着て踊りましょか」

「涼しいね、あれが南の十字星」

砂漠の古井戸蛇がひとすじ

黒い瞳チャドルの陰に輝いて

日夜なやます行きずりの人

酒好きの女道楽親ゆずり

やっと残った李朝の徳利

月光が微笑うかべた顔てらす

紅葉且つ散る神護寺の坂

ナウ 回廊の木の香ほのかに鹿の声

ひとり旅にも夜の帳くる

日本画を勉強してる留学生

左 旋 回 鳶 が 遊 々

花の散る一花一花の流れ川

春のソナタに腕もの憂く

平成十年五月二十五日首  
平成十年十月二十六日尾

(於・エルパーク仙台  
セミナー室)

径 無 鈍 房 南 滝 芥 鈍 滝 芥 無 滝 鈍 南 径 芥 滝 風

歌仙 『焼芋の笛』

狩野康子捌

焼芋の笛路地住みの二人まで

中田早苗

小庭の風を集め冬萌

狩野康子

楮蒸す農夫せわしき湯気のなか

佐藤千賀子

メール届きし点滅のあり

中村孝史

ビルディング影黒々と月今宵

北寿雄

秋の茶会の準備万端

小岩秀子

鶴領の花押透かせば昔日の

高橋良雄

君待つ舟のゆらと傾く

田中裕子

噴煙の傍危うさに抱かれたし

史

憂き午後をゆく瘦身の僧

千

石畳丸テーブルのうす埃

裕

銃を片手に熱きテキーラ

雄

月涼しでたらめ唄を口ずさみ

秀

少年祀る蟬の脱け殻

裕

あんパンの餡片寄って臍まがり

千

揺らぐ新湯のプリズムとなる

良

花びとの衣にひとひら又ひとひら

苗

旅上ひと月異郷朧に

史

ナオ薬売ってつづら収める別れ霜

だんご兄弟ヒットチャートに

凡庸に生まれついたる競争馬

禁断の実に七転八倒

雪明り女体の翳り白磁壺

別姓になお拘って居り

スパイスを効かせたピッツア切り分けて

風入れてきくポール・モリア

悠久の海は龍宮城を持ち

博物館へ長い行列

細き月精神病棟の梁に触れ

口にふふめど鳴らぬほおずき

ナウ新薬で嘘の大束ひと括り

○・×式で測る偏差値

三の丸趾に異国の文豪碑

長閑さたたきへリコプターゆき

登頂の報に湧きたつ花の村

ガーデニングに鳩の巣もあり

平成十一年一月二十四日首  
平成十一年四月二十二日尾

(於・パル長町)

雄

秀

千

苗

良

裕

苗

秀

千

裕

秀

史

良

苗

史

雄

康

雄

歌仙 『寒 紅』

狩野康子捌

寒紅の息吐いて玻璃やわらげる

狩野康子

生命惜し青滋の壺は尚更に

千

籠にこんもり揃う切炭

佐藤千賀子

美酒抱いて森のニングル冬籠

千

四肢太き野生馬岬の遊ぶらん

足立かほる

三つ四つ雪の罨を仕かける

千

風の流れに聴き耳持ち

康

匂い袋狂乱の女の片袖に

千

振り向けば夕月にじむ高階に

千

灯影ゆらめき歓喜大なり

千

林檎ゆつくり煮こむキッチン

か

届く土産は辛子蓮根

千

稔田を少しはずれて鉄路伸び

康

節穴を洩る月光は太刀に似て

か

鳥呼ぶことのうまさ少年

千

大臣歩めば紅葉且つ散る

千

本かかえ姉とも慕うひとのもと

か

トウネクタイの染みそのままに名残の茶

か

ブライオン城に伝わりし秘話

康

縄文土器の破片分析

康

石柱を楯に迫るか十字軍

千

世紀末顛頂骨には異状なし

千

鋳炉を燃やす腕のたしかさ

か

徳本峠そして穂高へ

か

放哉が呷吟夏の月涼め

康

ほつほつと夢の中にも桜花

康

廃船を這う船虫の群

千

限りある身に春雨の降る

か

限りなく利息は零に近くなり

か

平成十一年二月二十五日首

か

CMだけを早送りする

康

平成十一年四月二十一日尾

康

そそり立つビル街を抜け花の道

千

新草生うや飢餓の国では

千

新草生うや飢餓の国では

康

（於・狩野宅）

か

歌仙 『春の雪』

和田忠勝捌

笑み初めしつぼみは避けよ春の雪

木谷英子

まだ現役と咲ける老梅

大駒誠一

雛の膳調う厨覗きみて

和田洋子

ボールグローブ皆で片付け

大駒泰子

赤とんぼ群れ飛ぶ先に昇る月

中井淑子

粧う山につづく細道

和田忠勝

障子貼る祖母のしぐさを偲びつゝ

栃木やよひ

美と知そなえし女性キャスター

泰

いちはやくダイヤが光る薬指

英

嗚咽もれくる恋の裏側

洋

自殺では照明できぬこともあり

ひ

ダークホースがメダルとりしと

淑

月あかり白銀の峰神の如

英

あるじ自慢の葱鮪格別

英

ほろ酔の気を引き締める事故現場

泰

大手倒産あすはわが身か

淑

ベイエリア若樹が今年花をつけ

勝

五色風船放す青空

洋

ナオ遅き子の十三詣り薄化粧

淑

世界一周車イスにて

一

マラソンで地雷防止のキャンペーン

ひ

意気投合にビール飲みすぎ

洋

午前様汗だくのまゝ抱きしめて

英

シヤネルの五番匂うのは何故

ひ

路地裏に野菜を値切るパリジェンヌ

英

オープンカフェの古いテーブル

洋

同人展義理ある絵へと足早に

泰

甘味の抜けたガムをぎしぎし

洋

バス通り竹ヤア一竿だけエー昼の月

一

ビル屋上に生きる芋虫

洋

ナウ新蕎麦の里より届く恙なし

淑

きれいに並ぶ萬子字牌

ひ

定年へ三本締めで送られる

一

趣味も多才で開く教室

淑

櫓から眺める天守花の上

泰

陽炎の中とびはねる犬

平成十年三月一日首尾

(於・横浜網島・松聴軒)

歌仙 『冬 薔薇』

和田忠勝捌

冬薔薇褒めて一輪手渡さる

木谷英子

小障子開けてのぞく黒猫

中井淑子

虎落笛枝に音符を引っかけて

榎本良之助

羽化登仙の境地みるなり

中井啓輔

撮影の準備万端月仰ぐ

栃木やよひ

エルニーニョにて遅き紅葉

辻松雄

ッ土瓶蒸し小鹿田の柄のくつきりと

大駒誠一

髪カットして未練振り切る

和田忠勝

土壇場でキャンセルをするウエディング

大駒泰子

不適切なる妙な言い訳

玉生うめ子

サッカーの合併これにとどまらず

和田洋子

寒月を追い湯屋へ走りぬ

大駒泰子

ジョーカーをもう出す頃か出し惜しむ

助洋

赤きワインと貝のムニエル

英洋

オウム村ガリバー園に早がわり

輔英

とどのつまりは君子豹変

助輔

花散りて鷓尾の輝く大伽藍

助輔

連山遠く揚雲雀鳴く

ひ助

ナオ母の背で凧あげている隣の児

潮満ちてきて仕舞うキャンパス

ドコモ株売らず残した甲斐があり

ダイオキシンの調査報告

すれ違う部長の香りエゴイスト

ヴィーナス讚えデカンショ歌え

蒟蒻のふるえに似たる抱き心地

旧軽井沢ひと夏の恋

思い出は夢うたたかのジキタリス

商品券の去就微妙に

陶狸踊り出しそうな今日の月

すだれのように下がる干し柿

ナウ新走り醸せる町を訪ぬらん

道祖神前交わす挨拶

韓国語話して気づく新境地

籠に摘まれし土筆幼く

峠越え視界いっぱい花霞

ニューファッションの通りうららか

平成十年十二月六日首尾

(於・横浜・東小コミュニティハウス)

め

洋

ひ

め

洋

輔

助

英

洋

雄

め

一

淑

輔

助

英

淑

雄





歌仙 『花の光』

山左右捌

出会いの日和らげ花の光ふる

駆け込みセーフ入学の席

春眠が汁かけごはんかきこませ

深夜の中継衛星放送

ヒロインの悲しい最期月みつめ

独り静かにスズムシが泣く

ッぬくもりを恋えど電話の鳴りもせず

待てば待つほどつる切なさ

天の川二人の距離が身にしみる

愛じゃ家賃は払えないもの

部下を得る同期けおとすつもりなく

かばんの中にいつも胃薬

月あれば月見団子を食べ過ぎて

りすのほっぺたどんぐりの形

大きな目映し合ってるヤンマの目

園児遠足野道を行けば

タンポポの兄弟どこへ飛ぶのやら

卒業だからとツーショットとる

山左右捌

山左右

猛僧

如岳

法子

黄昏

斎軒

山左右

水田真理

千波

涼月

如岳

宙組

猛僧

可楽

鬼蘭堂

山左右

樹庵

棗

ニオ春の灯のうるむ銀座でめぐりあう

べにさす指のサイズはいくつ

衝撃の記者会見に胸いたため

真犯人は見当外れ

足跡を隠してくる雪が降り

あわてふためき目元にパツク

ぼや騒ぎ火のない場所の白煙

吸うに吸えない飛行機の中

草分けの両翼失くした映画界

夢の跡には響けサヨナラ

流星の千本ノック月を打て

いつ浴びたつけ紅葉のシャワー

ッ秋空へブーケにのせて舞う心

棄てられた者まっ青あおぐ

テレビ出てモザイクの中はんを押し

おままごとにも飽きたたそがれ

幻想は風に吹雪ける花のごとく

たれかは訪はん春のふるさと

平成十年四月九日首  
平成十一年一月八日尾

(於・和光大学)

凍玻璃

宙組

陽介山

庵堂

凍玻璃

庵堂

山左右

斎軒

樹庵

如岳

可楽

宙組

ほのか

斎軒

小花楼

山左右

光

新古今より



## 連句協会支部

### 連句協会愛媛県支部

支部長 青野竜斗  
事務局長 長井實平  
〒791-0242 松山市北梅本町甲 781-8  
(089-976-6182)

### 連句協会関西支部

支部長 近松寿子  
事務局 同  
〒567 茨木市北春日丘 2-13-7  
(0726-23-8817)

### 連句協会石川県支部

支部長 中田風来  
事務局 同  
〒929-03 石川県河北郡津幡町字  
加賀爪二 3 津幡町役場  
(0762-88-2121)

### 連句協会三重県支部

支部長 村田治男  
事務局 喜多さかえ  
〒516-0008 伊勢市船江 1-9-29  
(0596-22-3317)

### 連句協会埼玉県支部

顧問 金子兜太・宇咲冬男  
支部長 森 三郎  
副支部 磯 直道  
事務局 杉野辨一郎  
〒369-1216 埼玉県大里郡寄井町富  
田 3969-4  
(0485-82-2216)

### 岐阜県連句協会

会長 国島十雨  
事務局 伊藤白雲  
〒503 大垣市室村町 4-156  
(0584-73-0774)

### 連句協会千葉県支部

顧問 東明雅・今泉忘機  
支部長 上田溪水  
事務局  
〒272-0021 市川市八幡 2-8-20  
伊藤藪彦方(047-334-5606)

### 連句協会岩手県支部

顧問 小林文夫  
支部長 小原啄葉  
副支部長 志和正巳 菅原多つを  
事務局 沼宮内凌子  
〒020-01 盛岡市西青山 2-4-41  
(0197-46-5164)

### 連句協会栃木県支部

支部長 中尾硫苦  
副支部長 高井利夫・田中きみ  
田浪富布  
事務局長 富田昌宏  
〒329-4406 栃木県下都賀郡大平町  
下皆川 721  
(0282-43-2664)

### 連句協会富山県支部

支部長 志田延義  
事務局  
〒930 富山市大手 5-1  
富山新聞社内  
(0764-91-8111)

### 連句協会香川県支部

支部長 渡邊陽行  
副支部長 植松晴子・鎌田孝義・廣谷青  
石  
事務局 渡邊陽行  
〒764-0033 香川県仲多度郡多度津町  
青木 169  
(0877-33-0549)

### 大分県連句の会

支部長 佐々木均太郎  
〒874-0902 別府市青山町 2-72  
(0977-26-4476)

### 連句協会広島県支部

支部長 高橋昭三  
事務局 同 上  
〒731-0223 広島県安佐北区可部南  
4-5-47  
(082-815-1914)

(理事会)

第20条 理事会は原則として年3回会長が招集する。理事会の議長は会長とする。理事会の運営については別に定めるところによる。  
(常任理事会)

第21条 常任理事会は原則として隔月に会長が招集する。常任理事会の運営については別に定めるところによる。  
(総会)

第22条 総会は毎年1回会長が招集する。また必要と認めるとき会長は臨時に総会を招集することができる。  
(総会の議長)

第23条 総会の議長は会長がこれを務める。  
(総会の議決事項)

第24条 総会は次の事項を議決する。  
1. 事業計画および収支予算についての事項  
2. 事業報告および収支決算についての事項  
3. 役員を選任  
4. 名誉会長の推戴  
5. その他この会の業務に関する重要事項で理事会において必要と認められた事項  
(総会の議決方法)

第25条 総会の議事は会員である出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第7章 会 計

(会計の種類)

第26条 この会の会計は次のとおりとする。  
1. 経常会計

2. 特別会計

(経常会計)

第27条 経常会計の収入は会費、協力金その他とし、これによってこの会の経常的運営の支出にあてる。

(特別会計)

第28条 特別会計の収入は連句グループ、会員、関係団体等よりの寄付金とし、これを基金として積み立てるものとする。

(経常会計の剰余金)

第29条 経常会計に剰余金があるときは、理事会の議決および総会の承認を経て、その一部もしくは全部を特別会計の基金へ繰り入れることができる。

(会計年度)

第30条 この会の会計年度は、毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第8章 規約の変更

(規約の変更)

第31条 この規約は理事会において理事現在数の4分の3以上の議決を経、かつ総会において出席者の4分の3以上の議決を経なければ変更することができない。

第9章 解 散

(解散)

第32条 この会の解散については前条に定める手続きを準用する。  
この規約の制定、施行は昭和63年10月1日とする。

平成2年9月1日 一部改訂。

平成8年6月23日 一部改訂。

「連句協会」顧問・名誉会員・評議員及び役員名簿

(顧問) 大林柚平・國島十雨・岬峻康隆・東 明雅

(名誉会員) 今泉亡機・小松崎爽青・草間時彦・永田黙泉

(評議員) 秋元正江・江森峰雲・片山多迦夫・加藤耕子・関川竹四・牧野 巖・松永静雨・真鍋天魚

(役員)

会 長 上田淡水

副会長 宇咲冬男・近松寿子・土屋実郎

理事長 土屋実郎(兼)

常任理事 浅野黍穂・磯 直道・伊藤敏彦・小川廣男・川野蓼艸・小林しげと・式田和子・白根順子・寺岡情雨・富田昌弘・中尾青宵・引地冬樹・宮下太郎

理 事 池川鯛谷・井門可奈女・伊藤白雲・内田素舟・狩野康子・品川鈴子・中川 哲・西 幾多・二村文人・福田太ろを・八木紫暁・矢崎 藍・渡邊陽行

国民文化祭担当理事 高橋昭三<広島>・伊藤稜志<群馬>

監 事 城戸崎丹花・藤井 治

# 『連句協会』規約

## 第1章 総 則

(名称)

第1条 この会は連句協会という。

(事務所)

第2条 この会の事務所は会長の指定する場所に置く。

(支部)

第3条 この会は理事会の議決を経て必要の地に支部を置くことができる。

## 第2章 目的および事業

(目的)

第4条 この会は連句文芸の創造的発展とその普及ならびに連句実作者、連句愛好者の交流を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目的とする。

(事業)

第5条 この会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 全国大会および地方大会の開催
2. 会報(隔月)の発行
3. 連句年鑑の出版
4. 連句協会賞の選定
5. 国民文化祭への参加
6. その他前条の目的を達成するために必要な事業

## 第3章 会 員

(種別)

第6条 この会の会員は次のとおりとする。

1. 正会員
2. 賛助会員
3. 名誉会員

(入会)

第7条 正会員または賛助会員になろうとする者は入会金2千円と所定の会費を納入することにより入会できるものとする。

(会費)

第8条 この会の会費は次のとおりとする。

1. 正会員 年額3千円
  2. 賛助会員 年額1万円以上
- 名誉会員は会費を納めることを要しない。

(資格の喪失)

第9条 会員は次の事由によってその資格を喪失する。

1. 退会したとき
2. 理由なくして会費を1年以上滞納したとき

(退会)

第10条 会員が退会しようとするときは退会届を会長に提出しなければならない。

## 第4章 役 員

(種別)

第11条 この会には次の役員を置く。

1. 理事 35名以内(うち会長1名、副会長5名以内、理事長1名、常任理事若干名)
2. 監事2名

(役員を選任)

第12条 理事および監事は会員のなかから総会でこれを選任する。会長、副会長、理事長および常任理事は理事会の互選でこれを定める。

(理事の職務)

第13条

1. 会長はこの会の業務を総理しこの会を代表する。
2. 副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序でその職務を代行する。
3. 理事長は会長、副会長を補佐してこの会の業務を掌理する。
4. 常任理事は会長、副会長および理事長を補佐し理事会の議決に基づき業務に従事する。
5. 理事は理事会を組織して業務を行う。

(監事の職務)

第14条 監事は会の会計を監査する。

(役員任期)

第15条 この会の役員任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

## 第5章 名誉会長、顧問、名誉会員、評議員 (名誉会長)

第16条 この会に名誉会長を置くことができる。名誉会長は総会の議決を経て推戴する。

(顧問)

第17条 この会に顧問を置くことができる。顧問は理事会の議決を経て会長が委嘱する。顧問はこの会の業務について意見を述べ、また会長の諮問に応じる。

(名誉会員)

第18条 この会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は理事会の議決を経て、会員の中から会長が委嘱する。名誉会員はこの会の業務について意見を述べ、また会長の諮問に応じる。

(評議員)

第19条 この会に評議員を置くことができる。評議員は理事会の議決を経て、会員の中から会長が委嘱する。評議員は理事会の諮問に応じる。

## 第6章 会 議

# 連句協会規約

連絡先616-8395京都市右京区嵯峨小倉山落柿舎(075-881-1953) 会員9名

#### 竜神連句会

長坂 節子  
師系・矢崎 藍 連絡先471-0027豊田市喜多町4-53長坂節子 会員15名

#### 様炭会

蒲 幾美  
師系・中村俊定 連絡先215-0013川崎市麻生区王禅寺767-36 蒲幾美(044-955-8726) 会員8名 (休止中)

#### 連句愛好会

柴崎正寿郎  
連絡先241-0801横浜市旭区若葉台2-24-1402柴崎正寿郎(045-922-2851) 会員30名

#### 連句会「Za」

伊藤 直子  
連絡先981-8003仙台市泉区南光台3-3-9伊藤直子(022-233-7732) 会員9名

#### 連句会遊子座

和田 忠勝  
師系・清水瓢左 連絡先223-0052横浜市港北区綱島東5-22-4 和田忠勝(045-531-7174) 会員12名

#### 連句倶楽部

城 依子  
師系・宇咲冬男 連絡先135-0016江東区東陽3-26-8藤沼和恵(03-5690-3361) 会員10名

#### 連句「笹」

伊藤 敬子  
連絡先465-0083名古屋市中東区神丘町2-51-1伊藤敬子(052-701-5050) 会員7名

#### 連句研究会

小林 梁  
師系・松根東洋城・野村喜舟 連絡先338-0805浦和市針ヶ谷4-4-8小林 梁(0488-32-5828)

#### 連句パワー

浅沼 璞  
師系・真鍋天魚 連絡先241-0825横浜市旭区中希望ヶ丘97-14浅沼 璞(045-362-2717) 会員3名

#### 連楽会

高畑 自遊  
師系・阿片瓢郎 連絡先168-0063杉並区和泉4-26-15高畑自遊(03-3323-2454) 会員6名

#### 鹿吟舎

池 央耿  
連絡先216-0005川崎市宮前区土橋6-15-1A214池央耿(044-855-8546)

#### 若泉連句会

川田 章夫  
師系・宇咲冬男 連絡先372-0842伊勢崎市馬見塚町1121-4川田章夫(0270-32-8410) 会員8名

#### 和光大学

深沢 眞二  
連絡先406-0002山梨県東山梨郡春日居町別田520-3深沢眞二

#### ワラハナ連句会

鳥山 理衣  
連絡先336-0901浦和市領家6-145鳥山理衣(048-832-4145)

-1品川鈴子(078-743-2221)会員  
34名

#### ひらめき連句会

狩野 康子

連絡先981-0924仙台市青葉区双  
葉ヶ丘2-5-12(022-271-0005)会  
員8名

#### 広野連句会

村木佐紀夫

連絡先520-0026大津市桜野町1-  
13-16村木佐紀夫(0775-22-  
5444)会員15名

#### 風蘭社連句会

若尾よしえ

師系・東 明雅 連絡先155-  
0033世田谷区代田3-10-22若尾  
よしえ(03-3422-6874)会員8名

#### 富士裾野連句会

高橋 路草

連絡先410-1118裾野市佐野1490  
-2(0559-92-3874)会員16名

#### 北杜連句塾

狩野 康子

連絡先981-0924仙台市青葉区双  
葉ヶ丘2-5-12狩野康子(022-271-  
0005)会員15名

#### 句玉の会

竹内 茂翁

連絡先516-0036伊勢市岡本1-4-  
27竹内茂翁(0596-25-4711)

#### 松喜久会

藤井 浩

師系・阿片瓢郎 連絡先173-  
0005板橋区仲宿58-8-603(03-  
3964-4372)会員3名

#### 松山連句協会

渡部 伸居

連絡先791-0242松山市北梅本町  
甲781-8長井 實平(089-976-  
6182)会員20名

#### 松山連句教室

松永 静雨

師系・宇田零雨 連絡先790-  
0045松山市余戸中2-13-19井上  
弥生(089-973-6055)会員10名

#### 摩天楼連句会

星野 石雀

師系・野村牛耳 連絡先262-  
0046千葉市花見川区花見川2-6-  
105星野石雀(043-286-0725)会

員6名

#### 窓連句会

小林 和恵

師系・名古屋則子 連絡先154-  
0004世田谷区太子堂3-5-13小林  
和恵(03-3413-4431)会員18名

#### 摩耶連句会

佐野 千遊

師系・橋 閒石 連絡先654-  
0075神戸市須磨区潮見台町3-2-  
30佐野千遊(078-731-0334)会員  
11名

#### 丸亀連句会

廣谷 高士(青石)

師系・鈴木春山洞 連絡先763-  
0031丸亀市城南町75-8廣谷高士  
(0877-22-4201)会員6名

#### 三重県連句協会

村田 治男

連絡先516-0008伊勢市船江1-9-  
29喜多さかえ(059-622-2317)

#### 三河連句会

斉藤 吾朗

師系・宮下太郎 連絡先445-  
0806西尾市伊藤町伊藤前15-1斉  
藤吾朗(0563-57-8332)会員12名

#### 三豊連句会

植松 晴子

連絡先769-1613香川県三豊郡大  
野原町花稲907(0875-52-2137)

#### 水無月連句会

堀江 信男

連絡先311-1131水戸市下大野町  
844宮本素(029-269-2635)会員  
12名

#### 未来図連句会

鍵和田 柚子

連絡先108-0074港区高輪2-1-51  
-302原田千町(03-3445-6462)会  
員13名

#### 目黒連句会

渡邊 博

師系・宮下太郎 連絡先152-  
0001目黒区中央町2-25-1-204渡  
邊博(03-3713-6709)会員10名

#### メヌエットー若い現代連句の会

川端 秀夫

連絡先152-0035目黒区自由が丘  
2-15-9高橋ビル302メヌエット  
の会事務局(03-3724-4263)会員

3名

#### 杜の会

喜多さかえ

連絡先516-0008伊勢市船江1-9-  
29喜多さかえ(0596-22-3317)会  
員15名

#### 八千草連句会

山元志津香

師系・宇咲冬男 連絡先215-  
0006川崎市麻生区金程4-9-  
8(044-955-9886)会員10名

#### やまくに連句の会

水谷純一郎

連絡先871-0712大分県下毛郡山  
国町守実 水谷純一郎(0979-62-  
2009)会員33名

#### 山利喜会

粒針 修

連絡先364-0014北本市二ッ家2-  
51粒針修(0485-92-8951)会員4  
名

#### やみつくば会

下房 桃菴

連絡先690-0823松江市西川津町  
1060島根大学文学部内(0852-32-  
6206)会員6名

#### 瑤沙連句会

土屋 実郎

師系・清水瓢左 連絡先233-  
0014横浜市港南区上永谷3-20-  
34土屋実郎(045-843-8059)会員  
15名

#### 葉門連句会

井口 昌亮

師系・宇田零雨・木村葉山・磯  
直道 連絡先155-0033世田谷区  
代田2-9-1福島新吾(03-3414-  
8426)会員11名

#### よみうり文化センター川口

磯 直道

師系・宇田 零雨 連絡先332-  
0023川口市飯塚4-4-7磯直道  
(048-251-3033)

#### よみうり文化センター京葉

引地 冬樹

師系・今泉 宇涯 連絡先274-  
0812船橋市三咲8-3-20引地冬樹  
(0474-48-7260)会員10名

#### 落柿舎連句会

奥西 保

砂井斗志男

師系・渡邊陽行 連絡先769-2302香川県大川郡長尾町西683-10砂井敏夫(0879-52-4391)会員10名

渚の会

西岡 恭平

師系・長谷川ひさを 連絡先670-0011高松市浜ノ町60-25-705西岡恭平(087-851-9006)会員9名

習志野連句会

鶴田 秋甫

連絡先275-0002習志野市実初町2-80鶴田秋甫(0474-72-6270)会員15名

南草連句会

田島 竹四

連絡先517-0506三重県志摩郡阿児町国府1120-69田島竹四(05994-3-1846)会員7名

にほんご連句会

岡本 康子

連絡先182-0006調布市西つつじが丘2-5-2岡本康子(03-3326-0496)会員10名

日本作家クラブ連句会

市村美就夫

連絡先150-0012渋谷区広尾3-17-4二村マンション205中島まさし(03-3407-5368)会員20名

猫 蓑 会

東 明雅

連絡先182-0003調布市若葉町2-21-16青木秀樹(03-3309-0953)会員160名

乃木坂散人連

古館 曹人

師系・宇田零雨・宇咲冬男 連絡先102-0082千代田区一番町20-10-202古館曹人(03-3262-9350)会員3名

俳諧工房

窪田 阿空

連絡先359-1152所沢市北野521-10窪田阿空(0429-48-6618)会員6名

俳諧寺芭蕉舎

窪田 薫

連絡先060-0006札幌市中央区北6条西23-2-18窪田薫(011-631-4009)会員78名

俳諧接心

岡本 星女

師系・岡本松濱・阿波野青畝・岡本春人 連絡先555-0024大阪市西淀川区野里2-11-16メロディハイム塚本502岡本星女(06-6477-7445)会員オープン制

俳諧田園(協会主催)

連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)(休止中)

白水台連句会

山口 博三

師系・宇田零雨・寺岡情雨 連絡先791-0113松山市白水台1-1-9山口博三(089-927-3231)会員4名

白塔歌仙会

佐藤俊一郎

連絡先350-0275坂戸市伊豆の山町17-30会員11名

芭蕉記念館連句会

宇咲 冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨 連絡先135-0003江東区猿江1-2-2-501松澤晴美(03-3634-4094)会員30名

芭世里連句会

大野 鶴士

師系・東明雅・國島十雨 連絡先501-6081岐阜県羽島郡笠松町東陽町1(058-387-2035)会員20名

八戸俳諧倶楽部

関川 竹四

連絡先031-0812八戸市湊町上の山55-2関川竹四(0178-33-3432)会員58名

花野連句会

小出きよみ

師系・根津芦丈・東明雅 連絡先390-0821松本市筑摩東2419小出きよみ(0263-25-5436)会員11名

はねだ連句会

内海 良太

師系・名古屋則子 連絡先216-0001川崎市宮前区野川3138-17山口和義(044-777-2460)会員8名

はな川

黒田 耕三

師系・鈴木春山洞 連絡先791-8083松山市新浜9-25黒田耕三(0899-51-2889)会員9名

芭流朱連句会

鈴木春山洞

師系・松根東洋城 連絡先791-8061松山市三津1-3-13鈴木春山洞(089-951-0064)会員30名

B 面

内田さち子

師系・名古屋則子 連絡先176-0023練馬区中村北4-23-4内田さち子(03-3970-2468)会員5名

ひいらぎ連句会

小路 紫峽

師系・阿波野青畝・岡本春人 連絡先657-0065神戸市灘区宮山町2-7-15ひいらぎ発行所(078-821-0550)会員60名

燧連句会

植松 晴子(晴峰)

師系・鈴木春山洞 連絡先769-1613香川県三豊郡大野原町花稲907植松晴子(0875-52-2137)

日ノ出連句会

山根 於京

連絡先519-0600三重県度会郡二見町茶屋50-9山根於京(05964-3-2112)会員7名

東松山連句会

池川 蝸谷

師系・阿片瓢郎 連絡先791-0312愛媛県温泉郡川内町則之内乙1887池川蝸谷(0899-66-3608)会員30名

菱の実会

巖 涼江

師系・中尾青宵 連絡先210-0824川崎市川崎区日ノ出1-15-11プロビデンス202巖涼江(044-277-5143)

PC-VAN電腦連句

木原 幹雄

連絡先185-0014国分寺市東恋ヶ窪2-29-3林義雄(0423-24-1831)会員24名

ひよどり連句会

品川 鈴子

師系・橋 開石 連絡先651-1123神戸市北区ひよどり台1-17

深大寺連句会

名和 未知

連絡先182-0012調布市深大寺東町7-41-8名和未知(0424-85-1679)会員14名

篠

岡田 史乃

師系・鈴木香歩 連絡先107-0052港区赤坂6-9-4-301岡田史乃(03-3582-0081)

清流連句会

戒能 多喜

師系・宇田零雨・松永静雨 連絡先791-0312愛媛県温泉郡川内町大字則之内乙2590-3会員7名

浅春連句会

谷敷 寛

連絡先112-0003文京区春日2-25-2谷敷寛(03-3811-8519)会員8名

宗祇法師研究会

林 茂樹

顧問・金子金治郎 連絡先521-1200滋賀県神崎郡能登川町泉台215-24林茂樹(0748-42-2037)会員8名

草門会

工藤真理子

師系・野村牛耳 連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(0424-85-5480)会員10名

創の会

村田 治男

連絡先519-0503三重県度会郡小俣町元町1718村田治男(0596-24-1324)会員10名

啐啄会

森 三郎

師系・石沢無腸 連絡先369-1203埼玉県大里郡寄居町寄居982森三郎(0485-81-0077)会員10名

染井の会

蒲 幾美

師系・中村俊定 連絡先215-0013川崎市麻生区王禅寺767-36蒲幾美(044-955-8726)会員11名

大智院連句会

岡本 耕治

師系・名古屋則子 連絡先511-

1112三重県桑名郡長島町大倉1-450岡本耕治, 会員8名

第六天連句会

浅野 黍穂

師系・上甲平谷・清水瓢左・今泉忘機 連絡先272-0836市川市北国分1-2-19星野恵則(047-372-6448)会員30名

多度津連句会

渡邊 陽行

師系・鈴木春山洞 連絡先764-0003香川県仲多度郡多度津町青木169渡邊陽行(0877-33-0549)会員6名

多摩連句会

宮下 太郎

連絡先206-0013多摩市桜ヶ丘1-53-10宮下太郎(0423-74-7002)

丹 想

秋山 正明

連絡先661-0002尼崎市塚口町1-22-1-207秋山正明(06-421-1606)会員13名

ちばらき連句会

藤川 祐子

師系・今泉宇涯・藤咲ひろし 連絡先300-1636茨城県北相馬郡利根町羽根野800-55城依子(0297-68-4424)会員7名

中央連句会(協会主催)

連絡先230-0052横浜市鶴見区生麦3-16-16連句協会(045-501-4907)

土筆・有楽帖三吟会

連絡先214-0039川崎市多摩区栗谷1-4-16遠藤嘉章

筑波連句会

引地 冬樹

師系・今泉宇涯 連絡先272-0812船橋市三咲8-3-20引地冬樹(0474-48-7260)会員16名

津幡連句クラブ

中田 風来

師系・今泉宇涯 連絡先929-0325石川県河北郡津幡町字加賀爪二3津幡町役場中田風来(0762-88-2121)会員36名

つらつら吟社

山岸れい子

師系・名古屋則子 連絡先516-

0079伊勢市大世古3-8-24山岸れい子(0596-28-1395)会員7名

電通連句会

逸見 篤

連絡先104-0045中央区築地1-11電通マーケティング局逸見篤氣付(03-3544-5468)会員20名

東京義仲寺連句会馬山人記念会

師系・野村牛耳・高藤馬山人 連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(0424-85-5480)会員10名

桃 雅 会

杉山 壽子

師系・東 明雅・式田和子 連絡先470-0116日進市東山2-602武村利子(05617-2-2392)会員10名

桃天樹吟聚

赤田玖實子

師系・三好龍肝 連絡先228-0802相模原市上鶴間395赤田玖實子(0427-45-0407)会員4名

徳島連句懇話会

鈴木 漢

連絡先770-0868徳島市福島1-10-16梅村光明(0886-52-1989)会員5名

都心連句会

大林 柚平

連絡先233-0014横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員40名

富山県連句協会

二村 文人

連絡先930-0123富山市呉羽富田町4143-18二村文人(076-436-2257)

とよあけ連句会

永坂 博美

師系・矢崎 藍 連絡先470-1152豊明市前後町仙人塚1736-144永坂博美(0562-92-1030)会員18名

どん・あ・くらぶ

豊島 呑鳥

師系・鈴木春山洞 連絡先790-0844松山市道後一万11-13豊島正憲(089-926-2331)会員7名

長尾連句会



子(0565-53-2224)会員22名

### 柴 庵

中尾 青宵  
連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)

### 佐久良連句会

井門可奈女  
師系・栗田栲堂・富田狸通・鈴木春山洞 連絡先790-8503松山市湊町4-6-6丸三書店内井門可奈女(089-931-8501)会員7名

### さくら草連句会

小林しげと  
連絡先334-0001鳩ヶ谷市桜町4-11-35-1小林しげと(048-281-8161)

### 里 の 会

菅谷 有里  
師系・清水瓢左 連絡先248-0017鎌倉市佐助1-14-9菅谷有里(0467-22-8382)会員8名

### 三 尺 童

丹下 遙指  
連絡先338-0012与野市大戸4-6-3丹下遙指(048-832-3727)会員6名

### 三冊子(改め「高知癒しの連句桜蓼会」)

師系・寺田寅彦 連絡先780-0010高知県高岡郡窪川町窪川1145-5山崎曙(08802-2-2097)会員15名

### 鹿 の 会

宮下 太郎  
師系・松根東洋城・野村喜舟・阿片瓢郎 連絡先206-0013多摩市桜ヶ丘1-53-10宮下太郎(0423-74-7002)会員40名

### 慈 眼 舎

赤田玖實子  
師系・清水瓢左・三好龍肝 連絡先228-0802相模原市上鶴間395赤田玖實子(0427-45-0407)会員6名

### 鴨立庵連句会

草間 時彦  
師系・山路閑古 連絡先249-0005逗子市桜山1-6-16草間時彦(0468-71-5935)会員4名

### 獅 子 門

國島 十雨  
師系・各務支考 連絡先501-1131岐阜市黒野古市場193国島十雨(058-239-0037)会員100名

### 獅子門藜杖社

本屋 良子  
師系・國島十雨 連絡先500-8157岐阜市五坪1450-86本屋良子(058-248-1772)会員25名

### 紫 薇 の 会

澁谷 道  
師系・橋 閒石 連絡先558-0002大阪市住吉区長居西1-9-2澁谷道(06-6691-1395)会員8名

### 紫明庵連句会

井上 鶴鳴  
師系・東明雅 連絡先136-0074江東区東砂7-5-22アルス南砂サルーテ302井上鶴鳴(03-5632-0400)会員29名

### 樹氷連句会

犬島 正一  
連絡先939-8083富山市西中野本町5-14犬島正一(0764-21-3494)会員5名

### 樹林連句会

師系・林空花 連絡先177-0041練馬区石神井町3-9-12-401草刈澄(03-3996-8530)会員15名

### 湘南吟社

小林 静司  
師系・根津芦丈・清水瓢左 連絡先141-0031品川区西五反田6-23-8小林静司(03-3492-2983)会員10名

### 湘南連句うらら会

蒲原志げ子  
師系・東明雅 連絡先248-0022鎌倉市常盤937-219蒲原志げ子(0467-31-7829)会員6名

### 正 風

藤野 鶴山  
師系・寺崎方堂 連絡先520-0822天津市秋葉台35-9正風発行所(0775-25-9159)会員100名

### 正風大府支部

久野 溪流  
師系・寺崎方堂 連絡先470-1143豊明市阿野町上納91-6鈴置一花(0562-92-4521)会員25名

### 正風和氣支部

桐山 北天  
師系・寺崎方堂 連絡先709-0441岡山県和氣郡和氣町衣笠171桐山北天(0869-92-0807)会員10名

### 上毛連句会

伊藤 稜志  
師系・宮下太郎 連絡先371-0811前橋市朝倉町3-5-37伊藤稜志(027-261-2297)会員15名

### しらぎく

大西 貞子  
連絡先510-0304三重県安芸郡河芸町上野1168-73大西貞子(0592-45-3606)会員10名

### しらさぎ連句会

田中一火女  
師系・寺岡情雨 連絡先799-1303東予市河原津484-1森川年(0898-66-5232)会員10名

### 城

中田 泰左  
師系・名古屋則子 連絡先514-0034津市南丸之内9-11中田泰左(059-227-2437)会員7名

### 尋 牛 会

師系・矢崎藍 連絡先460-8445名古屋市中区栄4-16-36(株)電通中部支社内西脇智子(052-263-8324)会員8名

### 新 月 座

二上 貴夫  
連絡先194-0021町田市中町3-22-17-505二上貴夫(0427-23-7060)会員11名

### 信州大学連句会

宮坂 静生  
師系・根津芦丈・東明雅 連絡先399-0025松本市寿台4-5-3宮坂静生(0263-57-2461)会員40名

### 新庄・氷室の会

永沢 安栄  
師系・笹 白州 連絡先996-0082新庄市北町5-19会員6名

### 新庄北陽社

内田 武  
師系・春秋庵幹雄 連絡先996-0035新庄市鉄砲町3-71内田武(0233-22-1285)会員37名

**加納連句会**

小瀬 渺美

師系・各務於菟 連絡先500-8472岐阜市加納清野町14小瀬渺美(058-273-1591)会員5名

**兜の会**

山下七志郎

連絡先923-0938小松市芦田町2-2松下京子(0761-21-3464)会員18名

**からむし庵連句会**

根津 芙紗

師系・根津芦丈・東明 雅 連絡先396-0000伊那市山寺区山本町3185根津芙紗(0265-78-4723)会員18名

**歌林連句会**

坂手 手留

連絡先185-0011国分寺市本多1-11-13小向敏江(042-321-0285)会員20名

**歌留裏連句会**

金子 鳴陣

連絡先220-0061横浜市西区久保町48-14金子鳴陣会員18名

**夏炉の会**

高橋 柿花

連絡先780-8072高知市曙町1-28-35高橋歯科内高橋柿花(0888-44-0409)会員20名

**川内連句会**

池川 鯛谷

師系・松根東洋城・阿片瓢郎 連絡先791-0311愛媛県温泉郡川内町則之内甲2153-1小倉静子(089-966-2781)会員8名

**神田川連句会**

岡部桂一郎

連絡先134-0085江戸川区南葛西7-1-6-201松井青堂(03-3680-0053)

**神田義仲寺連句会**

伊藤 秀峰

師系・斎藤石叟 連絡先101-0047千代田区内神田1-6-6伊藤秀峰(03-3292-0835)

**観音寺連句会**

野口 雅澄

連絡先768-0040観音寺市柞田町油井野口雅澄(0875-25-0979)会員8名

**神田分教場連句会**

川名 將義

師系・ねこみの 連絡先232-0076横浜市南区永田台48-16川名將義(045-713-1388)会員6名

**桔梗連句会**

田先由紀子

連絡先456-0067名古屋市中出町1-20日比野マンション3B(052-683-1376)会員3名

**きさらぎ連句会**

小池 正博

連絡先594-0041和泉市いぶき野2-20-8小池正博(0725-56-2895)会員10名

**義仲寺横浜戸塚連句会**

八木 荘一

連絡先245-0067横浜市戸塚区深谷町671八木荘一(045-851-1655)会員17名

**義仲寺連句会**

師系・斎藤石叟 連絡先520-0802大津市馬場1-5-12義仲寺(0775-23-2811)会員15名

**木の会**

草間 時彦

連絡先240-0105横須賀市秋谷5237藤井弘美(0468-57-2764)会員限定

**岐阜県連句協会**

国島 十雨

連絡先503-0026大垣市室村町4-156伊藤白雲(0584-73-0774)会員80名

**錦心会**

渡部 伸居

師系・野村喜舟 連絡先791-0241松山市小野町15渡部伸居(0899-75-1532)会員10名

**句華苑吟社**

吉本 世紀

連絡先328-0036栃木市室町1-13吉本画廊内(0282-23-3665)会員7名

**くさくき**

磯 直道

師系・藤井紫影・宇田零雨 連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯直道(048-251-3033)会員300名

**くさくき北九州支部**

木部八千代

師系・宇田零雨 連絡先803-0832北九州市小倉北区都2-7-12木部八千代(093-651-1393)会員18名

**くさくき松山支部**

寺岡 情雨

師系・宇田零雨 連絡先791-0113松山市白水台4-12-8寺岡情雨(089-923-6028)会員10名

**くのいち連句会**

暉峻 桐雨

連絡先101-0047千代田区内神田2-12-5内山回漕店方内山秀子(03-3252-2941)会員8名

**熊谷ニットモール教室**

宇咲 冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨 連絡先360-0000熊谷市上之1342-4中 和枝(0485-23-7039)会員20名

**雲の会**

村野 夏生

師系・野村牛耳 連絡先165-0022中野区江古田4-18-2杏花村塾(03-3387-2321)

**耕**

加藤 耕子

連絡先467-0067名古屋瑞穂区石田町1-36加藤耕子(052-841-5054)

**興聖寺連句会**

松永 静雨

師系・宇田零雨 連絡先790-0052松山市竹原町1-4-1岡本眸(0899-45-1154)会員15名

**郡山連句会**

佐藤 淳

連絡先963-0121郡山市三穂田町川田東2佐藤 淳(0249-45-0218)会員5名

**小瀬川連句会**

永野 薫

連絡先739-0646広島県大竹市栗谷町大栗林739永野 薫(08275-6-0344)

**ころも連句会**

矢崎 藍

師系・東明雅 連絡先473-0913豊田市竹元町二ツ池6-44加藤治

五十鈴吟社  
中津 秋野  
師系・清水瓢左・名古屋則子 連絡先516-0017伊勢市神久3-2-32中津秋野(0596-22-1691)会員10名

いさよひの会  
鈴木美智子  
連絡先177-0032練馬区谷原5-20-14鈴木美智子(03-3925-5930)会員4名

伊豆芭蕉堂連句会  
石渡 蒼水  
師系・斎藤石叟 連絡先414-0014伊東市弥生町3-2石渡蒼水(0557-37-1831)会員10名

池袋連句会  
宇咲 冬男  
師系・藤井紫影・宇田零雨 連絡先227-0047横浜市青葉区みたけ台2-22臼杵游児(045-971-3293)会員15名

市川俳諧教室  
師系・藤井紫影・宇田零雨・今泉宇涯 連絡先272-0021市川市八幡2-8-20伊藤藪彦(047-334-5606)会員20名

一 粹 会  
浜本 青海  
師系・高藤馬山人 連絡先185-0022国分寺市東元町1-31-17浜本青海(0423-23-2010)会員12名

いなみ連句の会  
山本 秀夫  
師系・東 明雅・二村文人 連絡先932-0231富山県東砺波郡井波町山見1400井波町総合文化センター内いなみ連句の会(0763-82-5885)会員31名

茨 の 会  
近松 寿子  
連絡先567-0048茨木市北春日丘2-13-7近松寿子(0726-23-8817)会員25名

岩手県連句協会  
小原 啄葉  
連絡先020-0132盛岡市西青山2-4-41沼宮内凌子 会員40名

宇宙連句会  
松永 静雨

師系・宇田零雨 連絡先790-0001松山市一番町1-14-10井手ビル1Fヴェルデュールアン大月西女(089-931-0506)会員13名

NHK文化センター青山  
上田 溪水  
師系・大竹孤悠・小松崎爽青 連絡先271-0092松戸市松戸1407上田溪水(047-362-3822)会員12名

奥美濃連句会  
水野 隆  
連絡先501-4226岐阜県郡上郡八幡町新町929おもだか家(05756-5-3332)会員13名

おごおり  
小郡連句会  
河野 玄磨  
師系・松根東洋城・阿片瓢郎・鈴木春山洞 連絡先754-0000山口県吉敷郡小郡町津市上河野玄磨(08397-2-0599)会員5名

小野連句会  
長井 実平  
師系・松根東洋城・阿片瓢郎 連絡先791-0242松山市北梅本町甲781-8長井実平(089-976-6182)会員10名

おぼろ連句会  
高橋 昌民  
師系・鈴木春山洞 連絡先791-8013松山市山越2-6-46高橋昌民(089-925-5214)会員8名

貝 の 会  
戸田 貝江  
師系・阿片瓢郎 連絡先183-0055府中市府中2-31-9戸田貝江(0422-68-6063)会員6名

海市の会  
鈴木 漢  
連絡先650-0046神戸市中央区港島中町3-1-47-202鈴木漢(078-302-2230)会員4名

解 纜  
小原 洋一  
師系・野村牛耳・林 空花 連絡先155-0032世田谷区代沢1-3-7小原洋一(03-3413-6670)

香川県連句協会  
会長・渡邊陽行、副会長・植松晴子・鎌田孝義・広谷高士、事務局 渡邊陽行764-0033香川県仲多度郡多度津町青木169(0877

-33-0549)会員60名

香川連句会  
渡邊 陽行  
師系・鈴木春山洞 連絡先764-0000香川県仲多度郡多度津町青木169渡邊陽行(0877-33-0549)会員7名

雅 秀 会  
小川 邦明  
連絡先999-5201山形県最上郡鮭川村京塚3430(0233-55-2401)

風の香連句会  
笹 貞子  
連絡先996-0051新庄市松本348

風 の 巷  
守口津夜子  
師系・松根東洋城・阿片瓢郎・鈴木春山洞 連絡先799-1341東予市壬生川191-7守口津夜子(0898-64-2634)会員10名

河童連句会  
矢崎 硯水  
師系・宇田零雨 連絡先392-0004諏訪市諏訪2-10-22矢崎硯水(0266-52-0251)会員15名

勝山連句会  
井手 光子  
師系・松根東洋城・佐伯巨星塔 連絡先790-0878松山市勝山町2-155-1-501井手光子(089-931-1427)会員10名

花 扇 会  
宮 県人  
連絡先344-0116埼玉県北葛飾郡庄和町大袋600-4二宮方宮県人(0487-46-1443)会員5名

歌仙・集亭  
野刈 鴨  
連絡先980-0802仙台市青葉区二日町10-15-1F喫茶室「集」内会員約20名

かないわ  
金石公民館俳諧研究会  
松本 苔花  
連絡先920-0337金沢市金石西4-5-32松本苔花(0762-67-1045)

かびれ連句会  
小松崎爽青  
師系・大竹孤悠 連絡先319-1225日立市名坂町1-31-12西幾多(0294-52-3671)会員19名

## 全国連句グループ概況

①グループ名 ②代表者氏名 ③師系  
④連絡先(住所・電話番号) ⑤会員数

(五十音順)

### 亜の会

前田圭衛子

連絡先663-8156西宮市甲子園網引町8-21-403前田圭衛子(0798-46-3713)会員15名

### ああの会

村野 夏生

師系・野村牛耳 連絡先165-0022中野区江古田4-18-2杏花村塾(03-3387-2321)

### 青葉連句会

八島美枝子

師系・宇田零雨 連絡先145-0061大田区石川町2-32-8八島美枝子(03-3728-0712)会員9名

### 愛染連句会

高橋 昭三

連絡先731-0223広島市安佐北区可部南4-5-47高橋昭三(082-815-1914)

### 青葉城連句会

小野寺妙子

連絡先980-0005仙台市青葉区梅田町4-28小野寺妙子(022-233-0693)会員7名

### 茜連句会

合川月林子

師系・品川鈴子 連絡先769-1602香川県三豊郡豊浜町和田浜本町1233-2合川正雄(0875-52-2213)会員12名

### 紫陽

藤田 明

連絡先514-0114津市一身田町285藤田 明(0592-32-6438)会員6名

### あした連句会

宇咲 冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨 連絡先262-0031千葉市花見川区武石町1-75阿部朝子(043-273-7543)会員50名

### あした連句会えびね支部

宇咲 冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨 連絡先194-0041町田市玉川学園8-7-1大平美代子(0427-24-3800)会員15名

### あしへ俳諧塾

片山多迦夫

師系・清水瓢左 連絡先666-0013川西市美園町1-3-406号片山多迦夫(0727-58-3198)会員10名

### 梓川連句会

金井 教子

師系・根津芦丈・宮坂静生 連絡先390-1700長野県南安曇郡梓川村杏金井教子(026378-3808)会員25名

### 天霧連句会

高森 秋義

師系・鈴木春山洞・渡邊陽行 連絡先764-0027香川県仲多度郡多度津町道福寺200-13高森秋義(0877-33-2475)

### 天の川連句会

福田 真久

師系・三好龍肝 連絡先952-0206新潟県佐渡郡畑野町畑野772本間昭雄(0259-66-2079)会員28名

### 天の川連句会東京支部

福田 真久

師系・三好龍肝 連絡先215-0031川崎市麻生区栗平1-3-2福田真久(044-987-4442)会員13名

### 彩連句会

児玉 俊子

師系・宇田零雨 連絡先336-0012浦和市岸町1-11-12児玉俊子(048-831-6362)会員7名

### 鮎連句会

高橋 昭三

連絡先731-0223広島市安佐北区可部南4-5-47高橋昭三(082-815-1914)

### 鮎可部連句会

久保 俊子

連絡先731-0202広島市阿佐北区大林町315久保俊子(082-818-2719)

### 鮎倉橋島連句会

奥田恵以子

連絡先737-2100広島県安芸郡倉橋町鹿老渡奥田恵以子(0823-54-1296)

### 鮎須川連句会

藤本 幸子

連絡先737-2100広島県安芸郡倉橋町須川藤本幸子(0823-53-1255)

### 鮎ふれ愛連句会

高橋八重子

連絡先731-0223広島市阿佐北区可部南4-5-47高橋八重子(082-815-1914)

### 鮎連句同好会

高橋 昭三

連絡先731-0223広島市阿佐北区可部南4-5-47高橋昭三(082-815-1914)会員35名

### あらくさ連句会

草間 時彦

連絡先249-0006逗子市逗子2-4-5北沢義弘(0468-71-5393)会員限定

### あるふあ会

高津明生子

連絡先241-0833横浜市旭区南本宿町72-14(045-351-5806)

### 伊賀連句会

山村 俊夫

師系・清水瓢左・名古則子・村田治男 連絡先518-0878三重県上野市西大手町3687-9(0595-21-5068)会員25名

### 伊勢原連句会

近藤 蕉肝

連絡先259-1141伊勢原市上粕屋1766大津博山(0463-94-3402)会員13名

# 全国連句グループ概況

# ■編集後記■

\*平成十一年度の連句年鑑をお届けします。今年度から年鑑編集は従来の字咲冬男副会長と私に代って、小川廣男常任理事と私の担当になりました。多々ミスがあることを恐れております。卒直な御指摘をお願いいたします。

\*今年度も新しいグループが増えました。嬉しいことです。たゞ新しいグループの登録は土屋理事長宛に必ずお届け下さい。この登録がありませんと年鑑への作品出稿等の通知がとどきませんし、逆に未登録グループの作品は送付されてきても載せることができません。

\*これらに関連して連句協会の事務は役割分担で行っております。年鑑作品の送付は私宛、住所等の変更は伊藤藪彦常任理事宛、そして作品出稿料は必ず郵便振替でお願いいたします。

〈磯 直道〉

\*平成十一年度版の連句年鑑をお届けいたします。お陰様で、今年も例年規模で二五二巻の作品を収めることができました。御礼申し上げます。また、ページ数が増えました。より充実した内容となったことでしよう。

\*巻頭論文と三編の論文は、それぞれ異なった視点の芸術論・俳論になっております。今後、皆様の議論が進むことを期待いたしております。

\*巻頭論文では、元国立音楽大学教授の荒川有史氏に、同時代人としての西鶴と芭蕉にスポットを当てて戴きました。俳句・連句が芸術の仲間入りをしてから久しい今日、俳諧と世俗の人情あるいは滑稽の関係を原点に戻って考えて見るのも時宜を得ているものと思います。

\*この連句年鑑には、歌仙を中心として、様々な形式の連句が掲載されております。全国各地で開催される連句大会でも、十八公の募吟があるなど、連句本来の形式にこだわらない時代が訪れたようです。表六句を募吟した千葉国民文化祭が懐かしく思い出されます。

\*編集から校正までの作業のほとんどを、今年停年を迎えた磯直道常任理事に甘えてしまいました。

〈小川廣男〉

平成十一年九月二十四日 印刷  
平成十一年九月三十日 発行

平成十一年版 連句年鑑

定価 二、五〇〇円

編集人代表 磯 直道

発行所 230-0052 横浜市鶴見区生麦三ノ一六ノ六

新盛油槽船(株)内 土屋実郎

連句協会

電話〇四五―五〇一―四九〇七

FAX〇四五―五〇一―四九〇八

印刷所 114-0003 東京都北区豊島四ノ二ノ四

(財)印刷局朝陽会

電話〇三―三九一―三―五五二八

FAX〇三―三九一―三―五五三〇

★ご注文の方は〇〇一九〇―三―九〇〇二四番(連句協会)宛

郵便振替で送金して下さい。

